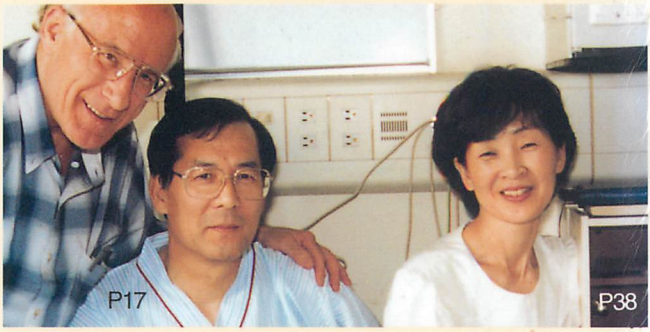
光よあれ

私たちは主のもの88人の証しシリーズ第8集











私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、
あなたの恵みとまことのために、
栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。
（詩篇　115・1）

光よあれ

私たちは主のもの　88人の証しシリーズ第8集

キリスト集会　編

はじめに

ゴットホルド・ベック

だいぶ前のことになりますが、私は大阪の万国博覧会を見にいきました。その万博の統一テーマは、たしかに誰にでも受け入れられそうなものでした。つまり「人類の進歩と調和」でした。多かれ少なかれ、どこの国も平和を求め、平和を願っていることは事実です。平和のない進歩はほんとうの進歩ではなく、平和がなければほんとうの調和もありえない、ということは、誰もがよく分かっています。しかしいくつかのパビリオンは、私にとって非常につまらないものでした。あるパビリオンの中では、壁に顔や手足が作りつけられていて、変な音楽が聞こえていたり、意味のない映画が始まったり、急に暗くなったりして何がなんだかまったくわけが分かりませんでした。

そこで案内係に、それが何を意味しているのか、目的は何かと尋ねたところ、その人は「目的も意味もないから、自分で考えてください！」と答えました。

私はそれが多くの現代人のしるしであると、つくづく考えさせられました。つまり何の目的も意味ももっていないのです。すべてのものは互いに関連をもたずばらばらな世界にいるため、自分自身が自己の目的になってしまっているのです。

この世に、平和を願い求めない人がいるでしょうか。

ほんとうの喜びを持ちたいと思わない人がいるでしょうか。

相互理解を深めたいと望まない人がいるでしょうか。ただ問題はそれらが「どのようにして得られるか」です。この点で、聖書と万国博覧会の考え方とは、はっきりと分かれてしまいます。

万国博覧会は、人類の進歩と調和が「人間の力」、「人間の知恵」、「人間の相互理解」によって達成されると言います。

ところが、聖書はそれと正反対に、現実の「人間の力の無さ」、「人間の惨めさ」、「人間の努力のむなしさ」を断言します。

万国博覧会にたずさわった責任者たちは、万国博覧会は輝かしい人類の歴史を象徴するものであり、「人間の英知こそがばら色に満ちた将来の扉を開く鍵である」と言います。

ところがそれに対して聖書は、「人類はあわれな存在であり、将来に対してまったく希望がない存在にほかならない」と言います。つまり、人間は神にたいして盲目であり、そのために悪魔に縛られて罪と自我にがんじがらめになっていて、悪魔から自分自身を解放しようとする人間の努力はまったく虚しくされている、と明言しているのです。

万国博覧会を賛美する人々は、人間の存在する所にはどこでも、いたるところに光を与える英知がある、と確信しています。

しかし聖書は、人類の英知の光と呼ばれるものは、実は人間が盲目で、ごう慢であることの一つの現われにすぎない、と言っているのです。そしてまた、人類の将来はいたるところ破壊と滅亡だけになる、とも言っています。

実際問題として、この世に不和と争いがあることはだれもが認めるところです。それを人間の努力によって、自分自身の力で解決しようとする態度こそ、「人類の進歩と調和」すなわち万国博覧会に代表される考え方から生まれたものであり、実はこれが見せかけの解決でしかないことに私たちはよく気をつけなければなりません。

聖書は、見せかけだけの平和、うわべだけの調和は確かにくるが、それは反キリストによってもたらされるごまかしにすぎないと言っています。反キリストはしばらくの間、この世の多くを支配しますが、イエス・キリストが現われる時、まったく力を失ってしまいます。その時はじめて、イエス・キリストによる平和の千年王国が始まるのです。この間、悪魔は縛られて何もできないので、真の意味での「進歩と調和」が実現されるのです。

主なる神のご計画は、いったいどのようなものなのでしょうか。主イエス様は次のように言われました。

「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じるものがみな永遠のいのちを持つことです。…」（ヨハネ　6・40）

「永遠のいのち」、つまりほんとうのいのちがなければ、進歩も調和も絶対にありえないでしょう。「永遠のいのち」がないのに、成長、進歩、調和などを考えることは、あたかも未婚の女性が、将来結婚したら生まれてくる子供にどんな名前をつけようかと、夜も眠らずに考えるような

もので、まったく意味のないことです。

神を信じない人間、神との交わりをもたない人間は、病の状態におかれていて、絶えず、「死に至る病の恐怖」におびえている者です。この基本的な問題が解決されないかぎり、そのほかの問題も決して解決されることはありません。

人類の最大の問題は、「罪と負債の問題」であります。この問題は、主イエスを除いては、誰によっても、この世のいかなる「宗教」によっても、解決されえません。

主イエスを体験的に知ること、主イエスとの出会いこそが、人類の最大の問題を解決し、私たちに救いの確信と喜びを与え、平安と、主なる神との平和をもたらしてくれるのです。

世界の国々の多くの人々は、「外側」の世界だけを大切にし、相互の理解を深めることが世界平和をもたらすものである、と思っていますが、実は一番大切な私たちの「罪の問題」には全然ふれようとしていません。イエス・キリストによって「罪の問題」が解決されてわたしたちが新しく生まれ変わらなければ、ほんとうの平和と平安とを得ることは決してできないのです。

悪魔はいつも次のようにささやいています。「人間はなかなかすばらしいものだ。人間は今までに偉大な業績を残しただけでなく、将来にも無限の可能性をもっており、主イエスの救いのみわざなど必要としない。仮にイエスを認めたとしても、少なくとも、それだけで十分だとすることはできない」と。

人間は、この悪魔の「だましごと」を信じるか、あるいは自分の負いめと惨めさを正直に主に告白してイエス様のみもとに行き、「永遠のいのち」を与えられるかのどちらかに定められてしまうのです。

過去の罪の問題、いま人間としていかに生きるかという問題、そして将来どのようになるべきかという問題は、すべてただ主イエス様によってのみ、本当の意味で解決されるのです。

目次(1)

はじめに……ゴットホルド・ベック　7

光よあれ　私たちは主のもの　88人の証し　第8集

1　主とひとつになって……小川泰徳　17
2　前夜祈禱式と葬儀におけるベックさんのメッセージから……ゴットホルド・ベック　32
3　約束された天の御国へ……小川麗子　38
4　主にあって喜ぶ……脇岡総一　56
5　主は私の羊飼い……脇岡和子　65
6　主とともに……脇岡洋平　73
7　十字架の愛……伊牟田經正　78
8　主よ、あなたのあわれみと愛に感謝します……伊牟田千代子　90
9　苦しみに会ったことは幸いです……大沢雅子　101
10　神はすべてのことを働かせて益としてくださった……道川勇雄　115
11　冷えた信仰から熱い信仰へ……道川節子　133

12 自我の牢獄から解放されて……藤井保夫 143
13 生まれる前から運んでくださった主……藤井槙子 155
14 主イエス様だけに栄光を……藤井奈生子 212
15 すべてを支配しておられる主……藤井嘉也 218
16 イエス様はすばらしい……藤井真奈 220
17 薬物依存からの解放……須藤辰郎 223
18 ただ主の隣みゆえに……須藤セツ子 242
19 あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです……松田博 254
20 いかにけがれたる者の心をも……松田由紀子 271
21 イエス様のところに行きます……歳川雅洋 286
22 苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした……歳川美也子 290
23 主の愛だけを……酒井千尋 310
24 そうだったのですね……酒井秀子 322
25 目をさましなさい……久保元勇 330
26 生きることはキリスト、死ぬこともまた益です……南場牧子 353

目次(2)

45人の証し（カラーページ）……161

・あわれみによって…古田公人／イエス様のものとされて…古田道子
・試練について…竹沢規／大事なのは新しい創造です…竹沢千穂子
みことばに支えられて…竹沢成一／イエス様の愛に導かれて…竹沢順子
・主の不思議な導き…芳竹勝也／主のものとされて…芳竹麗子
主がしてくださいます…芳竹弥生子
・主は見捨て給わず…名須川淳／主にふたたびまみえて…名須川一子
主のみ腕に抱えられて…名須川知子
・恵みとまことに満ちた主…崎浜秀安／主の導きに感謝する…崎浜桂子
・AでありΩである主…歳川譲治／主に道を示されて…歳川智子
・深い淵から引き上げられて…久田博／限りなき神の愛…久田倫子
・「自分主義」の破局から…小島繁一／主に愛されて…小島幸子
・人生の大変化…宮西清士／主の恵み…宮西貴美子
・重荷を主にゆだねて…長尾英夫／ともにいてくださる主…長尾康子
・一〇〇パーセントの犯罪人…後藤政彦／罪赦されて…後藤緑
・神の祝福…兵藤勝義／主は私の羊飼い…兵藤幸江

・神に愛されている実感…小野沢克実／主はいのちと喜びの泉…小野沢潤子
・イエス様の平安…石塚稔成／イエス様の十字架…石塚優子
・新しい人生と喜び…杉山明／イエス様のあわれみ…杉山澄子
・オタワ・ニューヨーク十字架の旅…井出和雄／差し伸べられた御手…井出智子
・しかし、私は主を仰ぎ見る…岩本秀造／新しい歌を主に歌え…岩本範子
・すべてを神にゆだねよ…鈴木俊雄／希望の光…鈴木幸子
・ともにいてくださる主…福留伸子・主は私のほめ歌…浅利三恵
・もはや死もなく…赫多久美子・あなたがたが私を選んだのではありません…上野文子
・「主われを愛す」…加藤朱美

希望にあふれて　死に直面した方々の証し　ゴッドホルド・ベック

・松田義子・長沼純子・笹川郁夫・長澤文枝・山川千秋・竹田清
・及川廣太郎・歳川雅洋・リンデトラウト・ベック・J・S・バッハ
・神田京子・平良孝七・真栄田久美子・辻陽子・丸山文乃・古川和夫

基礎的なみことば……384
キリスト集会出版物のおすすめ……386
全国のキリスト集会のご案内……392



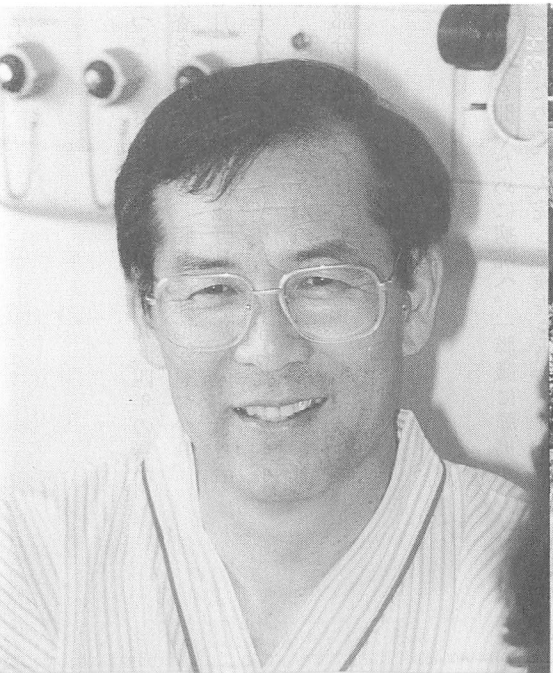
▼前夜祈祷式でのメサイアの賛美。



主とひとつになって

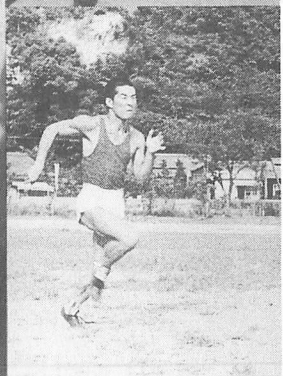
故　小川 泰徳

一九四〇年三重県に生まれる。東長島小、紀北中、県立長島高校卒業。一九六二年東芝クレジット株式会社入社。本社営業部長。
一九九四年六月がんの告知を受け、八月十四日天に召される。家族は妻麗子さん、長女貴子さん、長男敬是さん。



▼洗礼式の日に。





小川泰徳さんは、元気で仕事に、福音の伝道にとつとめておられましたが、一九九四年の春から体調を崩され、五月二十七日、公立昭和病院で検査を受けたところ、膵臓に腫瘍が見つかり、通院しながら自宅で療養することになりました。七月二十九日から武蔵野日赤病院に入院して治療を受けておられましたが、八月十四日午後七時四十分、主イエス・キリストに守られながら平安のうちに父なる神の御国に召されていかれました。以下に、泰徳さんの日記、証し、そして前夜祈禱式、葬儀でのベックさんのメッセージの主要部分を掲載いたします。

小川泰徳さんの日記より

一九九四年五月二十七日

二十五、六日と二日間受けたCTによる腹部検査の結果を聞くために病院へ。「膵臓に腫瘍がありますね、検査のために入院しましょう」とのことだったので、入院して検査を当方より希望。こう毎日痛くては会社に行っても仕事にならないからである。結局明日入院できることになった。麗子もこのところいつもいっしょに病院に来てくれる。けっこう淋しがりやの僕のことを一番よく知ってくれている妻であることは当然だけど、嬉しい。

先生に腫瘍があると言われた時も、意外に動揺はなかった。このところ、いつも祈りの中で、「この痛みの原因を明らかにしてください」と祈り続けてきたこと、また「どんな結果であれ、主のみこころとして平安に受けることができますように」と祈りつづけてきたからだと思う。

夜の食事で家族がそろったところで病状について証しと祈りをしたが、子供たちも平安に受け

とってくれて、主の守りを感謝できた。貴子はいつも冗談っぽく返してくるのに、今回は少々静かだった。冗談のつもりで「がんだったら、子供たちと過ごす時間が短かかったことだけが残念だったな」と言うと、敬是から「そんなことは召されると分かった時にしてくれ」と一言返ってきた。実に平安。主にある家族のすばらしさを、今回も見せてくださった。

五月二十八日

昨夜は痛みが強かったので、痛み止めの座薬をやって寝た。そのためか眠れた。でも今日は昼間はずーっと軽い痛みが続いていた。

昼すぎに麗子と貴子が来てくれた。スケッチブックを持ってきてくれたので、いただいたばらの花をスケッチしたが、あいかわらず下手くそである。

夜、仕事の帰りに敬是も寄ってくれた。感謝なことである。たとえ私が先に天国に行っても安心だ。七時より森川さんとマタイの章を読んで学んだ。終りの祈りは森川さんである。森川さんの手術のことを僕も祈った。

五月二十九日

家族は礼拝の後で来るとのことだったので、痛み止めの座薬をしておいたらすごく楽だった。主治医の村田医師が来てくださり、妻もいたので、先日のCTスキャナーの写真の結果を説明してくださった。非常に理解しやすく教えてくださって、腫瘍らしきものもよく分かった。これか

らは「徹底的に検査をして、その上で判断し治療する」とのことである。麗子と敬是と三人で説明を受けた。感謝。「光よあれ七集」に野口医師、辻医師の写真があったのでプレゼントした。

五月三十一日

昨夜も座薬をもらった。いつまで続くのか？　闇の中にいると、人間的な不安がふーっとでてきそうになる。また主への祈りとなる。本音が出て、「家族ともう少しこの世での暮らしをさせてください」と祈る。死に対する恐怖でなく、この世への未練、家族への未練、そしてまわりの方々への心遣いであろう。

隣のベッドの大脇さんに、罪と救いの話をすることができた。「罪の赦しを受けることはむずかしくない。罪を認め、イエス・キリストを心から信じることができればいい」と話す。「俺はだめだよ」と彼は言う。

六月二日

麗子に疲れがでてこないか少し心配である。われを忘れて一生懸命働いてしまう人だけに、疲れがたまってくるのではないかと思う。毎日病院に来なくていいように言おう。

六月五日

ここ三日間病院から帰って自宅にいる。朝方、痛みがきて、六時に座薬を入れた。そして八時

半頃まで眠った。「礼拝に行こう」と、昨日の調子のよい時には思っていたが、今朝になってみると、薬で痛みを押さえているのがよく分かり、家で麗子と二人で礼拝することにした。

六月十日

小腸の検査は午後一時半である。麗子がきた。妻も一生懸命やっている。明るくしているが、一瞬不安のよぎる時もあるだろう。ふびんである。彼女は信仰的には平安そのものであるが、肉体的に衰えていく僕を見るとき、あるいは今回はだめかな？　と思っているふしもある。

敬是と貴子もやがて結婚するだろう。これも主にある二人のことだ、諸事情を考慮して、またキリスト集会の方々の祈りと支え、それになによりも神の憐みにより問題なくとり行なわれるだろう。私がいなくても主が臨在したまい、結婚式がとり行われる…なんてすばらしいことだろう。主の憐れみは朝ごとに新しく、それは尽きることがない、と聖書にあるのはうれしい。

主よ、どうか私たち家族と共にいてくださり、また、私たち家族が、神様にそうしていただくにふさわしい者として日々歩んでいけますように。アーメン。

六月十一日

貴子の運転で帰ってきた。痛みは薬で押さえてあっても気分はすぐれない。夕食も思ったほど進まない。でも、家族がそろっているということは、なんとすばらしいことか。神様の与えてくださった家族のすばらしさに感謝する。

家族に、改めて私の死について語る時が必要かも？

六月十三日

苦しい一日。朝から腹部血管造影の検査の準備。検査は非常に厳しいものだった。造影剤を注入するとすごく熱く感じる。それの繰り返しである。そのあとが大変で絶対安静で一昼夜をすごすのである。寝返りができず、すごく腰が痛い。でも、なんとか痛み止めの注射を使いながら、朝を迎えることができた。

ただひたすら神に祈り続けた。私を解放してくださることができるのはただ唯一まことの神以外にないからである。解放、罪の赦し、そして天国に迎え入れてくださる神の約束がそれである。

六月十四日

検査の結果は明日説明してくださるらしいけれど、夕方麗子が村田先生に呼ばれて概略の説明を受けたらしい。要するに膵臓がんの可能性が大ということらしい。

そんなことは絶対ないと信じきっていた彼女にとってはショックだったらしい。貴子が先に帰っていった後、いつになく美しい夕焼け空を眺めながら話しているうちに、めずらしく涙を流していた。よほどショックだったのかと思うと、ふびんである。

村田主治医が来られて、話してくださったが、麗子から聞いた話とほぼ同じである。明日、家族がそろっている中で病状を説明してくださり、今後の方針を決めるとのことである。

「すべてが主の御手の中にあり、どんな情況にあっても、主を愛する者は主のご栄光だけを願いましょう」と、ベックさんの著「絶えず祈れ」上巻に説かれてあった。

六月十五日

夜の主治医の説明は、今川さん、小野田さん、岩上夫人と家族がいっしょに聞くことができた。九十パーセントの確率で次の通り。

「膵臓がんであること。腸にポリープがあること。肝臓にも腫瘍らしいものが二カ所あるかも知れないこと」。今後の対応方法として、「手術する方法、化学療法、対症療法の三つの選択があること。手術と化学療法は確率二十パーセント」とのこと。

また、「病院を替えることは自由で、返事はすぐしなくてもよい。化学療法と対症療法を採った場合は週一、二回の外来通院で、その他の日は軽いデスクワークは可能」とのこと。優しくていねいに説明してくださった。安らぎがあった。そして同時に主の守りがあり、主のなんらかの約束が保留されていることを感じることができた。説明を聞いた後、みなで感謝の祈りをした。

六月十六日

詩篇を開く。4章、5章、6章。主のくださったお答が確信できた。

いつも祈る「サタンが呟きをもって私を攻めたてます。主よ!どうか私のそばを離れないで導き、憐んでください」へのお答だと確信できた。

主治医の勧めもあり、同じキリスト集会の野口先生のおられる武蔵野日赤病院の個室に移り、残された時間を主と家族のために用いたいと、野口先生にお願いした。

六月十七日

病院にベックさん、松見夫妻、近藤夫人が来てくださった。私も病院での見舞いはずいぶんしてきたけれど、見舞われるのは初めてで、楽しい語らいのうちに、平安で満たされ、感謝だった。帰宅後も多くの方々から電話。深く主にある兄弟姉妹の祈りの愛を感じる。

六月二十日

こんなに多くの方々が、またふだん特別につきあっている方々でなくても、こんなに心配し、祈ってくださるのは何か？　まさに主の栄光、主のすばらしさが現わされている以外のなにものでもない。それ以外に絶対に考えられることではない。主をほめ賛えます。主を賛美します。

六月二十五日

痛むので、ふとんに寝て聖書を読むことにした。ステパノの石打ちのところ。神の前に、神によって造られたものにすぎない人間が何の力を持ちうるのか。確信に満ちた信仰こそが人を強くする。多くの方々のお見舞いをうける。感謝。

六月二十七日

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。（哀歌　3・22～24）

神の私たちに対する愛と憐みは、尽きることなく与えられるばかりでなく、私たちの思いを越えて毎朝新しく、私たち、また私自身のために神によって覚えられているのである。神のすばらしさと完全な真実はこれによって明らかに確認できる。

六月二十八日

麗子、愛する麗子、君が考えているより早く天に召されたとしても、悲しまないでくれ。天国は永遠であり、すばらしい所だと聖書に記されている。先に召された人々に会える。パウロ、ペテロに会うのも楽しみだ。でも一番すばらしいのはイエス様に直接お会いできることだろう。そして君がいつの日か天に召される日には、まっさきに迎えに出るだろう。

七月二日

比較的楽な状態で目覚める。主の与えてくださる朝はすごく新鮮で力のある朝である。今日も多くの方々が見舞ってくださる。主の憐れみ以外のなにものでもない。主に感謝し、賛美します。

七月三日

集会まで車で行き、ベックさんの福音メッセージの司会をつとめ、その時に二十分で証しをする。多くの方々の励ましをいただいて感謝だった。

七月三日の小川泰徳さんの証しから

「今日ここにいたるまで、まったく主に守られてきました。病気を通して主に与えられた恵みの大きさに驚いています。いかに多くの主にある兄弟姉妹が、愛をもって祈ってくださっているか、多くの励まし、手紙、祈りをいただいて、感謝しています。

私は元気な時は、メッセンジャーとしていろいろな所へ行きました。帰ってくると、家内に『行ってよかったよ。今日も病院に見舞いにいってあげて、すごく喜んでくださった…』と言っていました。でも、その『行ってあげてよかった』というのはすごいごう慢だったということがよく分かりました。

また、自分の病状が悪いということは分かっているので、もしお医者さんから『あなたはがんです』と言われると相当うろたえるだろうな、と思っていました。昔、お医者さんから『あなたは心筋に障害がありますね』と言われただけでへたりこんじゃった経験があるんですね。でも、今回、お医者さんから、スキャナーで撮った結果、『腫瘍らしいものがありますね』と言われた時は、まったく何の動揺もなく、これはほんとうに不思議なことでした。ついて来てくれていた家内に『アウトだったよ』と平安に言うことができ、本当に主がなされなければ絶対にできなかったことでした。だから皆さん、安心してください。もし、そういう状態になっても、主は必ず支

えてくださいます。

また、野口先生も、医長先生も、辻先生も、本当によく診てくださいました。検査の結果をお聞きする時も、まず家内が呼ばれたのですが、家内は『私とお父さんと家族全員の前でお願いします』と言いましたら、それをそのまま受けとめてくださいました。

当日は私、家内、家族以外に、数人の主にある兄弟姉妹がたが同席してくださいました。おそらく、家族以外の人もいっしょに、『あなたはがんですよ』と告げられるということは今までなかったことではないかと思いますね。

『がんだ』と言われた時、私も人の子ですから、まず『主よ、できることなら、もう少し家族といさせてください』と祈りました。次は『主よ、まだ申しあげていない、気がついていない罪があるなら、どうかお赦しください』という祈りでした。その祈りも、長くは続きませんでした。最後に落ちついた祈り、今でも祈っている祈りは、『この病気を通して、私を通して、家族を通して、また祈ってくださっているお一人お一人を通して、どうか主のご栄光だけが現わされますように。どうかいろいろなご栄光のかたちを見せてください』という祈りでした。このように祈る時、まったくの平安が与えられることがよく分かりました。

ベックさんは、『主と私たちの関係さえうまくいっていれば、何を祈ってもいいよ』。また『イエス様は、あちらからこちらからわんわん祈られるとうるさくてしょうがないでしょ、そうすると聞かざるをえないでしょ』という意味のことを言われたことを覚えています。欲のない、無心の祈りこそ主に聞かれる祈りではないでしょうか。

今私は、ごく自然に主に向かって、主とお話できるという、静かな時をいただいています。そして、多くの方々のお祈り、お手紙、お見舞いやお電話に支えられて、愛に包まれて日々を過ごしています。本当に、感謝です。これにまさる主のご愛はありません。苦しんでいる方々、病んでいる方々のために祈っていただきたい、私も含めて祈っていただきたいと心からお願いして、終わりにします」。

七月十一日

主が聖書の中に生きておられ、みことばによって人の中に住まわれ、読む者に毎日新しく語りかけ、必要に応じて啓示を与えてくださる。主を知らず、聖書を知らない人は何に頼るのか。ラジオで身の上相談や病気の相談をしている。虚しいことを繰り返している。すべて聖書の中に答があるにもかかわらずである。自分の力のなさと福音を伝えることの大切さ、難しさを感じる。

七月十二日

今朝、大量の血便。少しショックだった。神に祈り、少し眠って通常に戻った。メッセージのテープを聞いて眠り、聖書を読んで眠り、祈りをして眠る。なんと幸いなことか。何とぜいたくなことか。

七月十四日

今の自分は最も幸せである。主がいらっしゃることが確認できて、確信できるからである。主がおられるからこの家族があり、主がおられるから集会の方々のとりなしの祈りがあり、主がおられるから、平安がある。

七月十六日

書くことが、体調のせいで苦しい。これを書くのがせいいっぱいである。主がよい体調を少しでも長くしてくださることを祈る。

七月十九日

主治医から「つらかったらホスピスか日赤病院の個室に入院しては」と勧められた。家に帰り、できる限り家にいるということにした。

七月二十日

今日も体調は悪い。悪いとついつい眠ることによってすごすことになる。日記を書くのもおっくうになってきた。というよりは、書くことそのものがつらいのである。集会の方々のくださる愛のお便りを読み、感謝するのがせいいっぱいというところ。できればいっぱい手紙を書きたい。

七月二十二日

主のみこころが明確に現われるまで、黙って待つのがよかろう。動物のようでなく、木のように。ヨブ記に記されているように。

木には望みがある。たとい切られても、また芽を出し、その若枝は絶えることがない。

（ヨブ　14・7）

七月二十六日

朝病院へ。血液検査。痛み、血便、嘔吐が強くなってきている。

七月二十八日

貴い御名を賛美します。今日もあなたさまが新しい一日をくださったことを感謝申しあげます。体調の良し悪しでなく、今日も一日イエス様にあって生活できることをありがとうございます。私には主に差し出すべき良いものはありません。ただただ祈りだけです。でも、主はすべて最善のものを私のために与えてくださると確信できますから感謝します。主はいつも、私が悔い改めるとき、「あなたの罪は赦された。立って歩きなさい」と！　主よ、どうかあなた様の前に告白と悔い改めの祈りのできないことがありましたら示してくださいますように。また、私同様に苦しんでおられる一人一人の上に、主イエス・キリストの豊かな恵みが、憐れみの上に増し加えられますように祈ります。

野口先生のはからいで、明日から日赤病院に一週間の予定で、体力回復を主目的に、在宅ケア

の準備とあわせて入院させてもらうことができることとなった。

七月三十一日

午後から家族だけで礼拝、家族にメッセージを伝えることができた。使徒の働き17章から次のところである。

…神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。…神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。（使徒　17・25、27、28）

人の思いによらない、万物の創造主に対する奉仕が大切であり、それ以外のものは神様には不要である。いいかえれば、神の名を利用した、神のみこころによらない、人の手によるものは、神は対象が物であれ、宗教組織であれ、不要であると書かれてある。主のみこころに耳を傾け、主に従い、委ねて、すべてのことをなすことを神は望んでおられることを教えられた。みんな八時過ぎまで一日中いてくれた。感謝！

小川泰徳さんの日記は、ここで終わっています。七月二十九日に武蔵野日赤病院に入院、そして八月十四日午後七時四十分、主治医の野口先生、ご家族、看護婦さんにかこまれて、平安のうちに天に召されていかれました。前夜祈禱式では、メサイアの「われらをば血もて…アーメン」

が合唱団、管弦楽団によって主に捧げられ、葬儀では、多くの方々の祈りと賛美が捧げられました。次に掲載するのは、そのときのベックさんのメッセージの一部です。

前夜祈禱式と葬儀におけるベックさんのメッセージから

愛する小川泰徳さんのことを考えると、たしかに淋しくなります。そして、彼のことを考えると、ほんとうにうらやましい。なぜかというと、彼は目的地に着いたからです。

朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。（Ⅰコリント　15・54）

私たちは確信しています。愛する泰徳さんは、しかたがなくて死ななければならかったのではなく、「天国に召される特権」にあずかるようになったのです。「私も天国に行きたい」そういう気持ちを持つようになれば、幸せだと思います。

バッハは、自作のカンタータの中で次のように言っています。

「神の時は最良の時。神の望みたまうかぎり、われわれは神の内に生き、動き、存在する。神の望みたまうとき、われわれは神の内に、正しい時に死する」。

人間は病気によって死ぬのではない。主なる神の時が至って死ぬのです。

イエス様は愛する弟子たちに、別れの言葉を残されました。

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。」（ヨハネ　14・18）

「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」（ヘブル　13・5）

弟子たちはこのことを実際に体験するようになったから、喜びに満たされ、いのちがけでイエス様を紹介したのです。愛する泰徳さんもまた、ひとりでも多くの方々にイエス様を紹介したいと心から望んだのです。泰徳さんはそのために、休みなく、いろいろな病院に行ったのです。悩んでいる人は励まされるべきです。苦しんでいる人はイエス様との出会いによって元気になるべきです。これこそ、彼の心からの願いだったのです。

泰徳さんが病気だと分かった頃、私たちは祈りました。「主よ、ごらんください。あなたが愛しておられる者、愛しておられる泰徳さんが病気です」と。主のお答えは次のものでした。

イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は、死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」

（ヨハネ　11・4）

死を通して、主が栄光をお受けになることを確信することができるのは、ほんとうに感謝です。泰徳さんの心からの願いも、またそのようでした。「私は葬儀のことも、自分のことも、どうでもいい。私のことなど大切にしないで、イエス様だけを大切にして紹介してもらいたい。一人一人に、イエス様こそが私たちの神であり、愛してくださっている…このことを体験的に知っても

らいたい」。

イエス様は、生きておられるお方であり、ご自身を啓示なさるお方であり、私たちの祈りを必ず聞いてくださるお方です。泰徳さんは、「私はひとりぼっちでなく、イエス様はいつもいっしょにいてくださっています。私はイエス様に頼ることができるから幸せです」と言ったのです。ですから、彼はイエス様を「運ぶ」者でした。イエス様を紹介することが、彼の使命だったのです。彼の喜びの源は何だったのかといいますと、「イエス様は、私の代わりに、その血を流してくださった。イエス様のみもとに行けば必ず受け入れてくださり、赦してくださる。私は、私のためにご自身を捧げてくださったイエス様のために生きたい」。泰徳さんはそれを体験的に知るようになったから、いろいろな所に行って、その福音を宣べ伝えたのです。

彼の告白は次のものでした。

「イエス様、私は、ほんとうの心の憩いがあなたの中だけにあるということを見出しました。多くの悩みと苦しみのうちにありながら、まったく平安を得ることができました。あなたの愛が私の心をとらえてくださり、私はあなたのものとなりました。イエス様、あなたは、ご自身のいのちを与えてくださり、わたしを新しく造り変えてくださいました。私の心は感謝と喜びであふれ、やがて父の家であなたとともに新しい歌を歌う時まで、昼も夜も、私はあなたを賛美しつづけます。私を満ち足らせてくださるお方は、あなた以外にこの世にはありません。私は、これほどまでに私を愛してくださるあなたの中にのみ、ほんとうの喜びを見出すことができました」。

聖書の中で、「今からのち、主イエスにあって死ぬ者は幸いである」と書かれています。死ぬ

ことは泰徳さんにとって決して楽しいことではなかったはずです。自分の身体がだんだんとぼろぼろになっていくのは、こころよくない。けれども彼は、「死は決して終わりではない」、と信じたのです。「この目に見える世界は、大したものではない、ぜんぜん魅力的ではない。私の国籍は天国にある」と喜んで証しすることができたのです。

死は、人間の最大の敵です。しかしダビデは「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。」（詩篇23・4）と言ったのです。もう一人ぼっちではない。主がともにいてくださるから。

泰徳さんは、イエス様を信じることによって、神の家族の一員になったのです。

主にある者は、喜ぶ者とともに喜び、苦しむ者とともに苦しみます。愛する泰徳さんは、悩む人とともに悩み、苦しむ人とともに苦しんだのです。イエス様を知ったからです。だから彼は、多くの人々に、イエス様のすばらしさを伝えようとしたのです。

人が救われる条件とは、ただ「悔い改めることと、イエス様を信じること」だけです。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。

（ピリピ　1・21～23）

もちろん彼には、「悩んでいる人がいっぱいいるから、もう少しイエス様のことを宣べ伝えたい、それとせめて貴子ちゃんの結婚式まではいたい」という気持ちもあったんです。当然です。けれど彼は、「自分にとって、家族にとって、元気になっても、召されても、どっちでもいい。主の道は最善だから、私は安心して主にゆだねる」という態度をとったのです。希望をもって死に向かうことができる人はほんとに幸いです。

天に召されるということは、イエス様とひとつになることです。

見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

（黙示　21・3、4）

彼は今、イエス様とともにいて、主の栄光にあずかっています。ほんとうにうらやましい。なぜなら、すべての苦しみから解放されているからです。イエス様のみもとには、悲しみも、痛みも、心配も、悩みも存在しないからです。

私たちも、彼の信仰の生涯の結末を見て、それにならいましょう。

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者



であるイエスから目を離さないでいなさい。

（ヘブル 12・1、2）



約束された天の御国へ

小川 麗子

一九四一年三重県に生まれる。相賀小、潮南中学卒業。一九六五年小川泰徳さんと結婚。一九九四年泰徳さん天に召される。長女貴子さん、長男敬是さん。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

（ヨハネ　1・1～4）

一九九四年八月十四日、愛する主人は、約束された天の御国へ召されていきました。

私は、紀伊半島の山と川と海に囲まれた小さな田舎に生まれました。自然に恵まれたすばらしいところで、山に登り、川で泳ぎ、海で釣りをするなど、四季を通じて遊びまわってのびのびと育ちました。そんな空気の澄みきった大自然にかこまれながら、私は中学時代に胃を病みました。

幸いなことにたいしたことなく元気になりましたが、その後、肺結核を患い、しばらくの間通院しながら自宅療養をしました。そんな日々を送りながらも、気分がおちこむこともなく、回復しました。やがて私は、一九六五年に主人と結婚しました。主人は私の郷里と二十分ほど離れたところに育ち、大自然のもとで私と同じような子供時代をすごした人でした。主人は健康そのもので、膵臓がんになるまで病気を知らない人でしたから、「妻は自分より身体が弱い。だから妻が病気になったら、手厚い看病をしてあげたい」と言っていました。私も、さぞかしそうしてもらえると期待していましたのに、先に天国に召されて行きました。

結婚した私たちは、夫の転勤で三重県から愛知県、それから東京に越してきました。そこで、結婚生活十一年目に初めて聖書を知り、そしてイエス様に出会いました。

滝山で始まったキリスト集会の家庭集会に、初めて池田さんの奥様からお誘いいただいたのですが、聖書を中心とする集会とお聞きしても、そのころはまだ何か宗教の一種だとしか思われず、煩わしそうに感じ、そのようなものにはかかわりたくないと思ってお断りしました。でも、「ご近所の皆さんとお茶をいただきながらの気軽な集まりだから」と重ねてお誘いいただいたので、大好きな池田さんですし、「それでは」と出かけました。数人くらいの集まりでしたが、聖書も初めてなら聖歌も初めて、ベックさんからイエス様のメッセージをお聞きするのも初めてでした。でも、なんとなく、人間が作った「宗教」ではないんだ、神から与えられる「救い」なんだということが心に残りました。

この日の体験はとても新鮮でさわやかな気分でしたから、主人の帰りが待ち遠しく、夕食の時、

いつもは主人のほうが多く話すのですが、私は今日のできごとをくわしく話しました。主人はとても家族を愛し生活をたいせつにする人でしたから、「東京に越してきて淋しい思いをしないでいてくれるなら、それもいいのでは」と思ったのでしょう、気持ちよく聞いてくれ、いろいろと話しあうことができました。次の家庭集会からは自分の意思で参加するようになりました。ベックさんの奥様からケーキの作り方も教えていただいてケーキも作れるようになり、主人と子供たちにも喜ばれました。集会があった日には、そのときのことを主人に楽しく話し、会話が弾みました。そして小学生と幼稚園児だった二人の子どもたちも吉祥寺の日曜学校のクリスマス会に誘われ、喜んで参加しました。そんなときは主人が送り迎えをしていました。

そのうち、私にもいろいろなことが少しずつ分かるようになってきました。イエス様が十字架につけられて貴い血を流してくださったのは、全人類の罪をあがなうためであり、唯一まことの神様から離れていた私自身の罪のためであること、そして三日目によみがえられ、今も、一人一人を愛してくださっておられること、さらに、そのことを信じ、罪を悔い改めて救われた者には永遠のいのちと天国の約束があることなどです。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。

「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・10、11）

それまでの私は、人間はいつかは必ず死を迎えるが、殺人や泥棒などよっぽど悪いことをしない限り、天国に行けると思っていましたし、死に対しても死ねばそれで終わりだと思って、深く

考えたことはありませんでした。しかし聖書には、死を克服してくださったイエス様を信じる信仰によってのみ天国に導かれる、とあります。いのちの問題で、こんなに深く考えてしまったことは今までありませんでした。救いにあずかりたい、と切実に思いました。集会の後で、イエス様の前に、涙して心から自分の罪を悔い改めることができました。主イエス様の導きに心から感謝でき、すっきりとしてとてもいい気持ちでした。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

うれしくてたまらない私は、さっそくその夜、主人に話しました。主人は「それはよかったね」とすなおに言ってくれました。

イエス様のことは、いつも日常会話として主人に話していましたが、主が働いてくださったのでしょうか、ある日曜日の朝、主人の方から「今日はみんなで吉祥寺キリスト集会の礼拝に行ってみようか」と言いだしたのです。「え？　あ、そうね。行ってみましょうか」ということになって、家族そろって出かけていきました。主人はみなさまが歌われる聖歌の賛美のすばらしさに感動して、気分をよくして帰ってきました。「イエス様、これからも主人と子どもたちと、いつもいっしょに礼拝させてください。私は主人といっしょでなければ、信仰も弱く、何もできない者です。そして『妻は夫の助け手』と聖書にありますから、助け手として導いてくださり、主人がイエス様を信じ、救われますように、十字架を仰ぎ見て救われますように、どうか導いて助けて

ください」と、こればかりを絶えず祈っていました。

あるとき、ベックさんが「ご主人にぜひお会いしたい」と訪ねてきてくださいました。そのころは主人も、ベックさんとゆっくりお話をしてみたいと言っていたので、その時を主が備えてくださったのだと思いました。主人はベックさんとお話をして、イエス様によって提供されている十字架の救いを信じて受けとり、また人間を造られた天地万物の創造主なる神から離れていた罪をすなおに認め、悔い改め、イエス様の前に祈ることができました。

そのうち、信仰を証しするために洗礼を受けたい、という思いが自然に与えられました。それで「主人の洗礼のことは主におゆだねします。また、こんな私でも洗礼にあずかることができるのでしたなら、どうか証しとして洗礼を受けさせてください」と祈りました。祈りは聞きとどけられ、主人と二人そろって洗礼にあずかることができました。ただただ主に感謝しました。

それからの私は、嬉しくてしかたがありませんでした。毎週日曜日は夫婦そろって礼拝へ、子供たちも日曜学校へと、喜んで集うようになり、ほんとうに満たされた日々を主からいただきました。聖書を、今も生きておられる主のみことばとして信じることにより、生き生きとした希望をもてるようになりました。また、「祈り」を知ったこと、与えられたことは、なによりの宝でした。このように私たちが変えられていったかげには、キリスト集会、またドイツの主にあるみなさま方の祈りがありました。心から感謝しています。

あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。
（ローマ　12・1）

それまで「僕は家族一人一人を心から愛している」と思っていた主人でしたが、イエス様の愛をいただいてからは、「人間的な愛、問題にぶつかった時に消えてしまう愛、そんなはかないこの世の愛ではなく、決して変わることも消えることもないほんとうの愛、一方的な神様の愛を知ることができた」と言って喜んでいました。私たちは結婚したとき「年老いても手をつないで散歩している夫婦であろうね」と言いかわしていました。そしてそれなりに愛しあい信頼しあっていましたが、主を信じてからは、絶対に揺らぐことのない土台、愛と平安のもとをいただくことができました。

やがて娘の貴子は中学一年生のときに、息子の敬是は六年生のときに、それぞれイエス様に従うことを決心し、救われ、洗礼にあずかりました。このように家族みなが救いに導かれたのも、一人一人は弱い者なので、主のあわれみでした。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、—あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。—

（エペソ　2・4、5）

このように家族全員が救われましたが、いつも救われたときの気持ちを忘れないようにと祈りながら生きてきて、はや二十年になります。その間に主からたくさんの恵みをいただきました。

西軽井沢国際福音センターができる前、旧軽井沢で開かれたバイブル・キャンプには、主人の運転するレンタカーのマイクロバスで大勢の方々と出発し、途中賛美しながら長い時間かかって

行きました。それも今は懐かしい思い出です。また家庭集会では、遠足やバーベキュー大会をして楽しんだこともありました。地域の子どもたちに、ぜひイエス様を知ってほしい、ほんとうのクリスマスを味わってほしいという思いから、集会の大学生のみなさんと子どもたちの集会や映画会などを開いたこともありました。ポスターや案内状をいっしょに楽しく作りながら、若い人々がイエス様と出会って救われていく喜びを体験させていただきました。

主人が名古屋に単身赴任したときは、時々帰ってきましたが、その三年間、淋しい思いをしたこともありました。でも、赴任先の名古屋では日曜礼拝が備えられ、感謝でした。中西規夫さんご夫妻のご子息の康弘君は当時十二歳でしたが、名古屋の病院に入院されていることをお聞きし、ぜひイエス様を紹介したいと思い、献血を申し出ながら「世の光」のテープと「実を結ぶ命」の本を持って訪ねました。康弘君はイエス様をすなおに信じて、光の中に移され、今は天国で主とともにおられます。そして康弘君を通してご両親、ご家族、親戚の方々にも福音が伝わり、イエス様のもとに導かれましたことは大きな喜びでした。

また、同じ会社にお勤めの新井さんご夫妻、その新井さんを通して会社の佐野さんご夫妻が救われるという恵みもいただきました。時には自己中心になって、信仰的に元気のない日もありましたが、主は私たちのように消えてしまいそうな小さな者の種蒔きをも愛してくださり、実を結んでくださり、主人も会社の方々のためにともに祈りあえる力強い支えをいただいて喜んでいました。また主人は、病気の方々を心からお見舞いしてまわって、イエス様を紹介できる恵みを数多くいただいていました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・11）

ところが主人は、一九九四年の三月ごろから胃の調子がほんの少しおかしくなり、病院で薬をもらって服用していましたが、五月に入ると痛みの症状が出るようになりました。胃カメラの検査の結果は、異常なしとのことでした。しかし、最初のころの弱い痛みが日増しに強くなってきて、これはただごとではないと思い、日曜日でしたが近くの公立昭和病院で診察していただいたところ、エコー検査で膵臓かもしれないことが分かり、その後のCTスキャナー検査で膵臓に腫瘍があることがはっきりしました。この日まで主人は会社に出勤していました。

風邪をひいただけでも大騒ぎをする主人ですが、「膵臓に腫瘍がありますね」というお医者様の言葉に、以外にも動揺することなく落ち着いていたので、私はそんなに悪くないのかしら、と思ったほどでした。痛みの原因がなかなか分からなかったものですから、いつも祈りの中で主人自身「痛みの原因を明らかにしてください。そしてどんな結果であっても、主のみこころとして平安に受けとることができますように」と祈り続けてきたので、主が支えてくださったのでしょう。滝山のキリスト集会の方々も心配してくださり、心からお祈りをしてくださいました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

この日、夕食の時、家族がそろったところで、主人が病状について話し、皆で祈りました。家族の一人一人が、イエス様の御名によって祈りのできる恵みを、心から感謝しました。

五月二十七日、さっそく入院して腫瘍が良性であるか悪性であるかをくわしく調べることになりました。三週間、あらゆる検査をした結果、膵臓がんだと分かりました。

痛みは毎日二回の座薬で抑えているだけですし、苦しい検査が続きました。そのたびに「お母さんや子どもたちでなく、私でよかった」と言っていました。

がんの告知の前日、先生が私に「ご主人は悪性の腫瘍でした。膵臓と肝臓にも腫瘍があります。ご主人にはどう話されますか」と尋ねてくださいました。私は小さな声で「そうですか。……主人といっしょに家族全員に聞かせてください」と言いますと、「それでは明日、子どもさんたちがお勤めから帰られた時間にしましょうか」と聞いてくださいました。「はい、よろしくお願いします」とかろうじて言いましたが、それ以上はもう言葉が出てきません。足も少しがたがたしてきました。急いで病室に戻り、主人の前では涙が出ないように一生懸命耐えるのですが涙ぐんでしまいます。「先生がね、今日で検査は終わりましたって。それで結果は家族全員に話してくださるようにとお願いしてきました。それでよろしいでしょうか」と言いますと、主人は「うん、それでいいよ。みないつそろうかな」と答えました。職場から毎日父親のもとに直行してくる娘も、このときばかりは静かでした。病室を出たとたんに涙があふれて来て止まりません。帰りの道で、家で子供たちと祈りながら、泣きました。

翌日、がんの告知のときは、主人もいっしょにと望んでいた家族全員、それに今川さん、小野

田さん、岩上さんもいらしてくださいました。主人もとっても明るく、自分から「先生、大勢ですけれどみんなでお聞きしてよろしいですか」と言いました。そのいつもと変わらない主人の元気な声と態度に、私はイエス様が今、主人とともにいてくださっているのが分かり、心がやすらぎました。主治医の村田先生の説明は、優しくていねいで、たくさんの写真を見せてくださり、私たちも質問したりしながらお聞きすることができました。この日の主人の日記には、主の守りと主のなんらかの約束を感じることができ、安らぎがあったことが記されています。

あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

（Ⅰペテロ　1・5～9）

翌朝、主人はきっと昨夜は眠れなかったのではないかと心配しながら病院に行きますと、とても明るい顔で、お見舞いにきてくださった中西さんご夫妻と聖書の詩篇のところを開いて話しあっ

ているのです。「夜も痛み止めの座薬のおかげでぐっすり眠れて、気持ちがいい朝を迎えることができ、聖書のみことばによって平安をいただいたのだ」と言っていました。

私はみことばの力強さを目の前に見せられて、心から感謝しながら、でも、ただ、涙が出てきて止まりません。主人は「お母さん、どうして泣くの。泣かなくていいんだよ。すべて主がご存じなのだから」そう言って元気な声で私を励ますのです。

やがて主人は、だんだんと痛みがひどくなり、食欲もなく、嘔吐もあって、健康なとき痩せたいと思ってもなかなか減らせなかった体重も十キロも減ってしまいました。主人は「理想の体重になったな」と冗談を言っていましたが、そんな姿を見るのはとてもつらく、悲しいことでした。けれども私は、主は主人のことをこよなく愛してくださり、最善をなしてくださると確信していましたから、「召されることも、直ることも、主のみこころのままにどうぞ。私たちは主の御手の中にあって最高の恵みをいただけると思っていますから、神様のご栄光だけが現わされますように」と祈りつづけていました。死に対する恐れは、主人にはまったくありませんでしたが、家族といっしょにもう少しこの世にあって生活したい気持ちはあったようです。また、自分の生活をふりかえり、救われていながら、いかに自分が主にささげていなかったことか、またごう慢であったかを気にして、自分を責めていました。しかし、聖書のみことばと祈りによって、その思いは取りのぞかれ、「この病気を通して主のご栄光だけが現わされますように」と祈るようになっていきました。そして、まだイエス様をご存じない方々、また悩み、苦しみ、痛みのなかにある方々のために祈り、またそのために残された時間が与えられていることを主に感謝していま

した。特に親族については、自分と同じように、イエス様の十字架の愛を信じて天国で再会できますようにと、心から祈っていました。自分のことはすべて主なるイエス様に明けわたし、お委ねしていました。

がんとの苦しい戦いはありましたけれども、「主の手の内にあるという安心感が、不思議なほどの平安を与えてくださっている。不思議としか言いようがない」と言っていました。そして家族のことも「イエス様がいつもいっしょにいてくださるから大丈夫だね」と毎日のように言って私を安心させてくれていました。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ　8・18）

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ　8・38、39）

検査が終り退院して後、一カ月と一週間、自宅で過ごしました。この間、一週間に一度の通院で点滴などの治療を受けていましたが、嘔吐と貧血がひどく、水分をとることさえ困難になってきました。ちょうどその時、同じキリスト集会の野口先生が「日本赤十字病院に入院の用意をし

ました」とお電話をくださいました。入院の必要を主に祈っていた時でした。村田先生と野口先生はお互いにお知り合いの仲でしたので、主人の病状についても最初から話しあっていてくださり、時々訪ねてくださっていました。そして主にある方ですから、主人も安心感がありました。主が備えて導いてくださっている、イエス様の愛が私たちをとりかこんでくださっている、それが目に見えるようでした。　一日一日と体力が衰えていく主人は、この頃には天国に召されるかも知れないと思っていました。七月二十九日、栄養点滴のための入院の朝、どうしてもお手紙をしたいと思いながらもなかなか書くことができなかった方々に、最後の手紙をお出しすることができました。「これでよし。後は主がすべてのことをしてくださるし、させてくださるだろうからね」。そう言って家族といっしょに病院に行きました。

私はあなたの愛から多くの喜びと慰めとを受けました。それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによって力づけられたからです。
（ピレモン　7）

義は平和をつくり出し、義はとこしえの平穏と信頼をもたらす。
（イザヤ　32・17）

入院して三日目、日曜日なので子どもたちも病院に行き、主人といっしょに礼拝をすることにしました。家族で祈り、主人がベッドに座り、聖書を開いて使徒十七章二十四から二十九節まで、「生きている神と偶像」についてメッセージをしてくれました。そして、「主のみこころに耳を傾け、主に従い、すべてのことを成すことを神様が望んでおられるから」と話してくれました。息

子も祈りました。その祈りに、とても平安を覚えることができ、子どものことも主が守ってくださることが確信でき、安心しました。　その日主人は、朝から気分もよく、痛みも薬で守られて、面会時間が過ぎるまで、いろいろと多くのことを話し続けていました。一日中、とっても嬉しそうでした。今でもその光景を思うと涙が出てきます。

八月一日、入院して四日目、昨日とはうってかわって早朝から気分が悪く、病気になって初めて高熱が出ました。腹水が溜まり、黄疸も少し出てきました。熱はこの日だけでしたが、腹水は抜いてもすぐに溜まってきます。この日から力もなくなり、話し好きな主人ですのに、言葉数も少なくなり、書くこともできなくなり、痛み止めの薬もあってでしょうか、よく眠っていました。

そのころこんな話をしたことがあります。「私ね。家では聖い順番に天国に召されるのかもと思ったりして。そうしたら子供たちからかな、なんてね。でも一番聖いのはお父さんのようね」。「そうでもないけどね。主の再臨がきて家族全員が一挙に天に引きあげられることが一番いいけど、まだまだ救われてほしい人がいっぱいいるからね」。

主に愛されている者。彼は安らかに、主のそばに住まい、主はいつまでも彼をかばう。彼が主の肩の間に住むかのように。

（申命記　33・12）

八月十四日。昨夜は嘔吐と腰痛がいつもより強くあって苦しいでしょうに、そんなことをひとことも言わず、「見てるのつらいでしょう。眠れないでしょう」と私のことを心配している主人。そんなこと言われるとよけいに涙が出てきます。

朝がたになって落ちつき、しばらく眠って目が覚めると、主人は言ったのです。「お母さん、天の都で結婚式の準備をしているよ。結婚式の準備を…」。「結婚式？」。「う、うん。夢か。夢だよ。夢々」。夕方病室で子どもたちにその話をしました。「お父さんね、今朝結婚式の夢を見たんだって」。「えっ、結婚式？」と息子が言いますと、「そう、そうなんだよ」と主人が言いました。これが最後の日となりました。

私はまた、聖なる都、新しいエルサルムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」

（黙示録　21・2～5）

召される直前まで、意識がはっきりしていて、大好きな主治医の野口先生と看護婦さんと家族に囲まれて、直接イエス様にお会いできました。「お父さん、よかったわね」涙ながらの言葉でした。先生は「祈りましょう」とおっしゃってお祈りをしてくださいました。家族三人それぞれ、お父さんを天国に召してくださったこと、そして、またみんなで天国で会える希望をいただいて

いることを感謝する祈りを主にささげることができ、悲しいけれども満たされました。

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。（ピリピ　3・20、21）

前夜祈禱式と葬儀は、主のご栄光そのものでした。多くの方々による祈りと賛美、力の限り主をたたえて叫ばれた「メサイア」の合唱、死に打ち勝つ勝利のメッセージ。その場全体に聖霊が満ちあふれ、大勢の方々が主の栄光を仰ぎ見、ともに感謝し、喜んでくださいました。私は、聖書のみことばの力強さと賛美の力強さを、子どもたちとともに深く深く体験しました。イエス様をまんなかに、先に召された方々といっしょに、主人が、お父さんが、たしかにいました。その顔は平安に満ちています。イエス様ありがとう、ありがとう。悲しいけれども喜びと平安の涙があふれました。

主人の姪の安芸さんは、「イエス様はほんとうに生きて働いておられ、叔父は天国で安らいでいることが確信できました。今まで悲しんでいたのが今度は喜びに変えられ嬉しくてなりません」と言ってくれました。今では主にあって祈る生活へと導かれています。親族の方々も、「こんな葬儀をしてほしい」と感動の涙を流しておられました。会社の方々や友人の方々も、夏休みにもかかわらずご参列くださり、暖かいお心をいただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ　1・21）

一月二日には西軽井沢国際福音センターで「よろこびの集い」が開かれ、そのときみなさまが記念のコンサートで主を賛美なさいました。

詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。（エペソ　5・19）

主人が療養中に慰められた詩篇に中西さんが作曲なさった曲を、中西ご夫妻の歌、オーボエ、ヴァイオリン、ピアノの演奏で賛美をしてくださいました。主がこれほどまでに主人を愛してくださり、みなさまにも愛されていたことを、ただただ感謝するばかりです。主人は、子どもさんたちが遊んでいるのを見ると自分もその中に入って遊びたくなる人でしたから、子どもさんたちにも好かれていました。「小川さんのおじさんには幼いころよく遊んでもらったから」と言って、メサイアの合唱に参加してくださった今大学生の透君、そのお気持ちがとても嬉しく、胸が熱くなりました。お一人お一人の皆様からも同じお気持ちを受けとることができ、「約束された天の御国」を改めて心から確信することができました。これらすべては、みなさまの力強い愛の祈りの結果であることを見せていただいて、心から主に感謝しております。

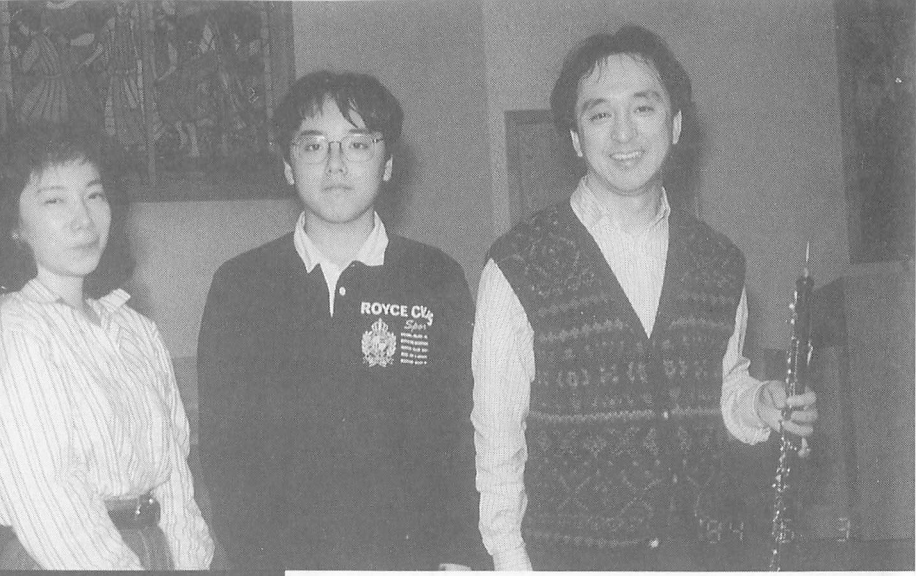
「イエス・キリストを知って、悔いのない、価値ある人生を送れて幸せだった」と主人は言っていました。二人の子どもたちも、イエス様に守られて礼拝に集うことができる恵みを感謝して

います。子どもたちにとっては、楽しいお父さん、大好きなお父さんでした。天国に行ってしまって悲しいけれど、神様はすべてのことを働かせて益としてくださいます。神様のなさることはすべて最善で、主人が召された時も最善の時だったと確信し感謝しています。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ　1・21）

家族三人は、毎日イエス様に祈り、語らっています。これからも主は最善に導いてくださると確信することができ、主人と天国で再会できる希望をもって日々を歩ませていただいているのは、なんという幸せでしょうか。主人が「このみことばをたいせつに生きてほしい」と、家族に与えてくれたみことばは、次のものでした

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。（哀歌　3・22～24）





主にあって喜ぶ

脇岡総一

一九四八年広島に生まれる。大芝小、山陽中、高。東京芸術大学卒業。オーボエ奏者。文化庁研修生でドイツに留学。東京都交響楽団首席奏者。家族は妻和子さん、長男洋平さん。

私はオーボエという楽器を吹いています。高校の時からオーボエを吹き初めて、将来この楽器で生活をしていきたいと決心しました。そして芸大に入学し、コンクールに入賞したり、妻と出会ったりして、楽しい学生生活を送りました。

この世界は就職は大変で、もちろん腕があってなおかつ運がなければオーケストラには入れません。幸いにも私はオーケストラに就職することができました。その後妻と結婚し、かわいい子供も生まれ、仕事にも恵まれ、ドイツにも文化庁から派遣されて留学し、その後家も建てて、これでもう少しお金でもあったらいいなというような生活を送っていました。

そうした中で妻が一年に一、二回、何かのときに爆発して叫びます。「なんてごう慢なの！あなたのような人は教会にでも行ったらいいのよ」。なぜ教会かといえば、その当時子供が教会の幼稚園に行っていたからでした。こう言われても、まったく身に覚えのない私としては、「何言ってんだ。一生懸命やっているのに！」と言うしかありませんでした。

というのもオーボエを始めて以来、その道で有名になりたいと思って一生懸命に練習をして、その目的に一歩一歩近づく努力をして、それで得たお金で家族ともども幸せに生活できるように頑張ってきたわけです。ただ妻が爆発した時には、家族のためにという名のもとに自分のやりたいことをやっているのではないかという後ろめたさは少しありました。しかしごう慢だと言われても、私自身は優しくていい人なんだという気持ちはいつもありました。

もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。

（Ⅰヨハネ　1・10）

妻も「確かにいい人で、自分たちにもよくしてくれる。しかしそれが何かは分からないけれど、何かが違う」と言っていました。

さて、自分の演奏生活において、一つの解決されない問題がありました。それは自分が演奏をした後に、演奏の出来、不出来に関係なく心の内側に残る不満足感でした。表面上は一応問題もなく、したがって多くの仕事があり、忙しく演奏活動をしていました。しかしその問題はいっこうに解決されることもなく、自分の心に積もっていました。それは自分にとって心の重荷となっていきました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

（マタイ　11・28）

それを取り除きたいと思い、努力し始めました。まずドイツへ留学をしました。家族ともども楽しく夢のような一年を過ごすことができました。オーボエの方はどうかというと、これもすごい成果があり、自分でも一皮むけた感じがありました。表面的には。ところがレベルアップした表面的なものと、自分の内面的なものとの間にギャップが以前よりいっそう広がった感じになり、何が原因なのか考えていました。それでも演奏の仕事は順調にやっていました。

次にやるべきことを探していたとき、それは本屋にありました。「自己実現」。何と響きのいい言葉でしょう。これこそオーボエを初めて以来、自分の求めてきたものだと思われました。「これだ」とばかり本を買いあさりました。テーマは「いかにして自分を変えて自己実現をして

いくか」という魅力的なものでした。これで自分が変われば内面的なものも変わるだろうと、今までの自分と違う自分にしようと努力し始めました。たとえば、しゃべりかたを変える、服装を変える、人に笑顔で対応する、悪口を言わないなどを、数年の間やりました。しかし「内面的」なものは一向に変わらず、だんだんとむなしくなってきました。

そうしたとき、次にしたのが「自己を探求して自己実現をする」というセミナーのようなものを知人から紹介されたのです。そのセミナーでは、人間は自分の過去の体験から自分を造りあげ、それによって今を生きているというのです。実際自分も、今までの過去の体験から今の自分が造られているという発見があったりして、感動すら覚えました。では、過去の体験からではない自分、こういう自分ではない別の在り方の自分がありえるのではないか、つまり自分を変えることが可能なのではないか、と思い、もしそうならば、内面的な問題も解決されるかもしれないと期待をもって一年あまり続けました。しかし結局、何も変わることもなく、内面的にはもんもんとした生活を送っていました。

そうした中で今から四年あまり前に、時々頭をかすめることがおき始めました。「ひょっとしたら自分はとてもごう慢なのではないか」。どうしてか分かりませんが、この思いが頭の中を飛び交い始めたのです。確かに今までも自分の思いで強引にことを運んだり、人を動かしたりして、自分でもごう慢だと思ったことはありました。しかしそういう目に見える動作や行動ではなくて、この自分を造っているもの、このからだ、この思い、生まれつきの自分というすべての本質そのものがごう慢ではないかとゾッとしたのです。だからといって何をしていいのか分かりま

せん。今までいろいろとやってきて、自分で自分を変えることはできないという確信がありました。妻から教会へ行けと言われたものの、今までの経験からいって、「宗教」は商売で、弱い人が頼るもの、自分にはまったく必要のないものだと思っていました。

その年の暮に「モーツァルト・イヤー」に関した演奏会を開きました。その時にすでにイエス様を信じ救われているいとこの後藤さん夫婦がチケットを十枚売ってくれたという話を聞いたとき、「ン？　何か変だな」と自分のアンテナが彼らに少し向いたのが分かりました。演奏会の終了後楽屋に訪ねてきてくれたとき、何とキリスト集会の方々もいっしょでした。でもその時は不思議と嫌ではありませんでした。皆で写真を撮って少し話をしました。その時、デザイナーの飯守さんが「今度演奏会の時は、ちらしを作らせてください」と言われたのが私の心に残りました。私にとって飯守さんは何か安心するものが感じられました。

次の年の初めに十月にリサイタルをしないかという話があり、さっそく後藤さんを通して飯守さんにちらしの話をしてもらい、こころよく引き受けてくださいました。打ちあわせのため、飯守さんの家を訪ねたとき、飯守さんのヴァイオリンとオーボエで聖歌を演奏するはめになりました。なんだか大変なことになったぞ、と半分逃げ腰で演奏をしていたのを覚えています。

その頃、妻の叔父の十三さんががんになり、後藤さんの家で面倒を見ていました。それで時々飯守さんの家へ叔父を連れていって、皆で聖歌を歌い演奏をしていました。その叔父も救われましたが、四月の中頃に召され、吉祥寺キリスト集会で前夜式と葬儀をしていただきました。私たち家族も出席し、私は子供の伴奏で演奏をさせていただきました。葬儀の後で火葬場に行くとき

に、私の車の助手席にベックさんが乗ってこられました。「五月に御代田に福音センターができます。そこでよろこびの集いがありますが、来られませんか？」と誘われましたが、「仕事がありますから」と必死で逃げました。火葬場で聖歌を歌い、十三さんを送り出した後、妻がベックさんと握手をして、突然なぜかワーワーと泣いていました。

そうこうしているうちに五月の連休がきました。たしかによろこびの集いの四日間の前半は仕事がありましたが、後半の二日は空いていました。その日ふと「御代田に行ってみようか」という思いが浮かびました。今を逃してはもうチャンスがないのではないかと思われ、妻にそれを話しました。すると妻は「あなたが思うようにすれば？　私もそうするから」というきびしい返事でした。「エエイもう行くか！」と後藤さんに電話をしましたが、すでに御代田に行って留守でした。どうしたものかと思ったとき、以前いただいていた「光よあれ」の後ろに福音センターの電話番号がのっているのを思いだし、さっそく福音センターに電話をしました。後藤さんを呼んでもらい「これから行くから」と行って家族三人で御代田へ出かけました。

御代田の福音センターでは、ベックさんと私たち夫婦でお話することができました。最後に、「お祈りをしますから、続けて言ってください」と言われたとき、自分が崖っぷちに立たされたのが分かりました。でもベックさんが祈り始められると、続けて言葉が出ていました。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

（ヨハネ　1・1）

その瞬間、いつも自分の中にあった「自分が常に一番でいたい」という思いがガラガラと音をたてて崩れ、「主であるキリスト・イエスが自分の上にあり、私は二番になってしまった」という劇的な変化が心の中に起きました。この「一番になりたい」という思いが、ごう慢だということにも気づかされました。そしてこのごう慢さこそ人間の罪であるということが、ほんとうに納得させられました。では、その罪はどうすれば赦されるのかと思ったとき、ベックさんが「キリスト・イエスが人間の罪を全部背負って十字架につけられて死なれたことにより、人間の罪はすべて赦された。したがって、悔い改めて主イエス・キリストを信じた人は、その罪を赦される」と言われたので、ほんとうに素直に主イエス・キリストを受け入れることができました。安心しました。これによって、以前から頭にちらつき始めていた「ひょっとすると自分はごう慢なのではないか」ということに関して完全な解決を与えられました。主にたどりつくまでは長い道程でした。もちろん、求めていたのが主イエス・キリストとは知らなかったのですが、救いに至るこの過程はまったく偶然ではなく、すべて主のご計画であったと後で知らされました。ほんとうに主によって救われたことを感謝せずにはいられません。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」（ヨハネ　15・16）

救われて三年半近くたった今、ふと自分を見てみるとほんとうに安心と平安が与えられていて、知らないうちに喜んでいるようにされているのが分かります。

たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。
（IIコリント　4・16）

この安心と平安とは毎日自分が生活している中で、たとえば「お金を貯めたから安心だ」とか「子供が受験に受かったから大丈夫だ」とかいう安心と違って、ほんとうに人間が「存在していること、生きていること」自体が安心していられるというものです。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」
（出エジプト　3・14）

まことの信仰に立った作曲家として名高いヨハン・セバスチャン・バッハは、信じられないほど多くの名曲を、主の賛美のために残しています。ほんとうに人間わざとは思われません。主がバッハを通してみわざを現わされたのだと思います。もちろんすべてのことがそうなのですが。特に私の好きなカンタータ第八十二番は、曲ももちろんすばらしいのですが、題が「わたしは満ち足りている」というものです。これこそ主が私たちに与えてくださるほんとうの恵みなのではないかと思います。

そして二十年以上の心の重荷であった不満足感が、私は何もしていないのに知らないうちに無くなっています。私にとってこれは奇蹟としか思えません。

神にとって不可能なことは一つもありません。
（ルカ　1・37）

私にとってこの喜びは、世の中のどんなものと交換しようと言われてもできないほど大きなものです。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（IIコリント　4・18）

こういう曲を演奏できる仕事を与えられていること、これからも主の栄光を賛美する演奏を続けていけるという喜びを与えられていることを、心から主に感謝します。

あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。（Iコリント　10・31）

いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。（ルカ　2・14）



主は私の羊飼い

脇岡和子

東京に生まれる。新宿区立落合第一小、落合第二中、川村学園高、東京芸術大学器楽科卒業。家族は夫総一さん、長男洋平さん。

私たち家族が救われて三年がたちました。二十年前に結婚し、二週間とたたないうちに潰瘍性大腸炎というやっかいな病気になり、それ以来数年前まで、疲れるとすぐ寝込むような生活でした。主人は、仕事、家事、育児、私の病気と、いやな顔もせずによくやってくれました。そんなわけで、息子のこともよく冗談半分に「おまえが生みの親で俺が育ての親だ」などと笑っていました。私は男の人が家族のために働くことだけでもほんとうに大変なことだと思っていましたので、不満も言わずにやってくれている主人を頼りにもし、感謝もしていました。

責任感も強く、仕事も意欲的にする主人と息子の三人家族で仲もよく、私は心から二人を愛していましたので、特別な問題は何もありませんでした。そんな中で、主人は目標を決めると試行錯誤を恐れず次々とそれをこなしていき、私はなんだか分からないけれど、息切れがするような気がしながらついていっていました。そういうときにふっと心の中に「何かが違う…」という思いがどこからか湧きおこり、一年に一、二度、心のモヤモヤを一方的に主人にぶつけては、主人

を当惑させていました。でも結局のところ主人にはっきりとした非があるわけでもなく、いつも私の「わがまま」ということにしてしめくくっていました。主人も仕事を通して壁のようなものを感じていたようで、「どのように生きるべきか」という類の本を毎日のように買っては読んでいました。救われた後、それらを処分する段になり、あまりの本の多さにびっくりしたものです。その後もいろいろなことを試みていましたが、いつもその答は出ないままでした。その間にも、いとこの石田さんや、後藤さんのご一家とのお付きあいの中で、イエス様のお話や、吉祥寺キリスト集会のこと、ベックさんのことなどをいろいろと聞かされていました。また五年前の春、私の母が白血病で亡くなる前日、人口呼吸器でかろうじて命をつないでいた母の枕元で、政彦さんと緑さんが母の救いのために祈ってくださいました。

その翌年、その亡き母の弟の後藤十三叔父さんががんになり、あと三カ月と診断され、その叔父夫婦を、叔父の義理の姉にあたる充子さんが引き取って、政彦さん、緑さんとともに面倒を見てくださることになりました。十三叔父さんは子供のときの病気がもとで知恵遅れでしたし、その他にもいろいろな事情がありましたので、充子伯母さんや政彦さん、緑さんたちがそれを決めた時には心配もし、頭の下がる思いもあり、十三叔父さんが後藤家で暮らすようになってから時々、その尾山台の家を訪ねるようになりました。

今、こうしている時にもその時の光景が浮かんできます。十三叔父さんとサラ叔母さんがまるで子供のようで、とても大事にされ、可愛がられていることが伝わってきました。十三叔父さんは、連れていってもらった温泉旅行の話などを心から楽しそうに話してくれていました。

あとどれほど生きられるかわからない「十ちゃん」を囲んで、静かで穏やかな、ほとんど幸福と感じられる一時でした。食事の前や、お茶の前の政彦さんのお祈りのたびに、なぜか私は涙がこぼれそうになるのを必死でこらえていました。息子の洋平は、尾山台に行くのを楽しみにし、「どうして?」と聞くと「とても暖かい感じがして僕は尾山台の家が好きだ」と答え、彼の言葉はそのまま私の心に残りました。

「十ちゃん」は、少し具合のいい時は、飯守さんのお宅にも集うことができました。しかし四月に入って体調も悪化し、入院し、四月十四日、幼な子のように主イエス様を信じて天に召されていきました。

召される二日ほど前、病室を訪れると、意識もしっかりしており、目にもしっかりとした光が宿り、その受け答えも物静かで、威厳すら感じられるほどでした。健常者だったらこんな人だったのかと、またここでも何か不思議な思いに打たれました。それでもこれは私だけがそう感じたのかも知れないと思っていたのですが、後日、政彦さんも同じことを感じておられたことが分かりました。主は、イエス様をまだ知らない私たちに、そうした道しるべを所々においてくださっていたのでした。

四月十五日が前夜式、十六日が葬儀となり、政彦さんから、主人に賛美の依頼がありました。前夜式の日、長い間噂に聞いていた吉祥寺キリスト集会に初めて主人、洋平とともに行きました。「教会」を想像していたので、また違う雰囲気だなあと思ったことを覚えています。中に入ると伯母や政彦さん、緑さんと話をし、見まわすと前の方に外人の方が立っていて、その方がお話

に聞いていたベックさんでした。緑さんがベックさんに紹介するからと言ったとき、「ふつうに、こんにちはを言えばいいのだわ」と思ったのはやはり心のどこかで警戒して構えていたからだったのでしょう。そのベックさんと握手をしたとたん、私は不覚にもワッと泣き出してしまいました。自分の起こした反応に驚きあわてて、混乱した頭の中でこれはどうにかしなくてはいけないと考えました。でもその時、自分の頭の中とは別に私の内のどこかで、ずっと長い間探し求めていたものが見つかったような、なつかしいというような感覚があり、そしてそれは、これでいい、これでいいということを私は知っている、というような断定的なものを含んでいました。説明のしようがないのですが、これはほんの一瞬の間のことだったのです。その夜、頭から離れなかったその時を思い出し、いったい何だったのだろうか、でも、今、私はこの事をすなおに受け入れたいと思っているのが分かりました。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

（Ⅰペテロ　1・8）

主人はよく「おまえのごう慢は見えにくい」などと言います。ほんとうにそうなのだと思います。人が右と言えばどうしても左だと言いたくなり、分かっていてもなかなか折れることができず、意地っぱり、わがまま、その場面の自己嫌悪、自分で自分をもてあましている私を、主はほんとうに憐んでくださって働きかけてくださいました。

「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」（マタイ　11・29、30）

次の日の葬儀でも、お祈り、聖歌の賛美のたびに涙が止まりませんでした。「神様のそばのきれいなきれいな川で、みんなで集まる日の、ああなつかしや」の聖歌を歌いながら、もう疑う余地はないということを感じました。

五月に、御代田にある西軽井沢国際福音センターの献堂式がありました。「行かれない」と言っていた主人が、仕事の終わった連休の後半、突然「御代田に行こうか」と言いだしました。いつもなら「そうね」と言うところを、そのときはどういうわけか、「あなたが行くと決めたら、ついて行くわ」というような返事をしました。主人は「おまえ、きたないなあ」と苦笑していましたが、もうすでに御代田に行っている政彦さんに連絡をとるために、「光よあれ」を見てセンターに電話をかけました。センターでは充子伯母さんや政彦さん夫婦が喜んで迎えてくれました。その後、ベックさんとのお話の時が与えられ、そのお話の最後にベックさんが「じゃあ、いっしょに祈りましょう」と言われました。それまでの流れの中で、それはごく自然に受け入れることができ、何の抵抗もありませんでした。それよりも隣に座っている主人がどう感じているのか横を向いてのぞき込むわけにもいかず、ベックさんに続いてほんとうにお祈りをするのかしらと、主人の声を耳にするまで落ち着きませんでした。ベックさんの後に、主人のボソボソ言う初めての

お祈りの声が聞こえてきました。信仰について「おまえは弱いから必要かもしれないけれど、おれには必要ない」と言いきっていた人でした。

福音センターに行ってから、礼拝や集会にも出るようになりました。ある日、帰宅途中、洋平が急に「早く洗礼受けたいな」と言いだしました。私たちの間ではまだ洗礼の話は出ていませんでしたので「どうしてそんなに早く洗礼を受けたいの」と聞くと、「イエス様のことを考えると、心が喜びでいっぱいになるんだもの」。主人は、「そうか、洋平がそう思うなら、八月の夏休みに洗礼を受けようかな」と言い、その通りに八月に一家そろって受洗することができました。

「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」

（マルコ　10・15）

救われてから、今までに見ることのできなかったものを見せてくださいました。主は私たちが知らないうちにとらわれている自我から私たちを解き放つために、いろいろなことをそなえてくださっています。結婚以来、十七年間、ほとんど真面目に弾くことなく過ぎてしまったヴァイオリンを西軽井沢国際福音センターで開かれた「よろこびのコンサート」で弾くことになりました。十七年のブランクはどうしようもなく、もともと劣等生だった私ですが、長い間人の前で弾くことも忘れてしまっていましたのですっかりあがってしまい、初心者のようなありさまでした。ほんとうに情けなく、いやな思いをしたのですが、そのときに、こういう結果をも主から与えられたのだと感じました。イエス様はじょうずに弾くことは望んでおられない、下手なまま、そのま

まをさしだしなさいとおっしゃっているのだとわかりました。弾くたびにわれながら「下手だなあ」と思うのですが、そのたびに少しづつ楽になり、自由になり、上手でなければいけないことから解放してくだっています。

キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。

（ガラテヤ　5・1）

息子との間に、目に見えない、それまでは気づきもしなかった「壁」があることも主は教えてくださいました。息子が生まれた時、男の子なので甘やかしてはいけない、自立心のある子にしなければと肩に力が入っていたようです。彼との間の見えない「壁」、それは愛しすぎないため、期待しすぎないため、そして、失望しないためという、私自身が傷つかないためのものだったのです。私がすなおな者でなく、その「壁」を踏みこえる危険をかえりみない者でもないのに、どうして息子にそれができるのだろうかと思うと、ほんとうに涙が止まりませんでした。主に悔い改め、息子にも主イエス様の示してくださったことをすっかり話し、自分の思いばかりの母親だったことを謝りました。

主の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、主の仰せはきよくて、人の目を明るくする。

（詩篇　19・8）

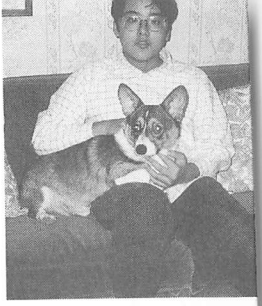
平凡な日常の中で、そばにいる主人の安らいでいる表情を見ると、それまで、どれほど独りで淋しく頑張ってきたのだろうかと思い、主人のために喜ばずにはいられません。

今は、家族の中心にイエス様がいてくだり、私たちが同じものを見上げることのほんとうの幸福を感じることができ、心から喜んでいます。

私はあなたに感謝します。あなたが私に答えられ、私の救いとなられたからです。あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。あなたは私の神、私はあなたをあがめます。（詩篇 118・21、28）

▼ご家族そろって。




愛犬セバスチャンと。▶

主とともに

脇岡 洋平

一九八〇年東京に生まれる。常盤台小、上板三中、東京芸術大学音楽学部附属高校在学中。

僕が主イエス様に初めてお祈りしたのは、母のいとこの後藤政彦おじさんのお宅でのお食事のお祈りでした。幼稚園がバプテスト教会の付属幼稚園だったので、よくお祈りをしていて、そしてイエス様を信じてさえいましたが、小学校に入ってからすっかりどこかへいってしまっていました。

その時、後藤おじさんのお宅に大おじががんのため養生していました。そこへ一家でお見舞いに行きました。そして僕はその時、後藤一家が大おじの看病をしている姿を見て、ほんとうに暖かいものを感じ、心が喜びで満たされました。そして、夕食の時、後藤おじさんが食前のお祈りをしてくださったので僕もいっしょに手を組みあわせてお祈りをしました。そうしたらもっと心が喜びでいっぱいになりました。こうして、二度、三度と行くたびに、「お祈りっていいなあ」と思うようになりました。

そして四月十四日にとうとう大おじが召されました。そして前夜式の夜、初めて吉祥寺のキリ

スト集会に行き、集会の方々と会いました。

小六の五月の連休に、父が突然「西軽井沢に行く」と言ったので僕はびっくりしましたが、同時にうれしくも思いました。でも、西軽井沢のどこへ何をしに行くのかも言わないので、途中で後藤おじさんたちが御代田にある福音センターの「よろこびの集い」に行っているので、そこに行くのだと知らされました。着くと後藤おじさんたちがいて、「よく来たねー」と驚いていたので、父が突然「行こう!」と言いだした理由がわかりました。両親はベックさんとお話をしに行き、僕は食堂で本を読んでいました。まわりは知らない人たちばかりでしたが、友だちやふつうの知り合いの人たちなどとまったく違う雰囲気を感じました。それはとても気持ちがほっとするような感じでした。

両親は長年にわたって音楽のことで何かが違うと思い、追い求めていたらしく、ベックさんとお話をして、涙を流して悔い改めて救われました。でも僕は違いました。キリスト集会には、だんだんととけこんでいったのです。ですから当初、自分の罪やごう慢さを見ず、ただ集会に集っていました。自分はイエス様を信じているんだからそれでいいんだという気持もありました。

しかし、何カ月かたつと、主はだんだんと僕のごう慢さを見せるために試練を与えられました。学校で、家庭でといろいろありました。ある時、朝、礼拝に行けなかったので父が帰ってきて家で礼拝をすることになりました。でも僕は勉強とピアノをしなければならないのに、礼拝をしていたら遅くなってしまうからと思い、ムッとしてとても悪い態度をとってしまいました。結局、「聖書と聖歌を持ってきなさい」と命令され、仕方なしに取りにいき、聖書と聖歌を持って階段

をおりていきました。すると突然目の前がパッと白くなり、その白い光が通り過ぎると今度は真っ黒な闇が見えました。その時、僕はなぜだか分かりませんが、その黒い闇が自分の罪だとハッキリわかりました。しかし、気がつくとまったく時間がたっていないのです。実はこの時はじめて自分の罪を見てしまったのです。そうすると後から後から涙が出てきました。悲しくて、こわくて、おそろしくて、嫌で、そのほかたくさんの感情が心の中で渦まいていました。多分イエス様は、いくら試練を与えても僕が少しも自分の罪を見ようとしないので、それを見せてくださったのだと思います。その後も、どうしようもない僕は、たくさんの悔い改めのための試練と患難を与えられています。今も受験と、こういう証しを書くという試練があります。

心に残っているみことばがあります。

「しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行ないなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません。自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」

（ルカ　6・27～31）

「なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たちがどんな人に似

ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」（ルカ　6・46～49）

ほんとうに「主よ、主よ」と言いながら、主が喜んでくださることを、僕はほとんどしていないなあと読むたびに思います。このみことばはトルストイの「愛のある所に神はいる」という短編の中で見つけたものです。これはクリスチャンなら涙が止まらない物語です。

また、僕は一年に二度くらいノイローゼのように何もかも嫌になって空しくなり、生きているのもいやになる時があります。救われてからもです。サタンの思うつぼでした。結局これも自分の甘えだったことを親を通してイエス様は教えてくださいました。今はもうありません。こういう時こそ、次のみことばを思いだせばよいのに、そういう時にはなかなか思いだせません。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

ピアノの練習の時もイエス様がいるといないのでは違います。時々、イエス様が喜んでくださ

るならやらなくっちゃ、と休みそうになるところをやらせてくださったりします。感謝です。

救われてよかったと思ったのは、家族の中心にイエス様がいてくださることです。今思うと昔は支柱のない、いつこわれるかわからない家に住んでいたけれど、今はイエス様という絶対に倒れない柱がある、安心できる家に住んでいるという感じがします。

まだこれからも長い信仰生活がありますが、イエス様がいつもともにいてくださることを感謝して、主に最善をつくせるように祈りながら、主が与えてくださった日々を歩んでいこうと思っています。

▼前列右からサラさん、十三さん、後藤さんの母充子さん。後列左端は後藤夫妻。





▲洗礼式の日に。後は染野さん。

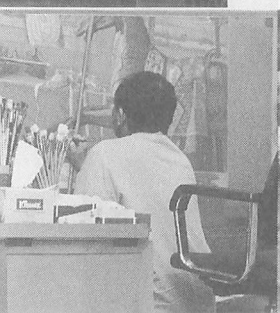
十字架の愛

伊牟田 經正

一九三四年鹿児島に生まれる。喜入小、喜入中、甲南高校卒業。光風会美術研究所修。光風会展特別記念賞二回ほか。日展特選二回。昭和会展林武賞。日本国際美術展、国際形象展、日本現代美術展(インド)、具象絵画ビエンナーレ、現代美術選抜展ほか招待出品。著書『伊牟田經正の油彩画』(河出書房新社)。現在日展会員。光風会会員、評議員。家族は妻千代子さん、長男耕児さん、次男草太さん。

▼光風会展出品作。







神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。（エペソ　1・5）

一九七二年八月のある日。私はマドリードのプラド美術館の比較的小さな作品が並ぶ部屋を一人で歩いていました。通り過ぎようとして、ふと一枚の絵に引き止められました。引き返してその絵の前に立った時、なぜか分かりませんが突然涙が溢れてきて、しばらく茫然と私はその絵の前に立ちつくしていました。

すこし上向きに目を閉じ、あえいでいるように少し開いた口元、わき腹の傷口から血を流し、苦しげではあるが決して悲しげではなくおだやかな表情のキリストの背後で、悲しげな天使の目にかすかに一粒の涙が描かれているその二十号位の絵の前に立った時のことを、昨日のことのように鮮明に覚えています。絵そのものではなく、その向こう側から来るものが何であるのか、その時の私には何も分かりませんでした。ただ涙が溢れてきたのです。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」（黙示　3・20）

今までの私の人生をふり返ってみるとよく分かるのですが、主はいつも私の近くにおられ、愛してくださり、救いのご計画の中に入れてくださっていたことを、沢山の体験を通して確信する

ことができます。

一九三四年、私は三人兄弟の次男として鹿児島で生まれ、裕福な家庭で皆に愛されて育ちました。しかし、小学校五年生の時終戦。翌年、六年生の時父を亡くし、戦後の農地改革で土地をほとんど取り上げられてからは生活は一変しました。育英資金を受けながら高校生活を送りました。母の苦労。父のいない寂しさ。頼れるものもなく、すがるものも失って私はいつも孤独でした。そんな中で唯一の慰めは、美術部に入り絵を描く喜びを知ったことでした。私は絵を描くことにどんどんのめりこんでいき、ついには授業をさぼっては絵ばかり描いていました。そんなわけで、美術以外の成績は悪かったのですが、何とか卒業させてもらった時は「絵」しかなくなっていました。高校を卒業すると、学資の当ては全くなかったのですが、芸大を受験しようと決心しました。そんな私に、母は何の反対もしませんでした。

一九五三年。十八歳で上京した私は、戦後の焼け跡の空き地の点在する新橋にあった光風会美術研究所に入所し、受験に備えて石膏デッサンに励みました。そして芸大受験。一次試験の石膏デッサンは無事通過したものの、二次試験は苦手な学科で不合格となりました。はじめて体験する挫折感で目的を見失ってしまいましたが、帰るべき場もなく、東京で何とか一人で食べていこうと決心し、それからしばらくは不況の中で飢えと仕事探しに明け暮れる日々が続きました。

さまざまな仕事を遍歴した後、やっとサイン・ペインターで食べられるようになった頃、家内と結婚しました。

一九六一年三月十二日朝。私たち二人は、新宿の二幸でワインとケーキなど一万二千円の買い物をし、先輩画家のアトリエを借りてささやかな結婚式をし、ゼロからの歩みをはじめました。貧乏生活が続く中で、男の子二人を授かり、女の子二人を生まれて間もなく亡くしました。

そんな生活の中で、また少しずつ絵を描きはじめ、展覧会に出品するようになり、一九六八年の光風会展で初めて奨励賞をいただきました。その頃から、画壇の芥川賞、直木賞といわれる二大コンクール、安井賞展、昭和会展にも推薦されるようになりました。

安井賞展は、十三年間出品し続けましたが、賞はついにいただけませんでした。コンクールに挑戦しはじめた時、出品申込用紙に書く私の略歴は、高卒、光風会美術研究所修、光風会展奨励賞一回、という貧しいものでした。芸大卒、フランス留学、文化庁派遣、数々の受賞などきらびやかな経歴の人々が多い中で、私はこの時からコンプレックスを持つようになりました。妬みを持つまでにも至らず、羨望の思いで、あの人たちの仲間のしんがりにでも入れてもらえる日を、ほとんど不可能と思いつつも夢見て、ひたすら頑張りました。

さて、もう一つの昭和会の方は、二回目に挑戦した時、翌年のシード作家に選ばれました。必死に頑張っている私を哀れに思ってか、その時妻がヨーロッパ遊学をすすめてくれました。子供二人を抱えた貧しい生活のこともあり、私にはとても無理なことと思われたのですが、妻は「半年食べるだけの蓄えはある。明日死ぬかも分からないのだから思いきって行ってきたら…」と、しきりにすすめてくれるので、私も決断しました。

「あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日

に、十分あります。」　（マタイ6・34）

のちにこのみことばを読んで当時を思い出し、感無量でした。

一九七二年の夏、私はスペインに遊学に出かけました。

北極の上を飛んでいる時、自分は今まで小さなコップのような透明な檻の中で、あっちに頭をぶっつけ、こっちに頭をぶっつけしながらもがき苦しんでいる者であり、一万メートル上空からは全く何も見えない小さな存在であることを知り、がく然としました。そして地上から切り離され、全く無力になった自分を、何か分からないものにゆだねざるをえないこの飛行機の中で、ある不思議な解放感を味わっていたのでした。

翌年の昭和会展には、今までのような気負いもなく、無心に、何者かに描かされるように絵ができてしまい、次席にあたる林武賞をいただきました。

それからは、次々と受賞を重ね、遊学を重ね、数多くの展覧会にも名を連ねるようになっていきました。

私は、絵を描く時、見える物を描きながら、その向こう側にたしかに在る「見えない何か」を感じていて、それをとらえたいといつも願っていました。なぜか分かりませんが、漠然と、絵を描くことは「祈り」のようなものではないかと考えていました。拙著の中で「いっそのこと、心まで（神に）縛られてしまったらどんなに楽だろう」とも書いています。

「渇」という絵を描き、「キリストと向きあう私」という構成の絵を何枚も描いています。ある時、「古代文明を探る」という展覧会の企画で、私はギリシャを受け持ったのですが、何も知らないでパウロの歩いたコリント、エペソを歩き、パトモス島のヨハネが立った地に立っていました。しかし、いつも主は近くにいてくださるのに、私の目にはまだおおいが掛けられたままでした。

次第に私は、この世でそれなりの立場が与えられていくことを当然のこととして受け止め、人間の、人間中心に創り上げた教養やモラルの環境の中に組み込まれていることに何の疑いも持たず、自己中心的な正義感を持ち、ごう慢になっていきました。すべては努力で勝ち取るものと思い、頼れるものは自分の努力だけだと思うようになっていきました。

そして仕事を続けていくうちに、いつしか私は、自分の作品の集大成によって「自分の塔」を建てあげるのが目標になっていきました。芸術にとって欠かすことのできないものは個性、自我の確立であり、自己完成を目指すものであると考えるようになりました。私は創世記11章にある「バベルの塔」を築こうとしていたのでした。次のみことばの通りです。

あなたは心の中で言った。「私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。」しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。（イザヤ　14・13～15）

今まで私は努力だけを頼りに生きてきましたが、六十年近くの歳月を主を見上げることなく過ごしてきた私を、主は憐んでくださり、愛をもってこの世での望みを取り上げようとしておられました。

…あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。（伝道者　12・1）

私は自分の塔を築こうとしながら、一方では自分のアイデンティティーを探し求めてさまよっていました。自己中心思考の堂々めぐりをくり返しているうちに、死で終わることになる自分の仕事が何か拠り所のない空しいものに思え、自分の力ではどうすることもできない、大きな壁が私の前に立ちはだかっていました。

長い作家活動を続ける中で、この世の頂点を極めた方々が次々と去っていかれ、また同じ世代の友人画家の中からも幾人もが去っていきました。

作品が残る。そう思いながらも、何か拠り所のない空しさのようなものを私は感じはじめていました。「われわれはどこから来たのか、われわれとは何か、われわれはどこへ行くのか」この言葉は、ゴーギャンの代表作の題名として昔から知ってはいたのですが、まさにこの言葉を突きつけられて、私はもう何も分からなくなってしまいました。

人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。（箴言　20・24）

そういう中で、絵を描く喜びも次第に失われつつありましたが、義務的に描き続け、夕方になると酒でストレスを解消するというくり返し…。一日の目標が酒で終わる。それも充足と喜びの酒ではなく、苦痛の酒であることに嫌悪感を覚えるようになりました。

アトリエは寒々とした空間に変わり、その中で空しさと無気力感にただ耐える日々が続いていきました。

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。

（ヘブル　12・5、6）

そんなある日。何が何だかわけも分からず、「神さま助けてください…」と必死で祈っていました。どれ位の時間が過ぎたのか、われに返った時、不思議な安らぎの中にいる自分に気がつきました。そしてそのあとに、主の導きだったとしか考えられないできごとが待っていたのでした。しばらくしてこの初めての体験を家内に知らせるために居間に行くと、家内が聖書を開いていたのです。

家内は二十数年前に洗礼を受けていましたので、聖書は家にあったのですが、私は今まで一度も見てみようと思ったことがありませんでした。しかしその時、生まれてはじめて聖書を手にしたのです。開かれていたところは「伝道者の書」でした。「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。」（伝道者1・2、3）

私に語りかけてくる言葉に引きずり込まれて、夢中で読みました。読み進むうちに、私のしがみついていた自我が、もののみごとに打ち砕かれていくのを覚え、自分の拠り所は目に見えるこの世には何一つ無いことを思い知らされ、がく然としました。完全に自我は敗北しました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。（イザヤ　55・6、7）

長い間、飽戸夫妻、金沢夫妻はじめ多くの方々が、このごう慢で愚かな私のために祈り続けてくださっていたのでした。

飽戸さんの奥様によって私はどんどん運ばれていき、一九九三年六月二十九日、ベックさんとお会いすることができました。ベックさんは私のために祈ってくださり、祈り方も分からない私といっしょに祈ってくださいました。帰りがけに私に「イエス様は、經正を愛しているよ」と言われたのです。私は大声をあげて泣きたい気持ちでした。長い間、この世の生存競争の中で疲れ果て、私は自ら孤独の穴に落ち込んでいたのでした。愛することも、愛されることも遠くに行っ

てしまっていたのでした。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

その後、キリスト集会の方々ともお会いする機会が増え、来る日も来る日もひたすら聖書に没頭しました。

時空を超越した万物の創造主である永遠なる唯一の神の存在。そして神の愛によって遣わされた救い主イエス・キリストこそが道であり、真理であり、いのちであることを知りました。

私をかたち造られた神、主を見上げることなく六十年間を過ごしてきた愚かな罪人の私を、十字架のみわざによって滅びの穴から贖い出してくださったイエス・キリストによって、新しいいのちと神の御国への道程を与えられたことを感謝し、私はこれからの生涯をすべて主イエス・キリストに明け渡し、主イエス・キリストにあって歩ませていただくことを決心しました。

そしてその証しとして、一九九三年八月八日、西軽井沢国際福音センターで、バプテスマを授けていただきました。かつてのプラド美術館での涙の意味を、そして十字架の愛を、二十年を経てやっと知ることができたのでした。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪の

ために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

（イザヤ　53・4～6）

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

（イザヤ　38・17）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

一九九四年夏。西軽井沢国際福音センターでの「よろこびの集い」に、一年ぶりに参加することができました。

私は昔の日々を思い出し、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたの御手のわざを静かに考えています。あなたに向かって、私は手を差し伸べ、私のたましいは、

かわききった地のように、あなたを慕います。（詩篇143・5、6）

救われてからの歩みは鈍く、この一年間、主を探し求める日々でしたが、やっと少しずつ、主が生きて働いていてくださることを実感できるようになり、今までになかった平安が与えられ、主を仰ぎすべてをおゆだねして、主にあって歩ませていただける幸せを心から感謝しています。

今、一人で、背負い切れない重荷を背負っている方。孤独の中で苦しんでおられる方がおられましたら、今すぐ、どうぞそのままの姿で主イエス・キリストに祈ってください。

イエス様は、永遠に変わらぬ愛であなたを抱いてくださいます。



主よ、あなたのあわれみと愛に感謝します

伊牟田 千代子

一九三五年中国チチハル市に生まれる。宮前小、終戦の翌年一九四六年鹿児島に引き揚げ、川内小、武小、鹿児島大学附属中、甲南高校、女子美術大（洋画科）卒。光風会所属、千葉美術会会員。家族は夫經正さん、長男耕児さん、次男草太さん。

私は現在の中国、旧満州で五人兄弟の三女として生まれ、第二次世界大戦が終わった翌年、十歳の時に父母の故郷である鹿児島に引き揚げてきました。

父は満鉄の職員で、母は助産婦をしていました。そのころにしてはめずらしい共働きの夫婦でした。病弱だった私はよく父の自転車のうしろに乗せてもらい、満鉄の病院に通いましたが、父の背中にはいつもリュックサックがあり、家族の生活用品や食物、いっしょに暮らしていた私の母の祖父の好物などを運んでいました。

母は助産婦という職業に誇りを持っていて、気丈で冷静、赤ちゃんを取りあげることをなによりの喜びとして生きた人です。休日には家族そろって釣りやハイキングに出かけ、賑やかなことの好きな父は、身内の面倒をよくみる人でした。

私は三歳の時、肺炎で危篤状態になり、もう絶望だと思われたそうですが、輸血で助かりました。病気になったのは、子守の手が足りないせいだと思った母は、弟が生まれた時、母の祖母に来てもらいました。その頃、年のはなれた姉たちは、進学のため上京していました。忙しい母は午前中に家事をこなし、午後は仕事で留守にします。それで私は、近所の家によく遊びにいって入りびたっていました。

第二次世界大戦が始まった昭和十六年、小学校に入学しました。未来の兵士であり、国の宝である子供を沢山生むことは国から奨励されていました。母は寝る時間もないほど忙しく、私の登校時にもいないことが多く、私はよく忘れ物をし、宿題をせず、落ちこぼれの生徒でした。頭におできができてしまい、一年間丸坊主で、男の子たちにいじめられました。

そんなことがあって、学校に行けなくなりました。あんずの林で花を眺め、広い野原で桜草を摘んだりしました。別に淋しいと感じることもなく、なにか霞がかかったような雰囲気で、ゆったりと時が流れていきました。ある日、がまの穂を摘もうとして足を滑らし、沼地に落ちて這いあがることができずにいるところを、通りがかりの男の人が助けてくれました。後年になって神様のことを思うたびに、ふしぎにその時の場面が思いだされます。

またあるとき、繁華街の交番の前で、人だかりがしていました。二階からぶたれる音と、泣き叫ぶ声が聞こえてきました。兄が「あれは自転車のチューブでたたいているんだよ」と言いました。私は大人たちが「憲兵隊につれていかれたら、無事に帰れる人はいない」と話していたのは、

やはり本当だったんだなと思いました。その門を通るたびに足がすくむような気がしました。

一九四五年八月、ソ連が参戦しました。家の前を国境から逃げてきたおびただしい人々を乗せたトラックが何台も、何台も通り過ぎました。

そして終戦。命からがら逃げてきた人々が、寒さと食糧不足、伝染病などで、極寒の地で亡くなりました。ソ連軍の使役のために男の人々が狩りだされましたが、父は一回行っただけで二度と応じませんでした。中学生だった兄が父の分まで受け持ちました。父はとても臆病だったのです。兄はその時の経験で、若い時からお経をとなえるようになりました。もともと兄は恐さ知らずの一面もあり、ソ連兵のいる倉庫からメリケン粉を何袋も運びだしました。母がいっしょで、リヤカーの上には母の仕事の医療器具が乗せてありました。もし見つかったらそれを指して「ドクトル」と言って逃れようという作戦だったそうです。足跡を消す箒まで積んでいったそうです。「あれはもとはと言えば満鉄の物だ」と言っていましたが、父は品物を見て震えました。でもそのメリケン粉は、うどんになりおだんごになって、私たちの生命を守ってくれました。

一年の間に、四つの異なった軍隊が通りすぎ、その都度、殺戮がくり返されました。弱い人も犠牲になるけれど、上の者もまた責任をとらされて消えたりしました。私はこのような現実を見て、人はどんな思想も主義主張も持たないでひたすら目立たない存在でいる方がよいと、本気で思っていました。目標もなく何も信じられないまま、ただ死ぬことだけは怖いと思い続けることは、暗い海を漂うような絶望感でした。八路軍の人民裁判を見てきた人が、「処刑される人はた

いてい恐怖で腰が立たず、両方から引きずられるようにして行くんだよ」と言っているのを聞くと、弱虫の私は怯えてしまい、「たぶん私もそのような時、半狂乱になって諦めきれず、あがき続けるだろう」と考えました。八路軍に若い姉たちと兄がとられそうになった時、父は顔色を変えて助けるため奔走しました。このような死と隣りあわせの日々が続きましたが、幸い一人も欠けることなく、家族そろって帰国することができました。

一九四六年の秋、生まれてはじめての海を見、玄界灘を渡って着いた佐世保の風景は、箱庭のように見えました。外地からの引揚者は勉強ができていないからという理由で、一年下の学年に入れられました。

このような体験をしてきた私は、一変して口が達者になり、へ理屈を言い、もっともらしい話やお説教めいたことを聞こうものなら、いつものお人好しの明るさからは想像もできない、攻撃的で容赦のない反抗心を持つようになりました。その極端な二面性は、イエス様に救われるまで変わることがありませんでした。人はお互いに迷惑さえかけなければ自由でいるのがいいと思っていたので、人のやることを真似したり、人に従うことが何より嫌いでした。

母は満州の寒さの中で不眠不休で働き続けて得たものを、失いました。新しい土地では思うように仕事は与えられず、無口になっていきました。

私は中学、高校と、好きなことだけをして過ごしました。何かひとりで走りだしたいような解放感がありました。高校の美術部に入っていましたが、油絵の道具をアルバイトをしてはじめて

手に入れた時は、うれしくて枕もとに置いて寝ました。先輩の中に後の主人がいました。

大学は女子美を志望しました。父は反対しましたが、それを振りきり、母の賛成と後押しで入学することができました。学費だけを送ってもらい、無理を承知で苦学しましたが、生きるだけでへとへとになり、もうやめようと思いました。しかし、「もう少しだから頑張って」と、生活費を送ってくれました。四年半かかって、秋に卒業しましたが、たぶん一番びりだったのだろうと思います。弟は地元の大学に入りましたが、私だけ上京し、えらそうなことを言いながら援助してもらったことをずっと負い目に感じていました。

一九六〇年のこと、かつての先輩だった主人に再会しました。私の二十五歳の誕生日でした。結婚を申し込まれた時、私は自分が協調性がないことを強く感じていましたので、気がすすみませんでした。私には花嫁への憧れがありませんでした。そのような私が結婚したのは、父と母が主人を気に入り、手放しで大喜びしたせいもあります。私は主人の書いた手紙と、名刺ほどの大きさの写真を一枚、父母に見せました。主人はその頃、一人で自動車に文字を書く仕事をしていました。父は終生、主人を信頼していて、主人が鹿児島で個展をした時には、本当に喜んでくれました。

私に結婚への一歩をふみ出させたのは、主人の「いっしょに勉強していこう」という一言でした。はじめて主人の母と妹に紹介された時、その清らかな感じにも心ひかれました。これからは毎日を大切にして、心を満たすものを探していこうと思いました。今までできなかった絵の勉強

への飢餓感もありました。

主人は働きながら絵を描き、展覧会に出品しはじめました。

私には子供が与えられました。血の通った心情の芽がはぐくまれたのはその頃からです。そして長男と年子になるはずの女の子を早産しました。その時、主人の目に涙を見、私ははじめて私と共に悲しんでくれる人がいると気づかされ、人間不信で凝り固まっていたかたくなな心の一角が溶けました。

でもその頃から、神様の試練が始まっていました。母が初老性うつ病になり、精神病院に六カ月間入院しました。病名がまだ一般的でなかったこともあって、しっかり者の母の挫折は家族に衝撃を与えました。弟が自立した時点で、母は自分の役目が終わったと思ったのでしょう。その時から父は母を本当に大切にしました。母は退院後、長姉の家族に囲まれて少しずつ回復に向かいました。

私は次男を与えられた後、再び女の子を亡くしました。医学的な事情があってのことと思いますが麻酔なしでおなかを切除され、打ちひしがれました。

女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。」

（創世記　3・16）

そんなこともあって、私は孤独でした。子供たちの通っていた幼稚園で開かれていた聖書会に

出てみました。飽戸さんの奥様もいっしょでした。聖書のことは何も分からず、ただイエス様はとても孤独そうな方なので、この方についていきたい、と思ったのです。自分の罪深さは昔から知っていましたが、自我が罪だと言われると、絵を描く人はどうしたらよいのだろうと思いました。絵を描くということは、自我を表現することだと思っていましたから。やがて、バプテスマも授けていただきました。

ある日私は、牧師さんにお聞きしました。「私は男の子が二人いますが、戦争の経験のせいでしょうか。もしもの時、私は命をかけて子供たちを守ることができるでしょうか。私は弱虫なので、子供でさえ裏切る人間ではないかと不安です」。すると牧師さんは、「主の十字架を見上げなさい」と言われました。その頃の私には、自分にはいい所が少しもない。だけど主を見上げ、祈ってゆだねれば、主の愛がすべてをなしてくださるということがまだ分かっていなかったのです。女の子たちを亡くした私は、とっても不安でした。何年かたったある時、牧師さんに「もしかすると、あなたは十字架の贖いと救いが分かっていないのではないですか」と言われました。

一番大切なものが欠けた宙ぶらりんのままの私の教会生活は、義務的に続けられました。礼拝で十二時を過ぎると、家にいる主人の昼食が気になって、語りあうこともそこそこに飛んで帰りました。

いろいろなことをイエス様に祈って相談することなど思いつきもしない頃で、近くにいた飽戸さんの奥様に何でも聞いてもらいました。子育てのことや、主人がひどくわがままなことなどを言いますと、「私の主人もそうなの」と意気投合し、励ましあいました。もっともわがままなこ

と以外はまったく対照的な性格らしく、お話を聞くうちに笑いだしてしまうこともありました。家族ぐるみでごいっしょに旅行に出かけたりしましたが、生活パターンが飽戸さんのお宅は超特急の速さみたいで、私たちは徒歩でゆっくりという感じでした。

主人はその時期、一日に十三時間ほども絵を描いていて、主人の母が山のようにおみやげを持ってたずねてきても、話もせず仕事に没頭していました。母はにこにこして、一晩泊まると帰っていきました。母に会うと私と子供たちは安心しました。

一九八一年千葉に引っ越して何年かたった頃、ある特別伝道会ではじめてイエス様の十字架の贖いと救いに対する心が開かれました。

「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。」

（イザヤ　1・18）

また、生活をあれこれ思い煩う心がなくなり、主人にかけていた生命保険も必要ないと思って解約してしまいました。

その頃、浜田山の飽戸さんの奥様から、キリスト集会の本やテープがどんどん届くようになりました。私は心が開かれていた時でもあり、ちょっと見たり聞いたりしては段ボール箱に入れていきました。箱には「キリスト集会」と書いて大事にしていましたが、これらの本やテープを主人と二人で毎日聞いたり読んだりする時が来ようとは当時思いもしませんでした。

やがて子供たちは家を出て自立していきました。私たちは二人きりの生活で、のんびりするはずなのに逆にぎくしゃくしはじめました。主人は絵描きとして少し名前を知られるところまでいっていましたから、私の役目は一応は果たした、と思いました。年齢的なこともあったと思いますが、私の気持ちは沈みこみ、一人で出直したいという思いが強くなっていきました。

結婚して十二年目頃から、わずかな余裕もできたので、私は再び絵を描き始め、展覧会に出品したりしていました。小学校では落ちこぼれ、大学ではひどい成績でしたが、私の絵も進歩のないまま低迷していました。心にゆとりがなく、制作するのになにより大切な、こつこつと楽しみながら積みあげてゆくという地味な努力に欠けていました。それを、家事や雑用のために時間がこま切れになるせいにしていました。生活の中で主人に合わせていくことが重荷にもなっていました。家事は嫌いではなかったはずなのに、それでさえ苦痛になり始めました。絵も自我と自己主張で描いていましたので、神様に対する感謝の気持ちが湧いてこず、いつも砂山を登るような苦しさがつきまといました。私は本当は絵が嫌いなのではないか、とまで考えました。親たちから、「お前も子育てが終わったのだから、これからは少しは自分の絵も上達して、楽しいニュースを聞かせてくれるのでは…」と期待されると、ますます気持ちが沈んでいきました。重苦しい生活から抜け出したくて、自分のことだけを考えていました。

ふりかえってみると私は、敗戦の時に自我が芽生え、死の不安を覚え、自分を含めて人間に不信感を強め、自由になったようで不自由になり、私が私に振りまわされ続け、いつも何も分から

ず、何も見えずに渇ききり、疲れ切っていたのです。

そのような時、主はそのような私自身の自我こそが本当の罪だと教えてくださいました。私の今までの数々の罪のために十字架にかかってくださったイエス様に心からお詫びし、感謝しました。そして主に示され、教会を出てキリスト集会に導かれました。

一九九三年の春、自分の力だけを頼りに走り続けていた主人が、突然聖書に出会いました。そして主イエス様を信じ、従う者に変えられ、夏に洗礼を受けました。

主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだき、世話をして、ご自分のひとみのように、これを守られた。わしが巣のひなを呼びさまし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に載せて行くように。

（申命記　32・10、11）

主人が救われたことは、神様が見せてくださった本当の奇蹟でした。私は主人が救われてほしいと一度も祈ったことはありません。私の祈りは身近な人々が苦しんでいる時だけ祈るという大変貧しい祈りでした。今思いますと、その頃主人のために沢山の方々のお祈りの輪が広がっていたのです。その前から市川のキリスト集会に行きはじめていらした会沢さんご夫妻が、私たちが言い争いなどしてくたびれている時など、よく顔を見せてくださったり、きれいなお花を持って来てくださり、神様の話など何もせず、ただにこにこして気むずかしい主人の話にうなずいていらっしゃいました。金沢さんや飽戸さんが、市川キリスト集会やいろいろな場所で皆さんにお願

いしてくださり、顔さえ知らない私たちのために祈っていただいていたのです。その祈りの声を主が憐れんでくださったことは明白な事実です。

私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。（使徒　6・4）

主よ。…私たちにも祈りを教えてください。（ルカ　11・1）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

一九九四年の夏、西軽井沢国際福音センターで開かれた「よろこびへのコンサート」の時の礼拝で、主人がはじめてお祈りをしました。とても嬉しくて感謝しました。

主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵みに富んでおられます。主はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは、造られたすべてのものの上にあります。主よ。あなたの造られたすべてのものは、あなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめたたえます。（詩篇　145・8～10）

苦しみに会ったことは幸いです

大沢 雅子

一九四五年香川県に生まれる。四番町小、城内中、明善高、立正大学文学部卒業。家族は夫秀樹さん、長女綾子さん、長男宣明さん。

写真上　左から雅子さんのお母さん、雅子さん、綾子さん。
▼写真下　右から二人めと三人め雅子さんのご両親。





私は脊索腫という脳腫瘍にかかっています。私の脳腫瘍は日本中でも年間に数十人しか発病しない病気だそうです。私にとってこの脳腫瘍という病気は主からのすばらしいプレゼントで、現在私が何か誇れるものがあるとすれば、主の一方的な憐れみによって与えられたこの脳腫瘍という病気しかありません。

今から思うと、この病気になる前の私はいつも自己中心で、自分の思うようにならないといらいらして、自分の考えはいつも正しいと思っていました。明日のことならまだしも、十年先、二十年先のことまで、自分で考えられる最悪の状態を想像し、そうならないためにはどうすればいいかと心配し思いわずらってばかりいるような私でした。もちろん夫のことも信頼できず、外向きには良い妻を一生懸命演じていましたが、心の中ではいつも夫に従うことのできない最悪の妻でした。また、父が病気がちな家で育った私は、病気については特に神経質で、健康が一番と思い、食べるものの注意や本から仕入れた元気に暮らすための注意を夫や子供たちにくどくどと押しつけ、自分もできるだけ心がけて生活していました。

そんな私が、一九八八年九月のこと、目に異常があることに気がつきました。すぐ眼科に行きましたが二重に見えていた像のずれはひどくなるばかりで、いっこうに良くなりません。その時はまだ左目が動いていましたが、像はいつも二つに見えるようになってしまいました。私は脳腫瘍ではないかと思い先生に言いますと、眼科の先生は「視野が欠けていないので九十八パーセン

ト脳からではありません」とおっしゃいました。それでも私はなぜか不安で、先生に紹介状を書いていただいて大学病院へ行くことにしました。検査が始まりましたが、最初のうちは、腫瘍が透明な腫瘍だったのでCTスキャンにも映らず、血管造映やそのほかいろいろな検査をしましたがそれでも分かりませんでした。その当時は、まだ東芝病院など日本に数台しかなかったMRIという器械で検査をした結果、やっと腫瘍のあることが分かりました。症状だけがどんどん悪くなって病名が分からないので、私は不安と恐れで胸がはりさけそうで、子供たちの将来のこと、両親が自分のことを聞いたときのショック、主人がこれからの生活の苦労をどう受け止めていくのかなど、いろいろなことを思いわずらっていました。病院に通う車の中で主人と話したいと思うのですが、思うように話せず、大切なことを今まで何一つ話しあってこなかった夫婦の悲しさをかみしめ、不安は一段と大きくなっていきました。

その時点では、まだどのような腫瘍なのか先生にも分かりませんでしたので、先生は、「組織を取って検査してみましょう」とおっしゃったのです。組織を取るのも手術と同じ方法だと聞かされた私は、とにかく早く病名が知りたくて、「検査はいいですから、手術をしてください」とお願いしました。

そして一九八八年十二月八日に手術をした結果、病名は「脊索腫」でした。この腫瘍は良性ですが、骨から出ている腫瘍なので全て取り切ることはできないことが分かりました。先生は主人と姉に手術後、「九十五パーセントは取り除きましたが、残りの五パーセントはまた細胞分裂をおこして一年半か二年くらいでまた手術をすることになるでしょう。これからはその繰り返しで

す」とおっしゃったそうです。

手術後、けいれんをおこしたりしましたが、薬によってそれもおさまり、身体の状態も一応落ち着くと、担当の先生は「二十八日に退院してもいいよ」と言われました。いつもどなたかの退院が決まると、何人かいらっしゃる先生方も看護婦さんも「良かったね」、「おめでとう」と、喜びいっぱいの笑顔でその方のところにいらっしゃるのに、私の場合は一人としてその笑顔と一言がありませんでした。これはちょっと変だ。他の方々のように私の退院は喜んで祝える退院ではないのかもしれないと、それとなく不安になっていた頃のことでした。お隣のベッドの人が腫瘍が全部取り切れていないことを知ってしまい、泣いたりわめいたり、家族に手術をした先生への恨み言を言ったりして大変でした。私はそれを聞いて、私もそうなのではないかと思い、担当の先生に聞いてみると、「取り切れなかった」ことを教えてくださいました。さすがにショックでしたが、先生が「良性だから」と言ってくださった一言が私を支えてくれました。二十八日に退院できると言われたにもかかわらず、若い時から持っていた胆石の症状が出て微熱が続き、退院できたのは翌年の一月十八日でした。

病院にいる間は病人ばかりの中にいるので、自分自身の容姿を気にすることもなかったのですが、退院してきた日にお友だちが三人お祝いに駆けつけてくださり、そのお友だちの化粧した元気そうな美しい顔を見た時、自分の惨めな姿を鏡に映されたような気持ちになってしまいました。動かなくなった目や髪の毛のない頭、夫や子供たちはこんな私といっしょにいるだけで嫌なので

はないか、ましていっしょに外を歩くことなど耐えられないのではないかと思い、むしろ私が死んだほうがよかったのに、と思うようになるのではないかと、たまらなく惨めになり、その惨めさと病気への不安、思いわずらいは雪だるまを転がすようにどんどん大きくなっていきました。

その反面、夫や子供のお荷物にはなりたくない、そして子供の妨げにだけはなりたくないと思い、そのためには自分の障害に負けないで、つとめて強く明るく生きなければいけないと思ったりしていました。

そんな時、ある宗教を信じている友人からその宗教の集まりに誘われたので行ってみることにしました。何度か参加したのですが、その場に行くと必ず私は「気の毒な人」、「かわいそうな人」として見られ、その人々が言うことは、「病気はきっと治りますよ。奇跡は必ず起こります」、「これはご先祖様のたたりですから、あなたは一生懸命徳を積んで頑張れば、病気も治るし子供さんたちも幸せになれますよ」と、言われることは決まっていました。私は現代医学では治らないといっている病気が宗教で治るとはとても思えませんでした。それに、ご先祖様のたたりなら、二人姉妹なのになぜ私にだけたたりがあるのか、納得できませんでした。そして何人かの人にそのことを聞いてみました。答は、「お姉さんは両親を見なければならない。だからご先祖様はあなたのような優しい人に、たたって出て先祖供養をしてほしいのでしょう」ということでした。私にはその答も納得できるものではありませんでした。ただ、たたりと言われると私には一つだけ思い当たることがありました。私は夫との間に与えられた子供を中絶したことがあり、自分の

したことは何にも代え難い殺人という罪であると思い、ずっとそのことを悔いていました。この病気はそのことのたたりなのだと思え、誰にもそのことを話せず、ただ毎日、入院したときお友だちからいただいたお札や自分が買ってきたお札に向かってお友だちに教わったように水を上げお経を読み、手を合わせて「ごめんなさい。あなたのことは子供たちを育てながら、いつも忘れることなく来たのよ。あなたはそのことを知っているわよね」などと、話しかけていました。

そうこうしているうちに、自分の体がだんだんと動けるようになってくると、いろいろなことを課せられる宗教の集まりからは遠ざかり、普通のお寺や神社へ主人と通ってこれ以上悪くならないようにお願いするようになりました。病気になるといろいろな人が宗教的な知識を教えてくれますので、知れば知るほどその知識に縛られ、朝神棚に水を上げるのを忘れただけで、心がとがめ、今日一日何か起こったらどうしよう、何か悪いことが起こるのではないかと不安で、いつも誰かから脅迫されているような恐ろしさでいっぱいでした。その苦しさの中で、「こんな私のことを全部分かってくれる人がいたらどんなにいいだろう」と思うことがよくありました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。

（マタイ　7・7）

あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。

（エレミヤ　29・12、13）

そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。

（ヨハネ　3・19～21）

そんなとき、友だちの家で何度か顔を会わせたことのある桜本さんの奥様が、その友だちを捜してわが家にいらっしゃいました。私はものごとに対して自分の考えをはっきりおっしゃる彼女をその頃は好きではありませんでしたので、友だちのところでお会いしても直接お話をすることはほとんどありませんでした。それなのに、この時は不思議に彼女をお茶に誘っていたのでした。今思うとこれは、イエス様のご配慮だったとしか考えられません。そしてその日の夕方、彼女は「もしよかったら聞いてみてください」と書かれた封書に一本のテープを入れてわが家のポストに入れてくださいました。いわゆる宗教に誘う方は、いつも無理矢理押しつけるようなところがあるのですが、その「もしよかったら」という言葉に私はとても気持ちのいいものを感じて、すぐにそのテープを聞きました。そのテープは蘇畑さんの「信仰と行ない」というテープでした。私はそのテープの中のお話の内容はほとんど分かりませんでしたが、なぜかとても納得できるも

のがあり、うん、うん、と気持ちよく聞くことができましたので、桜本さんにすぐお礼の電話をしました。心の中では、桜本さんの行っているキリスト集会というところへ行ってみたいと思いましたが、「宗教」には少し懲りていましたので、不安もあって、私の方から連れていってほしいとはとても言えませんでした。

すると次の日、桜本さんに気持ちが伝わったかのように、井之頭の家庭集会へいらっしゃいませんかと誘っていただきました。その頃の私は、キリスト集会が何を信じている人の集いなのか全く知りませんでしたので、何も考えず、とにかく誘ってくださったことがうれしくて、喜んでいっしょに連れていっていただきました。そのとき、ベックさんとお話していただく予定だったのですが、ベックさんが病院へお見舞いに行かれなければならなくなり、ベックさんは、「明日はめずらしく一日中家にいるから遊びにいらっしゃい」と言ってくださいました。私は以前、ベックさんのお宅にうかがったことのある友人が「インテリアが素敵なのよね」と言っていたことを思い出し、ドイツの方のお宅を拝見させてもらえる、嬉しい、といった程度の軽い気持ちで、次の日ベックさんのお宅にうかがいました。すると、「分からないことは何でもベックさんに聞くといいわよ」と桜本さんがおっしゃいました。

ベックさんは私の手をしっかり握って、「雅子、雅子は神様に愛されているよ…」とおっしゃいました。私はなぜだかこの一言を聞いただけで涙がとめどなく溢れ、ベックさんのお話を聞いている間じゅう涙が止まりませんでした。ベックさんが何を話してくださったのかほとんど記憶

にありませんが、ベックさんが優しく涙を拭いてくださったこと、そしてベックさんと話している間、それまで味わったことのない、母の胎内にいる時はこんな感じだったのかと思えるような平安を味わったことを今でも忘れることができません。ベックさんのお話を通して、子供を殺した罪を主は赦してくださったこと、そして私にとって、病気が治ることが奇蹟ではなく、病気を感謝できることが奇蹟なのだということを知り、今まで自分をがんじがらめにしていた鎖からいっぺんに解き放されたような解放感でいっぱいになりました。目に見えるものが、全て光をあびて輝いているようで、帰りの電車の中には、朝家を出た時の私とはまったく別人の私がいました。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

（イザヤ　38・17）

その夜、今朝までお水を上げていた神棚をじっと見ていて、私は「本物の神様を知ったのだからもうこんな物はいらない。これはただの木じゃないか。こんな物に高いお金を払って愚かだったなあ…」と思ったとたん、主人が一生懸命作ってくれた神棚を必死になって外していました。その上に置いてあったお札は、新聞紙にぐるぐると丸めてごみ箱に出してしまいました。この行為は、いくら考えてもそれまでの私には考えられない行為でした。この日が、一九八九年二月三日でした。次の朝、自分が一生懸命作った神棚がなくなっているのに気がついた主人は激怒しましたが、私は不思議なほど平安で、「私は本物の神様を知ったからもう神棚もお札も必要ないの」

と言っていました。その日以来、私は朝からテープを聞き、暇さえあれば聖書を読む毎日が始まりました。

イエス様は本当に私のことを愛し、憐んでくださり、今まで不安で不安で病気のことばかり気にして生活していた私に、みことばを通して、これから先の不安をなくしてくださり、喜びに満ちた平安を与えてくださいました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。

（伝道者　3・1、2）

だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

（マタイ　6・34）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。

（Iテサロニケ　5・16～18）

これらの聖句を心にとめ、ただただ主に与えられている永遠のいのちのすばらしさを感謝し喜んで、私はそれまでには考えられないほど明るくなっていきました。

その頃長男は急性腎炎で入院していました。病院で聖書を読んだりテープを聞いたりし、また

私が急に明るくなったのを不思議に思い、「どうしたの」と聞くので、私はどう答えていいか分からず、桜本さんのご主人にイエス様のことを伝える手紙を書いていただきました。そして長男は退院後ベックさんとお話して、「僕が病気になったことでイエス様を知ることができたから、お姉ちゃんより得したね」と言って喜び、彼は救われました。その日は私が救われた日からたった二十日後の二十三日でした。その日以来、私と長男がことあるごとに聖書の話をしたりイエス様の話をするので、長女の綾子は「私もベックさんにあってみたい」と言って、三月二十一日にベックさんにお話をしていただき、救われました。その日から子供たちと私は、ひたすら主人の救いを祈るようになりました。

「あなたがたが、わたし（イエス様）の名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」

（ヨハネ　14・14）

そしてイエス様は、私たち家族のために家も用意してくださっていました。私が救われて一カ月後、友人が建てていたマンションができあがって引っ越すので、元の家を借りてほしいと言われ、税金問題があるので私たちの出せるだけの家賃でいい、と言われた時には、イエス様の恵みに驚くばかりでした。

二年半後、今度はその場所にマンションを建てるので明け渡してほしいと言われ、私たちは困ってしまったのですが、これもきっとイエス様のご計画に違いないと思い、家族で祈り始めました。すると、主人の父が「助けてやるから家を買え」と言ってくれ、私たちは父に働いてくださった

イエス様と父の愛に心から感謝しました。イエス様は、私たち家族のことを全てご存知で、家を探し、家を建て、そして引っ越して住むようになるまで、さまざまな恵みとみわざを体験させてくださり、なにひとつ困ることのないように完璧に全てのことを整えてくださいました。

与えられた家は、病院まで四十分、そして横浜のキリスト集会まで数分という、考えられない所でした。転校した息子には一軒隣に同級生を備えてくださいました。子供の頃からあじさいと黄色いチューリップの咲いた家にあこがれていた私には、それを用意してくださり、春になって黄色いチューリップが何本も咲き始めたときには驚き、私を造り育ててくださっている主の愛に本当に感謝しました。

また、お世話になった不動産屋さんの奥様は、問題の多いある新興宗教に入会する寸前でしたが、私が「光よあれ」をさしあげたことがきっかけで、奥様は入会を見合わせ、ベックさんにお話していただいて、本当の神様を知ることができました。

「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。」

（マルコ　5・19）

そして愛するイエス様は、私の両親や姉の家族のうえにも豊かに働いてくださいました。横浜、高松、岡山に遠く離れているのですが、主は近くにキリスト集会の方々を備えてくださいました。父がパーキンソン病で入院してからは、内田さんご夫妻がことあるごとにベックさんやキリス

ト集会の方々を連れてお見舞いに行ってくださり、父はその方々を通してイエス様の愛に触れ、救われました。父の症状が進み、動くことも話すこともできなくなってからも、多くの方々がお見舞いに来てくださると涙を流して喜びを表わしていました。

そのような父も、一九九四年一月二十八日に、静かにイエス様のところへ旅立ちました。母は、父が信じた聖書に従った葬儀をしたいと心から思い、キリスト集会の方々にお世話をいただいて、本当に祝福された葬儀を行なうことができました。そして、イエス様の愛にふれ主に従おうと決心した母は、一九九四年十二月四日、姉といっしょに高知キャンプで洗礼を受け、このことを皆さまの前に証しすることができました。

私がイエス様を信じて、早や七年が過ぎ去ろうとしています。脳腫瘍はどんどん大きくなっていますが、私の人生のなかでこの七年ほど幸せな時間はありませんでした。この喜びをくださったイエス様に、祈り続けてくださった方々に心から感謝いたします。この喜びや幸せを、一人でも多くの方々に知っていただきたい、それが今の私の願いです。

その後、一九九五年の十一月に、私は東邦医大病院に入院し、二度にわたって手術を受けました。一回目は、天国に行くのも楽しみ、帰ってくるのも楽しみと思って手術を受けましたが、二回目の手術を経てもなお、私は主によって生かされ、回復に向かっています。どうやら主は私に、もっとお前を使う、働くようにと言っておられるようです。

神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。

（ダニエル　10・19）

この証しを読んでくださった方々の上に、主イエス様が豊かに働いてくださることを、心からお祈りいたします。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。…私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

（詩篇　23・1～6）

神はすべてのことを働かせて益としてくださった

道川 勇雄





一九三八年東京生まれ。中央大学中退。JAF(日本自動車連盟)に勤務。現在、広告代理店に所属するかたわら制作プロダクションで広告、編集制作に従事。妻節子さん、長男洋一郎さん、野辺地東洋さん。

江藤さん宅の家庭集会で。▶

私生児として

私は、私生児として生まれました。

母の胎内で私が三カ月になったとき、父は、母と私を捨てて、別の女性の元に去っていきました。父と母は、結婚届けを出さない同棲でしたから、私の戸籍謄本の父の欄は、長い間、空欄でした。今でも、長男とも次男とも記されず、ただ雌雄の別を表す「男」と書かれています。

後年分かったことですが、父は母と並行して、その女性との関係を持ち続けていたのです。私の誕生からわずか数カ月後に、父は、その女性との間に女の子をもうけています。父が、終生をともにしたのは、その女性でした。

私が生まれたときに、父は「養子に出す」といって、随分強引に母に迫ったそうです。禍根を残したくなかったのでしょう。しかし母は、手放しませんでした。ですから私の道川という姓は、母の実家のものです。父は、出産費はもとより、養育費も一切出しませんでした。

不倫の子は主の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、主の集会に加わることはできない。

（申命記　23・2）

と書かれています。別の聖書訳では、不倫の子が私生児となっています。私生児は、いくら主を礼拝したいと思ってもさせてもらえないわけです。同じ申命記のすぐ近くの節と比べてみると、私生児に対する厳しさが、一層鮮明になります。

人が新妻をめとったときは、その者をいくさに出してはならない。これに何の義務をも負わせてはならない。彼は一年の間、自分の家のために自由の身になって、めとった妻を喜ばせなければならない。

（申命記　24・5）

とあり、また、隣人との賃貸に関して、

もしその人が貧しい人である場合は、その担保を取ったままで寝てはならない。

（申命記　24・12）

と書かれています。私生児に対する記述に比べ、何と人道的で、心やさしいことか……。この一節は、申命記が記された時代、いまから数千年以前の人々がいかに私生児を嫌っていたかを物語るものですが、私の生まれ育った時代でも、明らかに特殊な目がありました。

私生児として生まれることは、全く当人に責任のないことです。でも、聖書は前記のように「主の集会に加わってはならない」と断言しています。ちょっと理不尽に思えますが、私のわずかな経験からは、この記述は当然だと思えます。

人は、生まれて両親の愛の中で育ちます。もとよりこれは人の愛でしかありません。しかし、感知しやすい人の愛を知ることで、感知しにくいが、より大きな神の愛に目覚めることができるわけです。

目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。

（Ⅰヨハネ　4・20）

自分の出生が、両親の愛の結晶なのか、愛の破局なのか、全く愛なしであったのかは、大きな違いです。そういう意味で私生児は、神の愛を知りにくいことは確かです。そしてもう一つ、先の私生児に関する聖書の言葉は、私生児や不倫の子を生ませないための、それこそ神の大いなる愛の言葉だといえるでしょう。

再　会

高校三年のときに、今後、就職、結婚に差し障るといけないということで、父に認知（父親であることを法的に認めること）を頼みに行きました。それが父と私の初対面でした。

当時は、映画が盛んで、とくに母子物、父子物といって、離別していた親と子が涙の再会をするストーリーがはやっていました。行く道すがら、そんな濡れ場になったら困るなどと考えていましたが、これはとんでもない馬鹿げた想像に過ぎなかったのです。

父の最初の言葉は「大きくなったな」でしたが、これはほんのお愛想で、それに続く言葉は「お前がいることは、家族に内緒なんだ。認知で、もしお前のことが知れたら、家庭がメチャクチャになってしまう。だから生まれたときに養子に出せばよかったんだ。お前のお母さんが、反対したからこうなってしまった。実に迷惑だ」という本音でした。

父は、無頼の輩ではありません。一高、東大出のエリートで、当時は弁護士でしたが判事を務

め、いままだ名が残る大きな事件に係わってきた人です。そして司法試験を通った人たちを教育する司法研修所の教官もし、多くの後輩を育てた人でした。証拠法などに関する著作もある人なのです。

それから何度会ったでしょうか。十回に満たなかったと思います。対面に期待したすべてのことごとが裏切られ、会わなければ良かった、という悔いさえも時とともに風化して、いつしか父のことに無関心になっていきました。でも、私の心の根深いところに「法の番人といわれる人でさえ、あんなものだから、社会なんて甘いものよ。やりたいことをやってもバレなきゃいいのさ」といった考え方が確実に芽生えていきました。

家庭内暴力のはしり

ちょっと時を遡ります。私が小学生のときに、家の離れに一人の男性が下宿住まいをしました。それからどのくらいの月日が経過したか定かではありませんが、あるとき母から「今日から、あの方を、おじさまと呼びなさい」といわれました。その人は野辺地東洋という人で、そのとき以来、母の姓も野辺地になりました。

野辺地と再婚するまでの母は、父のいない私を不びんに思っていたのでしょう。ウィークディは働き、休みの日には、雨でも風でも、必ず私と行動をともにしてくれました。疲れていたのでしょうが、父と母の二役を一人で果たすために、随分無理をしてくれていたのでしょう。

こうした母子の間に、野辺地が割って入ったのですから、うまく行くはずがありません。この

男は、母を私から奪った奴。母は、私を捨てて、男のものになった奴。この思いが、母と私の間に亀裂をつくり、次第にその裂け目を大きくしていきました。

愚にもつかないことが、トラブルのもとになってしまうのです。当時は、戦後まだ日も浅いころで、男と女が手をつないだり、肩を組んで歩くという姿は、アメリカ兵とある種の職業的日本女性との間にみられる程度でしたが、野辺地夫妻は、辺り構わずイチャツクわけで、それを私の同級生が見る、私をからかう、私が母に怒る、母は「当然のことをしているだけ」というわけで、私の暴言がはじまるのです。

中学生のころには、私の家から罵声の聞こえない日は、おそらく一日もなかったでしょう。なぐる、ける、棒で追い回す。母は、幾度、筋向かいの私の伯母の家に逃げ込んだことか、何度、それを追ってなぐり掛かったことか……。

高校生のころには、売春宿へ通い出し、町で女性を誘っては関係を結ぶ。関係を結んだ後、すぐ逃げるように別れる。何人の女性が、私の一時の快楽のために傷ついたことか……。

浪人から大学時代には、同棲生活。まともに勉強などできるはずもなく、四年で中退。

就職、結婚、妻の救い

大学中退後、新聞広告で自動車業界紙に就職。三年後に同じ自動車業界のある社団法人の編集部へ移籍、その三年後にＪＡＦに移り、ここで私の救いまでの二十三年間を過ごすことになります。妻節子と見合い結婚したのは、ＪＡＦへ移る時、一九六七年三月でした。二年後には、長男

の洋一郎も生まれ、私にとって静かで、楽しい日々が続きました。

結婚十二年目の一九七九年の秋、普段みせない落ち着かない素振りで、妻が突然「洗礼を受けてもいい？」と聞いてきました。その頃ちょうど、昔の女遊びの虫が疼き出していたので、妻の洗礼を大賛成しました。

わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。（マタイ　5・39）

なにしろ妻は、こういう大変結構な教えを受け入れるわけですから、これに反対する理由はありません。妻が「髪振り乱して信仰狂い」してくれれば、浮気であろうが、本気であろうが、こちらは好き勝手なことができる。その上、妻は、それを黙って許してくれる人になるわけです。こんな有り難いことはありません。

もともと私には、無神論というような立派な「論」はなく、神とか仏とか、宗教とか信仰とかいったものに、ただ無関心でしたから「見えざる力がある」などとは考えてみたこともありませんでした。信仰を持つ、ということはある教えを受入れて、本人の考え方を変えていく、あるいは、社交の一つ、自己満足、慰め程度にしか考えていなかったのです。

私は、自分の欲望通りの行動をはじめました。妻が信仰に熱心になればなるほど、私は、妻という縄目から解放されるわけですから、信仰の邪魔をしよう、などと考えたことは一度もありません。何人かの女性との関係ができました。

当時、管理職として、部下も相当数になっていました。仕事は、課長と仲良くしていれば、巧く運びます。同時に、妻に隠したい私生活さえも隠せるのです。印鑑を課長に預け、役員からの問い合わせには、適当な外出先を告げるように頼み、昼日中から女性の元へ。そして万が一の時のために、特に親しい二人の課長には、女性の自宅の電話番号を教えてあり、もし緊急の時は連絡を、また、私が女性のところで不慮の死でも遂げたときには、その死の有様を隠すように頼んでありました。

父の死

もう一度、時をちょっと戻します。父との初対面から二十年余の歳月が過ぎ去ったある日、父が死に、日本キリスト教団のある教会で葬儀をするとの知らせが来ました。葬儀の場で、牧師が「○○さんは、十二月二十一日に洗礼を受けられ……」といった言葉だけが耳に残りました。たくさんの参列者の中で、その洗礼の日がどういう日なのか分かるのは私だけでした。その日は、私の誕生日だったのです。

でも、そのとき思いました。神だか、イエスだか、キリストだか知らないが、誰が父を許そうと、私は絶対に許さない。戸籍謄本を長い間、空欄にしたこと、イヌ、ネコのような扱いをし、精神的な支えはおろか、出産費、養育費など、一切の金銭的な支援もしなかったこと。その被害者は私だ。イエスでも、キリストでもない。誰が許すものか……。

そして、もう一つ感じたことがありました。なぜ、私の周辺の人は、みなクリスチャンという

隠れ蓑を着るのか。そして父までが。私から母を奪った野辺地東洋の父親は、野辺地天馬といって、童話作家でありホーリネスの牧師。東洋の伯父には、渡辺善太という日本キリスト教団の牧師であり、神学者であった人。母は、ミッションスクール・女子学院時代に洗礼を……。私とは父違いの姉も受洗者。もちろん野辺地東洋も受洗者。クリスチャンとは、自己の責任を果たせない人、いや果たそうとさえ考えない人たちの別名である、と結論付けました。

「何がイエスだ、何がキリストだ。馬鹿らしい……」。

劣等感が出会わせた「キリストの手紙」

学歴なしの私にも拘らず、仕事は順調。サイドビジネスでやっていた某広告代理店の仕事も手広くなり、これも順調。どちらが本職だか自分でさえ分からないような状況になっていました。それでさえ本職の方も、その年の四月から、新しいセクションで局次長。お金も地位も仕事も遊びもオールOK。定年後の生活設計もまず無事なものとして立てられる状況にありました。そんな時に妻から「集会に、東大を出て富士銀行に入り、ノイローゼになって銀行をやめ、いま翻訳業をしている田中さんという人がいるけど……」という話。

東大を出てノイローゼ、その上、不安定な翻訳業。加えて、馬鹿げたキリスト信仰。どんな奴か会ってみよう。一九九〇年三月のある日、田中さんご夫婦がわが家に。三、四時間の間、反キリスト論を喋っていたのはほとんど私一人。

しかし、田中さんご夫婦は、反論することもなく、ご自分たちがイエス様に出会った経緯「証

し」をわずかに、そして静かに話されただけでした。それでも田中さんは結局、私にとって「神の前にかぐわしいキリストのかおり…」（IIコリント2・15）、「推薦状…」（IIコリント3・2）、「キリストの手紙…」（IIコリント3・3）となったのです。

心臓停止

田中さんと会った数日後、自分の健康を証明するために、心臓の動きを二十四時間連続して調べる検査をしました。もとより自分は健康だと思っていたので、そのまま出張へ。ところが出張先へ医者から「すぐ帰れ」の連絡。それも、自分の胸に「洞結節不全症候群・完全房室ブロック」と書いた札をぶら下げて、階段はゆっくりと、歩くのもノロノロと。極めて危険な状態にあるとのこと。帰宅して手配されていた大学病院へ。そこでは手術の用意が整えられていて、すぐペースメーカー挿入の手術。一週間後、手術の失敗が判明。二回目の手術。今度は切り口を縫合した段階で失敗が判明。手術台に乗ったまま三回目の手術。この三回目の手術にかかる前に、執刀する教授に「今度、失敗したら神のみ心ではないのだから、手術は止めにしてほしい」と私。そのとき想定した神は、伊勢や出雲の神ではなく、もとより仏の姿でもありませんでした。どうにか三回目は成功。しかし、ペースメーカーの手術では、珍しい一カ月の「絶対安静」に……。

私は、勤務先のＪＡＦでも、サイドビジネスでも、部下や上司、関係者に感謝されるような自分であろうと努めてきましたが、絶対安静の状態になると、尿をするにも、便をするにも、食事を取るにも、寝返りをするにも、体を拭くにも、すべて看護婦さんの手を煩わせるわけで、感謝

することはできても、感謝されることはできなくなってしまったのです。

そんなある日、突然、死後は「無」であるという考えが、大きく揺らぎ出しました。もしも、この世の短い「生の世界」とは比べものにならない「永遠の命」が存在するとしたら…。そしてこの世の生が、来るべき永遠の命への序章だとしたら…。序章として位置づけられたこの世の生を、その与えられた目的通りに生きてきただろうか（後日知ったことですが「罪」の原語には「的を外す」という意味があるそうです）…。目的が何であるかは分からないが、自分の過去を振り返ってみて、あまりにも無様過ぎる。結婚以来、わがままらしいわがままをしたことのない妻が、それに加えてわが身を犠牲にして、いま、看病をし続けてくれている。その妻に、私は何をした。裏切ったではないか。妻だけのことではない。あれはどうか。これはどうか。想起されるすべては、罪そのものではなかったか。いくら科学が進歩しても「無」から「有」が生じると考える論理は、理性の破局にすぎない。だとすると、万物の創造主がいるかも知れない。私を支配している神がいるかも知れない。人間をはるかに超えた創造主なる神が存在していたら、その目は厳しいだろう。人の目はごまかせても、神の目はごまかせまい。その神の前に立たされたとき、私には、申し開きをする術はまったくない。

寡黙で、なに一つ反論をせず、聖書の中身についての弁明もしなかった、あの田中さんが、神の前にかぐわしいキリストのかおりになり、推薦状になり、キリストの手紙になったのは、このときです。「田中さんたちに会いたい。どうして見舞いに来ないのか？」。節子の連絡で田中さんが来てくださったのは、その翌日のことでした。何を話したでもなかったと思います。私は、お

二人から限り無く発散されるキリストのかおりの中にいたことをはっきりと記憶しています。

その数日後、ベックさんが来てくださり、二時間ほどの間、三角定規で三位一体の話のほか、いろいろと話してくださったようですが、わかりにくい日本語で、本当は何を話してくださったのか未だに不明なのです。でも、ベックさんが先導してくださった悔い改めの祈りだけは、はっきりと分かり、一語一語、自分のもので、途中から、涙にむせぶ中での祈りになりました。

受洗とその後の僻病

六月三日、吉祥寺キリスト集会で受洗。もとより聖書を信仰と生活の基準の書として、神の言葉として読んだことはなく、また、聖書のどこそこに書かれていることが信じられるから、ということで受洗したのではありません。意識的な動機としては、一カ月余りも、病院へ通い続けてくれた妻へのお礼、裏切った数々の事々へのお詫び、でしかありませんでした。

そんな動機からの受洗者である私をも、イエス様は、私を捨てて孤児にはされませんでした。(ヨハネ14・18)。信仰者として幼い私を、吉祥寺の中町の方々が、本当によく導いてくださいました。「今日は、ここの家庭集会」「明日は、あそこの家庭集会」。こんなに集会に潰かりっぱなしで、一体、この人たちの家庭生活はどうなっているのか、と心配になるほど熱心に連れ回ってくださいました。

受洗から三カ月後の九月のある日、目覚めると同時に、表現しようのない不安感に襲われました。地獄の底から手が伸びてきて私の足をつかみ、ぐいぐいと底知れぬところに引きずり込んで

いく、といった感じでした。無理に起き上がり、這うようにして犬を散歩に連れ出して、わずか数分後、一体、さっきの不安の原因は何だったのかと考えても、さっぱり分からないのです。その翌日も、その次の日も。襲い来る「不安そのもの」に脅え続けました。一週間後、医者へ。私を見慣れたその医者は、顔を見るなりほとんど何も聞かずに、精神科の医者に連絡。そこで「鬱病」との診断が下されました。キリスト信仰は、ご利益ではないぐらいのことは、身内に二人も牧師がいれば、信じていなくても分かります。でも、何も鬱病にしなくても……。イエス様ひどいじゃありませんか……。全く信仰なんてろくなことはない。そう思っても捨てられず、ただひたすら家庭集会に行き、聖書をしがみつくようにして読み、「この不安を取り去ってください。イエス様、あなたを心から信じさせてください」と祈り続ける毎日が続きました。

堀り出された穴を見よ

創生記1章1節から、黙示録22章21節まで、何度か通読しました。最初はどこを読んでも「こんな馬鹿な」という判定者として……。どうしてイエス・キリストが救い主なのか、神なのか。何度目かの通読で「人間って、思ったよりはるかにひどいものだ」。そしていつか心に響くみことばと出会えるようになり、次第に面白くなって、ついに聖書とそれに関連する書物以外は、一切読まなくなってしまったのです。

そして、そのころ出会ったみことばが、

すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばく

ことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。（ローマ　2・1）

…あなたがたの切り出された岩、堀り出された穴を見よ。（イザヤ　51・1）

父は私にひどいことをした。母もだ。みんなひどい奴だ。しかし、自分はどうだった。父がひどければ、同じように自分もひどい者ではないか。同じ罪の穴から堀り出された者ではないか。

ベックさんに先導されて悔い改めの祈りをしたときの、その悔い改めとは比べものにならないほどの罪の深さを知り、ある日の礼拝で、その深い自分の罪を悔い改めるのに、自分の言葉よりも、はるかにそれを言い表すのにふさわしい詩篇の51篇を読んで祈りました。涙がこぼれました。声がかすれました。震えました。その祈りの後、私は生き返りました。

父が、洗礼の日を私の誕生日にしたのは、私が救われるように、という必死の祈りだったことがみえてきました。父は「不倫の子は主の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ主の集会に加わることはできない」というみことばにも出会って、愕然としたことでしょう。主の前に立てない子を産んでしまった。おそらく脂汗を流して祈ったと思います。

私が、英語に初めて接したのは、母がいつもそらんじていた英文の詩篇23篇でした。終戦後、疎開先の長野から引き上げるとき、列車は、立錐の余地もなく混んでいました。母は、年老いた祖母を背負い、二人の子供の手を握り、何時間も立ち続けて、やっと焼け野原の東京へ戻りまし

た。その後、大の男でさえ生活できないような社会情勢の中で、必死に働き続けました。あげくの果てに私の凄まじい暴力。苦しい生涯で、母が本当に心の底から頼れ、力付けられたのは、詩篇23篇だったことがみえてきました。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます…。

（詩篇　23・1～3）

母が野辺地東洋と再婚したことで、私はイヤな思いもしました。しかし、それによってイエス様を信じる人々が私をとり囲むことになったのです。母の再婚の背後には、イエス様のみ手が働いていた。イエス様が、私を救うために彼らを遣わしてくださったことがみえてきました。

渡辺善太は「勇雄君に講談を習わすといいよ」と、始終いっていたそうですが、その頃でさえ講談など見捨てられたような芸で、習っても何の役にも立たないことは明らかでした。しかし渡辺は、信仰的洞察力とでもいうのでしょうか、私が救われることを確信していたのでしょう。救われて後、証しをしたり、イエス様を伝えるときの話の「間」を講談で訓練しておくといいよ、ということだったことがみえてきました。野辺地天馬も、祈りの人でした。イエス様のイの字も私に言ったことはありません。しかし、私が救われることを祈っていたのです。

…祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。

（マルコ　11・24）

私を取り巻いた人々、父も、母も、天馬も、善太も、もう、この世にはいません。でも、

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

このイエス様の約束を信じて、私が救われるのを確信してこの世を去っていったのです。そして、その確信は間違いなかったのです。

祈りは聞かれる

意地でいえば、私を私生児にした父の信仰を認めるはずがありません。母を奪った野辺地一族が信じる神を自分の神とするわけがありません。私が自ら進んで近づくはずがないのです。

しかし、父の祈りは聞かれた。その証拠は、私がいまここに証しをしている事実が証明しています。これ以上確かな証拠はありません。

「…神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」（マタイ　22・32）

イエス様が、生きて働かれたがゆえに、いまの私がここにいます。十字架は二千年前の義人の死という、単なる歴史的一事象ではなかったのです。私がどう抵抗しようと、イエス様は、父の必死の祈りを聞かないわけにはいかなかったのです。そして、父の悔い改めは、自己満足や絵空事ではなく、科学の実験よりもはるかに確かなことだったのです。私が救われて、今日あること。

父と、天の御国での再会を楽しみにしている事実がその証拠です。

闇を光に変えられるイエス様

私の人生は、イエス様の十字架の一方の面からみると、罪そのものです。聖書は、私が罪人であることを明示しています。パウロが「罪人のかしらです」というなら、私は「悪人のかしらです」。どんな宗教も、どんな修業も、どんな学問も、どんな科学も、どんな思考の変更も、もはや過去となってしまったこの罪の人生を変えることはできません。

あなたがたが足の裏で踏む所は、ことごとくあなたがたのものとなる。

（申命記　11・24）

踏んではいけない地を踏んでしまった…。私の場合、それは背負い切れない重い荷です。しかし、イエス様の十字架のもう一方の面からみると、罪の赦し、救いになります。この一面からみるときにだけ、私の人生は、実に輝かしいものになるのです。私生児として生まれたこと、母が再婚したこと、幾多の病をしたこと、学校を中退したこと、書き切れないすべての忌まわしいことが、事実とは逆転して光になるのです。

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

（ローマ　4・25）

イエス様が、重荷を負ってくださった。私が背負いきれない罪を負ってくださった。ゆえに、死後の準備はできた。私は救われた。私はいま、この確信に立っています。

これから先、どれほどのこの世の時が残されているのか、私には分かりません。直面する人生の場面で、いやでも選択を迫られます。イエス様が、その都度、右だ、左だ、と最善の道を指示してくださいますが、強い肉の思いのゆえに、精神の弱さのゆえに、その選択の場面で、過去に犯したと同じような過ち、罪を犯さない、とはとても断言できません。形こそ違え、同じことを繰り返すでしょう。しかし、イエス様は、私と共にいてくださり、ペテロたちの足を洗ってくださったように（ヨハネ13・1～10）、私の足も洗い続けてくださっていることを信じています。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）



冷えた信仰から熱い信仰へ

道川 節子

一九四四年長野県松本市生まれ。信州大学教育学部附属松本小学校、同中学校、松商学園、文化服装学院研究科卒。銀座松屋勤務。家族は夫勇雄さん、長男洋一郎さん、野辺地東洋さん。

生家の宗教

生家は、曹洞宗の壇家で、大きな仏間がありました。母の毎朝の仕事は、お水とご飯を仏壇にあげることでした。子供たちも小さな頃からこの姿を見て育ち、母が留守のときは自然に引き継いでやっていました。母は何よりも仏壇が大切で「死んだ後、誰がこの仏壇を守ってくれるか」ということが一番の関心事でした。実際、父の死後、長男の家に移り住む話があったときにも、長男の家に仏間を新たに設けるかどうかが最大の難問になり、とうとう生活の不便をしのびながら、その死にいたるまで仏壇を守り通しました。

私は七人兄弟の末から二番目で、両親と兄弟の愛の中でのんびりと育てられ、兄や姉からも可愛がられました。本来、その環境からいえば、のびのびとしたすなおな人間になるはずだったのに、どういうわけか、劣等感の固まりになってしまいました。周囲の人がみな自分より優れた者

に感じられ、自分の考えや思いをすなおに表現することができない、いつも相手に威圧を感じる、という実に哀れな者になってしまったのです。私の無口は、その後遺症かもしれません。劣等感の原因は、いまだに不明です。

結婚生活

二十二歳で主人と見合結婚をしました。同じ敷地内に両親と同居。父も母も、私を娘のように可愛がってくれました。

主人の母は、外向的な人で、一方の私は内向的な性格でしたから、最初はよかったのですが、次第に母の外向性と合わなくなり、毎日、菓子を持ってきて話しこむ母をうっとうしく感じる時もありました。主人の別れたお父さんのこと、主人の過去の女性のことなど、私の聞きたくもないことばかり日々聞かされるのは辛いことでした。

二年後には、長男洋一郎が生まれました。仮死状態でしたが、無事に育ちました。年子で女の子が生まれましたが、わずか六時間で天に召されました。知りあいの牧師さんに葬儀と納骨式をしていただきましたが、そのときはイエス様と出会うことはできませんでした。その後、三人目の子供が与えられましたが、私が風疹だったために医者や家族と相談の上、生むのを諦めました。

このような結婚生活を通して、主は私に何かを語りかけておられたのですが、その頃の私はそれにまったく気がつきませんでした。

友人の死

イエス様を知ったのは、ある友人の死を通してでした。三十一歳のときです。ある朝、友人の死を知らされました。前日まで話をしていたあの人が…。信じられませんでした。人間は簡単に死んでしまうのだ。死に対する恐怖が襲ってきました。私もいつかは、と不安になり、人と会うのがいやになって、家の中でぼうっと過ごすことが多くなりました。

両親にも主人にも、つくり笑いをして、明るく見せかけましたが、虚しい毎日でした。そんな時に、洋一郎の学校のPTAで知り会ったキリスト集会の方々が、キリスト集会に誘ってくださり、少しずつ人と会うことも気にならなくなり、あちこちの家庭集会にも行くようになりました。ベックさんの話はよく分かりませんでした。とくに罪ということが分かりませんでした。でも、不思議に死の恐怖感はなくなり、少しずつ明るく生活できるようになっていきました。ベックさんと話したときは、涙で顔がくしゃくしゃになりました。友人の死を通してイエス様は、私を信仰の道へと誘ってくださったのです。

主人が救われるまでの信仰

キリスト集会に集って十一年の歳月が過ぎ去りました。私の家はキリスト集会から三分ほどの場所にあります。私は火曜日の婦人会には集うようにしていましたが、日曜日の礼拝は、主人が休みなので、一緒に買い物へ、食べ歩きへ行くことが多かったのです。そういう日曜日にはキリ

スト集会の方々と会うのが嫌で、姿を見ると、手前の道を曲がって会わないようにするような状態でした。そしてキリスト集会では、私はほとんどお客さまという状態で「私はクリスチャンです」と人にいうためのアクセサリーの信仰でしかありませんでした。

「…ですから、もし子（イエス様）があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

（ヨハネ　8・36）

というみことばがありますが、当時の私の信仰は、キリスト集会の方々の目を避けるために、道を歩くことさえままならず、信仰のためにかえって不自由になっていました。

人の悲しみ、苦しみ、悩みに耳を傾けることもなく、ましてその悲しみや苦しみ、重荷を分かちあうことなど考えたくもないことでした。当然、喜びもありません。そしてキリスト集会の方々の内に働いていらっしゃるイエス様を見ることもできなかったのです。最初に救われた頃の気持ちは薄れてしまい、イエス様にひれ伏すことのない者となっていました。そんな私の信仰をイエス様は悲しんでおられたと思います。

家族の死

しかし、家族の死の試練を通して、私はイエス様に立ち返ることができました。実家の父、母、主人の母、私の長姉。この四人の死が次々にあり、私の信仰が大きく変えられました。死は終わりではない。このことを確信できるようになったのです。イエス様の恵みと憐みに感謝しました。

主人の母は突然倒れ、十日間の闘病生活の後、天に召されました。召される三日前に、二人でお祈りをしました。母は口をきける状態ではありませんでしたが、目に涙を一杯ためて泣いていました。そして三日後に、苦しむことなく安らかに天に召されていきました。天国でまた会えることを確信し、楽しみにしています。

母が召されたとき、私は母が好きだったみことばを親戚の方々の前で読みました。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。

私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

（詩篇　23・1～6）

私の心は平安に満たされました。葬儀は家族の救いのためにキリスト集会で、と思いましたが、主人とその姉との相談の結果、日本キリスト教団の教会でいたしました。

私の長姉は、三十年間リュウマチで寝たり起きたりの生活で、ある時動脈瘤破裂で入院しまし

た。両親には伝えることができなかったイエス様を、この姉にはどうしても知ってもらいたいと、ベックさんはじめ多くのキリスト集会の方々に病院へ行っていただきました。ベックさんは姉とともに祈ってくださり、姉も涙を流しながら祈っていました。召される一週間前に、電話で姉が「ありがとう」といってくれました。姉が召されたときベックさんは「お姉さんは、いま天国だよ」といってくださり、平安でした。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（IIコリント　4・17、18）

主人の救い

主人が救われたのは一九九〇年四月のことです。そのとき主人は、杏林大学病院のベッドの中でした。イエス様は、このときのために一カ月前から田中さんご夫妻を備えてくださいました。主人はイエス様に反抗する知識にたけており、田中さんがきてくださったときにも主人はイエス様に一方的に盾つくばかりで、私たちはまったく平安がありませんでした。でも二週間後に、再び語りあうことができました。前のときより多少うちとけて、田中さんご夫婦も証しをしてくださいました。でも、主人が救われることは、私の目には絶望的だと映りました。

そして一カ月後、イエス様は主人の心臓を止められました。ペースメーカーの手術をし、その

後の入院療養中のこと、主人は突然、「どうして田中さんは来てくれないのか」と言いました。私はびっくりしました。見舞いに来てくださる方は多いので、主人が退屈のあまり田中さんを待ち望んでいたのではないことは確かです。主人の気持ちを変えさせたのはイエス様の御力としか言いようがありません。そして手術の一カ月前に、田中さんと語りあうことができたのも、イエス様のご計画だったのです。

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」（ルカ　18・27）

その後ベックさんに来ていただき、悔い改めの祈りをし、イエス様を受け入れて救われました。重田さんがお見舞いに来られたときに、主人は「ペースメーカーは、神の作品か、それともサタンの作品か」と聞きました。重田さんの答は「これからの人生をイエス様のために生きるなら、そのペースメーカーはイエス様のつくられたもの。イエス様に逆らって生きるのなら、それはサタンの作品」。この答は、主人にとっても、私にとっても深く心に残るものでした。それから今日まで、この重田さんの言葉は、私たちの信仰的判断の大切な基準になっています。

主人の救いと同時に、以前から祈っていた弟の妻、名古屋睦美さんが救われ、一九九〇年六月三日、主人とともに洗礼を受けました。睦美さんは、病気の夫の看護をする私が、あまりにも明るく、少しの不安もなく過ごしている姿を見て、私もそうなりたいと思ったのだそうです。病気が恵みであることを教えていただきました。

その後、主人は癌病になり、会社を辞めました。この病気も、同じ病気を持つキリスト集会の

方々や未信者の方々の気持ちを少しでも知ることができるようにと、イエス様が与えてくださったものと確信しています。いまは祈りに支えられ、ほとんど気にならなくなっています。

洋一郎の救い

洋一郎は、美術の専門学校へ入学しました。一九九二年のある日、同級生の大高久弥子さんが洋一郎の車を運転して、事故を起こしました。以前の私でしたら、あわてふためいたことと思いますが、私は「恵み」、主人は「しめた」と、思わず口に出してしまいました。事故の処理より大高さんにイエス様を伝えられる、ということが、まず二人の頭に浮かんだからです。本当に信仰というのは不思議なものです。案の定、洋一郎も、久弥子さんも大ショックで、大高さんのご両親もあわてて相談に来られました。このことから大高さんとの交際がはじまり、イエス様を少しずつ伝えることができました。その後、久弥子さんがノイローゼになり、洋一郎は久弥子さんを集会に連れていってほしいと言ってきました。吉祥寺キリスト集会で開かれているＡＡに集い、家庭集会にはお母様も一緒に集うようになりました。

そしてまず、久弥子さんがイエス様を受け入れ、洋一郎もイエス様を受け入れることになり、一九九二年八月二日、そろって洗礼を受けました。大高さんのご両親もよろこびの集いや家庭集会に導かれ、お二人そろって洗礼を受けることになりました。そうなるまでにはキリスト集会の中町の方々の献身的な導きや祈りがあったことを忘れることができません。そして大高久弥子さんと洋一郎は婚約し、一九九四年十二月十日に結婚しました。

この世に残っている私の兄弟、甥、姪など、まだ救われていない親族が二十四人もいます。洋一郎と久弥子さんの結婚式で福音を伝えることができ、その後も全員が救われることを祈り続けています。今すぐにそれが叶えられないとしても、私には最後のチャンスが残されていることを信じています。

それは私の葬儀のときです。さきに書いたように、私は無口で、親族にイエス様を証することがなかなかできませんが、葬儀のときには、私の自我、肉の欲のすべてがなくなり、ただ、イエス様だけを差し示すことができるからです。

ヨハネの福音書の4章には、イエス様がサマリアの女を用いられて、サマリアの町の多く人々を救われたことが記されていますが、どういう形でか、どういう機会にか、それは分かりませんが、イエス様が必ず私を用いられる時があり、私の親族を救われることを信じています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

私にとって、このみことばによるお約束は、平安そのものです。

キリスト集会の方々とあまりお付きあいをしなかった昔の私だったら、とてもこんな恵みをいただくことはできなかったと思います。私たちの心がいつもイエス様に向いていなければ、イエス様が働かれることはできない、ということもよく分かりました。その後出会った方々、一人一人の人生には、イエス様のご計画が必ずあるということを体験させていただいています。



▲洋一郎さんと奥様の久弥子さん、ご両親。

全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。知れ。主こそ神。主が、私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。主はいつくしみ深く、その恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。

（詩篇　100・1～5）



自我の牢獄から解放されて

藤井 保夫

一九四六年福岡に生まれる。名古屋市立矢田小、川名中、向陽高、南山大学卒業。テスコ(株)勤務。家族は、妻槙子さん、長男嘉也さん、長女奈生子さん、次女真奈さん、母玉枝さん。

・家庭集会　不定期

・住所　埼玉県春日部市栄町
一-二一二二-八

・電　〇四八-七六一-二九三六

私は一歳位のときから子供がなかった母に養子として育てられました。母は私を育てることに懸命で、私もその母にいつもしがみついている母親っ子でした。父は夜遅くしか帰宅しない日が多かったらしく、母は休日になるとよく私をつれて二人だけで映画や食事につれていってくれたことを覚えています。同年代の友だちも少なく、いつも母といっしょにいた私には忘れられない思い出です。

小学校六年生のとき、私は中耳炎の手術を受けなければならなくなり、一カ月近く入院しました。前の年に続いて二度目の手術でした。そのとき母は「人生には歩くのが大変な上り坂があれば、かならず楽な下り坂もある。今は上り坂だけれど、上ってしまえば下り坂だから、がんばるのよ」と私を励ましてくれました。学校を一カ月近くも休むのは大変なことだと母は思っていたのでしょう。この母の励ましの言葉を聞き、入院して、私ははじめて母の守りの手なしで一人で現実に直面することになりました。そうなってみると、私は一人で頑張ることができないこと、自分の中には現実に立ち向かっていく基盤がないことに気がつきました。母は「将来の楽しさを思って今の辛さに耐えろ」と言うのですが、私は「それだったら将来の楽しさなどはいらない。今自分は幸せでいたい」と考えました。将来の下り坂を下るために、上り坂を上らなければならないなら差引きゼロではないか、ゼロであれば、はじめから何もしない方がましだと思い、心が重くなえて行きました。今思うと、この時がイエス様が「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ11・28）とひそかに私に呼びかけてくださったはじめだったように思います。

このような体験、そしてそれから来る不安と恐れは、私が中学生になったとき、「一体自分は何のために生きているのだろうか」という疑問となって私の心を占めるようになりました。そのため私は急に無口になり、うれしそうな顔をすることがなくなっていきました。学校を卒業し、会社に就職し、結婚し、家を建て、そして死ぬ。そういう自分の人生コースにどういう意味があるのか、という思いにとらわれるようになりました。この悩みはイエス様に「ごめんなさい」と言って降参するまで消えませんでした。

中学二年生のとき、国語の教科書に掲載されていた亀井勝一郎の文章に強く引かれました。「何のために生きるかという疑問を持つことがすばらしいことであって、多くの人が、特に大人は、その人生の根本問題を忘れてしまっている」という趣旨でした。私はまったくその通りだと思いました。そして私は他の多くの人とは違って、人生の意味は何かと問う者であり、そのような問題に目覚めている者だから私は偉いのだと思うようになり、まわりの人を軽蔑するようになりました。そして文学書や哲学書を読むようになりました。自分と同じような考えが書いてある文章を捜すのです。それを見つけ出すと、自分がそのような疑問で悩んでいるのは正しいことだと確かめられるので安心することができました。

母は私が高校に入学したとき、私が養子であることを教えてくれました。母は私が高校生になったら打ち明けようと決心し、私がそれをどう受け止めるかをとても心配していたようです。私は肉親とはどういうものなのか知らないのだから、今そうでないと言われても何も失うものがないので平気でした。けれども母が告知を決心し、その決心を実行してくれたことはとても感謝して

います。

大学生になった私は、「自分は特別だ」という思いが高じて、酒を飲み、反社会的なないたずらまでするようになりました。私は人のやらないことができる人間だと、悦に入っていました。当時読んでいた本はカミュの「異邦人」とか、「実存は本質に先立つ」という実存主義の哲学書でした。社会のきまりや通念の中で黙々と生きるのではなく、生の本質は何かと問うことが重要であると思っていた私はそれらの本に共感しました。

今の妻には、私が高校を卒業する頃会いました。彼女は従姉妹でしたから小さい頃から顔は知っていました。その頃、「人生の意味や目的は何か」と、抽象的な言葉を吐いていた私は、ちょうど家から独立したいと思いはじめていた彼女とよく気が合いました。

大学を出る時、私は就職するよりも本を読んでいたいと思い、大学院を受験したのですが失敗し、二年間浪人したのちにあきらめました。父母から貰った援助の費用もなくなり、フリーターをしていましたが、やがて今の仕事に就職しました。私の二年間の就職拒否は終わりました。

その後、今の妻と結婚しました。結婚してどうしたいということもなかったのですが、ともかく、いっしょにいたいと思ったのです。

結婚はしたものの、妻と私はお互いに顧みることもなく、二人とも自分の仕事や、興味のあることに没頭していました。そのような結婚生活をお互いに拘束しない自由な結び付きだと思っていましたが、自我の牢獄に繋がれていた私は、深く、真実に妻と関わることができませんでした。妻の方を向くことがあっても、自分の都合がよい時、自分の利益になる時だけでした。結局、全

てが自分を中心にして世界が動いており、全ての目標は、自己の充足でした。やがて長女が生まれ、また長男も生まれました。私は十二指腸潰瘍が進行して腸に穴があき、入院して緊急手術を受けました。また、長男が生まれて二年位たった頃、職場の一人の女性の存在が私の頭を離れなくなるという経験をしました。もちろんどうなるというものではありませんが、このことを通して、自分の中には自分で自由にならない心の領域がひそんでいるということを知りました。

さて、そのころ、この世にはクリスチャンと呼ばれる人たちがいて、笑顔で満足そうで幸せそうにしているということが気になりだしました。そのようなクリスチャンのイメージをどこで得たのかを考えてみると、結婚する前、妻の大学の先輩にイエス様を信じたばかりの人がいて、その人に誘われて行った教会でだったように思います。その人は「イエス様を受け入れてよかった」とうれしそうに話をし、皆さんはそれを聞いて「本当によかった」と喜びあっているのです。その人に比べて、私は泥まみれでみすぼらしく、不満がいっぱいで悲しんでいる。どうしてこうも違うのだろうかと思いました。クリスチャンが大切にしている聖書に、その秘密があるのではないかと思いました。

私は宗教は嫌いでした。特定の人の考えに拘束されたくありませんでした。けれども、クリスチャンと呼ばれる人が持っており、私が持っていないものがあると思い、私ははじめて聖書を開きました。それまでも聖書を理解して偉くなってやろうと思って開いたことはありましたが、「何かをください」というような気持ちで読んだことはありませんでした。しかし、読んでみても何も分かりませんでした。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」（マタイ　5・3）

しかし目にとまったこのみことばが、私にとって慰めとなりました。「幸いです」とあり、私には分からないながらも「天の御国」というすばらしいものが自分のものになると書いてあったからです。これがきっかけとなって聖書をもっと読んでみたいと思い、教会に行くようになりました。牧師と会って自分の今の状態を話しますと、「自分のいのちをとりもどさなくてはいけません」と言われました。私にはまったくその意味がわかりませんでした。ただ「ああ、自分のいのちがなくなっているのか」と思っただけでした。そのうち礼拝と祈り会に出るようになりました。ある時、次の聖書のみことばが私に迫ってきました。

…自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。（エペソ　2・3）

彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。（ピリピ　3・19）

この二つの聖書のみことばは私のことを正確に言い当てている、と驚きました。たしかに今、私は自分の肉の欲の中に生きていて、肉と心の望むままを行なっているのでした。驚いたことに、聖書には「自分の姿そのもの」が書いてあったのです。それを知って、私は聖書から離れられな

くなりました。それまで読んでいた種類の本などまったく読みたくなくなってしまいました。それらの本は塵芥のように見えました。自分がどんどん変わっていくのが分かりました。「こんなことは夢だ。明日になれば、もとの自分に戻るのではないか」と思ったり、「今の生活を全て整理しなくては」と思ったりもしました。

けれども私は、目に見えない存在があるということが信じられませんでした。私は目に見えるものしか存在しないと思っていました。しかし、それからしばらくしたある夜、一人で聖書を読んでいたとき、次のみことばに眼が釘づけになりました。

ペテロはイエスに言った「決して私の足をお洗いにならないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

（ヨハネ　13・8）

イエス様が弟子たちの足を洗いはじめられ、ペテロの順番になったときに、ペテロは遠慮したのでした。自分の最も汚い足を、貴いイエス様に洗ってもらうのはおそれおおいと考え、洗わないでくださいと言いました。その時イエス様がなさったお答えは、私の予想にまったく反するもので、想像もできない答えでした。「どうしてもお前を洗うのだ」と決めているお方がおられることが分かりました。イエス様を心に受け入れようとしない自分にしびれを切らしているお方がいらっしゃることが分かりました。「こう言えば必ず自分のところに来る」と考えられて、突き放すようなみことばを発せられた…。こんな細かい配慮を私のためにもしてくださるお方がおら

れる。イエス様は私を救いたくて救いたくて仕方がなかった。だから私のような者にも暖かいご配慮をもって呼びかけてくださったのです。私はそのとき、ペテロとともに「主よ、私の足だけでなく、手も頭も洗ってください」と言いたい思いでいっぱいになり、イエス様に今までの私の罪を、知る限りにおいて全て申しあげました。そうしたら心が羽毛のように軽くなり、喜びと平安で満たされました。

主は私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。

（詩篇　18・19）

私はあなたの仰せの道を走ります。あなたが、私の心を広くしてくださるからです。

（詩篇　119・32）

これらはその頃いつも念頭にあった聖書のみことばです。私は心にゆとりがでてきたので、妻の存在とそのありがたさがよく分かるようになりました。妻の方は、私が救われて幸せそうにしているのをそばで見ていて気持ちがよかったそうです。

私が洗礼を受けるとき、発熱していたのを心配して、妻もいっしょに教会に来てくれました。それがはじまりで、一年後には妻も信仰をもつことができ、救われました。私の受洗は一九七九年十一月で、妻の受洗は翌年の十二月でした。

その間私は、主に「妻を救ってください」とは祈りませんでした。私が主を信ずるようになり

救われた経過を思うと、私などが主の救いのお働きに入る余地はどこにもないように感じられました。ただ私は、「あなたは妻をお救いになることができます。あなたが救ってくださるのは本当にありがたいです」といつも申しあげていただけでした。妻が救われたとき、私はうれしくて仕方がありませんでした。私が主に導かれるきっかけとなった事件も、妻に話して謝ることができました。

それから私たちは、教会の仕事に没頭し、いそがしい十年間を過ごしました。それはしかし、救ってくださった主イエス様に全面的に頼ることを知らないで、「人間」と「人間からでたもの」に頼る生活でした。日曜日に配布する印刷物の作成と印刷、伝道会や音楽会などの催しの企画と開催は、「人間的」なものが中心になってそれに頼って行なわれていました。その頃はその間違いが分かりませんでした。しかし、何か変だとは感じてはいました。今ふりかえってみると、この十年間は、私が人間を頼り、主ご自身に頼ろうとしないのを主が忍耐をもってお赦しになっていた期間だったと思います。主イエス様が中心ではなく、人間が中心のところでは、どこでも表と裏の区別が行なわれます。教会も例外ではありません。妻はそのことで長い間悩んでいました。私は、主の救いにあずかった者同志の集まりなのだから、問題があっても必ず解決すると信じていました。

一九八九年十一月、妻は乳がんの手術を受け、退院して自宅療養をすることになりました。その頃、教会には「いやし」の問題が入ってきていました。(「いやし」とは、簡単に言うと、病気を通して現わされる主のみこころに従順に従うことをしないで、「病気をどうしてもいやしてく

ださい」と主に強要することをさします。このことについては、ベックさんは「実を結ぶ命」の中で異言とともにその危険性を明快に指摘し警告しておられますのであわせてお読みください）牧師はその「いやし」を拒否していましたが、夫人はその信奉者で、妻の病気を機会に、その教えを強要してこられました。

私にとっては、この「いやし」は、主イエス様がせっかく救い出してくださった自我の牢獄に私をひき戻すものでした。私は主イエス様に出会ったとき、それまでの生活全体が自分を第一にしたものであり、自分のためであれば何を犠牲にしてもかまわない生き方をしていたことに気づかされ、主イエス様を信じたのです。私が生まれてはじめて、自分のためでなく行なったことは、主イエス様を信ずることでした。私は自分でよいと判断して、自分でイエス・キリストを選んだのではありません。むしろ私は、主を信ずることができない自己中心的な者だったのです。だから主は一方的なあわれみによって私を自己中心の牢獄から救い出してくださったのです。

妻は、このことがあってから、その教会へ行くことをやめ、キリスト集会に集う決心をしました。このことについて聖書が示しているみことばは、私としても最初は信じられないものでした。

それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。

（IIコリント　6・17）

その後も教会内ではいろいろと問題があり、やがて私は退会届けを出しました。主は、私が他の人々と傷つけあうことのないよう、また私を、主のみこころに反して「人間」の利益と体面だ

けが渦巻く場所からつまみ出してくださいました。

私はすぐにキリスト集会に行くつもりはありませんでした。

…あなたの救いを愛する人たちが、「主をあがめよう。」と、いつも言いますように。

（詩篇　40・16）

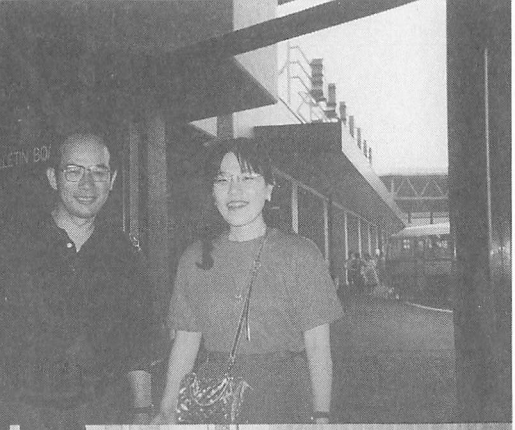
しかし、このみことばに励まされて次の日曜日、吉祥寺キリスト集会の礼拝に出席してみました。それがはじまりで、毎週行くようになりました。キリスト集会に集いはじめて数年間は、集うといつも、主に初めてお会いするような感動を覚え、救われたときのことが思い出されて涙が出ました。

教会を去るとき言われたみことばが真実だったことを知り、感謝しています。

…そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。（IIコリント　6・17、18）

やがて私の母も、私たちと同居するようになりました。父の納骨式、毎週の礼拝と、キリスト集会に出席するようになり、主を中心とするおつきあいの中に入れていただき、ともに主イエス様を見上げることができるようになりました。

キリスト集会も人の集まりにちがいありませんが、そこでは人間的な心の働きや人の裏表は効力を失い、主の光と主の愛の明るみに引き出され、主のみこころとお働きだけが現れていくのを



◀奈生子さんと。



▲名古屋の家庭集会で。

見ることができます。私はいつまでも、このような主の働かれるところにいたいと思います。まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。（詩篇　84・10）



▲右槙子さん。

生まれる前から運んでくださった主

藤井 槙子

一九四六年岐阜県可児郡御嵩町に生まれる。御嵩小、向陽中、岐阜県立加納高校音楽科、東京芸術大学音楽部、同大学院卒業。東京理科大非常勤講師。家族は夫保夫さん、長男嘉也さん、長女奈生子さん、次女真奈さん、保夫さんの母玉枝さん。

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ、わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた。わたしは、わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、「わたしはここだ、わたしはここだ。」と言った。（イザヤ　65・1）

私は若い頃読んだ外国の小説の影響で、「神」という存在について考えたり、大学生の時クリスチャンの友人からいっしょに「聖書を読もう」と誘われると参加したりすることはありました。でもそれは、「自分を高める手段として神について考える」という思い上がった心が動機でしたから、まったくなにも分からないまま、いつしか聖書から離れてしまいました。

神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。（ヤコブ　4・6）

「わたし（イエス様）は正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」
（マタイ　9・13）

私は無意識にではありましたが自分は正しい者だと高ぶり、罪人だとへりくだることもなく三十歳過ぎまで生きてきました。大学時代のクラスメートの中に二人のクリスチャンがおられました。その一人が出産後間もなく乳がんのために召された時、どうして神様はこんな悲しいことをなさるのだろうと、ますます神様から遠ざかる思いがしました。その頃はまだ「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。」（イザヤ55・8）という聖書のみことばを知りませんでしたし、召されることの幸せにも思い至りませんでした。

三十歳を過ぎた頃、主人がイエス様を信じ救われました。それまでは、哲学書や文学書を読みあさり、悩める人だった主人が、ある日急に明るくほがらかな人になったのです。でも私は、自分の居心地がよくなったことを「よかった」と思うだけで、主人の心のうちに何が起きたのかを知りたいとは特に思いませんでした。信仰は個人の自由だし、夫婦といえども心の深いところはお互いに干渉してはいけないと思っていました。

ところが、主人が洗礼を受ける日の朝、突然高熱を出したのです。その時「こんな体を全身水につけたら大変なことになる！」と初めて心配になり、ついて行って様子を見よう、場合によっては反対して洗礼をやめてもらわなければ、と思い、真剣な気持ちでいっしょに教会に行きました。それが教会の礼拝に出席する初めての経験でした。洗礼式の様子を見ているうちに、なぜか

「主人はもしこれで死んでも本望なのだろう」という気がしてきて、何も反対できず、洗礼式も最後まで見ていました。それまでは「神様はおられるかもしれないが自分とは関係ない」と思っていたのですが、その日から「自分と神様との関係をはっきりさせなくては」という思いになり、さっそく聖書を買い、教会の入門者クラスにも出席し、イエス様と関係があると思われる本を読みあさる日々が始まりました。その頃は礼拝のメッセージも聖書も、さっぱり分からなかったのですが、ところどころはっとする言葉があり、心が探られる毎日でした。

私はそれまでは「絶対的な価値観などこの世にないのではないか」と考えていたのですが、聖書に次のように書いてあるのを見つけて驚きました。

神の子キリスト・イエスは、「しかり。」と同時に「否。」であるような方ではありません。この方には「しかり。」だけがあるのです。（IIコリント　1・19）

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。（Iコリント　2・9）

「…人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ　3・3）

「心に浮かんだことのないようなものって何だろう、新しく生まれるとはどういうことだろう」と不思議に思い、「三十歳を過ぎた自分が人生の将来に思い描いているものとはまったく違う世界があるのではないか」と思うようになりました。

神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。　（Ⅰヨハネ　1・5）

これを読んで、今まで自分はほんのうす暗い程度だと思っていましたが、実は神を知らないでまっ暗闇の中にいるのではないかと思いました。新約聖書を読み、旧約聖書を読みはじめた頃は夢物語だと思っていたイエス様のことを、「聖書に書いてあるのはすべて事実なのだ」と思うようになりました。

ところが、「イエス様の十字架が自分の罪のためだ」ということが受け取れないのです。聖書を読みはじめて半年ほど過ぎていました。何をしていても、そのことばかり考えていました。「自分は罪人だけれど、そんなにはひどくはない」と言い訳ばかりしたいのです。そんな時、まるでイエス様が私に直接言われたように、次の聖書のみことばが迫ってきました。

「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あたながたは今、『私たちは目が見える。』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」

（ヨハネ　9・41）

涙があふれ、イエス様の前に全面降伏しました。「私は目が見える。私は知ることができる。

私は、私は…」と言っている。まさにそのこと自体が私の罪だったのです。

私は小さい頃から音楽が大好きでしたが、ピアノを習える環境ではなく、やっと中学三年になってからオルガンでバイエルから習い始めましたので、ずいぶん根をつめて練習しました。大学では音楽理論を専攻しましたが、いつも心にゆとりがなく、ただひたすら何かを得たいとがんばっていました。大学院の途中で結婚、出産したので、勉学の道は挫折しましたが、アルバイトとしてやっていたピアノ指導だけは続け、そこでも少しでも指導の成果を上げようとがんばっていました。しかし私は、生徒の上達を熱心に求めているように見えて、実は自分が満足したいだけ、自分が立派になりたいだけのわがままな指導者でした。このことは、イエス様を信じてから気づいたことです。当時の生徒さんたちには、本当に申し訳ないことをしました。自分は、自分は、とがんばり、「自分は目が見える」と自負している高慢の罪をイエス様ははっきり示してくださり、全面降伏した私を赦してくださいました。

それからは、胸のうちに暖かいものがこみあげて、草花を見ても、「ああ、神様がこんなにすばらしいものを造られたのに、なぜ今まで気づかなかったのだろう」と感動したり、聖書の冒頭にある「初めに、神が天と地を創造した。」（創世記1・1）という聖句が熱く心にせまってくるようになりました。

「わたし（イエス様）を信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」（ヨハネ　7・38）

その後十年ほどその教会に集いました。教会では聖歌隊や奏楽や音楽教室などの奉仕をさせていただき、音楽奉仕者としての学びをしました。

しかしその教会では、まず牧師夫妻の間に流れる不協和音に心を痛めることになりました。私は、最初から牧師夫人を学びの長とするグループに出席していましたが、立派な信仰者になりたいという夫人の思いの強さとその強制に、いつも息苦しさを感じていました。一方、牧師は異言やいやしを求める態度を非常に危険視し、教会にそれが入ることを警戒して、信徒にそのための特別な学びの時間を持たせていました。ところが、夫人がその信仰の持ち主だったのです。

その教会で十年ほどたった頃、私は乳がんになりました。それによって夫人の異言やいやしへの態度がはっきりしたのです。手をおいていやしを祈ったり、牧師に内緒で見舞いにこられ、牧師が警戒している類の本を紹介したりしました。(注　異言、いやしの危険性については、「実を結ぶ命」の第三部をお読みください。)。

私は入院、手術ということになって、静かにベッドの上でそれまでのことを振り返った時、牧師夫妻の関係を悩んでいた私の悩みの深さに改めて気づきました。それは幼い頃、両親の不和に心を痛めていた思いと重なっていたのかも知れません。同時にこの悩みを主にゆだねないで自分でかかえこんでしまっていた自分の強情さを主に示されました。「イエス様、私は自分でかかえこんであなたに罪を犯していました。もうゆだねます。このがんと一緒に私の罪をぬぐい去ってください」と祈りました。

実は、乳がんになる数カ月前からキリスト集会発行の証し集「光よあれ」が手に入り、読んで

あわれみによって

古田公人

東京大学教授

京都府出身／藤森小／付属桃山中／桃山高／京都大学農学部卒／妻　道子／子供　三男



私はこれまで順調な人生を送っていると思っていました。人と仕事に恵まれ、上司にお世話いただいた妻にも出会いました。妻とはよく意見の食い違いもありましたが、それも世間一般にあることとして問題ではないと思っていました。自己満足としてキリスト者を自認し教会に通っていましたが、3年ほど前からキリスト集会に集うようになり、自分がどれほど自己中心的で、偽善者であったかを知りました。妻との意見の食い違いも、そのひとつの現われと知りました。「わたし（イエス様）は正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」（マタイ9・13）　自分のありのままの姿を知ったとき、このように語ってくださった主の恵みを自分のものとして受け入れることができました。救いの確信も与えられ、今は喜びでいっぱいです。私がイエス様のところに導かれたのは、上司ご夫婦と妻、そして恩師の奥様を通してでした。主が私のためにはじめからすべてを準備して導いてくださっていたのです。「あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに」（詩篇139・16）

イエス様のものとされて

古田道子

愛媛県出身／美須賀小／美須賀中／今治西高／津田塾大学学芸学部卒／夫　公人／子供　三男

キリスト集会に集うまでの30数年間は、教会生活や無教会派の集会を通して主を求め、主に従いたいと願いつつも、主のみこころを知らずに歩んでいました。「光よあれ」を読み、キリスト集会に集ううちに、結婚以来、心の奥に深くしまい込んでいた執拗なまでの人への不信感、恨み、ひがみなどが示され、「人の心は何よりも陰険で、それは直らない」（エレミヤ17・9）　という自分に苦しくなり、真剣にお祈りしました。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです」（1コリント6・19、20）　心の中にある、自分を責めたてる多くのものから、主はみことばによってその罪の縄目から救い出してくださり、今までに経験したことのない平安を豊かに与えてくださいました。今は主人とともにイエス様のものとされ、主のお約束である息子たちのたましいの救いを楽しみにしています。郷里の両親もベックさんとお話をして主を受け入れ日々喜んでいます。主に心から感謝いたします。

試練について

竹沢　規
東京都出身／中目黒小／化学工業学校卒／妻千穂子／子供　一男／孫　二人
住所　浦和市上木崎6－36－15 〒338
電　048-833-8037
家庭集会 月一回10時半(不定期)、毎第1土曜19時



私は酒も飲まず他人に迷惑もかけず、親子3人で普通の生活をしているので、真面目でよい夫、よい父親だと自負していました。しかし、「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい」(ピリピ2・3、4)　の聖句により、すべて自分中心に考え行動していたことを主から教えられました。

墨汁会社に勤務していたある夏の日、墨汁が腐敗し商品が工場へ返品されてきました。工場責任者の私は、今後返品の量がどのくらい増えるのだろうかと不安がつのり、心配で毎朝早く目覚め体重が減り続けました。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」(1コリント10・13)　家族一同で主に祈りました。この試練を通して、主は確かに約束を守られる、真実な方であることを知りました。

大事なのは新しい創造です

竹沢千穂子
東京都出身／旭小／調布高女卒／夫　規／子供　一男／孫　二人

キリスト集会へ集うきっかけとなりましたのは、主人が死ぬほどの病気を二度もわずらったからでした。最初は分からない事ばかりで重い心で集っていましたが、メッセージを通して私の内には何も良いところがないことを知らされました。主に自分のわがままを告白し救われ、受洗いたしました。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」(ヨハネ3・3)

この度、「ドイツよろこびの集い」に参加させていただき、先に出発されたベックさんご夫婦やご家族の皆さんが夜遅いのに空港まで迎えに来て手を振って待っていてくださいました。またベックさんご夫婦の信仰を応援し、日本の救いのために真剣にお祈りされているドイツの主にある皆さんにもお会いいたしました。ミンヘンさんの妹さんをはじめ、どの方のお顔もとても輝いていらっしゃいました。美しい紅葉の中、バスでいくつかの集会に行きましたが、どこも主の愛に包まれていて、ほんとうに豊かでした。ドイツの主にある皆さん方の愛とお祈りによって、家族が新たにされたという主の恵みに心からに感謝いたしました。

みことばに支えられて

竹沢成一

イディー(株)勤務
東京都出身／上目黒小／新星中／日比谷高二部／城西大学経済学部卒／妻　順子／子供　二男



教会の付属幼稚園に通っていたことから、結婚式もその教会でしました。しばらく礼拝に集っていましたが、十字架の意味も分からないままでした。母の勧めでキリスト集会の軽井沢の「よろこびの集い」に参加し、ベックさんとのお話の中で、イエス様が私の罪のために十字架にかかってくださったことを知りました。尊いイエス様のあがないの死のゆえに罪を赦され救われたことを感謝しました。また、英語の勉強をしたり、税理士の資格を取りたいといろいろ勉強しましたが、結局何も得るものはありませんでした。しかし、主はなによりも、やすらぎの場として大切な家族を与えてくださっています。時として、どうしようもない事が起こったり、社会生活でも多々困難に出会います。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」(詩篇37・5)　「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」(ローマ5・3、4)　みことばに頼ると平安が与えられます。私は日々主に支えられ励まされています。

イエス様の愛に導かれて

竹沢順子

福岡県出身／調布第一小／調布中／青葉学園高等部／東京YMCA学院卒／夫　成一／子供　二男

こんなにも私の内にイエス様が大きく存在していることに神さまの不思議な導きと力を感じます。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです」(エペソ2・4、5)　幼い時から父と母の病気という環境をみじめに思い、反面、二人の祖父を誇る心に満たされないものがありました。結婚生活でも主人への不満、姑問題と、私には幸せはついてこないと思っていました。しかしこれらのことを通して、主は自己中心でごう慢な私の多くの罪を気づかせてくださり、主と出会うことができました。今は主人とともにゆるぎのないイエス様を土台として、ほんとうの夫婦になれたことを実感しています。主人の母との間にも主は介在してくださり、主にある同労者としてともに歩ませていただいています。問題が起きても家族全員で祈ることができ、イエス様が手をたずさえて支えてくださっている幸せに感謝しています。「主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる」(詩篇121・8)



主がしてくださいます

芳竹弥生子
イディー(株)勤務
東京都出身／石神井小／自由学園女子部普通科
／同学園女子部高等科／自由学園女子学部卒

家族が主のみもとにひとつとされたのは約1年前です。それまで母と私は日曜日になると教会へ行き、父は我関せずという状態が10数年続いていました。私は小学3年から教会へ行き始め、高校1年で滴礼を受けていましたが、主の道とは正反対の歩みをしていました。自分さえ満足できればそれでいいと思っていましたから、両親に「はい」とすなおに従うことがまったくないという状態でした。そのような私をも、主はほんとうに一方的な愛とあわれみによって、今も生きて働かれていることを体験的に教えてくださいました。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです」(ピリピ2・13)　主に従いたいと思うこともできない者ですが、祈り求めると主は最善の方法で答えてくださいます。みことばに従うと豊かに祝福してくださいます。「子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです」(コロサイ3・20)　私にできないことも私の内で働いてくださる主が行わせてくださいます。日々主に喜ばれる者へと変えられますよう心から願っています。

主の不思議な導き

芳竹勝也

ホクシー(株)勤務

北海道出身／花園小／東山中／潮陵高定時制／国学院大学政経学部二部卒／妻 麗子／子供 一女

私は信仰にはまったく関心も興味もありませんでした。自分とは関係がないし、クリスチャンでなくても自分のほうがずっと人間らしく生きて行ける自信がありました。妻が吉祥寺キリスト集会に集うようになり、我が家は一変しました。妻が突然「お父さんが早く救われてほしい。それだけがすべてです」と執拗に言い出し、いつもイエス様の話ばかり聞かされてうんざりしていました。92年の夏に軽井沢での「よろこびの集い」に運転手として仕方がなくついて行きました。その後、何度かの「よろこびの集い」でのメッセージ、聖歌、語り合いを通して、今考えると不思議なことですが、いつの間にか主のみ前に立たされ、救いの戸を叩く者と変えられていました。主がすべてをご支配しておられる事、私のような者の罪のために身代わりとなられ十字架にかかってくださったことを知り、93年の夏、罪を悔い改め、主に従って行く決心をしました。「神は言われます。『わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた』(2コリント6・2) 今はすべてが新しく変えられ、喜びと平安に満たされ、心から主に感謝しております。

主のものとされて

芳竹麗子

沖縄県出身／平一小／平良中／宮古高／東京声専卒／同オペラ研究科中退／夫 勝也／子供 一女

教会を訪ねてから28年、ずっと主を信じ歩んできたつもりでした。しかし92年にキリスト集会の礼拝に出席し、主が生きておられ聖書のすべてが真実であると知らされました。私は真の救いを知らないで罪の中に留まっている者でした。自分の汚さ、罪深さを示され、「ごめんなさい」と泣き叫ぶ思いの日々が続くなか、主から罪の赦しと救いの確信を与えられ、心から感謝し喜びと平安に満たされました。同時に主人の救いと娘の真の生まれ変わりを真剣に祈りました。私のために祈り続けてくださった集会の皆さんは家族のためにも祈ってくださり、その姿はまるで主のみ前にひとつになっているようでした。我が家はあっという間に主のものとされました。また、誰にも頭を下げることのなかった頑固でわがままな父が主に赦しを願い、平安な顔に変えられた姿を目の前にした時、ただ主を恐れました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」「それから、…全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ」(使徒16・31、34) 主のものとされている事実に感謝し、「我が家と我は主に仕えん」と心から祈るばかりです。



主のみ腕に抱えられて

名須川知子

兵庫教育大学助教授

千葉県出身／稲毛第二小／神戸市立山手中／芦屋高／お茶の水女子大学教育学部／同大学大学院修士課程終了

イエス様を知るまでの私は、あらゆることが自分の思い通りにいき、ごう慢そのものでした。次第に人間関係が難しくなり、また理由もなく不安に襲われたりするようになりました。偽善による自己嫌悪と自己過剰のはざまで悩む日々が続きました。そのような時、「光よあれ」を読み福音にふれ、主は嫌な私でもありのままの状態で受け入れてくださり、悪い私のすべて身代わりになって十字架にかかって血を流され、私の罪を赦してくださったという事実を知りました。このことを「真実である」と信じた瞬間、肩の荷を降ろしたような、ホッとした思いを味わいました。

今でも環境は変わりませんが、目に見えるものや自分自身を見るのではなく、主を見上げる時、ほんとうに力強く主がみ腕で支え抱えてくださっていることを確信でき、平安が与えられます。仕事も主が与えてくださったものとして、みこころにそって少しでも主のお役に立てられますようにと願っています。また、私の救いの背後には、10年以上も毎晩祈り続けてくださった中学時代の友人の存在がありました。私も周囲の方々の救いを祈り続けていきたいと思います。

主は見捨て給わず

名須川　淳
国土道路(株)勤務
東京都出身／桜木小／新京一中／旅順工大予科／四高／九州大工学部卒／妻　一子／子供　一男二女

1945年8月14日満洲新京より安東への疎開列車内で当時4歳の弟が召天した。翌15日に関東旅順において終戦。ソ連の戦車隊の進駐と中国の混乱の中を身一つで避難。私の人生は一夜にして一変した。今まで不動のもの、永遠に続くものと信じていた全ては消滅した。いっさいは空の空、すべては空。明日をもわからぬ日々の連続であったが、幸いにも学業は続けることができ、人生について深く考える機会を与えられた。そのような時、熱心な無教会のキリスト者である恩師の指導を受けカール・ヒルティから聖書へと導いていただいた。私と妻は恩師の司式により家庭集会の皆さんの祝福を受けて主のみ前で結婚し、家庭生活は主によって始められた。しかし、いつしか主から離れ、ひたすら仕事に没入していたある時、主は私を砕いた。2年の入院となり、あわてて聖書を求めたが、その場限りであった。しかし主は私を見放さず、長女を通してキリスト集会に導かれ、ふたたび主を覚える日をもつことができた。このたびは人生の転機に当たりドイツにおいて多くの主にある皆さんと共に主の栄光をたたえる恵みを与えられたことを心から感謝している。

主にふたたびまみえて

名須川一子

福岡県出身／冷泉小／筑紫高女卒／夫　淳／子供　一男二女

45年前のこと、主人から聖書のみことばが書かれた手紙が毎日届きました。聖書との出会いでした。無教会の集会に集い始め、1954年に結婚し聖書に2人の名前を記しました。3人の子供に恵まれましたが、18回もの転勤ですっかり聖書から離れてしまいました。ある日突然知子からハワイで洗礼を受けたことを聞き、驚きました。主のご栄光を感じました。その1年後の4月22日、沖縄の海で主人とともに洗礼を受けました。その日はすごい嵐でとても無理だろうと思いながら礼拝をしている時、奇蹟が起こりました。晴れたのです。視界がぱっと開け美しい光景です。11人の洗礼が終わるとすぐにまた雨が降ってきました。喜びに満ちあふれました。その日の感動は一生忘れられません。それからしばらくして、私は病に倒れ、孤独のどん底に突き落とされ死の淵に立たされました。集会の皆さん方がお見舞いに来てくださり主の恵みを感じました。「イエス様、みこころでしたならば結婚記念日の日に退院させてください」と祈り続けました。医師は「無理だろう」と言っていましたが、不思議なことにその日に退院できました。主のご愛に心から感謝しました。

恵みとまことに満ちた主

崎浜秀安

那覇市水道局勤務
沖縄県出身／伊江小・中／沖縄高／琉球大学
法政科卒／妻　桂子／子供　一男一女
住所　沖縄県那覇市三原3-9-29 〒902
電　098-895-0007　家庭集会 不定期



「影のように過ごすむなしいつかのまの人生で、…」(伝道者6・12)　いかに生きるべきかも知らず、闇の中をさまよっていた私を主はあわれんでくださって、救いへと導いてくださいました。それまではこの世の目に見えるものがすべてであり、その中に人生の意義や目的があると思い、いろいろなものを追及し、それなりのものを得ましたが、それでも心のむなしさをどうすることもできず、一人でもがいていました。

「わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません」(ヨハネ6・35)　とイエス様は約束してくださっている通りに、飢え渇いていた私の心を今までにない平安と喜びで満たしてくださり、生きる希望を持つ者へとしてくださいました。また自分の状態や罪もよく分からない者ですが、イエス様は私の内側に何一つ良いものがないということを教えてくださり、心の重荷からも解放してくださいました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハネ14・6)　と言われる主イエス様こそが私の生きる希望であり、すべての問題を解決してくださる救い主です。今も生きておられる主に感謝します。

主の導きに感謝する

崎浜桂子

沖縄県出身／開南小／上ノ山中・東京池袋中／巣鴨女子商業高等学校卒／夫　秀安／子供　一男一女

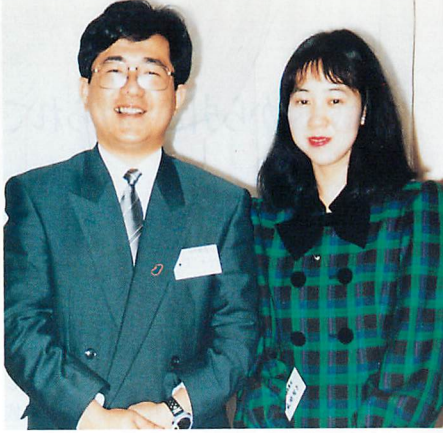
「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです」(1ペテロ5・7)　イエス様に出会う前の私はどんなにつらく悲しいことや悩みも、いずれは時が解決してくれるのだから、我慢し耐えれば、いつかきっとよい事があるという思いでいろいろな試練を乗り越えてきたつもりでしたが、真に満たされた思いはなく、時々心のむなしさにどうしようもなく厭世的になったりしました。今はイエス様にめぐり逢い、家族そろって礼拝に参加できる喜びをかみしめています。

自我が強く、信仰の歩みの遅い者ですが、どんな場合においてもみことばを通して心が安らぐのを覚え、日々イエス様の愛に感謝しております。勤続30年目にしてＮＴＴを退職することについても、いろいろ不安もありましたが、イエス様におゆだねし平安をいただいております。日々悔い改め感謝し喜び、主イエス様から目を離さないで歩めますように。そして一人でも多くの方がイエス様に出会われますようにお祈りいたします。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」(マタイ22・37)

AでありΩである主

歳川譲治

コマツ電子金属(株)勤務
宮崎県出身／飯野小／飯野中／小林高／東海大学電気工学科卒／愛妻　智子



「神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。『わたしはアルファであり、オメガである』」(黙示1・8)　私は2年前までは主を知らず、企業戦士として頑張っていました。しかし主は職場の人間関係の問題から私を悩む者と変えてくださり、主を知るようにしてくださいました。そして、兄雅洋の妻、美也子と実の姉の平山悦子も前後して救ってくださいました。残るは父と兄だけと思っていましたが、その兄ががんと診断されました。集会の皆さんの多くのお祈りと家族の祈りに主は答えてくださり、兄は主を受け入れ、天国への確かな希望を得ました。今にして思うと主は兄を天国に召す前に、まず周りの弱い者をさきに救ってくださったという憐れみに感謝しています。そのうえ主は愚かで弱い私に、助け手の妻をも与えてくださいました。それも兄の病気が発見される2ヵ月前に私たちは出会い、婚約式の当日に義理の姉が受洗、結婚式の翌日に兄が受洗するという恵みをいただきました。主は時を越え、人間の思いをはるかに越え、私たち哀れな人間を永遠の道へと歩ませてくださっています。

主に道を示されて

歳川智子

神奈川県出身／上野小／大住中／高浜高／国士舘短大国文科卒／夫　譲治

「自分の力で生きていこう」。そんな思いのわがままで強情だった私の夢が崩れたのは、20歳の時でした。そして、不思議な考えてもいなかった方法で、イエス様のみもとにたどり着き、生きるほんとうの目的を見つけることができました。亡くなった父への思いもイエス様にゆだねることができ、天国で再会できる希望を与えられました。「聖書はこう言っています。『彼(イエス様)に信頼する者は、失望させられることがない』」(ローマ10・11)　結婚についても、「同じ土台に立つ人を与えてください」と祈り続けた結果、主はまったく思いがけなく、遠く九州の地に夫となる人を備えてくださっていました。結婚後、主人の実の兄ががんで天国に召されましたが、その闘病生活を通してイエス様の豊かな恵みとみわざを見せていただき、天国が近いということを実感として受けとめています。　まだスタートしたばかりのクリスチャンホームですが、主が私たちに与えてくださった恵みをまわりの方々に伝えていきたいと心から願っています。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」(詩篇37・5)

深い淵から引き上げられて

久田　博
(株)富士銀行勤務
香川県出身／神子畑小／常盤中／浦和高／慶応大学経済学部卒／妻　倫子／子供　二男



人は苦しみの真っ只中にある時「なぜ、どうして自分だけがこんな目に会うのだろうか」と叫び続けます。今から約7年前、私は仕事と人間関係の悩みから強度のうつ病になりました。自分のことしか考えられず、友人にも家族にさえも頼ることができず、孤独と絶望の中で1年余りの苦しみの日々を過ごしました。自分は何も悪くないのに「なぜ」という被害者意識と同時に、一方で妻や子供たちに迷惑ばかりかけて何と情けなく不甲斐ない人間なのだろうと自分を絶えず責めていました。人生に何の意味も見い出せず、とめどもなく押し寄せる不安の中で睡眠薬で眠る時、このまま二度と目が覚めないようにと何度願ったか知れません。「主ご自身がこう言われるのです。『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない』」(ヘブル13・5)　心に深くしみ入るみことばでした。孤独感にさいなまれていた私に、この力強いみことばが計り知れないほどの大きな慰めと励ましになりました。苦しみの原因が自分の罪にあることも知らないで、滅びに向かっていた者を深い淵より引き上げてくださったイエス様に心から感謝しています。

限りなき神の愛

久田倫子
大阪府出身／インターナショナルスクール・ハンブルグ小／神戸松蔭女子学院中／イングリッシュ・スクール・ウィーン高／上智大学ドイツ語学科卒／夫　博／子供　二男

いかなる困難も自分の努力で乗り越えてきたことを私は誇りに思っていました。しかし、夫のために何もできない無力さを知り、限界にぶつかりました。キリスト集会に集い、頑張らないで神様にすべてをゆだねていればいいのだと知らされた時、とても楽になりました。主人が元気になってくれることだけを願い集っていましたが、そのうちに、イエス様が人間の罪を赦すために十字架上で犠牲になってくださったというみわざが私自身のためであったということに目が開かれました。イエス様は私の罪深さを日々の子育てのなかではっきりと見せてくださいました。子供のためによかれと思ってしていることも、大部分は結局自分のエゴから出ていること、そして子供を支配しようとする自分の姿に気づかされました。神様の無限の愛、無償の愛、そして無条件の愛を知った時、私の中に愛のひとかけらもないことが分かりました。しかし、自分の力でできないことも、主を信頼して祈り続ければ、主が成し遂げてくださることを確信します。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」(1テサロニケ5・16〜18)

「自分主義」の破局から

小島繁一
神戸国際ビジネス学院講師／
元産経新聞論説委員
大阪府出身／広教小／旧制布施中第四高／
東京大学文学部卒／妻　幸子／子供　二女



「私だけは特別だ」(イザヤ47・10)　物心ついた頃から「そうありたい。あってほしい」と思っていました。偏屈と呼ばれることさえ好んでいました。学生時代も、新聞記者になってからも、カドのある人間こそが意味があると、人の心を傷つけることに満足感を持っていました。一方、自分が傷つくことは極度に恐れ避けていました。まさに、「夢見る者」(ユダ8)であり、「自分主義」のかたまりでした。

33歳でノイローゼになりました。そのときは信仰ではなく、妻を与えられました。挫折をしても「自分主義」を捨てるどころか、育て続けました。それでいてまた傷つくことを恐れ、現実から逃避していました。55歳で定年を迎えたあとも、「自分主義」で生きるつもりでした。しかしその後、娘たちの問題を通して試練が与えられ、3年ほどの間に、家庭の状態はどんどん悪くなっていきました。私の生き方、「自分主義」がすべての原因だと明らかにされました。

「自分主義」の完全な破局にゆき当たったとき、私は主の呼びかけを受け、主のみもとに重荷を下ろし、涙を流したのです。真の平安がそこにありました。

主に愛されて

小島幸子
英語塾教師
大阪府出身／海老江東小／下福島中／市岡高／
関西学院大学文学部卒／夫　繁一／子供　二女

がんばり屋の私は「ファイト!」をモットーに生き、それなりの満足感を得ていました。しかし、完全に打ちのめされたとき、ベックさんにお会いし、「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(1ヨハネ1・9)　の聖句を示され、「イエス様は全部知っているよ。幸子が好きだから。『導いてください。赦してください』と祈ればいいのだよ」と言われました。1990年の浜名湖の「よろこびの集い」でした。とても気持ちが楽になりました。そして翌日の聖日5月20日、私の51歳の誕生日に受洗へと導かれました。質実剛健の私が主にゆだねることを知りました。「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう」(エレミヤ33・3)　日々主の奇しい恵みに触れ、「イエス様、大好き」と言いながら歩み、与えられている仕事にも感謝しています。時には、感謝できないことにも出会いますが、「イエス様、憐れんでください」と祈ります。主は必ず助けてくださると確信しています。

人生の大変化

宮西清士
飯山コンクリート(有)勤務
香川県出身／香大付属小／同付属中／坂出高卒／妻　貴美子／子供　一男一女／孫　一人



職業軍人であった父親の死にざまに共鳴し、記憶にない父親像を偶像として、幼い頃から、淋しい時、悲しい時の糧として生きてきました。成長するにつれ、偶像と自分が一体化してしまい、人生33年説を美徳として唱え、自分の感性に陶酔し、自分の肉欲の中に生きる者となっていました。しかも悪いことに、それらを覆い隠すために、内面と外面のまったく異なった人間として、自分を神として生きてきました。そのような私に主イエス様は、突然自意識過剰からくる対人恐怖症を与えられました。そして豊かな憐れみと、限りない愛を持って望んでくださり、主の大庭へと救い出してくださいました。主イエス様との出会いにより、罪に汚れた古い自分と決別することができ、日々喜びと希望と感謝に満ちた者と変えられました。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」(2コリント5・17)　愚かな偽善者として無目的な人生に死んでいた私を、愛と恵みによって新しく生かしてくださり、永遠のいのちをも与えてくださった主に感謝いたします。

主の恵み

宮西貴美子
(株)岡本四国出張所勤務
香川県出身／栗熊小／久万玉中／明善高卒／夫　清士／子供　一男一女／孫　一人

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ11・28)　私たちの家庭生活は光のない暗闇でした。しかし、長男の嫁の家が祖父の代からのクリスチャンであり、その嫁を通して、イエス様が私たち家族に呼びかけて救い出してくださいました。ほんとうに短期間で私たち家族は主イエス様を信じるクリスチャンホームへと変えられました。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」(詩篇119・71)　愛もなく自己中心に生きてきた私の罪が示され、すなおに主の前に悔い改めることができました。イエス様の十字架の死は私の罪が解決されるための唯一の道でした。罪の赦しと永遠のいのちをも与えられました。主はいつも私とともにいてくださり、苦しみも痛みもともに担ってくださることを信じていますので、何の不安もなく平安で満たされた日々を過ごすことができます。「彼(イエス様)に信頼する者は、失望させられることがない」(ローマ10・11)　イエス様の豊かな愛と恵みに心から感謝しています。

重荷を主にゆだねて

長尾英夫
時久建設(株)勤務
高知県出身／野市小／野市中／高知工業高／
妻　康子／子供　一女



私がイエス様を知ったのは、息子の病気を通してでした。それまでまがりなりにも世間並みの生活をしていた私たちにとって、まったく予期しないことが4年前に起こりました。当時21歳の長男のがんの発病でした。健康には十分注意していたはずですが、最悪の事態の発生でした。とにかく何かに頼らざるを得ませんでした。最初は医者に頼り、次の段階では神仏に頼るようになり、神仏を容認する自分は生まれながらに日本人であると実感もしたのでした。しかし、病状の進行にともない、「何か違う、何かおかしい」という思いが生じてきました。その頃、以前からの知人であった故岡本基子さんより紹介されたのが、キリスト集会と聖書でした。初めて見る聖書なるものは、むずかしくて何も理解できませんでした。しかし、ここには、すべてのことが凝縮された結論とそれに対する唯一の解決が示されているように思えました。偶像崇拝から脱却した私は、これからも起こるであろういろいろな問題も、重荷を主イエス様にゆだねることにより、安心して生きてゆくことができるであろうと確信します。私は真理そのものである主イエス様を信頼します。

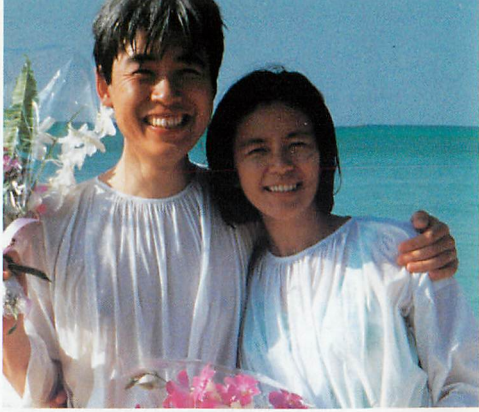
ともにいてくださる主

長尾康子
愛媛県出身／北条小／北温中／松山女子商業高
／夫　英夫／子供　一女

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」(1コリント10·13)　1991年5月22日、闘病生活9ヵ月の末の息子の死、覚悟していたとはいえことばでは言い表すことのできない悪夢のような苦しい毎日でした。この時、最初の聖句にどれほど支えられたことでしょう。当時は、息子のいる天国へ行くためにイエス様を信じなくてはと自分に言い聞かせていましたが、そんな愚かな私をも、イエス様は忍耐強く待っていて愛してくださいました。92年11月、主人とともに新しくイエス様に従う者とさせていただきました。淋しさは残っていますが、天国で再び会える希望があり、ほんとうに感謝です。私と娘の病気、商売の廃業と次々と起こる生活の変化も、主はすべて平安のうちに守り導いてくださいます。「私たちは、火の中を通り、水の中を通りました。しかし、あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました」(詩篇66·12)

100パーセントの犯罪人

後藤政彦
富士重工(株)勤務
東京都出身／玉堤小／尾山台中／久我山高／
国学院大学法学部卒／妻　緑



私の心の中には、解決ができず、どうしても許せない部分がありました。しかし、これらが自分自身の罪からと知らされたのは、次のみことばによってです。「義人はいない。ひとりもいない」(ローマ3・10)　なぜ、今まで悩み迷っていたのかが分かりました。私は(殺人する者、不品行の者、盗み、偽証する者、など…)100パーセントの犯罪人だったのです。

イエス様はさらに私に語りかけてくださいました。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ23・34)　私がイエス様を十字架にかけ、唾を吐きかけていました。「イエス様、すみませんでした。赦してください。でもなぜ私みたいな者のために十字架にかかられたのですか。痛いでしょう。…苦しいでしょう…」。部屋の中で独り初めて主に祈り、泣きました。

今だに、なぜ私のような者が、主の救いにあずかれたのか分かりません。でもやがてイエス様とお会いする時、すべてが明らかにされることと思います。主のご再臨が近い今、一人でも多くの方が生きた主イエス様と出会うことができますように望んでいます。

罪赦されて

後藤　緑
東京都出身／藤枝小／光塩女子学院中／同高／
白百合女子大学文学部卒／夫　政彦

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」(ローマ6・23)

最初の結婚に失敗した私は絶望していました。人生とは何か、結婚とは何かといろいろ考えるようになりました。もし、また結婚できるのであれば、同じ方向に歩んでいける人と人生をともにしたいと思うようになりました。カトリック系の学校で育ったこともあり、神様はいらっしゃると信じていましたが、イエス様とは出会ってはいませんでした。そんな時、クリスチャンである現在の主人との出会いがきっかけで主を受け入れ、結婚しました。しかし、私にとってのイエス様は「全人類の救い主」という漠然としたものでした。その後、吉祥寺キリスト集会に導かれ、聖書から離婚が罪であることを知り、大変苦しみました。その時、イエス様の十字架が私に迫ってきました。この私の罪のために十字架にかかられ、このわがままな私のために身代わりに死んでくださったイエス様、それだけではなく、私の罪を赦し永遠のいのちさえも与えてくださった主イエス様に感謝の心でいっぱいです。

神の祝福

兵藤勝義
(株)ショーエー勤務
栃木県出身／天明小／佐野西中／佐野高／
千葉大学人文学部卒／妻　幸江／子供　一女



「あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない」(創世記3・17)　社会人一年生であった私は、「お金が命より大切」と考える人たちの財産を集めるノルマに心蝕まれる日々を送っていました。心を削ってまでもしなければならない仕事とはいったい何なのだろう、と悶々とする日々でした。数年後、キリスト集会に導かれ、主の光の一端に触れました。「私の一生は、あなたの前では、ないのも同然です。まことに、人はみな、盛んなときでも、全くむなしいものです。主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです」(詩篇39・5、7)　苦しんで食を得なければならないこの世の生活にあっても、主を知らないでいたそむきの罪を主に告白することを通して、主は私に豊かな恵みを与えてくださいました。

「あなたは、自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。あなたの妻は、あなたの家の奥にいて、豊かに実を結ぶぶどうの木のようだ。あなたの子らは、あなたの食卓を囲んで、オリーブの木を囲む若木のようだ。見よ。主を恐れる人は、確かに、このように祝福を受ける」(詩篇128・2～4)

主は私の羊飼い

兵藤幸江
東京都出身／明正小／実践女子学園中／同学
園高／実践女子大学国文学科中退／日本ジャーナリスト専門学校卒／夫　勝義／子供　一女

18歳の時、私は初めてキリスト集会へ導かれました。当時この集会に集っていた従姉妹に誘われ、一度だけならという気持ちでした。十代の私にとって宗教は必要ではありませんでした。ところが集会に参加して、たいへん心をひかれるものがありました。何か今までとは違う、今まで見たことのない穏やかさが集会の人たちに感じられました。また、イエス様を愛することと、キリスト教という宗教に入信することは同じではないことを聞き、目には見えないけれど、とても大切な世界が存在するのではないかと感じました。

その時、私はイエス様とお会いするために、たった一つだけ、小さな一歩ですがイエス様の方へ向かって歩み出しました。それは心の中で「私は目に見えない神様を信じることなどできません。しかし、もし神様がほんとうにおられるのならお会いしたいです。どうか私にご自身を現わしてください」と祈ったことです。そのような私にイエス様はこの15年間、「わたしこそ神、主である。わたしはあなたを愛している」と語り続けてくださっています。天の御国でイエス様にお会いできる日を楽しみにしています。

神に愛されている実感

小野澤克実
(株)内田洋行勤務
東京都出身／二葉小／両国中／巣鴨高／青山学院大学経済学部卒／妻　潤子



「もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。私はあなたの戒めを決して忘れません。それによって、あなたは私を生かしてくださったからです」(詩篇119・92、93)　今年の1月2日、私の受洗の時に妻の潤子が読んでくれた聖句です。私たちは1983年に結婚しましたが、3年後に離婚し、そして、昨年7月に想像もつかなかった方法で7年振りに再会しました。そしてこの一年、様々な試練や出来事を通して主に愛され、9月に再び入籍するように導かれ、主にある夫婦として新しいいのちを吹き込まれて歩み出すことができました。私たちのためにずっと祈ってくださっていた妻の叔母は私たちの離婚後の2年後にがんで天に召されましたが、叔母の祈りは、昨年白血病で余命がないその叔父が私たちの再会を促したことによって聞かれ成就されました。その後、叔父が天に召されたこと、そしてその3ヵ月後に妻の父が突然天に召されたことを通して「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」(ヨハネ12・24)　を実感したのです。

主はいのちと喜びの泉

小野澤潤子
東京都出身／永福小／桐朋女子中／桐朋女子高／青山学院女子短大卒／夫　克実

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」(マタイ5・4)　かつての私は結婚生活につまずき、何のために生きているのかわからず、人も自分も愛せない苦しみと暗闇の中にいました。生きるほんとうの目的を必死に求めていた時、この聖句が私を捕らえました。よいところもないわがままな私をそのまま愛してくださり、十字架上で血を流して私の罪を贖ってくださったイエス様に出会った時、感謝と喜びに満たされて新しい人生を歩む者となりました。主は私たちの日々の生活の小さな事もすべて支え導いてくださるお方で、生きて働いておられます。主のあわれみと集会の皆さんのお祈りによって、私は主と主人の前に悔い改めへと導かれて、夫もイエス様を信じて同じ土台に立つ夫婦となる恵みをいただきました。

人間の思いをはるかに越えた主とともに歩む人生は、何ごとにも変えられない喜びです。一人でも多くの方々がこの事を体験され、豊かな人生を見い出していただきたいと心より願います。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです」(1ペテロ5・7)

イエス様の平安

石塚稔成
埼玉県立川越高校勤務
北海道出身／府中第二小／府中第一中／三鷹高／東京理科大学理学部卒／妻　優子

劣等感が強く何をするにも自信がなく、特に就職してからは毎日が不安と悩みの連続でした。肉体的にも精神的にも疲れ果て、これから先こんな自分でどのように将来に向かっていったらよいのかまったくわからず、孤独と不安と恐れでいっぱいでした。

そのような中から、「イエス様、助けてください」と心から叫んだ時、イエス様はあわれんでくださり、「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ41・10)という聖句をもってイエス様の平安と希望を私に与えてくださいました。



また、イエス様は神の御子であられる方なのに十字架の死と復活を経験してくださり、私の最も根本的な問題である罪をも解決してくださいました。私のために血を流されたイエス様はその義の右の手で私を守り、「恐れるな」と語りかけてくださる全知全能の主です。

「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです」(1ペテロ2・25)

イエス様の十字架

石塚優子
山梨県出身／泉西小／泉中／峡北高／日本大学理工学部卒／夫　稔成

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました」(1ペテロ2・24)

私は今まで「罪」について真剣に考えたことはありませんでしたが、イエス様の十字架を知った時から、イエス様の十字架に対してどのように答えたらよいのか、目に見えないイエス様の十字架の前に、自分自身を悩ますようになりました。

「私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです」(ピリピ3・18)　この聖句に出会った時、パウロが涙をもってまでも今の私にイエス様の十字架を提供しているように思え、イエス様の十字架を受け入れる決心をしました。

その後の歩みの中で、私はほんとうに不真実な者で罪を持つ「罪人」であることを示され、こんな不敬虔な者のために、ご自分のいのちさえもおしまずに十字架にかかってくださったイエス様の圧倒的な愛を知り、イエス様の私に対する愛と十字架に心から感謝しました。イエス様ありがとうございます。「私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう」(詩篇116・13)



新しい人生と喜び

杉山　明

カルテック・マシナリー・コーポ代表取締役
東京都出身／精華小／明治学院中／同学院高／明治学院大学経済学部卒／妻　澄子／子供 一男一女
住所　40 Via Capri, Rancho Palos Verdes
CA90274 USA　電 310-377-6850
礼拝、家庭集会　毎第1・3・5日曜10時半

「もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護してくださる方があります。それは、義なるイエス・キリストです」（1ヨハネ2・1）

アメリカンドリームを求めて20年、この世の欲望を追い求め、この世とがっちりと手を握りながら、インディアンダンスを踊っていた高慢な私の価値観、人生観を180度変えられたお方、真の喜びとは何かを教えてくださったお方、そして、私を罪から洗いきよめてくださったお方、この方こそ、私の罪のために十字架にかかってくださった主イエス・キリストです。この主の救いを主の一方的な慈愛により知り、受け入れた時、今までには考えられない平安と希望がもたらされました。高慢で自分勝手な私が主に祈り、主に頼り、主を見上げて送る新しい人生を歩めるようになったことは、とうてい考えられることではありません。それは、月2回日本から来られるキリスト集会のメッセンジャーの方々や、また、「ロサンゼルスよろこびの集い」に参加された皆さんを通して主が成されたみ業です。「主をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。これを、全世界に知らせよ」（イザヤ12・5）

イエス様のあわれみ

杉山澄子

東京都出身／三谷小／川村学園中／同学園高／川村学園短期大学卒／夫　明／子供　一男一女

母がクリスチャンだったため、私は幼い頃から時々教会に行き、イエス様のお話は聞いていました。しかし、イエス様の救いを求めることもなく苦労知らずのまま楽しく青春時代を過ごしてきました。ほとんどの問題は一生懸命頑張れば解決できると思い、自己中心の生き方でした。ところが結婚後、長男の病気、夫婦の問題と大きな試練に出会いました。私はあらゆる方法で頑張りました。結果は肉体的にも、精神的にも疲れ果て、自分では何もできない哀れな弱い者であることに気づかせていただきました。「助けてください。イエス様」と必死で呼び求めました。主は苦しみの中にいた私たち家族をあわれみをもって救いへと導いてくださいました。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです」（詩篇23・4）　今までの頑張り人生から、唯一の助け主であられるイエス様におゆだねしてお祈りができる毎日に変えられたことはほんとうに感謝です。「主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです」（ヤコブ5・11）

オタワ・ニューヨーク十字架の旅

井出和雄

ベル・ノーザン・リサーチ（カナダ）勤務
山梨県出身／船津小／河口湖南中／沼津工業高専卒／妻　智子／子供　一男一女
住所 197 Equestrian dr, Kanata Ontario, K2M 1K7, Canada　電 613-591-0654　家庭集会 不定期



10時間のドライブを要して、自分の意思とは関係なく参加した「ニューヨークよろこびの集い」で「聖霊きたれり」を賛美している時、自然に涙があふれ出てきて、それをどうしても押さえる事ができませんでした。意識的に聖書とイエス様から遠ざかろうとしていた自分にとって、この一夜は、まさに人生の一大転機となりました。主はこの集いを通して、私を暗闇から救い出してくださったのです。それまでの私は自分の努力によってのみ、心の満たしが得られるものと信じ込んでいました。その結果として私の人生は思い煩いの連続で心の平安とはほど遠い生活をしていました。

この集いでの男の人たちの祈りを聞いているうちに、私はかたくなな心を持っており、自分の弱さを認められずに悪あがきをしている自分を知りました。そして、主はこのような罪深い私を憐れんでくださり、次の日には洗礼にまで導いてくださいました。それから私たち家族は主の喜びと平安に満ちて私の罪がつけられた主の十字架を持って帰途に着いたのでした。「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」（1コリント1・21）

差し伸べられた御手

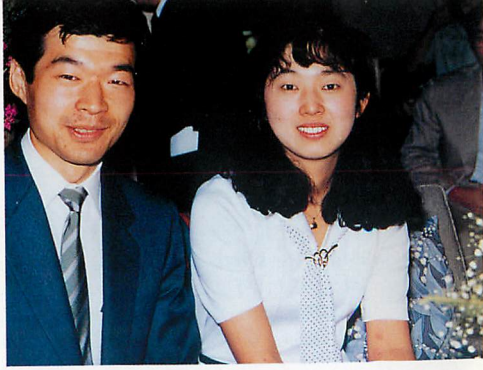
井出智子

北海道出身／広陵小／北星中／南高／東海大学工芸短大卒／夫　和雄／子供　一男一女

「私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます」（詩篇139・9、10）
互いの自我が衝突するだけで少しも歩みよれない夫との関係、今後もカナダで暮らし続けることへの漠然とした不安、思うようにならない言葉や人との関係にいらだちながら、見つからない出口を手探りしていました。そんな時、父の訃報で6年ぶりに日本へ帰り、すでにキリスト集会に集っていた友人との再会を通してイエス様に出会いました。自己愛に凝り固まった、夫も子供たちも心から愛せない自分の醜い罪を示され、情けなくて涙が止まらなくなった時、イエス様の十字架がこの誰をも愛せない私のためだったと知らされました。様々な誘惑や有形無形の偶像が蔓延しているこの時代にあって、すんなり唯一誠の神への信仰を与えられたことは、日本を遠く離れて暮らしている私にとって奇蹟でした。自我の束縛から解き放され、ことばに尽くせぬ喜びと平安のうちに、主にあって新たな歩みをさせていただいています。光を求めて闇の中にさすらっていた私を、イエス様の御手がしっかり捕らえてくださいました。

しかし、私は主を仰ぎ見る

岩本秀造
(株)日立製作所勤務
東京都出身／大泉第一小／八坂中／井草高／
中央大学商学部卒／妻　範子



「そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう」(ハバクク3・17、18)

結婚が決まる過程の中、子供の頃に患った病気が原因で、ほとんど子供が与えられる可能性がないとわかったある夜、絶望と悲嘆で真っ暗闇の心の中にこの聖句が光のように差し込み、なぜか涙が止まりませんでした。自分ではどうしようもできない現実に、いかに自分という存在がちっぽけで哀れな存在かがわかりました。同時に、イエス様がこの私のために十字架にかかってくださり、私の罪のために死んでよみがえってくださったことも確信し、心の深いところでイエス様に救われたことを体験しました。結婚が決まり、主はその時、私たちに「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」(2コリント12・9)の聖句を与えてくださり、改めて主がすべてのことに働かれ、守り導いてくださったことに感謝しました。

新しい歌を主に歌え

岩本範子
長野県出身／川田小／若穂中／長野西高／
信州大学教育学部卒／夫　秀造

「良い人になろう」と努力の道を歩んでいた私でしたが、人のする事は自己愛の偽善でしかないという人間の限界に気づかされ悩むようになりました。「もし、死で終わりなら、なぜ人は孤独な競争をひたすら死に向かって続けていくのだろう」と人生がむなしく思えました。「義人はいない。ひとりもいない」(ローマ3・10)「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」(マタイ5・4)「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません」(ヨハネ6・37)　みことばが闇の中を歩んでいた私の心を照らしました。そして、イエス様は人間の自己愛からくるわがままを赦すために十字架の上で尊い血を流され、死んで復活された神ご自身である事を、事実として信じ受け入れました。そうしたら、不思議なことに、悲しみが賛美に変えられ、私の内に新しい歌が与えられました。私は相変わらずどうしようもない者ですが、イエス様はいつもともにいて祈りに答えてくださいます。主人をはじめ両親や友人、そして天国ではもっと多くの方々と新しい歌を心ひとつにして歌える幸いを感謝せずにはいられません。「主にだけ栄光あれ」と。

すべてを神にゆだねよ

鈴木俊雄

TAC Inc. 勤務
愛知県出身／八事小／川名中／千種高／中央大学理工学部卒／妻　幸子／子供　二男一女



「いっさい神にゆだねなさい」(1ペテロ5・7)イエス様との出会いは私にとってこの一言で十分でした。分厚い聖書も毎日少しずつ読んではいますが、今でもこの一言で事足りているような気がし、他にもすばらしい聖句がたくさんあるでしょうが、正確に記憶はしていません。イエス様を知るにはそれぞれ皆きかっけがあったと思います。私の場合、海外赴任に伴い家族がばらばらになる不安、異国の地で家族がほんとうにやっていけるかの不安です。また人にはいろいろな不満や怒り、悩みなどがあります。たとえば自分がこうでるべきだと頭に描いた状態と現実とが違う場合、あるいは違うと予測した場合、その差が大きいほど、不満、不安、怒り、悩みがより大きくなると思います。しかし、すべてをイエス様にゆだねた時、もはやこうあるべきだと頭に描くことがなくなり、したがって現実との差そのものがなくなり、不安や悩みが存在し得なくなるわけです。何の努力も必要とせず、ただ、いつでもどこでもすべてをイエス様にあずけてしまうということは、何とすばらしいことでしょう。そのためにいつも主イエス様に感謝し、祈り続けています。

希望の光

鈴木幸子

東京都出身／新田小／新田中／荒川商業高／図書館短期大学卒／夫　俊雄／子供　二男一女

私の両親は今、天国にいます。やがて私も私の家族もともに同じところへ行けることに感謝しています。母が57歳にして寝たきりになり看病している時でした。「何のために母はこうなったのか、また何のために人は生きるのか」大きな問題が重くのしかかってきました。一生懸命世話をすればするほど、その比重が重くなってきます。そのような重い心の私に主は手をさしのべてくださいました。「あなたを形造った方、主はこう仰せられる。『恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している』」(イザヤ43・1、3、4)　と主は声をかけてくださいました。失われていたいのちがよみがえりました。「生きていていいよ」と私の造り主からはっきりと言われたのです。その日から希望の光が与えられました。そして両親と夫も救われました。

「わたし(イエス様)が事を行えば、だれがそれをとどめることができよう」(イザヤ43・13)

栄光在主。



ともに いてくださる主

福留伸子

筑波大学留学生センター非常勤講師(日本語教師)
福岡県出身／小倉泉台小／久留米東中／武蔵丘高／明治学院大学社会学部／ソウル神学大学大学院卒

「わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います」(ヨハネ14・27)　イエス様を私の救い主として信じ受け入れた人生において、最高に幸福なことはイエス様の平安がいつも私の側にあるということです。熊本の水俣病患者さんたちに会い、人は愛されたいという切なる願いを持っていても、無条件にそれに応えられる人間は自分を含めてこの世に一人もいないと知った時、生きている意味がまったく分からなくなってしまいました。この虚無から私が救い出されたのは神が存在しておられ、神が人間を愛してくださることを信じたからです。しかし、私は母の死によって再び虚無の淵に落とされました。私のそれまでの信仰は知識的なものにすぎなかったので最愛の人の死によって希望を失ったのです。でも、自分が罪人であり、イエス様が私の罪の身代わりとなられて十字架の上で死んでくださったことで、私の罪が赦されたことを事実として受け入れた時から、イエス様のゆるぎない平安が私のものとなりました。その後、父も天国へと見送り一人ですが、今は主の平安が私から離れません。



主は私のほめ歌

浅利三恵

(社)高知県薬剤師会勤務
高知県出身／足摺岬小／足摺岬中／清水高卒

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します」(ローマ7・24、25)　いつも人の目ばかりを気にして心が落ち着くことなく、逃げ道を捜し求めていた私に、イエス様は「わたしのところに来なさい」(マタイ11・28)　と語りかけてくださいました。イエス様のみもとは、それまで経験したことのない平安と希望と喜びに満ちた場所でした。私はようやく求めていた変わることのない永遠の憩いの場を持つことができました。イエス様は私の罪や愚かさをすべて受け入れ赦してくださいました。またイエス様は恵みとして私に白血病を与えてくださいました。このこともまったく考えられないできごとでしたが、イエス様はいつも私に天国が用意されているという喜びで満たし、毎日の苦しみや心配から解放へと導いてくださいます。主が私に成してくださったみわざ、……私が天国を待ち望む者と変えられた事実に一番驚き、感謝しているのは私のたましいでしょう。「主は大いなる方。大いに賛美されるべき方」(詩篇145・3)



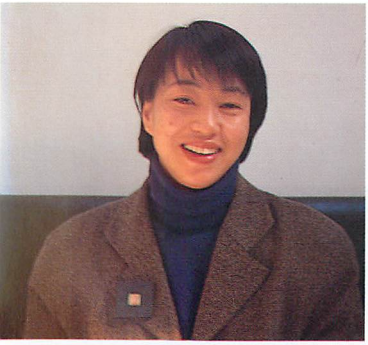
もはや死もなく

赫多久美子
東京都立光明養護学校・国立小児病院内そよ風分教室教諭
神奈川県出身／入船小／横浜共立学園中・高／大阪教育大学教育学部卒

「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである」(黙示録21・3、4)

院内学級には、脳や四肢に重い障害を持って生まれた子供たちや、ある日突然病魔に侵され、長期間の入院生活を送っている子供たちが在籍しています。

学生時代から祈り求め、導かれた職場ですが、小学校に勤めていた頃とはまったく異なる「別れ」を経験する日々です。病気が良くなり、退院して地元の学校に戻っていく喜ばしい別れもあれば、この地上ではもう会えない悲しい別れもあります。けれども痛みと苦しみの中で精いっぱい生き抜いたあの子供たちには、死に勝利されたイエス様からの特別の慰めがあると確信しています。子供たちが召された後も、ご両親方とのつながりが何らかのかたちで続いているのは、ほんとうに感謝なことです。ご家族にも天国での再会の希望を得ていただきたいと、心から祈っています。



「あなたがたが私を選んだのではありません」

上野文子
イーモリ・アーツ勤務
鳥取県出身／育英小／中央中／八頭高／東洋美術学校卒

「信じようと信じまいと、関係ない。神様はいます。それをあなたが信じるか信じないかです」。8年前、初めてしたベックさんとのお話の中で、私の心に深くつき刺さったことばです。ショックでした。「確かにこの世のすべてを造られたような神様が、こんな私一人の信仰の有無に左右されて、その存在が無くなるわけがない…。神様というのはそんな小さな方ではないはず…」。今までいかに自己中心的な思いで生きてきたかを思い知らされました。でも神様はこのようなわがままな者のためにも大きな愛をもって罪の赦しと、天国への希望を用意してくださっていたことを聖書から知ることができ、目に見えるものしか信じなかった者が、目に見えないものを信じる者へと変えられました。それからは、苦しい時、つらい時にも私のそばにいてくださるのは創造主なるほんとうの神様なのだと思うと、心からの安心が湧き上がってきます。「彼(イエス様)に信頼する者は、失望させられることがない」(ローマ10・11)　無心論者の私がなぜ信じられたかはわかりませんがほんとうの神様に信頼して生きるということは、どんな時でも希望と喜びがあるということです。



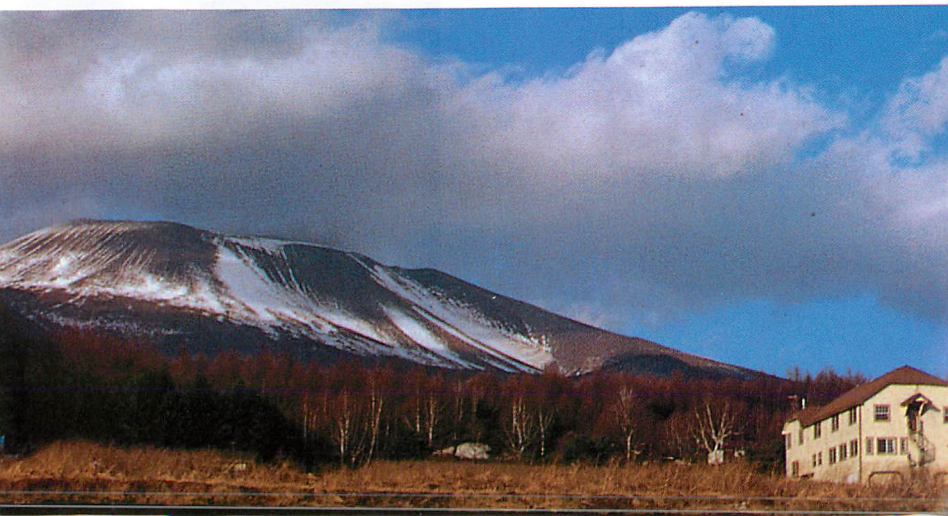
「主われを愛す」

加藤朱美
神奈川県出身／大道小／鵠沼中／
鎌倉高校／創形美術学院卒

何も愛していない日が来た時、死にたいも生きたいもなく、文字通りの絶望の中にあって、繰り返し私の内側にわいてきた歌、それが「主われを愛す」でした。どうして「チューリップが咲いた」は出てこないのかなと思いながらも無感動に歌っていました。この行き詰まった状態は、すべて自分のせいでこのようになったと知り、「自分の今までのすべての罪をつぐないたい赦されたい」という思いが人生の目的となりました。今までが意識的な行為ではなかったので、自分でつぐなうことは不可能であるとの結論でした。それでも喜びのないこのままの状態で生きていくこともできず、「神様、助けてください」と叫び祈りました。そして不思議な方法でキリスト集会を紹介され、初めて参加した「よろこびの集い」で、13年前に一人で聖書を読んで信じられたこと、キリストの名によって祈ったことを思い出しました。集会の責任者のベックさんから約２千年前にイエス様の十字架ですべての罪があがなわれていること、すでに赦されていること、神と個人的な契約であることを聞き、救いの確信に至りました。私は罪赦されて喜びの中に新しく生まれました。



主は私の羊飼い。
私は、乏しいことがありません。
主は私を緑の牧場に伏させ、
いこいの水のほとりに伴われます。
主は私のたましいを生き返らせ、
御名のために、私を義の道に導かれます。
たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、
私はわざわいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖、
それが私の慰めです。
私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、
私の頭に油をそそいでくださいます。
私の杯は、あふれています。
まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと
恵みとが、私を追って来るでしょう。
私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。（詩篇 23）



希望にあふれて

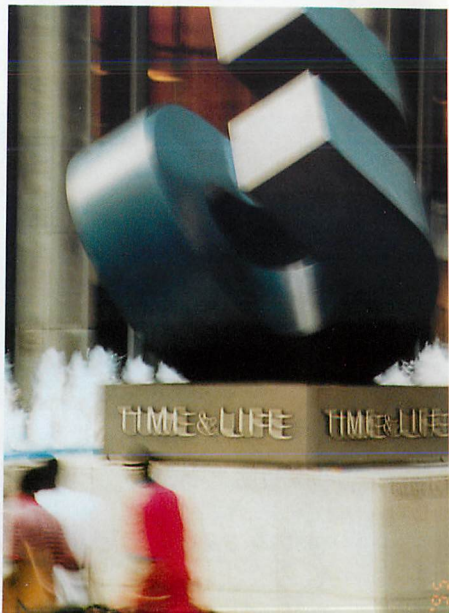
死に直面した方々の証し

ゴットホルド・ベック

…彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。
（ヘブル　13・7）

この本はいうまでもなく、人間が作りだした「キリスト教という宗教」を宣伝するためのものではなく、十字架上で私たちの罪をあがなうために死んでくださり、そして三日の後に復活なさったまことの救い主、イエス様ご自身を紹介するための本です。たしかに私たちは主イエス様をこの目で見ることはできませんし、証明しようと思ってもできません。人々を納得させようとする努力もまったくむだです。しかし主イエス様に出会って変えられた人々を見ると、主イエス様こそが「すごい」としか言えなくなります。

主イエス様は、人間と違って偽善を知らない、嘘を知らないお方です。主



イエス様は約束を必ず守ってくださるお方です。主イエス様の約束とは「わたしの名を呼び求める者は、みな救われる」という約束です。つまり、自分自身を低くして頭をさげ、「イエス様、私をあわれんで赦してください」という態度をとる者はまちがいなく主に受け入れられ、救っていただけるのです。

人間には二つの種類があります。一種類の人間は、「死については考えたくない、死にたくない人々」です。聖書は彼らのことを「一生涯、死の恐怖につながれている奴隷」と呼んでいます。ふつう、死のことについて何か話そうとすると、いやな顔をして拒む人が少なくありません。太陽王、フランスのルイ14世は、葬列が通るとすぐカーテンを閉めさせました。ルイ14世は、望むものは何でも、名誉も、地位も、財産も、この地上のあらゆるものを手に入れることのできた王でしたが、その王がなによりも嫌ったものが「死」でした。ドイツの偉大な詩人であり政治家だったゲーテも、死を嫌い、親しい人の葬式でさえ出席しませんでした。

もう一種類の人間は、「死の恐怖から完全に解放され、安心して生き生きとした希望を持って死に向かうことができる人々」です。「私は死んでも主イエス様とともに生きるようになる」と確信できることは、なんと幸いなことでしょうか。主イエス様は、どんな罪をも赦してくださる偉大なるあがない主です。主イエス様は、どんな束縛からもあなたを解き放ってくださる偉大なる解放者です。主イエス様は、死の恐怖につながれて奴隷となっている人々を解放してくださるために来られたのです。十字架の上でご自分の血潮によって私たちの罪の代価を払って救ってくださったのです。「死の恐怖

からの解放」こそ、聖書によって提供されている救いです。聖書には天の御国での状態について次のように記されています。

彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。（黙示　21・4）

天国での栄光は、ほんとうにすばらしいものです。ですから、主イエス様につながっている人々はみな、次のように確信しています。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに掲示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ　8・18）

私たちはここに、一足先に天に召されていったキリスト集会の方々の証しを、喜びとおそれとをもって見ていきたいと思います。聖書は言っています。「…彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。」（ヘブル13・7）と。「ならう」ためには、そのことについて、よく見てみなければなりません。考えてみなければなりません。そして本当に真剣に見、考える人は、天の御国を、イエス様を、信じざるをえなくなります。そして信じた人々は、目先のことだけでなく将来のこと、確実にやってくる自分の死についても考えるようになります。重病になったり、死が近づいてきたなら、いったいどうしたらよいのでしょうか。そのような状況になっても、イエス様を信じ、信頼し、まことの神との平和をもっている人は、決し

て絶望的な状態にはなりません。なぜなら、復活と永遠のいのちを知り、それを自分のものにしているからです。「死んでも主イエス様といっしょに生きる」。これこそが、召されていった方々の動かすことのできない確信であり、またそれをこの目で見た私たちの喜びであり、誇りです。

松田義子さん

私たちに尊敬され愛された松田義子おばあちゃんは、遺言状に次のように書きました。

1　前夜式について。集会の方々の指導により、祈りと賛美を中心としたものにしてください。

2　葬儀について。霊は肉体を離れてすでに天国で安らいでいます。遺体を拝んだり、焼香する必要はありません。葬儀はイエス様のご栄光だけが証しされる場としてください。

3　納骨は集会の納骨堂に安置してください。

おばあちゃんが選んだ聖歌は三九六番、「十字架のかげに泉わきて、いかなる罪も清めつくす。おらせたまえ、この身を主よ。十字架のかげにとこしえまで…」でした。その中に次のことばが記されていました。「賛美しつつ、この白衣を縫う。安らかに、主の花嫁として受け入れられる日を祈りつつ…」。



長沼純子さん

長沼純子さんはがんになり、死をも克服してくださった主イエス様を知り、すべてを委ねるようになりました。病が重いころ、彼女は次のように祈ったのです。

「愛する主よ。今日も朝からつらくて苦しい時、いつもそばにいてくださって心から感謝します。私が弱い時こそ、イエス様が強く私に現われてくださり、抱き上げてくださり、私を励ましていてくださいます。心から感謝します。感謝をすれば感謝がたくさん返ってきて、私はイエス様のみことばがどれだけすばらしいかをいつも心に感じています。この病気を通して、私はイエス様から多くのことを教えられました。人を愛すること、優しくすることなど。それまで知りませんでしたが、今は病気を通して知ったことを心から感謝します。主人が私と同じようにイエス様を知って、一日も早く楽になることができますように。イエス様は「思い煩うな」と言われますから、また主人の救いを約束してくださいますから、ありがとうございます。子供たち、私の兄弟たち、親戚の人たちが私の病気を通してイエス様を知るようになることを、心からお願いします。まだまだ病気、肉の苦しみは続くでしょうが、イエス様がそばにいらっしゃるので私は平安です。どうかイエス様のご計画通り、すばらしい日がやってきますように。いつもいつも私のために心を砕いてくださってありがとうございます。アーメン」。



純子さんには肉体の苦しみと激しい痛みの日々が続いたのですが、私が「怖くないでしょう？イエス様がいっしょにいらっしゃるの、わかる？」と聞きますと、彼女は「はい、わかります」と答えました。どんなに苦しくても、いつもこの答えは変わりませんでした。お母さんのツルさんによると、召される直前、純子さんは大きな目を開けて上を見、にっこり笑って息を引きとられたとのことです。間違いなく彼女は主イエス様を見てほほえんだに違いありません。

純子さんは一度も教会に行ったことはなかったし、もちろん洗礼も受けていなかったし、聖書の知識もそう多くは持っていませんでした。しかし、主イエス様を知ることによって、死の恐怖から解放され、生き生きとした望みを持って天に召されていかれたのです。

笹川郁夫さん

笹川郁夫さんは健康そのものでした。しかし、がんにかかって体重は八十五キロから四十三キロになり、骨と皮になってしまわれました。ふつう、病状がよくない場合、真実を告げることは避けられます。特にそれが不治の病の場合、医者や家族は本当のことを患者に打ち明けるのをためらいます。しかしこのような行為は病人にとって何の助けにもならないし、解放にもなりません。というのは、真理だけが自由を与えることが



できるからです。あらゆる錯覚は、偽りです。　奥さんの公子さんは、がんだということを隠さずに夫に話されたのです。彼はある集会で次のように祈られました。「私ががんになったのは、本当によかったと思う。もしそうでなければ、決して主イエス様を信じなかったからです。一足先に天に召されるのですが、どうか、家内と子供をよろしくお願いします」。

長澤文枝さん

長澤文枝さんは、がんにかかり、肉体的にも精神的にも深く苦しみ悩むようになりました。しかし、彼女は主イエス様を知り、次のことを経験し、証ししたのです。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。（イザヤ　38・17）

天に召される数日前、キリスト集会の方々が夜遅くお見舞いに行った時、そこには文枝さんの妹のかほるさんがいました。その頃かほるさんはまだ主イエス様を信じ受け入れていませんでした。文枝さんは言いました。「私ががんになったのは、ほんとうに感謝です。主イエス様を信じたことで、生きる希望を見いだしたから。主イエス様は私をいやそうと



思えば、かんたんにおできになります。でも私がいやされたら、皆は確かに喜ぶでしょうが、それによってだれも自分のあやまち、またわがままを知り、悔い改めることはないでしょう。しかし、もし私が希望を持って死に向かうことができれば、家族の人々は必ずイエス様のことを考えるようになり、そして家族の救いが実現するに違いない。私をいやすことは確かにひとつの奇蹟でしょう。しかし私が主人と子供たちを残しながら、絶望しないで希望にあふれて死ぬことができれば、それこそ、もっと大きな奇蹟に違いない。そして主イエス様はそのように導かれるでしょう」。隣にいたかほるさんはただ「お姉さんは強い！」としか言えなかったのです。もちろん文枝お姉さんが強かったのではなく、彼女の内に住まわれた主イエス様こそが、彼女の栄光の希望そのものだったのです。

山川千秋さん

山川千秋さんはフジテレビのニュースキャスターで、ヨーロッパでもアメリカでも人気のある方でした。しかし、彼は五十四歳でがんにかかり、入院しなければなりませんでした。私は千秋さんにあった瞬間、嬉しくなりました。正直な人だとわかったからです。「私はがんだそうです。いま必要としているのは、生き生きとした希望です」と彼は言いました。その千秋さんに初めのショックを与えたのは、奥様の穆子さんでした。



なぜなら、彼女は真理を語ったからです。「がんです。手遅れだそうです」と。次のショックを与えたのは私だったようです。私は彼に言いました。「あなたは病気によって死ぬことはありません。神の時が来なければ絶対に死にません。そして主なる神の時は最善の時です」と。後に、彼は私に「あの言葉は私にとってカルチャーショックだった」と言いました。自分の死を、運命だ、天罰だと思いこむ人は、しかたなく諦めなければなりません。しかし、諦める必要などまったくないのです。なぜなら、唯一の生けるまことの神は「希望の神」であり、希望のない人々のための「助け手」だからです。生けるまことの神は、どんなに希望がない状態の中でも、真の希望で満たしてくださいます。主イエス様とつながっている人々は、次のように言います。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。（2コリント　4・8、9）

千秋さんは言いました。「私は羊のようにさまよっていました。しかし、父なる神は、私の咎、罪、わがままを主イエスに負わせたのです。私は自分のたましいの牧者であられるお方のもとに帰ったのです。主イエス様の犠牲の死によって私はいやされ、救われ、義とされたのです。主イエス様は私の羊飼いです。ですから、私が罪に定められることは決してあり

ません」。彼の口から最後に聞いた言葉は「主イエスは私のただ一つの望みです」というものでした。

どうか、私たちの主イエス・キリストであり、私たちの父なる神である方、すなわち、私たちを愛し、恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方ご自身が、あらゆる良いわざとことばとに進むよう、あなたがたの心を慰め、強めてくださいますように。

（2テサロニケ　2・16、17）

竹田清さん

竹田清さんは、東大の数学の教授であり、定年退官後は東海大学で教えておられました。この方ほどじょうずにドイツ語を話す方は、めったにいません。ある日、彼は奥様の竹子さんといっしょに私の家に来られました。竹子さんは「イエス様を信じるために洗礼を受けさせてもらいたい」と言われました。私たちはゆっくりと話しあいました。私は「救われるために必要なのは、洗礼を受けることではなく、主の前に正直に悔い改め、そして素直に主を信じることだ」と言いました。竹子さんは「私は罪人として過ちを犯した者です。主イエス様。あなたに対して無関心だった不信仰の罪を赦してください。あなたさまが私のために死んでくださり、私の代わりに罰せられたことを感謝いたします」と祈られまし



た。このような態度を取る人を主イエス様は決して見捨てられません。喜んで受け入れてくださり、救ってくださいます。そして竹子さんは、自分が救われ、主に従う者になったことを証しするために、洗礼を受けられたのです。

何年か後、清さんは病気が悪化して入院なさいました。お見舞いに行った時、清さんは弱っておられましたが意識ははっきりしていて、「私のために祈ってください。私は主の恵みを必要としています。私は傲慢な人間でした」と告白されたのです。奥様も驚いて、「主人の目は子供のようになった」と言われました。大出潤子さん、息子さんの尚郎さんと展郎さんとともに聖歌を歌って主の御名を呼び求め、いっしょに祈りました。清さんはドイツ語で「安心しました。嬉しい。心から感謝します」と言われました。また、「私が死んでから家内のこと、子供や孫のことをよろしくお願いします」と何度も頼まれたのです。「子供と孫が主イエス様を信じ受け入れることですか?」と尋ねますと、「はい、そうです。お願いします」と言われたのです。次にお見舞いに行った時、彼は「私のために祈ってください。主の恵みを必要とするからではなく、今、私は主に心から感謝しています」と言うまでに変えられたのです。清さんは頭のいい数学者でした。しかし彼は聖書のみことばを通してまことの神を信じ、また救われたのです。学者だったパウロは次のように書いたのです。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教の

ことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。（1コリント　1・21）

及川廣太郎さん

及川廣太郎先生は、竹田清先生の後輩でした。数学者として東大の名誉教授になり、日本だけでなくドイツでも著作が出版されている有名な方です。「自分は無宗教だ」と言っておられましたが、がんになり、その病は彼にとって大きな重荷になったのです。

廣太郎さんはイエス様の招きのことば「重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ11・28）を聞いたときすぐに従いました。彼は祈りました。「主イエス様。私のわがままのために死んでくださったことを感謝いたします」別れる時、彼は言ったのです。「救われることはかんたんなことですね」。

聖書の知識があってもなくても、救われたいと思う人はだれでも救われます。頭の知識を得る必要はないのです。救いとは、理性の問題、理解力の問題、また感情、気持ちの問題ではありません。意思の問題です。救われたいと心から望む人は、必ず救われます。それを廣太郎さんは経験したのです。そして、「救われることは本当にかんたんなことだ」と言われたのです。主なる神は約束しておられます。「確かに、今は恵みの時、今



は救いの日です。」(2コリント6・2)明日まで待たなくてもよいのです。今すぐ、永遠の救いにあずかろうと思えば、かんたんに救われるというすばらしい事実を、廣太郎さんは経験したのです。その結果彼は精神的に元気になり、心配から解放されたのです。奥様の恭子さんはそれを見て、医者から聞いていた真実の病状を話されました。「実は、がんです。手遅れです。いつ死んでも不思議ではないような病状です」と。廣太郎さんはすぐ「私は主イエス様を信じたから、すべてを任せたから、心配しません」と答えられたそうです。

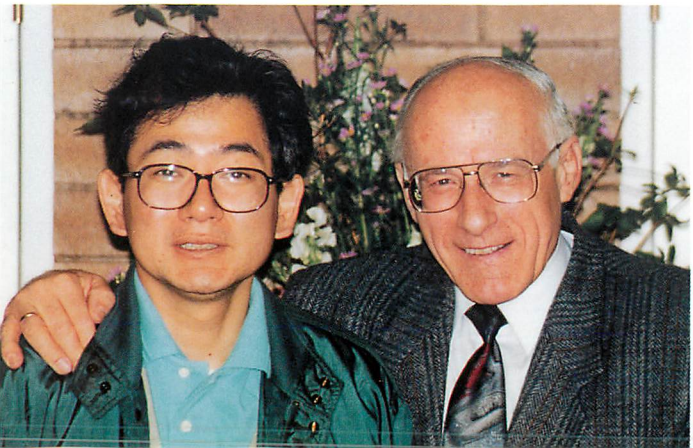
危篤だという奥様の電話で私はすぐに飛んで行きました。病室に入る前に「さしつかえなければ葬儀についてご主人と話してもいいですか」と奥様に確かめました。奥様に「お願いします」と言われていたからです。廣太郎さんに私は語りかけました。「先生は尊敬された人格者であり、数学者として世界的に有名な方です。その先生が『主イエス様が私のわがままのために死なれたことを感謝します』と言われたのは、一生でもっとも大切なことだったのではないですか?」。廣太郎さんは答えられました。「まちがいなくそうです」と。私が「だから感謝する気持ちもあるでしょう?」と聞きますと「はい、あります」と言われました。しかし、今はもう、何もすることができなくなってしまわれたのです。そこで私は「葬儀を通して、主イエス様が働かれるかも知れないから、あなたの気持ちを文章で残したらどうですか?」と言うと、彼はゆっくりとベッドの中で座り、鉛筆を取り、書こうと思ったのですが、書く力がなかったので、

奥様に頼んで書いてもらったのです。「私の葬儀は無宗教でやってもらいたい。聖書に基づいてやって欲しい。そして、葬儀に来る人々はみな主イエス様を知ることによって生きる望みを持つように」。それから彼はもう一度鉛筆を取って、全力を入れて「及川」と書きました。しかしその後に「廣太郎」と続ける力は、もはやなかったのです。

しかし、彼が言った「救われることはかんたんなことですね」という言葉は、すばらしい真実です。人間は自分の罪滅ぼしのために何をやっても無駄で、何をやっても自己満足に過ぎません。私たちの代わりに十字架で罰せられた主イエス様だけが、人間の罪、過ち、わがままを赦すことがおできになるのです。

歳川雅洋さん

歳川雅洋さんはがんにかかった時、まず、「死ぬのは怖い」と正直に告白なさいました。しかしイエス様はまず奥様の美也子さんの心を開き、それからご主人の雅洋さんに働かれて彼もイエス様を受入れ、救われたのです。その結果、彼は「もう、死は怖くない」と言うようになり、あまりにも大きな慰めと平安を持つようになったので、美也子さんはそれを「うらやましいと思った」のです。その後美也子さんは電話で「私と家族は主イエス様を信じて幸せです」と言われました。雅洋さんの最後に記



された言葉は「主イエス様のところに行きます」でした。

葬儀も主イエス様の栄光が現わされる場となり、そして、長男である創太郎さんは祈りました。「お父さんを天国に連れて行ってくださり、ありがとうございます。僕たちもいつかお父さんに会いに天国に行きますが、それまで導いてください」。またいただいた手紙の中で、美也子さんは「イエス様を知ってよかった。救いにあずかってよかった。信仰を持ってよかった。心から感謝します」と書いてこられたのです。

リンデトラウト・ベック

リンデと主イエス様との関係を明らかにするのは、リンデの遺言ではないかと思います。

「主イエスさま。たとえ肉眼であなたを見ていないにしても、私はあなたを心から愛しています。そして、たとえ個人的にあなたを見ていないとしても、私はあなたに全き信頼をおきます。この目であなたを見ることが許される時、なんというすばらしい、言葉にならない喜びで、歓呼の声をあげるでしょう。その時、私は永遠に安全な場所におかれます。あなたはよみがえりであり、いのちです。あなたを信じる者は死んでも生きるのです。そして、生きていてあなたを信じるものは、だれでも永遠に死ぬことはありません。神のたまものは、私たちの主イエス・キリストとの交わり



における永遠のいのちです。私はまだ、この肉の体にとどまる限り、本当のふるさとに到達していません。私はまだ、主から離れている旅人のような状態におかれています。私は主と顔と顔とを合わせていませんが、信仰によって歩み続けています。しかし、私は安らかです。願わくば、この肉の体を去って私の天のふるさとへ行き、主のみもとに行きたいと思います。ですから私は、主が来られるまで、主に喜ばれるように、すべてのことを一生懸命にやりたいと思います。私のふるさとと、私の目標は、天にあります」

リンデは、主イエス様のために実を結びたいと心から願っていました。自分の健康は、自分の幸せは、どちらでもいいことでした。「ただ、主だけが栄光をお受けになる時、私は嬉しいのです」というのがリンデの態度でした。そしてこの態度は主に用いられ、実を結ぶようになりました。多くの人がイエス様を求めるようになり、イエス様を訪ね、出会うようになったのです。

J・S・バッハ

J・S・バッハは数々の名曲を残しましたが、その中ではっきりと歌っているように、心から死を待ち望んでいたのです。バッハは、生きているこの世よりも死んだ後に来る世界のすばらしさを信仰の目で見ること



ができた人でした。ですからバッハは、死を賛美せざるをえなかったのです。「私は待ち望んでいる。私はきょうにも、喜んでこの世を去ろう。私は満ち足りている」。

袖田京子さん

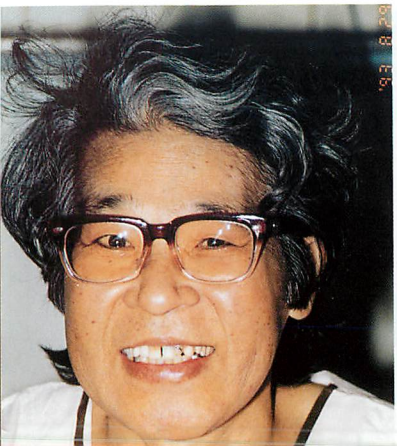
京子さんは、胃のスキルスがんになり、入院して二カ月後、三十五歳で天に召されていかれました。私が彼女とお話したとき、彼女は「イエス様は本当に私のために死なれたのですね」と何度も聞かれました。母親の依田敏子さんは京子さんにがんだということを告げるべきかどうか、悩まれました。でも京子さんは置き忘れてあったノートからそのことを知ってしまったのです。彼女は言いました。「お母さん、私の病気はがんだったのね。でも驚かなかった。このことは神様が私に知らせてくださったと思った」と。彼女はよくお母さんに「聖書を読んで。詩篇かイザヤ書を…」と頼んだのです。それを聞きながらすやすやと眠ったのです。そんな彼女も一度私に「死にたくない」と言ったことがありました。でもいっしょに祈ったとき、平安に満たされ、にっこり笑って「なんだかふわっとしちゃった。眠るね」と言いました。彼女はまた「イエス様、ごめんなさい」とよく祈っておられたそうです。このような京子さんを、主はどれほど愛されたことでしょうか。召された時、苦しみの顔がみるみる穏



やかになり、笑顔に変わりました。この時イエス様のみ手に抱かれたのでしょう。このことを通して、敏子さんも父親の政利さんもイエス様のもとに導かれ、救われたのです。彼女は入院中、お父さんに言ったそうです。「私とお母さんは天国に行くけど、お父さんはイエス様を信じてないから行けないよね。かわいそうね」と。彼女は苦しみの中でせいいっぱいお父さんにイエス様を伝えたのです。

平良孝七さん

平良孝七さんは第二次世界大戦の激戦地だった沖縄の記録を写真集にして出版し続けられた有名な方です。救われてから肝臓がんになり、イエス様にすべてを委ね、死への恐れから完全に解放されたのです。彼はほんとうに安心して自分の死に対することができたのです。彼は自分の葬儀の時いのちがけで「自分の信じているイエス様を紹介してもらいたい」と願いました。葬儀の前夜祈祷式で奥様の芳子さんは言われました。「主人は見かけによらず弱虫なところがあって、夜道を歩く時はハブが怖いからあんた先に歩きなさい、と言うような人でした。その主人が、がんの末期になっても死に対する恐怖はなく、いつもイエス様、感謝だ、感謝だと言っていました。これこそがイエス様の愛の証しです」と。また、彼は葬儀の時に、生前に録音しておいたテープで主の証しをさせてほし



いと望みました。その中で、彼は言っています。「病気が悪化し、日に日にいろいろな症状が起こり、体が衰えても私にはまったく何の不安も恐れもありませんでした。それは自分の努力によるのでなく、イエス・キリストの愛とあわれみと、一方的なふしぎな大きな力によるものです。それは私の五十四年の人生の中で、もっとも充実した、ゆるぎない幸せの時でした。『恐れるな。あなたはわたしのもの。…わたしはあなたを愛している。…恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。』（イザヤ43・1～5）。主はみことばをもって私から不安や恐れをしめだしてくださいました。死はだれにでもやってきます。私は主にある喜びを皆さんに伝えたくてこうして話しています。死は終りではないのです。主を信じ、天の御国で主の栄光に包まれて永遠に生きてください。」と。

真栄田久美子さん

真栄田久美子さんも、がんの末期症状で苦しんでおられました。私がお見舞いに行って話したとき、彼女は言いました。「私、ほんとに心配してません。うれしいんです」と。一月ほど後に行ったときには、付き添っておられるお母様はもう意識不明の状態だからと病室に案内することをためらわれたほどでした。でも私が「話しかけたら魂は聞いているか



ら、側で祈らせてください」と言ってそばに行き、話しかけますと、目を開かれたのです。そして彼女は言ったのです。「私はまったく心配していません」と。ほんとうに平安そうに。お母様は驚かれたのです。この後五時間ほどで、彼女は天に召されました。私たちはイエス様が彼女とともにいてくださることを見ることができたのです。

辻陽子さん

辻陽子さんの信仰は、自分に完全な救いをもたらしてくださった主イエス様を心から愛し、主に従うことでした。いのちがけで主イエス様を宣べ伝えたい。これこそが、陽子さんの心からの願いでした。意識不明の状態から目覚め、自分がまだ生きているとわかった時彼女は悲しみました。「主のみもとに召されることだけを期待していたから」だそうです。「私はずいぶん回り道や横道にそれて来ました。私はまだ多くのものを抱えていて不完全です。私が主のみもとに持っていくものなど何もない。ただ主よ。あなただけが私のすべてです」と証ししたのです。「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」（ピリピ1・23）。これこそ陽子さんの希望でした。



丸山文乃さん

丸山文乃さんは十年間がんと戦ったのです。そして彼女の信仰生活の特徴は、次のようなものでした。「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」(ローマ8・18)　文乃さんの遺言は次のものでした。「二十数年にわたりいろいろなことがありましたが、ともに過ごすことができましたこと、心より感謝しています。貴史も小喜子も立派に成長するまで生かされていたことも感謝でした。妻としても母親として至らないことも多かったと思いますが、私自身としては、本当にせいいっぱい生きてきました。何一つ思い残すことはありません。信仰の力はおりにふれ大変に大きな支えでした。『神のなさることは、すべて時にかなって美しい。』(伝道者3・11)　私にとって、もっともふさわしい時に死を与えてくださることを思い感謝です。むしろ主のみもとで安らぐことを思うと喜びです。ですからどうか安心して喜んで送り出してください。くれぐれも悲しまないでください。一足先に出発しますが、みんなの来るのを天国で待っていますから、再会を楽しみにこの世での生活を送ってください。それから、次のことをお願いしておきます。」

1　葬儀は吉祥寺キリスト集会、ベックさんの司式で。

2　聖書　ピリピ　10・6、7　1コリント　15・56～58　黙示21・4

3　聖歌　四三〇番、六〇九番、四七二番、六四〇番、三四八番



文乃さんは、決してキリスト教という宗教に入るのではなく、聖書を勉強するのではなく、いい人間になろうと努力するのではなく、ただキリストの貴い血によって「先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出された」(1ペテロ1・18)のです。その気持ちは、聖書に見る初代教会の人々と同じでした。

キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。
(黙示録 1・6)

彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。
(ヘブル 11・16)

私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。
(ヘブル 13・14)

私たちの国籍は天にあります。
(ピリピ 3・20)

古川和夫さん

古川和夫さんも七年前に天に召されたのです。彼は次のように書きの

こしています。

「人生において、本当に大切なものは、死の直前の三十分前においてなおも重要な意味を持ち続けているものだけです。私は自分の人生をこの言葉に照らして見た時、あまりの空しさに愕然としました。ほとんどがどうでもよいことだったのです。以来、人生観が一変しました。それまでは自分勝手に後何年は生きられるだろうと考え、自分の都合をいっぱい背負った息の詰まるような生き方をしていました。しかし、今は違います。私の人生観は、『自分が現在やっていることは主イエスのみもとに行くのにはたして必要なことなのか』というものです。そして主イエスのみもとに行く栄光は、この世のどんなものも比較のしようがないほど貴いものです。それこそ比較などという言葉を使うのさえ恐れ多いことであり、人生においてこれほど大事なことはない、とはっきり分かりました。人の人生は、死を望む三十分前こそがかんじんです。私は自分の一生を考えた時、もしあのまま真実の救いに出会うことができなかったらと思うと慄然とします」。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。（イザヤ　55・6、7）



いました。また、入院中に友人が貸してくれたたくさんのテープの中にベックさんのメッセージ「真理について」があり、聖書の聖句がまじり気なくそのまま心に入ってくるようなそのテープを何度も聞きました。

「わたし（イエス様）が道であり、真理であり、いのちなのです。」（ヨハネ　14・6）

そのメッセージの中で、「イエス様は道そのものです。道しるべではありません」と言われた時、私は今までイエス様を道しるべにしていた、あの「初めの愛」（黙示録2・4）から離れてしまっていた、と気づかされました。絶望の前に、主が助けの道を備えてくださっていたのです。教会を出るについては何のトラブルもなく、退会届けを出してすぐ受理書をいただきました。

このようにして、私はキリスト集会に集うようになりました。その中で主だけを中心にした愛にみちたおつきあいを味わわせていただいていると、救われたばかりの頃のあの喜び、あの平安がよみがえってきて、イエス様はなんとすばらしい方だろうという思いと賛美が自然に心の内にわきあがってきます。初めて吉祥寺キリスト集会の礼拝に集い、あのあふれるばかりの聖歌の賛美をともに歌った時、口では言えないほど感動しました。熱心に求めていたのに現実には味わうことのできなかった賛美に出会うことができ、かつて教会で、聖書の学びや音楽活動で色々な手を尽くして求めていたものが、キリスト集会の礼拝や集まりの中に現実に存在していたのです。また同時に、教会での十年間に、「何かが違うのではないか」と漠然と感じていたものが何だったのかが、キリスト集会にきてから次第に明らかになってきました。

みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはいけません。（ヤコブ　1・22）

また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。（Ⅰコリント　13・2）

妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけません。（コロサイ　3・18、19）

また、聖書には夫婦のあり方についてわかりやすく示されていて、愛のない者がへりくだって罪を悔い改め、主に願い求めれば、必ず主が愛しあえる夫婦にしてくださるということを、キリスト集会に移ってから体験的に知ることができました。

今、礼拝や家庭集会で暖かい愛に満ちた集まりに入れられ、生きた主イエス様の働きを見せていただいていると、ただただ感謝でいっぱいになります。

また最近、両親の不和に私が傷ついていたことなどを正直に母に伝えることができ、母もイエス様にあやまってくれ、主にある和解ができ、母を心から尊敬できるようになり、喜びでいっぱいです。父は十年前に天国に行っています。また、主人との関係も、私の中のわだかまりがすっ

かり明らかになり、イエス様と主人にあやまることができ、主にある夫婦となれました。

…明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。明らかにされたものはみな、光だからです。（エペソ　5・13、14）

「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。（エペソ　6・2）

…おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。（エペソ　5・33）

今でも、知らず知らずのうちに、自分が正しいことを証明したいために聖書を読もうとしたり、すぐ高ぶったりするおろかな者ですが、気づいたらすぐに「イエス様、ごめんなさい」と言います。こんな私のような主を尋ね求めなかった高慢な者をも、主は赦して愛してくださり、育み、導いてくださっています。

…胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。（イザヤ　46・3、4）



左から二人め 奈生子さん。▶

主イエス様だけに栄光を

藤井 奈生子

一九七二年埼玉県浦和市に生まれる。豊春幼稚園、立野小、大増中、大宮光陵高校、東京音楽大学卒業。現在、東京音楽大学大学院音楽研究科で声楽を専攻。第四十三回全日本学生音楽コンクール第一位受賞、一九九五年度ザルツブルグ・モーツアルトコンクール奨励賞受賞。

幼い頃の私の心はいつも真っ暗で、絶望していました。日常生活の半分以上は、目をそむけたくなるような心がちくちく痛むような苦しみがいつもありました。私は、人並みの能力もとりえもなく、人からほめられたり愛されたりする魅力も何も持たない者です。だからといって、自分で努力して頑張って一人前の人間になろう、という気力もないみじめな者でした。

一九七二年二月二十四日、三千六百グラムで生まれた私は、体が人一倍大きく、ミルクもよく飲んで、大きく丈夫に育ちました。いつでも同年齢の子供より頭一つ大きく、太っていました。動作はとても鈍く、気が弱く臆病で、いつもぼけっとしていました。保育園、幼稚園、小学校、と問題児でした。体育や図工がまったく駄目で、人よりワンテンポ遅れるので集団行動はできま

せん。泣き虫で、自分の身の回りのこともきちんとできずに、いつも物をなくしたり忘れ物をして、よく先生に叱られました。また、何より体のことでクラスの子からいじめられ、一生分の涙をこの時期に枯らしてしまったようです。両親は私を愛してくれていましたが、そんな私をどうすることもできませんでした。よく泣きながら思いました。なぜこんな何のとりえもない役立たずな者がこの世の中に人間として生まれてきてしまったのだろうか。何かのはずみで間違えて人間になってしまったのではないか。なぜ空の雀、土の中の蟻、木の上の蝉、木の葉のように命の短い、名前もなくすぐにとび去り消えてしまうものではないのか。私はこの世の中で何の価値もなく必要ともされない虫けらだ。どうやってこれからの長い一生を生きていけばよいのだろうか。

しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしり、民のさげすみです。私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。「主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」

（詩篇　22・6～8）

このみことばを、約十二年後キリスト集会に導かれてから見つけた時、主に感謝しました。虫けらである私、人間でない私が、あざける者たちから「主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼のお気に入りなのだから」と言われている。私は主イエス様のお気に入り。嬉しくなってしまいました。

私が小学生になってから父が明るくなってきました。そして私に熱心に教会の日曜学校へ行く

ように勧めました。父はその頃主イエス様を受け入れ、喜ぶ者へと変えられていたのです。小学校二年の十一月二十五日に初めて教会へ行きました。それから毎週集うようになり、教会の英会話教室へも行くようになりました。翌年の夏、英会話教室の軽井沢のキャンプで、当時神学生だったある方からイエス様の十字架のお話をお聞きしました。「イエス様は、あなたの罪のために身代わりとなって十字架にかかって死なれたのです。そのことを信じますか」。しかし、私は生まれて初めて家族から離れて行った遠い軽井沢の地で、またほとんど外国人ばかりのキャンプだったこともあり、カルチャーショックを受けていて、重度のホームシックで夜になると泣いてばかりいました。だからその時は、イエス様どころじゃない、一刻も早く家へ帰りたい、という気持ちでいっぱいだったので、頑固に「信じません」と泣きながら答えました。その方も最後には私のかたくなな心をみて、涙ぐんでいらっしゃいました。しかし私は、この時から主イエス様をはっきりと意識するようになりました。

二週間後の日曜学校の軽井沢のキャンプで、今度は別の方とお話しすることになり、その時、私自身の罪のためにイエス様はいばらの冠をかぶり、裸にされ、両腕と両足を太い釘で十字架にはりつけにされたことをはっきりと目前に見させられました。そして、イエス様にごめんなさい、と頭をさげて祈りました。イエス様のその十字架の痛みと苦しみは、想像を絶するものです。そして祈り終えたとき、頭を上げた私の目の前には光が満ちていました。心は私の味わったことのない喜びと平安で一杯で、皆さんに「私、救われたの」と言ってまわりました。初めにイエス様のことを話してくださった方もそのことを聞いて心から喜んでくださいました。私は教会の方々

の祈りのうちに救われました。一九八〇年八月十九日のことです。

「わたし（イエス様）は、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」
（ヨハネ　10・11）

「…見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」
（マタイ　28・20）

イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」
（使徒　1・10、11）

高校生まで教会へ行っていましたが、教会生活は次第に私にとって重荷となっていきました。教会の中では人間同士の横のつながりが重んじられ、その人の能力や人間性で判断されていました。必然的にいい子でなければならないのです。私は教会の人の目を気にし、つきあいを避け、最後には劣等感と自意識過剰による人間恐怖症という病にかかってしまいました。

大学に入学した一九九〇年四月一日、病後の母の熱心な勧めで、吉祥寺キリスト集会へ行きま

した。びっくりしたことに、皆さん一人一人がまわりの人をまったく気にせず、自分に正直に振る舞っておられるように見えるのです。教会にいて、いつもどう見られているかということばかり気にしていた私には、とても自然で、作り笑いも社交儀礼もなくすっかり肩の力がぬけました。そして、「ここの人たちは人間関係という横のつながりではなく、縦の関係、主イエス様と自分とのつながりを第一にしていて、主イエス様を中心にしたおつきあいをしている」と思いました。それからキリスト集会に導かれ、また主イエス様との生きた命の結びつきを味わうようになりました。

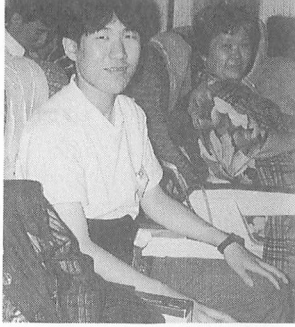
私は主を愛する。主は私の声、私の願いを聞いてくださるから。主は、私に耳を傾けられるので、私は生きるかぎり主を呼び求めよう。（詩篇 116・1、2）

私は中三のときから、声楽を学んでいます。不思議なことですが、自分の力で頑張ったり、自分自身で切り開いていこうとする前に、イエス様が先に立って道を作ってくださって、その後に私はついていくようにされます。もし自分で何かをしようとすると、例えば練習をもう少しちゃんとやろうと思い自分で決意してやると、必ず風邪をひいたりしてその行動は妨げられます。ただ主イエス様にすべて委ねて「何をしたらよいかわかりませんから、教えてください。どうかあなたがやってください」と祈ると、楽に歌えます。声楽を始めることになったのもそうです。音楽の先生が勧めてくださり、そういう音楽の分野があることも知らず、言われるままに専門の先生のレッスンに行きました。そこでその先生から、「体が大きいのはいいことですよ。声楽をす

るのに重要なことです」と言われました。体のことでずっとコンプレックスを持っていて、主イエス様を知ってからも主に「どうして私の体は大きいのですか」と祈っていた私でしたが、「これはきっと何かご計画があるにちがいない」と思えるようになっていましたので、「ああこのためだったのか」と感謝しました。

一九九四年ドイツのよろこびの集いに参加して、主を賛美し歌うことの喜びを体験することができました。また声楽の訓練も、主を賛美するための手段だということがはっきり示され、この声楽の学びは私のものではなく、主イエス様が栄光をお受けになるためのものだということがわかり、嬉しくなりました。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。
主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。
（詩篇 103・1～5）



すべてを支配しておられる主

藤井嘉也

一九七五年埼玉県与野市に生まれる。春日部市立立野小、大増中、県立大宮光陵高校音楽科卒業。現在浪人中。

僕が幼いときに両親がイエス様に救われ、四歳になって教会の幼稚園に行くようになりました。先生も優しく、毎日聖書の話を聞き、自分も救われていると思うようになりました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

僕はよく嘘をつきました。小学生だったある日、母親に対して一日に嘘を二回つきました。母親はそのことを知ったとき、すごく怒って家のベランダに僕を追い出しました。僕はすごく不思議に思いました。なぜ嘘を二回ついただけでこんな罰を受けなければならないのかと。その時は夕方でだんだん暗くなり淋しくなってきました。ふと思い出しました。イエス様は人間みんなの罪の身代りとして十字架にかかったことを。嘘二回でこんなに淋しい思いをするのなら、全世界

の罪だとどのような思いで罰を受けられたのかと。僕がおかした罪は今日の嘘一回だけでなくもっとたくさんあったことも気づかされました。本当にイエス様に、ごめんなさいをすることができました。

やがて母親が窓を開けてくれ、泣いて謝ることができました。それからしばらくは本当にうれしい気持ちで毎日暮らしていましたが、教会に行っているうちに、だんだん喜びがなくなってきたように思います。

やがて、僕が高校に入るころに家族全員が教会を離れ、キリスト集会に行くようになりました。それからイエス様は僕の一番苦手なところを試されました。それは女性関係でした。高校に入り、まだイエス様のことを個人的に知らない人とつきあい始めていました。なにかよくわからない中で、平安なし、喜びなし、希望なしの状態が続きました。やはり土台としているものが違うからだと思いました。やがて父親から別れるように言われ、僕はまだイエス様のことを伝えたいから別れたくないと反発しましたが、その反発は実は自分のプライドや世間体からきていることでした。そのことに気づかされたときは本当にショックでした。今まですべて口だけの信仰で本当はイエス様を無視していたことを悔い改めました。泣けに泣けました。自分のものをすべて失ったような気がしましたが実は違っていました。

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ　6・33）



◀左から二人め真奈さん。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ　8・32）

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

（Ⅰペテロ　5・7）

イエス様はすばらしい

藤井 真奈

一九八四年二月二日春日部市に生まれる。春日部市立内牧小学校五年生。家族は父保夫さん、姉奈生子さん、兄嘉也さん、祖母玉枝さん。

私はお母さんのおなかにいたときから、教会に通っていました。お父さんも、お母さんも、お兄ちゃんも、お姉ちゃんも、家族みんなが通っていました。

ようち園も教会だったので、日曜日、れいはいに行って月曜日がお休みでうれしかったし、小学校に上がり、教会のタンブリン隊に入れてとてもうれしかった。でも、お父さんたちが教会でどんなことをしているのか知らなかったです。

私が初めてキリスト集会にきたのは、小学校一年生のときです。

お父さんに「これからはキリスト集会に行く。」と言われたときは、教会の友だちと別れるのがいやで「行きたくない。」とわがままを言って泣いてしまいました。

吉じょうじキリスト集会にはじめて来たときは、やっぱり友だちもいなかったからつまらなかった。でも何回か行ったとき、あまり遊んだことがなかったけど、教会にいたときのきみえちゃん、あゆみちゃん、きょうこちゃんがいました。そのときは、イエス様がしてくれたことだなんて思いませんでした。

それからずっと、キリスト集会に来るのが楽しくなった。友だちができたから楽しくなったなんて、やっぱりわがままだと思います。

しばらく吉じょうじキリスト集会に行ってたけど、春日部にもキリスト集会ができました。このときはじめて、イエス様がしてくれたことなんだなって実感しました。

毎週、春日部キリスト集会に行っているうちに、前の教会の友達がたくさん集会に来ました。とってもうれしかった。わがままを言う私を、神様はちゃんと守り、愛してくださっているんだなあって集会に来て初めて知りました。私は教会にいたときは、イエス様に一人でおいのりして、かんしゃしたり、あやまることなんて知らなかった。でも、今はすっごく神様にたよれることを

知って、ほんとにうれしいです。

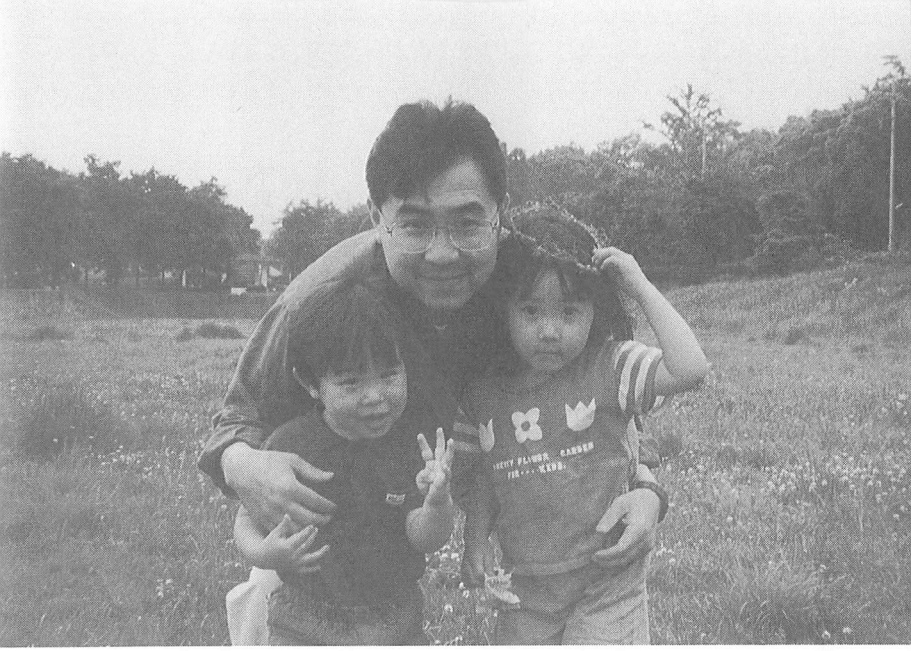
つらいときだっておいのりすれば、イエス様が守ってくださいます。

集会に来てすごいぐうぜんがいくつもありました。たとえば、初めて集会に来た人の友だちがお母さんの友だちの妹さんだったとか、こんな風にすごいぐうぜんがいくつもありました。こんなすごいことも、私たちを造ってくださった神様がしているんだなあって思いました。

私は友だちにすばらしいイエス様のことを教えてあげようと思い、イエス様のことをその友だちに言ってみました。そうしたら、その子はイエス様のことを知っていました。春日部キリスト集会がかりているようち園に行っていたそうです。

こんな風にイエス様はとてもすばらしいこと、すごいことを、こんな私にたくさんしてくれています。神様は本当に、すばらしい方です。

私たちを造ってくださった神様は、私にえいえんのいのちをくださいました。



▲守ちゃん、ひとみちゃんと。

薬物依存からの解放

須藤 辰郎

一九五四年熊本県菊池市に生まれる。隈府小、中、菊地高校、京都芸術大学フルート科卒業。名古屋フィルハーモニー交響楽団入団。文化庁派遣留学生としてドイツに留学。現在、東京ＳＩＭ外語研究所に勤務。家族は妻セツ子さん、長女ひとみさん、長男守さん。

「須藤さんは薬をやめるべきだと思いますよ」。
ある方の言葉を聞いた時、私は一瞬ドキリとしました。
驚きましたが、なぜか反発する思いはありませんでした。むしろ、来るべきものが来たという不思議な安堵感に包まれました。
「これは主の導きだ…」
私はポケットに忍ばせていた数粒の白い薬を取り出し、すべてを窓から捨てました。
爽快でした。

その日私は、全く別の用件でその方と話をしていました。話しているうちに、いつの間にか私の薬のことが問題になったのです。思いがけない展開にびっくりしながらも、私はその方の言葉に従い薬をやめる決心をしました。
大いなるチャレンジの開始は、大いなる試練の始まりでもありました。やっと薬の影響が体から抜けた半年後の今、当時をふり返ると、自分は本当に大変なところから救い出されたものだと思います。
主の完全な導きに感謝し、主の御名を心から賛美します。

私の薬歴

それまでの私は、二十年の間ノイローゼの薬、精神安定剤を飲み続けていました。飲まずには

二日ともちません。安定剤なしでは人に対する極度の緊張で話すことさえできず、仕事も手がつかなくなるのです。飲むと少し落ち着き、外に出ることができました。

私の一日は薬を飲むことから始まりました。まず、朝起きぬけに一、二錠飲んで気持ちを安定させます。フワフワした頭で出勤し、十時、昼、就寝前と数回に分け、薬が切れて頭が冴えてくる頃に飲みます。頭が冴えると恐怖感も強くなるのです。さらに何かプレッシャーを感じるようなことがある日は量を増やしました。薬で酔っぱらってやり過ごすわけです。ズボンのポケットにはいつも薬があり、そこから少しずつ取り出してはカリカリと噛っていました。恥ずかしいので、人目を盗んで飲んでいました。

薬をやめようと思ったことは、それまでに何度かありました。信仰を与えられた後のことです。神を信じていながら薬に頼ることに矛盾を感じるようになり、薬を断とうと試みました。

一度に全部をやめるのは危険なので、一カ月に一錠のペースで減らす計画を立てました。当時、デパスという安定剤を一日八錠飲んでいましたから、八カ月でやめられる勘定です。最初の一、二カ月は大変うまくいきました。そのまま時間とともにやめられそうな気がしました。しかし、三カ月目くらいからおかしくなりました。うつ感が出て、仕事をするのがつらくなりました。薬の量が半分になる頃には、苦痛は耐えがたいものになりました。あまりの苦しさに薬の量を元に戻さざるをえませんでした。そんな時の薬は苦い挫折の味がしました。自分はつくづくダメな奴だと思いました。

彼らに起こったことは、「犬は自分の吐いた物に戻る。」とか、「豚は身を洗って、また

どろの中にころがる。」とかいう、ことわざどおりです。（IIペテロ　2・22）

その後も私は何度か薬をやめようとしましたが、ことごとく失敗しました。ところが恐ろしいことに、失敗をくり返しているうちに私は薬と妥協するようになりました。薬は主が与えてくださった松葉杖だ、と正当化して考えるようになったのです。みこころの時がくれば、主が取り去ってくださる。しかし今は松葉杖である薬が必要だ、と自分を納得させて私は薬を飲み続けました。周囲の方にも理屈を言うようになりました。「薬を飲むことについて神との間に平安があります。これは私と主との間の問題です」と言っていました。

彼らは…平安がないのに、「平安だ、平安だ。」と言っている。（エレミヤ　6・14）

自分の立場を弁護するためには、ありとあらゆる自分に都合のいいみことばを引用しました。一方、神様に対しては「何があっても薬は飲みます、飲んだ後で従います」という態度でした。主に従いたいと口先では言いながら、みこころとは関係なく内心どんな手段を講じてでも私は薬を飲みたいと願っていました。

「この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。」（マルコ　7・6）

薬なしの生活など恐ろしくて考えられませんでした。私は一生飲みつづけるかもしれない。で

もまあ、それはそれでいいじゃないかと思いました。この問題には誰にも触れてほしくありませんでした。

私は完全な薬物依存症でした。

ノイローゼの発病

私が薬を飲むようになった直接の理由は、ノイローゼです。ノイローゼの発病は大学二年生の秋にさかのぼります。当時の私は、京都の音楽大学で熱心にフルートの練習に明け暮れる学生でした。

長い夏休みが終わって、久しぶりに級友と会った時のことです。私は人とコミュニケーションがうまくできない自分を発見しました。何か自分の中に不自然なこだわりがあるのです。それが何なのか全く分かりませんが、気になってしまい、自然な会話ができません。級友たちの笑いの渦の中で、どうしても話題についていけない自分を意識して、あせりました。疲れているのだと思い、あまり心配しないようにしましたが、「不調」はその後、どんどんエスカレートしていきました。

たとえば道を歩いている時、知っている人が向こうから歩いてくるのが何ともいえず恐ろしくなりました。そのような状況であいさつするのがわけもなく恐いのです。自意識が異常に強くなり、自然に話すこと、自然な表情をすることができません。

それまで自分のことは自分でコントロールできると信じていました。表情も口調も、自分の思

い通りにあやつっていましたし、そのことを意識もしませんでした。しかし、ひとたび気になりだすともう自然でいることはできません。何ごともなく談笑する人々の中で、ひとりパニックに陥っている自分がとても異常に思えました。人間関係のすべては恐怖そのものになってしまいました。

私は悩んだ末に病院に行くことにしました。

「ああそれにしても、僕はいったいどうしたんだろう。これからいったいどうなるのだろう」。

京大病院精神科の待合室に座り、考えることは自分のゆく末でした。周囲は明らかにおかしいと分かる人たちばかりでした。自分もあのようになってしまうのかと思うと、際限もなく心が暗くなりました。診察の結果、私はノイローゼと診断されました。

ノイローゼのルーツ

今になってノイローゼという病気にかかった理由を考えると、はるか昔の私の幼年時代にルーツがあるような気がします。

子供の頃、私の両親は仲がよくありませんでした。あまり記憶には残っていませんが、いつも喧嘩が絶えませんでした。私が五歳の時にとうとう両親は離婚してしまいました。安定感のない家庭で、私は情緒不安定気味に育ちました。愛情飢餓の私は、愛されること、好かれることを異常に求めました。好かれるために、自分本来の感情を押し殺し、置かれている状況に応じて自分を変えました。私の最大の関心は「評価されること」でした。ほとんどその喜びのために生きて

いました。このゆがんだ価値観が私の人生を誤らせてしまったのです。

何をするにも、人に見られている自分、というものがありました。たとえば私のフルートも、自分が演奏して楽しむためというより、人に聴いてもらってほめられるためにありました。練習もそばに人がいると張り切り、人がいなくなるととたんに興味がなくなりました。このように、私にとっては音楽さえも人に評価されるための道具だったのです。

評価されることで自分を高め、自分の安定を保っていた私は、逆に評価を失うこと、失敗を極度に恐れるようになりました。好かれることを追求するあまり、嫌われることが何よりも恐ろしくなりました。失敗すること、嫌われることをまず恐れるような人づきあいでしたから大変に疲れました。この不自然な構えがプレッシャーとなり、ノイローゼを引き起こしたのだと思います。

あがない主イエス・キリストとの出会い

ノイローゼと診断されてから数年後に、私は薬を飲むようになりました。

当時私は大学を卒業して、名古屋のオーケストラでフルート奏者をしていました。社会の荒波にもまれて神経を鍛え直さなくてはと、決死の思いのオーケストラ入団でした。しかし、その生活は今までに輪をかけてつらいものでした。対人恐怖の上にさらにステージ恐怖が加わり、まさに青息吐息の毎日でした。

その頃たまたま、通っていた病院から出された精神安定剤が劇的に効きました。その薬を飲むと恐怖が著しく緩和するのです。大事なソロがある日は薬をザラザラと食べるように飲みました。

薬で酩酊して臨むとなんとかうまくいきました。対人恐怖の苦しみはだいぶ楽になり、薬さえあれば大丈夫だという奇妙な自信がつきました。

ノイローゼの苦しみが薬によって緩和された頃、あらたな悩みが持ちあがりました。フルーティストとしての仕事にいきづまりを感じるようになったのです。専門的なことになりますので詳しくは書きませんが、演奏テクニックの上での問題でした。この問題を解決するために、私は留学を決意しました。

留学先はドイツのシュツットガルトでした。基礎から勉強し直して、再出発するつもりでした。しかし私は、そこでフルーティストとして完全に破綻しました。師事した先生の奏法に自分の奏法を無理に合わせようとしたため、まともな音が出なくなったのです。私は目の前が真っ暗になりました。ノイローゼの私には、まがりなりにもフルートを吹けることが唯一の誇りでした。フルートは私にとって最後の砦でした。その誇りがこなごなに砕かれてしまいました。

宣教師であるベックさんにお会いしたのはこのような時です。

力強い握手と、どこまでも優しい笑顔が印象的な方でした。人間を根本的なところで拒否して生きていた私でしたが、ベックさんにはすぐ心を開くことができました。すべての希望が断たれてしまい、自分にも人にも失望していた私に、ベックさんの優しさがしみました。聖書はあまり分かりませんでしたが、ベックさんから放射される圧倒的な愛の背後に神の存在をおぼろげながら感じました。

「イエス様、聖書はよく分かりませんが、これからはあなたに従います」。

ベックさんの後について祈ると、不思議なことに涙があふれてとまらなくなりました。肩の重荷がスーッとおりた気がしました。祈った後は、張りつめていた気持ちがいっぺんにゆるみ、こんなに安心していいのだろうかといぶかしく思うほどでした。

「確かに僕はもうひとりぼっちではないんだ、天のお父様がいらっしゃるんだ」という思いが与えられました。孤独感はいやされ、かつて感じたことのない喜びがこみあげてきました。世界は洗われたように美しく見えました。私は救われたのです。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ　10・10）

当時をふり返ると、私の留学地シュツットガルトがベックさんの故郷だったこと。ふだんは日本で宣教しておられるベックさんが、その時はシュツットガルトに帰省していらしたこと。そのベックさんに引き合わせてくださる人がいたことなど、とても偶然とは思えません。すべては主のご計画でした。

一年の留学期間が終わり、私は日本に帰りました。ドイツに行く前とはうって変わって、私は別人のように明るい人間になっていました。

オーケストラはフルートが吹けなくなったためにやめました。生活が成り立つか心配でしたが、仕事のことも主は完全に守ってくださいました。導かれて東京ＳＩＭ外語研究所に就職させていただきました。新しい仕事は、今までとは全く毛色の違う企画宣伝でしたが、主は仕事をしていくのに必要な能力をも与えてくださいました。数年後には、セツ子といういい伴侶を賜わりまし

た。この結婚は主からの最大の賜物でした。そして子供も二人与えられました。またフルートの方も少しずつ音が出るようになりました。

このような者でも主を信じた時、主は大いに祝福してくださったのです。

薬からの解放

しかし、相変わらず私は薬を飲み続けていました。主はこの問題をそのままにしておかれませんでした。

まず主は、次のみことばをもって私に迫られました。

わたしの民は二つの悪を行なった。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。

（エレミヤ　2・13）

水ためとは薬、湧き水とはイエス様だと示されました。無尽蔵の湧き水がそばにあれば、私たちは水に不自由しないはずです。苦労して水ためを掘る必要もないはずです。恐れを取り去ってくださる万軍の主がついておられるのに、どうして私は薬を飲んで恐怖を押さえなければならないでしょう。

「よろこびへのコンサート」でフルートを演奏した時も、私は薬を飲みました。大量の薬のために体はふらふらでした。演奏した後、主は喜んでおられるはずがないと思いました。この日に

向けて苦労して練習したのに、ただうしろめたさだけが残りました。

主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。

（Ⅰサムエル　15・22）

ついで主は、ある方を通してはっきりと薬を断つように迫られました。冒頭に書いたとおりです。薬をやめる恐怖は、たとえばしっかりとしがみついているはしごから手を放すようなものでした。でも、手を放したらイエス様が抱きとめてくださるようにも思えました。私はイエス様だけに頼りたいと強く思いました。その方も「主に従うと責任はすべて取ってくださいますよ」と励ましてくださいました。私は思いきって薬をやめる決心をしました。一九九四年二月二十七日のことです。

薬を完全に断った翌日、会社から帰った私は、ひきつけ発作を起こし口からあわをふいて気絶しました。私はそのまま自宅で床につきました。全く眠れない、食事もできない日々が始まりました。目に入るものがギラギラとまぶしく、あらゆる音が耳に突き刺さるように痛く感じました。布団を頭からかぶり、耳せんをして、ひどい頭痛と吐き気に耐えました。ひきつけの後遺症で全身の筋肉が痛く、特に胸のあたりの筋肉が全く動かず、満足に呼吸することさえできませんでした。少し大きく息をすると激痛が走りました。身の置きどころのない苦痛の中で、私は、助けてくださいと祈るばかりでした。

この禁断症状は数日たつとしだいに軽くなりました。わずかに眠れるようになり、少しずつおかゆを食べられるようになりました。しかし、めまいを伴う自律神経の不調が強く出て、二週間たっても床を離れることができずにいました。

薬を断った私にとって恐ろしかったのは、実は禁断症状ではありません。禁断症状はいつかおさまるでしょう。私が真に恐れたのは、やがてしなければならない薬なしの社会復帰でした。薬を飲んでいたからこそ耐えられた社会生活でした。薬なしの社会生活など想像するだけで恐怖でした。それは、よろいを着ないで戦場に出るようなものでした。キリスト集会はともかく、会社に行くことはまず不可能に思えました。しばらく休むつもりの会社でしたが、内心ではいつまでも、できれば一生行きたくないと思っていました。

薬を断って二週間後、私は会社に一カ月の病欠を願い出ました。休みをいただけることになり、とりあえずほっとしました。一カ月過ぎたら延長するつもりでした。その日の午後、別のある方からお電話がありました。

その方は私の状態を聞いた上で、こうおっしゃいました。

「そろそろ起きてもいいのではないですか」。

私は耳を疑いました。現実問題として、私は布団をかぶって寝ていたからです。その方の言葉はとても厳しいものに思えました。その方はさらに、現実を見ないこと、信仰だけに立つことを噛んで含めるように話してくださいました。お話を聞いているうちに突然、心の中にひとつのみことばが響いてきました。

「起きなさい。寝床をたたんで…」。

マタイの福音書9章6節の中風の人へのイエス様の言葉です。私は胸が熱くなりました。みことばだけに立ちたいと強く思いました。

私は意を決して床を上げ、外に出ました。体は少しふらふらしましたが、不思議にめまいはなくなっていました。歩くのもやっとだった私が、自転車に乗って近くの公園まで行くことができました。春の気配を含んだ風の中の白梅が揺れていました。すべてのいのちのあるものに主の祝福を感じました。嬉しくなった私は、久しぶりにおなかが空いて、公園の帰りに食堂に寄りました。おかゆしか食べられなかった私が、定食を一人前たいらげました。

こうなると欲が出ました。私は一番恐れていたこと、会社に行くことを考えました。ついさきほどまで布団をかぶって寝ていた私です。そんな私に信じられない奇蹟が起こりました。私はその翌週から会社に行くことができたのです。会社ではしばらくつらい思いをしましたが、耐えられないほどではありませんでした。

…神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

完全な主の勝利でした。主を信頼した時、主は先立って歩んでくださり、手を取って導いてく

ださり、完全な勝利を与えてくださったのです。主が私に要求されたのは、握りしめていたものを捨てること、そして待つことでした。

一年後の今、私は以前にもまして元気です。顔色もよくなり、心身ともに抵抗力がつきました。薬なしでは二日ももたなかったのに、薬なしで全く何の問題もありません。あんなに苦しんだノイローゼも、今の私にはほとんど問題ではありません。

誤解のないように書き添えますが、私は一般論として「薬はどんな場合でもやめるべきである」と言っているのではありません。私はこの証しをあくまでも個人的な体験として書いています。私たちの行動に真に影響力を持つものは、人間ではなくただ主おひとりだけなのです。

悔い改め

私は薬を飲んでいる間、薬は松葉杖であると固く信じていました。しかし薬をやめた今、自分には薬など一粒も必要なかったことが分かりました。なぜなら現在私は全く飲まずにいられるからです。これは事実であり、事実ほど強いものはありません。では以前は必要だったのでしょうか。これも私には疑わしいのです。いったん薬に手を出すと、薬は絶対必要なものに思えてきます。薬の怖いところです。必要がないのに薬を飲んでいたのかもしれないのです。今の私は、薬は必要がないどころかむしろ有害であると思います。薬は恐怖をまひさせると同時に、霊的なまひをもたらすからです。飲んでいる頃、私は自分の霊的な状態についてきわめて鈍感でした。

たとえば飲酒のこと。

私は薬をやめるまで晩酌するのが常でした。しかし信仰が動機でないものは、みな罪なのです。私の場合、晩酌は生活のつらさをまぎらすためでした。会社でいやなことがあっても、酒を飲んで寝てしまえば楽でした。その結果、みことばに頼り、祈ることが非常に少なくなりました。

…信仰から出ていないことは、みな罪です。

（ローマ　14・23）

また音楽のこと

私にとって音楽は単なる楽しみ以上のものでした。人生のいろいろな局面で、音楽を聞くことにより私は慰められ勇気づけられました。音楽は主の賜物でした。しかし、それを自己目的として追求した時、音楽は偶像になりました。よいCDレコードを手に入れると、さらに別のCDが欲しくなりました。買っても買っても私は満足するということがありませんでした。しばしば、私の頭の中は欲しいCDのことで一杯でした。

…むさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。

（コロサイ　3・5）

これに加えて高慢の罪があります。

家庭で、集会で、会社で、生活のいたる場所で、私は信仰者とは言いがたいほど高慢な者でした。家庭では自分の思いどおりにならないとすぐカッとなって怒り、時には手が出ました。集会では自分を過信し、押し通し、自分と考えの違う人をさばきました。会社では上司を批判し、同僚や部下に冷たく、取引先の方々には尊大に接しました。

高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。怒る者は争いを引き起こし、憤る者は多くのそむきの罪を犯す。（箴言　16・18、29・22）

主か自分か

薬をやめることがすべての突破口でした。飲んでいる時はこれらの罪が見えませんでした。薬を断ち、頭がはっきりして初めて、罪にまみれた自分の姿がどっと一度に見えてきました。禁断症状で床についた頃でした。私は号泣しながら悔い改めました。

しかしやがて、これらの罪はごく表面的なものであることが分かりました。私は罪の奥に存在する、非常に凶悪で恐ろしい罪の根を示されたのです。それは「自我」という怪物です。

私たちは、主に従うか自分に従うかのどちらかなのです。私は主に従うと言いながら、実は「薬だけは何があっても飲みます」という自分の意志に従って歩んでいました。私が喜ばせたかったのはイエス様ではなく自分自身でした。神を信じると言いながら、私の神は結局「自我」でした。恐ろしい神への反逆でした。

あなたは心の中で言った。「私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。」しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。（イザヤ　14・13～15）

この記述はサタン（悪魔）についての預言です。サタンは神と対極にある忌み嫌うべき存在で

すが、何とサタンの性質が私のうちにあったのです。これは戦慄すべき事実です。

自我に従う時、人間は不幸になります。私が自我に従った結果は、薬物依存、むさぼり、姦淫、高慢でした。しかし信仰は自我に従うのとは違う別の道を指し示します。自我に従わず神に従う生き方です。救われて十年目に、やっと私は正しい信仰のあり方を学びました。信仰とは、単純に「神を神として従うこと」だったのです。

主の十字架の意味

それでは私は、このように真の信仰の目を開かれたので、今からは完全に主に従うことができるのでしょうか。

残念ながらそうではありません。私の本質はあいかわらず不従順であり、自分の意志に従うのが大好きなのです。主に従いたいと切望している私の内側に、それと正反対の思いがあるのです。

私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

（ローマ　7・19）

私は本当にみじめな人間です

でも、このようなみじめな私のためにイエス・キリストの十字架があったのです。私は主の血潮によってのみ永遠に赦されていることを心から感謝します。私の赦しの根拠は、ただこの点だけなのです。私の努力はそこに何の益ももたらしません。私は主のために何もできないことを主

の前に泣く者です。本当にふがいない人間です。しかしみまえにひれ伏して泣く私に、イエス様は優しくこうおっしゃってくださるのです。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

そして主は、主のために何ひとつよいわざをなしえない私に、「わたしがします」と力強くおっしゃってくださいます。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

さらに、良い行ないについてはすでにそれが備えられているとも書いてあります。

…神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。（エペソ　2・10）

私に求められていることは、苦労して何か良い行ないをすることではなく、備えられた良い行ないに歩むことだけなのです。

私は救われた後もあいかわらずだめな人間です。しかし、こんな私でも、イエス様は愛してくださり、丸ごと受け入れてくださるお方であることを私は知っています。素晴らしいのは古今東



▲結婚式で。

西、世界中ただイエス様おひとりだけなのです。

私はこのお方を愛しています。

私のためにすべてを備えてくださるイエス様は、天国をも備えておられます。やがて天国で、私はこのお方の御顔を拝し、永遠にみそばに生きることができます。その日を心待ちにする毎日です。



▲セツ子さんとお父さまの桂一郎さん。

ただ主の憐れみゆえに

須藤セツ子

一九六一年福島県石川町に生まれる。石川町立石川小、石川中、福島県立石川高、津田スクールオブビジネス卒。小金井製作所、福島県南酒販、クラフト勤務の後結婚。家族は夫辰郎さん、長女ひとみさん、長男守さん。

父の死

親から離れれば自由が得られる。東京という多彩な価値観が共存する場所なら自由を満喫できるに違いない。私は希望に満ちあふれて上京しました。しかし、そこは狼が行きつ戻りつする荒野でした。若くて世間知らずの私は道を踏み外してはじめてそのことに気づきました。主は、自分の犯した罪の大きさにうちひしがれる私を見いだし、イエス様という囲いの中に入れてくださいました。イエス様が私の牧者となってくださり、今、私はほんとうの自由を得ています。

愚かでわがままな一匹の小羊を、主がどこまでも捜し歩いてくださった道程と、憐れみによって私に与えられた恵みを、ここに証ししようと思います。

一九八四年、父桂一郎はがんに冒され、三カ月の入院の後この世を去りました。当時四十八歳、頑健で働き盛りの父にそんなことが起こるとは思いもよりませんでした。父の死は家族にとって大きな悲しみだったばかりでなく、次々と起きてくる問題との戦いの始まりでもありました。家族が一つになって乗り越えなければならない時でした。けれども、当時二十三歳の私は、東京でのOL生活を捨てることができず、母や妹にすべての重荷を押しつける結果になってしまいました。まさに自己中心の塊でした。

キリスト集会との出会い

父の葬儀の数カ月後、私は勤めていた会社の仕事で聖書の購入を依頼されました。聖書といってもたくさん種類がある中でどれを購入してよいか分からなかった私は、クリスチャンである叔母に相談することを思いつきました。

父の弟嫁である叔母の小池さんがクリスチャンであることを知ったのは、父の通夜の時でした。親戚たちの前で、申しわけなさそうにお焼香を断っている姿を遠目に見て、クリスチャンはお焼香をしないということを、はじめて知りました

この叔母に聖書のことで電話をすると、「キリスト集会に行ってみない」と誘われました。私はキリスト集会という所を一度のぞいてみてもいいと思いました。

見物程度の軽い気持ちで行ってみたキリスト集会の雰囲気は、静寂な中にも明るく清らかで、私にはそぐわない所のような気がしました。ここにいる人々の持つ、突き抜けたような明るさは

何だろうと思いました。

このキリスト集会は、組織も宗派もなく、ただ聖書を拠り所とする集いであること。また聖書でいう教会とは、組織ではなく、「神を信じる者の群れ」であり、組織としての教会に入って会員になることと、まことの信仰を持つこととは本来関係がないものであることなどを叔母は語ってくれました。叔母の静かな語り口からは真摯な神への畏れが伝わってきました。それまで叔母の人柄についても、またキリスト集会についてもほとんど知る機会のなかった私でしたが、その両方に引かれるものを感じました。そして、いつしか毎週のように日曜礼拝に集うようになっていました。といっても、気ままな時間に訪れ、集会の片隅に座り、礼拝も福音集会も居眠りばかり。それなのになぜ貴重な休日にそこに足を運ぶのか、自分でも分かりませんでした。

ある時叔母が、江藤さんの奥様とともに入院中の父を見舞った時のことを話してくれました。叔母たちが父に、「イエス様は桂一郎さんの罪のために十字架にかかってくださったのですよ。イエス様に、私の罪を赦してくださいと祈れば、赦されるのですよ」と言うと、父は目を閉じて胸の上で手を組み、「信じます。信じます」と答えたそうです。私は実際に自分で見たように、その時の父の姿が目に浮かぶようでした。

キリスト集会の祈り会では父の救いが祈られていたこと、またベックさんも父を見舞ってくださるつもりでいらしたことを聞きました。

光をとるか闇をとるか

その後叔母から「ベックさんとお会いしてみない？」と言われました。とたんに洋画で見た「ざんげのシーン」が頭をかすめました。内心は怖くてしかたがありませんでした。なぜなら、私には人に知られたくない罪があったからです。それでも断れずにいると、いよいよベックさんと一対一でお話する日がきてしまいました。「誰かに、心の奥に隠している罪を告白できたらどんなに楽になれるだろう、ベックさんにお話できたら何かが変わるかもしれない」と思いながらも、この時はとうとう本当の悩みは話せませんでした。のどまで出かかったのですが、できませんでした。ベックさんと叔母が知りあいでなければ話せたかもしれません。叔母の口から母に漏れることを非常に恐れたために、私は言葉を飲みこんでしまったのです。

ベックさんに出会って、私は「この方の持つ真実な香りは何だろう。この方が信じているという聖書は真理かもしれない」と思いました。そして、このままキリスト集会に来ていたらいつか神様の存在を認めざるをえなくなる予感がしました。私の行なっていることの何もかもを知っている方がいるとしたら…。私は恐れました。人は欺けても神は欺けません。神様がいてもらっては困る、と思いました。

キリスト集会は光の中を歩む人の来る場所。それなのに、私の実生活は闇そのものでした。一時の安らぎを求めて集会に来ても、闇の生活が待っていました。光と闇の両方を行ったり来たりする矛盾に疲れ、私は自分自身に尋ねました。私はいったい何を望んでいるのか。どちらを選びたいのか。「光の中を歩みたい！」私の魂は叫んでいました。けれども闇、つまり罪の引力に私は打ち勝つことができませんでした。

キリスト集会から逃げよう。そう決心して、それからは叔母や集会の方々からどんなお誘いがあっても行くことはありませんでした。

東京から福島へ

光よりも闇を選ぶしかない。地獄に落ちてもそれも仕方がないではないか。そんな心境でキリスト集会を去ってから、主の懲らしめは大変なものでした。嘘が嘘を、罪が罪を呼び、良心の呵責は頂点をきわめました。夜は泣きながら眠り、夢うつつに、亡くなった父や残された母のことを思いました。蟻地獄に落ちた蟻とは私のことでした。地獄の恐ろしさを甘く見ていたのです。そんな所に行けるほど私は強くはなかったのです。もがき苦しみながら叫びました。

「誰かここから助けて！」

あなたの憤りのため、私の肉には完全なところがなく、私の罪のため私の骨には健全なところがありません。私の咎が、私の頭を越え、重荷のように、私には重すぎるからです。私の傷は、悪臭を放ち、ただれました。それは私の愚かしさのためです。私はかがみ、深くうなだれ、一日中、嘆いて歩いています。（詩篇　38・3～6）

その頃、福島の実家に問題が起きて、私が帰らなければどうしようもなくなりました。東京を離れない限り泥沼から抜けだすことのできない私への、救いの第一歩でした。私はとうとう潮時が来たことを悟り、東京を引き払いました。

叔母やベックさんとの再会

実家で起きた問題とは、家族にとって最も大切なひとりの女性を、「教会」という名を詐称したある新興宗教に奪われたことでした。彼女の変貌を目のあたりにした時、私は問題の大きさに途方にくれました。母と顔を見あわせては泣いていました。私は再び叔母に電話しました。

叔母と話すのは三年ぶりでした。キリスト集会や叔母を避けていたくせに、困った時だけ連絡をするような私にも、叔母は親身になって相談に乗ってくれました。その結果、叔母がベックさんといっしょにわが家に来てくださることになりました。私はこのチャンスを逃すまいと、ベックさんがいらっしゃることを言わずに彼女を呼びよせました。ベックさんを見た彼女は、表情を固くして、終始無言でした。私たちの言葉がまったく届かないのがよく分かりました。ベックさんは彼女の様子をただ黙って見つめておられ、「彼女は話してわかる段階を過ぎてしまっています。祈るしかない」とおっしゃるのです。まだ神様の存在と力を知らない私には、それが物足りない言葉に思えました。叔母や江藤さんの奥様の、「毎日時間を定めていっしょに祈りましょう」という言葉に、しかたなくうなずきました。

この時のベックさんとの再会は、私にとってとても嬉しいことでした。心にパッと灯がともったようでした。ベックさんは「愛するセツ子」と私を呼び、抱きしめてくださいました。そのようなしぐさは西洋人だからできることでしょうが、内側から溢れでる愛を感じました。

その後、わが家の問題は、祖父の入院、私の交通事故と、さらに増えていきました。心配した

祖母が「カミサマ」という占い師に伺いをたてると、「これこれのことをしなければ次は誰かに不幸が見舞う」という答が返ってきました。また、親切心から家相を見てくださる方もありました。その方はこう言いました。「私には普通の人間には分からないことが分かります。ただしこの能力をお金のために用いることはできません。人を助けるために用います。助言を得たいなら、私がしなさいということを忠実に行なってください。あなたがそれを忠実に行なわないならば、私の体が病を負ったりすることになりますから注意してください」。

私はこれを聞いて、今まで知らなかった不気味な世界を見せられた気がしました。以上の二種類の占いのいずれをも信じられませんでしたが、かといって反証することもできません。ただ不気味な力の存在を感じました。

ベックさんが再びわが家を訪ねてくださったのはこのような時でした。

私は尋ねました。「悪霊はいるのでしょうか。親切に家相を見てくれた方があったのですが、その方のお話に従おうと思うと不快になるのです。どうしたらよいでしょうか。わが家にだけ不幸なことが起きるのはなぜでしょうか。」

ベックさんは、「悪霊はいます。そういう占いをする人には、『イエス様だけで十分です』と言えばいい」と答えてくださいました。また「あなたと家族は主に大いに愛されています。ドイツ語で不幸とは本物を得るための道しるべという意味があるのです」ともおっしゃいました。

それまで、不幸は呪いの現れであるという認識しかありませんでしたから、「神に愛されている」ということは、まったく意外な言葉でした。私は内心、わが家のトラブルの本当の原因は、

過去に犯した自分の罪にあるのではないかと恐れていました。それなのに、ベックさんのおっしゃることはまったく逆なのです。この時はじめて、私の中に「真理を知りたい」という思いが生まれました。悪霊がいるのなら聖い神もいらっしゃるはず。神が本当におられるのかどうか、それが私にとって最大の問題になりました。その答を知らなければ、もう一歩も進めませんでした。

神の救い

そんな時、江藤さんの奥様が電話をくださいました。「キリスト集会の皆さんのように、神様の存在を信じたいのですけど、信じられません」という私に、江藤さんは「信じたいのならそう祈ってごらんなさい」とおっしゃいました。

私は祈りました。「神様が本当にいらっしゃるのでしたら、信じられるようにしてください」。そう祈った三日後のことです。数日来読んでいた本の中の数行が目に止まりました。それは真っ暗だった私の心に、一筋の光となって届きました。次の聖句でした。

神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。
（ローマ　12・3）

聖書は「おのおのに分け与えてくださった『信仰』の量りに応じて」と語っています。叔母やベックさんから聖書の「信仰」とこの世のいわゆる「宗教」とはまったく違うと聞いてはいましたが、この時、聖書のみことばが直接私に語りかけ、その違いを示してくださったのです。

「いわゆる『宗教』とは人間が作ったもので、人間をお造りになった神とはあい反するものです。また『宗教』は人間にお金や行ないを要求します。けれども、まことの神は、人間に与えたくて与えたくて仕方がないお方です。この世では人間がまことの神の所に来るのを妨げようとする力が働いています。『宗教』もその一つです」と、ベックさんが以前話してくださったことを思い出しました。

不吉な予言によって私たち家族を恐怖に陥れ、私たちを恐怖で縛ろうとする宗教や迷信の働きかけがあったのも、神に敵対する悪霊が存在するからと考えればつじつまが合います。私の頭の中で、すべてのできごとが一つにつながりました。

「神様がいらしたからなのですね。ありがとうございます、ありがとうございます」。私は祈りともつかず祈りました。すると、それまで味わったことのない深い安堵と感動に、私の心は満たされました。

この日以来、道ばたの小さな花々や山々、青空、私をとりまくすべてのものが洗われたように美しく輝いて見えました。特に夕焼けが心にしみました。茜色に染まった雲の合間から、イエス様が微笑みかけていらっしゃるような気がしました。毎日聖書を読み、祈るという日々がはじまりました。聖書の中に次のようなみことばを見出し、過去に犯した大きな罪も赦されていることを知りました。

たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。（イザヤ　1・18）

神様が赦しの神であることは、イエス様が人間の身代わりとして十字架にかかって死なれたこと、三日後によみがえられたことによって明らかだと知りました。イエス様は私の心を照らす灯になってくださり、恐れや不安は嘘のように消えてなくなってしまいました。

みことばの約束

罪の問題、また新興宗教や迷信の問題、それらを通って、私は唯一まことの神様にやっとたどりつくことができました。まことの神様を知らなければ、自分の罪が赦されることも知らなかったことでしょう。前に述べました家族の問題である彼女は、まだ新興宗教の一つに捕らわれたままです。そのことを思うとたまらなくなります。けれども、主は一方だけを優遇なさるはずがありません。

彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょう。（ピレモン　15）

また、次のみことばも主からプレゼントされています。

父がわたし（主イエス様）にお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。（ヨハネ　6・37）

彼女は必ずイエス様のところに来ると約束してくださったのです。彼女のことを思い、苦しくなると私はいつも「イエス様、彼女のために何をすればよいのですか」と祈ります。イエス様のお答は同じです。「ただわたしを信頼しなさい。」

罪赦されて恵みが

私は家族に、特に母に対してわがままな娘でした。父を失って心身ともに疲れ、孤独な母に尽くすことができませんでした。救われた後、主の前に何度悔い改めても、私はそんな自分を変えることができず、それが私にとって大きな苦しみになりました。今までの罪滅ぼしに母を幸福にしてあげたいと思いながらも、自分の将来を考えずにはいられず、このままいくつもの問題をひきずったまま一生を終えるのかと思うと淋しくて仕方がありませんでした。「イエス様、私は淋しいです。どうか心から理解しあえる人を与えてください。あたたかい家庭が欲しいのです。どうか伴侶を与えてください」と祈ってしまう私でした。結局私は自分が一番可愛いのです。

人間なら、こんな私を「虫のいい奴、自分勝手な奴」とさげすむことでしょう。けれども主は、私を受け入れ、憐んでくださいました。同じイエス様を信じ、生きる土台とする今の主人に引きあわせてくださったのです。紹介してくださったのはベックさんでした。彼も私も、過去に同じような過ちを犯していたことから、私たちの結婚を一年間祈ってくださったそうです。結婚してはや五年がたちました。主は私たちに二人の子供を与えてくださり、さらに今三人目を授けてくださろうとしています。次のみことばの通りです。

「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」（イザヤ　40・1、2）

主がなぜこのように私を愛してくださるのか、どう考えても不思議です。私は主のお役に立つことは何ひとつできないばかりか、かえって主の御名をはずかしめてしまう者ですのに。以下の使徒パウロの言葉は、そのまま私の心からの告白となりました。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。（Ⅰテモテ　1・15、16）

苦しみの中におられる方々が、イエス様のもとに一日も早く来られるように、祈らずにはおられません。

あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです

（詩篇23・4）

松田　博







一九四三年茨城県に生まれる。五箇小、水海道中、水海道第一高、静岡大、同大学院（修）修了。日揮（株）勤務。家族は妻由紀子さん、長男崇さん、長女めぐみさん、次女初穂さん、次男賛さん。

・家庭集会　毎月第四土曜日夜六時

・住所　東京都練馬区谷原六-六-十三　〒一一七

・電　〇三-五三九三-五五九五

◀写真中、ニューオーリーンズで。
写真下、一家そろって。

一九九四年十月三日、私たち家族全員は「ドイツ喜びの集い」に参加するために、キリスト集会の皆さんといっしょに、成田からドイツに向けて飛び立ちました。この日は私たち家族にとって忘れられない日でした。家族全員でヨーロッパへ行くなど、飛行機に乗るまで信じられませんでした。また、働き蜂である日本のサラリーマンにとって、夏休み以外に一週間もの休暇を取ることはたいへん勇気がいることで、かつての私ならとても無理なことでした。

ドイツでの一週間の生活は、私たちの想像をはるかに越え、祝福で満ちあふれていました。人と話すことが苦手な私たち夫婦でしたが、言葉は不自由ながらも、ドイツの方々と心を開いておつきあいができたことは本当に嬉しいことでした。主は子供たちもそれぞれに祝福してくださいました。その前の一学期までの約一年間、登校拒否を続けていた次女が、ドイツのお友だちと言葉が通じなくてもすぐ仲よしになり、楽しそうに遊んでいる姿を見て、本当に感謝でした。そこには聖霊のご支配があり、言葉の障害、国籍の違いを越えて、主にある方々がなんの隔てもなく語りあうことができました。

私は信仰を持って早くも十七年になりますが、主は私を信仰の歩みから外れないように守ってくださり、さらに私の中に生きて働かれ、信仰を持つ前とくらべて比較にならない満ち足りた生活を与えてくださっています。天国を思わせるようなミヘルスベルグのすばらしい宿舎の庭を歩きながら、洗礼式の時のみことば「あなたの目は、麗しい王を見、遠く広がった国を見る。」（イザヤ33・17）を思い起こさずにはいられませんでした。乏しい信仰ながらも、主は私をここまで導いてくださっていることをあらためて実感することができ、心から感謝しました。

生い立ち

私は太平洋戦争も終わりに近い一九四三年に茨城県の田舎に生まれました。家は地主でしたが、戦後の農地開放でほとんどの農地や山林を放出させられ、残されたわずかの田畑を母が管理し、父は教員をして一家を支えていました。教員の家ということで、また昔の地主と言うことで、その地方では一目おかれていましたが、経済的には決して豊かではありませんでした。この頃の生活が、私の中に潜んでいるコンプレックスとプライドを作りあげたのだと思います。

小さい時は人を意識せず、おしゃべりな子供でしたが、いつの頃からか急に人前で心を開いて話すことができなくなりました。子供の頃は、屋敷の中で一人で過ごすことが多く、外で友だちと遊んだことは少なかったように思います。また私は、本を読むよりも、工作をしたり花造りをしたり、自然と親しむことが好きでした。この性向は今でも続いています。また、多くの人々は人生についていろいろと悩むようですが、私は就職するまであまりものごとを真剣に考えたり悩んだりすることはありませんでした。また、親に逆らったことはほとんどなく、他人と議論をすることも好きではありませんでした。私の悩みといえば、話すことが苦手なことと、対人関係で悩んだり気を使ったりすることでした。

信仰への第一歩

私は十七年前まで、特に聖書やイエス・キリストに反発はなく、むしろ他の宗教に比べてどこ

か心の中で憧れるものがありましたが、まさか私がイエス様を信じる者になろうとは思ってもみませんでした。社会人になるまであまり深刻に悩んだことがなかったので、心から何かを求めるという必要がありませんでした。クラシック音楽を聞くことが好きで、宗教音楽にも関心があり、パイプオルガンの演奏を聞きに教会の音楽会に行き、聖書の朗読も何度か聞いたりしましたが、何も心に残っていません。また、進化論や自然発生論なども、それらが単なる仮説だということも知らずに何の疑いもなく信じていましたから、神の存在をすなおに信じることはできませんでした。聖書の中に次のように書かれている通りです。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。
（Ⅰコリント　1・21）

しかし一方で、プライドの高いことが妨げとなって人と心を開いて話すことができず、その結果日々の生活は孤独であり、時には淋しさを感じることもありました。

そのような私を、イエス様は想像もしなかったような大きな試練を与えることによって滅びへの道から強制的に引きずり出し、主の恵みの中へと導き入れてくださったのです。

しかし彼はためらっていた。すると、その人たちは彼の手と彼の妻の手と、ふたりの娘の手をつかんだ。――主の彼に対するあわれみによる。
（創世記　19・16）

最初の結婚生活

私は、一九七四年に最初の結婚をしました。人とつきあうのが苦手でしたから、仕事が終わるとすぐ家に帰り、家族の団らんがただ一つの楽しみでした。一年後に、長男が生まれました。初めての子供なので夫婦で大切に育てましたが、大切にしすぎて神経質に育てすぎたように思います。ちょっとでも泣くと、大あわてで子供を抱いて泣きやませたりし、そのために子育てにはいささか疲れました。

子供が満一歳の誕生日を迎える頃、思いもかけない試練が家庭にふりかかりました。私の身にまったく覚えのないいろいろなことで、急に家内が疑り深くなったのです。それまでは平穏に仲よく暮らしていた二人の間にののしりあいが始まり、毎日が地獄のような生活になっていきました。これはサタンの働きでした。サタンはちょっとしたことで家内にありもしない疑いを植えつけ、彼女に私のプライドを傷つけるような鋭い言葉を吐かせます。私には、それを受け入れるような寛容さはありませんでしたから、すぐかっとなって怒り、言い争いになるという毎日でした。私は子供のころから家や学校や職場で人と争ったことがなく、のんびりと生きることを理想としていましたので、このことは本当にショックでした。言い争いから解放されたいために、酔って寝てしまおうとして酒をがぶ飲みしたこともありました。しかし私は酔いつぶれることもできず、主の憐みがなかったらきっとアルコール中毒になっていたと思います。

自分の力での解決

それで私は、問題が起こらないように必死で努力しました。そのような家庭のことを会社の人

に話すわけにもいかず、最も大切な家庭を守るために、時には社会的な評価を捨て去らなければなりませんでした。残業もせず、残った仕事を家に持ち帰り、夜遅くまで仕事するという本当につらい毎日でした。

聖書に「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。」（箴言16・9）とあるように、自分の力に頼ったけんめいな努力にもかかわらず、その状態は一時的にはよくなったとしても、決して本質的な解決には至らず、自分の無力さをつくづくと感じさせられました。また、家庭のことを思って真面目に生活し努力しているのに、なぜ私だけがこのようなめに会い、社会的にも不利な生活を強いられるのか理解できませんでした。何とか早く帰宅しようと努力してもすぐ退社することができず、数秒の違いで出発してしまった電車を見送り、また家で問題が起こるのではないかと悲しくなり、涙ぐむこともありました。もちろん家内も同様に悩んでいたとは思いますが、私にはそれを思いやるゆとりはありませんでした。

約半年ほど、このような状態が続き、いよいよ限界にきた時、何か別の解決方法がないかと真剣に考えはじめました。家内も何とか解決しようと考えていました。家内は以前、吉祥寺のキリスト集会に集っていたことがあったので、キリスト集会に戻ろうと考えました。私もよく分からないながらも、いままで行なってきた以外の別の解決方法として、神による解決法があるのではないかと考えました。

その頃は、宗教とまことの信仰との違いは知りませんし、聖書やイエス・キリストに特に抵抗する気持ちは持っていなかったので、思いきってキリスト集会のベックさんのところに相談に行

きました。夜の十二時過ぎまで話してくださり、今までに経験したことのない愛を感じました。

ベックさんと話すことによって、人間の罪というものを初めて知りました。また、その私たちの罪を赦すために、イエス様が十字架上で私たちの身代わりとして死ななければならなかったということを聞きました。今までの私は、真面目に生活していると自分で思っており、世の中の不正をする人々を憎んでいたくらいですから、私がその罪人の一人であるなどとは考えたこともありませんでした。しかし本当の罪とは、人間に対する罪ではなく、創造主であるまことの神に対しての罪であるということ、さらに私たちは神との正しい関係を持つ必要があるにもかかわらず、神から離れた自分勝手な生活をしていることが最も大きい罪であることを知らされ、神の基準に従えばたしかに私も罪をおかしているかもしれないと、何となく理解できました。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。

（イザヤ　53・6）

ベックさんとお話した時、今まで六カ月間の地獄のような生活から解放された平安を感じました。問題解決の糸口がここにある、いやここにしかないと思い、とにかく従ってみようと決心しました。この道が真理であれば道がさらに開かれていくだろうと期待しました。その時はあまりよくは分かりませんでしたが、ベックさんの勧めに従っていっしょに祈ることができました。

次の日曜日に、生まれて初めて礼拝に参加してみました。そこで読まれた聖書のみことばやメッセージの内容については、ほとんどなにも分かりませんでしたが、皆さんが一つになってイエス

様に礼拝を捧げている静けさの中に包まれて、今までにない平安に満たされたことだけはよく覚えています。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

神に頼らず、ごう慢にも自分の力で努力していた時には何の解決もなかったのが、神に近づこうと決心した時には神の方から御手が差しのべられるということを後になってから知るようになりました。人間の考えることや狭い知識では神を理解することは不可能です。神を知るには、考えや知識によらず、ただ神の前に心を開いて近づこうとする決心が大切であると知らされました。

神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。（ヤコブ　4・8）

聖書もどのように読んだらよいか分からないながら、あちこち探して読んでいるうちに、私の心を打つみことばが次々と目に入ってきました。疑われ、プライドを傷つけられると黙っていられず口論になるというそれまでの生活は、この世では当然のことに思われますが、聖書のみことばは次のように言っています。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりま

せん。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。（Ⅰコリント　13・4～6）

「あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。」（マタイ　5・39）

イエス様はこの世と全く逆のこと、自分が損になることを勧めておられます。イエス様ご自身も、神に逆らった人々のために十字架上で死ぬ必要など、まったくなかったはずです。イエス様はこのような割に合わないことをあえて私たちのために行なってくださったということ…ここに、この世にはない新しい世界があることを知るようになり、ついに私はイエス・キリストを自分の救い主として受け入れる決心をしました。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。（Ⅰペテロ　2・22～24）

一九七七年四月十日のイースターの日に、私は信仰を持ったことを証しする洗礼を受けました。しかしこのように信仰を持っても、すぐに家庭の大きな問題は解決したわけではありませんでした。この試練は五年近くも続きました。私はイエス様に向かって不信仰にも「なぜ私に平和を与

えてくださらないのですか！」と叫ぶこともたびたびでした。

しかしこれらの試練は、私の内にある頑固な自我を打ち砕くための、神様の愛の手段でした。

主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。
（ヘブル　12・6）

これらの試練を通して、私は少しずつ自分の本当の姿を主に示されていきました。さらに信仰を持つことによって、このような試練の中で主に助けを求めることができるようになったことは、何よりの大きな助けでした。主を受入れ、信じて後は、全能なる主に信頼して全てを委ねることができ、その分どれほど自分の重荷が少なくなったか分かりません。イエス様は次のように呼びかけておられます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」
（マタイ　11・28）

イエス様はこのように、自分が正しいという思いにしがみついていた私を、五年という長い時間をかけて打ち砕いてくださいました。長い試練でしたが、私が自分を捨てられるようになってきた時、家内の目が開かれ、私のことを信じられるようになりました。そして、今まで迷惑をかけた方々に謝ることができました。

これからは新しい歩みができると思っていた時に、なぜかイエス様は、家内を天国に召してし

まわれました。なぜ、このような方法をとられたかは分かりません。しかし、家内を苦しむことなく平安の内に天に召してくださり、また、イエス様に救われた者同士として天国での再会が約束されていることを確信し、肉的な悲しみはありましたが、信じられないほど平安に過ごすことができました。

新しい結婚生活

それからしばらくの間、私の母親に子供の面倒を見てもらっていましたが、だいぶ年をとっており、健康が心配でした。「もしみこころなら、この家庭にふさわしい助け手を与えてください」と祈っていたところ、主の恵みによって今の家内との結婚に導かれ、十二年前の十一月三日、多くの方々に祝福されて結婚しました。その頃、家内は学校の先生をしていたので、責任上次の年の三月まで結婚を延ばしたいと考えていたようでしたが、思いきって退職し、結婚へ踏みきってくれたことを本当に感謝しています。

新しい生活は、過去の五年間とは比べものにならない祝福がありました。新しく二人の子供も授けてくださり、四人の子持ちになりました。これで平和な毎日が送れると思っていましたが、新しい十二年間は、私たちの信仰の成長のための訓練の期間となりました。イエス様は、いつも平安な生活だけを与えてくださるのではなく、いろいろな問題を通して、私たちの中にある主に喜ばれない部分に光を当ててくださるのです。それは、私の信仰の成長の妨げになるかなかすを取り除かれるための、主の手段でした。

銀から、かなかすを除け。そうすれば、練られて良い器ができる。（箴言　25・4）

もし試練がなく結婚生活が祝福だけであったなら、不信仰な私などはきっと、なまぬるい信仰生活を送っていたか、信仰から外れてしまっていたことでしょう。主の人知を越えたご配慮に感謝しています。ダビデは次のように言っています。

あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。（詩篇　23・4）

神に訓練されてこそ、喜びのある豊かな本当の生活があるということが、最近になって少しずつ分かってきました。その訓練とは、夫婦間の問題、子供の問題、仕事の問題、おつきあいの問題など、いろいろとありました。しかし、これらの訓練を通して、主は私を少しずつ変えてくださっているのです。信仰を持っていなかった頃の十七年前と比べて、今、どれほど恵まれているかを考えるとき、はるか以前から私を愛し、私を滅びの運命から救い出してくださり、天の御国に入るにふさわしい者になるように訓練してくださっているイエス様に、心から感謝します。

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ　46・3、4）

夫婦間の問題をみても、四十年近く別々に生活していた二人が一つになって生活していくことは、簡単に見えてもなかなか難しいものであることを、十二年の結婚生活を通して体験させられております。もし、イエス様という共通の助け主がなかったら、今のような家庭にはならなかったと思います。いろいろな問題が起こったとき、夫婦は別々の身体と考えとを持っているために、解決に一致がない場合がよく起こります。しかし、祈りによって主に頼ったとき、主は私たちをとりなしてくださり、私たち夫婦に主にある一致を与えてくださいます。

キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし…敵意は十字架によって葬り去られました。（エペソ　2・14、16）

私たち夫婦は、家庭のいろいろな問題、親族や友人の救い、キリスト集会の方々のことなど、祈りのリストを作って毎日祈っています。結婚記念日には、夫婦で過ぎ去った一年の主の恵みを思い起こしますが、主は私たちの多くの祈りに答えてくださっており、年を重ねるごとに恵みが多く、大きくなっていることが分かり、感謝しています。主の恵みは書ききれないほど多くありますが、そのいくつかをここに記させていただきます。

家族関係の改善

最も大きな恵みは、まず私たち夫婦のそれぞれの両親が救われ、次に四人の子供たちが全て救われたことです。私たち夫婦が祈ってきた一つの大きな問題は、私たちの過去をいつ子供たちに

話すべきかということでした。長男は、今の家内と結婚したときにすでに小学校の一年生でしたから過去のことを知っていました。しかし、長女はまだ二歳でしたから、全く知りませんでした。ある方はなるべく早く過去のことを話したほうがよいと勧めてくださいましたが、これを話すためには、子供が動揺せずに全てを受入れ、主のご計画であることを感謝できることが何より大切だと思い、夫婦で子供たちの救いを祈っておりました。

しかし、その頃は家族の中に多くの問題があり、さらに一番下の次男はまだ幼稚園生で、私たち夫婦は子供たち全員が救われるには時間がかかるものと、不信仰にも思っていました。しかし、主のご計画は私たちの思いをはるかに越えていて、まず長男が思いがけないときに主を受け入れることができ、洗礼を受けました。さらに続いて、長女の登校拒否を通して子供たちとも祈ることができるようになり、この祈りを通して、次女、長女そして次男と約二年の間に次々に子供たちが救われました。

そして、その年の結婚記念日に、ごく自然に家族の成りたちについて、子供たちに話すことができました。実は私たちは、その年の結婚記念日には過去のことを話そうと思って祈っていましたので、主がこのように私たちの祈りを聞いてくださったことに心から感謝しました。過去のことを子供たちに明らかにしたことにより、主はさらに私たちの家族に多くの祝福を与えてくださいました。私たちの家族関係を大きく変えて、肉によるつながり以上に主にある結びつきを強めてくださったのです。数年前と比べて、本当に驚くばかりの変わりようでした。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽し

さであろう。（詩篇 133・1）

束縛からの解放

試練を通して少しずつ変えられているもう一つの大きな恵みは、この世の束縛からの解放です。イエス様を知るまでは、そして信仰に入った頃の私は、まだこの世に大きく束縛されていたと思います。あることを行なう場合、まわりを気にする私は、とかく自分と他人とを比較し、他人の自分に対する評価が気になってなかなか実行できず、必要以上に気を使ったり、苦しい努力をしなければなりませんでした。しかし、いろいろな試練を通して、たとえこの世に気を使っても、また気を使わなくても、結果は同じであることが多く、たとえ多少よい結果になったとしても、そのために気を使う精神的な負担はどれほど大きいかを、だんだんと知るようになりました。

人間の考えや評価は変わりやすく、一定していません。しかし、イエス様はいつも変わることなく、私たちを愛してくださり、私たちのために最善をなしてくださいます。一時的には大きな試練だったことも、後になってみるとそれが私にとって最善だったことを何度も体験しました。これらの体験を通し、人の評価を気にすることなく、見つめるべきお方はイエス様だけであることを確信できるようになりました。

私たちは真実でなくても、彼（イエス様）は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。（IIテモテ 2・13）

キリスト集会の方々との交わりの中へ

「信仰の成長に必要なことは、祈りと、聖書を読むこと、そして交わりである」とベックさんはよく言われます。最初の二つは理解でき、乏しいながらも実行していましたが、最後の交わりについては、人と話すことの苦手な私にはなかなか理解し実行することができませんでした。毎週日曜日の礼拝には必ず参加していましたが、語りあえる集会の方々も少なく、礼拝が終わるとすぐに帰ってきてしまうという、バランスの欠いた信仰生活を長い間続けていました。また、大きな試練が終わって気がゆるんでいること、仕事が忙しくなったこと、次女が川崎病にかかったことなどが、私を交わりから遠ざけていました。

しかし、家内の両親と同居するようになって、今の練馬の家に引っ越してきてから、家庭集会にも誘われて参加するようになり、少しづつ集会の方々とのおつきあいの中に入れていただくようになりました。

また六年前からは、私の家を家庭集会に使っていただくようになり、このことを通してさらに多くの方々との交わりを深めさせていただくようになってきています。いろいろな試練はありますが、家庭集会は私たちの訓練の場でもあり、そこから多くの祝福をいただいています。さらにイエス様は、私のような者を福音のメッセージを伝える器として各地のキリスト集会に行かせてくださり、これを通してさらに多くの方々との交わりの輪を広げてくださっています。

以上、まことにつたない証しですが、イエス様は滅びゆく運命にあった私を救い出してくださ

り、十七年間の信仰生活を通して私を訓練してくださいました。この世的に見れば失ったものも多いかもしれませんが、しかしイエス様は、比較にならない恵みを私に、私たち家族に与えてくださっていることが分かり、心から感謝しております。これからも、乏しい歩みながら、イエス様に信頼して歩んでいきたいと思っています。

主はヨブの前の半生よりあとの半生をもっと祝福された。（ヨブ　42・12）

そして主は、彼らをその望む港に導かれた。（詩篇　107・30）

主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンにはいり、その頭にはとこしえの喜びをいただく。楽しみと喜びがついて来、嘆きと悲しみとは逃げ去る。（イザヤ　35・10）



▲右から由紀子さん、エミリエ

いかにけがれたる者の心をも

松田 由紀子

一九四七年京都府に生まれる。伊丹市立緑ケ丘小、練馬区立石神井東中、都立大泉高校、東京造形大学卒業。神奈川県立山北高校、柿生西高校勤務の後、一九八二年に夫博さんと結婚。長男崇さん、長女めぐみさん、次女初穂さん、次男賛さん。

罪とけがれの中から

「いかにけがれたる者の心をも、きよめたもう主はげにほむべきかな。つみけがれはいやますとも、主のめぐみもまたいやますなり」（聖歌七〇一番）。この聖歌は私たちが結婚の時に主からいただいたもので、それ以来、わが家のテーマソングになっています。最近この聖歌をくださった主のみこころが少しずつですが分かるようになってきました。救われるまでの三十二年間、私はまさにけがれと罪との中にありました。主を知らず、自己中心で自己愛のかたまりで、自分は特別な者だと思い続けてきました。私はもの心のつく頃から、人には言えないけれど自分は本当は悪い人間だと思っていました。私の中にはいつも汚い考え、人を悪く思ったり人を見下げたり、平気で嘘をついたり、卑怯で貪欲でむさぼる者であり、人の心を支配しようとはかる思いがあり

ました。毎晩のように夢を見ましたが、それらはいつも私の心を責め、訴えているものでした。毎夜うなされ、泣き叫んだり、怒鳴ったりして目が覚めました。また自分の存在が危うくなるようなこわい夢をよく見ました。宇宙のような果てしない空間をいつまでもさ迷い続けて、決してもどって来られない私の姿に、恐怖心でいっぱいになったりしました。大人になって現実から逃避するようになった時、これらの非現実の夢が一番手ごたえのある世界になり、常に夢を見ているような状態になっていきました。私は小さいなりに本能的に自分の中を隠していました。子供ですから日中は何もかも忘れて遊ぶのですが、時折り日常の中でも恐怖心におそわれることがありました。背中や足元に不安な気配があり、いつか恐ろしいことが起こりそうで緊張していました。そんな私でしたが、外面的には親にも可愛がられ、小さい頃は友だちもたくさんいてすぐその中心になり、自他ともに良い子と認められることで一応満足していました。私は親が私のわがままを許す姿を見、侮っていました。そして私は何をしても許される人間だと思っていました。

思春期に入ると、人前で普通でいられなくなりました。自分の中の暗やみを相手に見透かされるのではないかという不安で、人の顔色を見るようになりました。人と会うことが苦痛になり、私は特別だと思っていた自信も足元からぐらつく場面を見せられ、強いコンプレックスを持つようになりました。自分を醜いと思いながら、人を、特に大人を裁きました。「人間ってなんて汚いんだろう」と思いました。両親に対しては特別厳しく裁き、表と裏の違う偽善者だと思っていました。親の言うことなどまったく耳をかさない不遜な者でした。世間の人々はなぜみんな平気な顔をして生きていられるのかと思い、私だけはあんなふうになりたくないと思っていました。

高校二年の時、進路は誰にも相談せずに美術方面へ進もうと決め、この世界には何か世間と違う清さがあるのではないかと飛びこんでいきました。そして大学の頃は親元を離れ、勝手気ままに欲のおもむくままの生活をしていました。何をしてもむなしく、期待していた芸術の世界も結局は競争社会であり、人と違ったものをどれだけ示せるかを競う場でした。毎日遊び歩き、遊ぶほどむなしく、いつも泣きたい気持ちでした。心の中では「誰か助けて！　私は落ちてる！　助けて！」と叫んでいました。

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。

（ガラテヤ　5・19～21）

何かにすがらざるをえなかった私は、最後にヨガという偶像崇拝へと傾倒して行きました。そしてすべてを捨ててヨガに飛び込もうと決心していた時に、職場の同僚だった今村さんによって主の元へと導かれました。

キリスト集会に集うようになり、聖書を読み、主にお会いし、自分が罪人であると知らされ、まったくその通りだ、と思いました。罪人と宣告され、むしろほっとしました。私の求めていたものは、まさにこれだ、と思いました。私は今までの罪を悔い改め、主を受け入れました。その後、喜びの涙で洗礼にあずかりました。洗礼の時いただいたみことばは次のようなものでした。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配し

てくださるからです。身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。（Ⅰペテロ　5・7～9）

こうして新しく生まれ変わらせていただきました。すべてが新しくなり、毎日が喜びに変わり、まわりの方々へイエス様を伝えたい思いでじっとしていられませんでした。でも私はここまでひどい者にもかかわらず、主の血潮の意味を知るにはあまりにも鈍い者であり、私の罪は神のひとり子を十字架につけなければならないほどどうしようもなく深くすさまじいものであることを知りませんでした。それを分からされたのが、二年後に与えられた結婚を通してでした。そしてその二年の間に、結婚とは主のご意思によるものであり、私の望みや意思によるものではないことを、おそれをもって学ばされました。

私にはそれまで九年間ほど交際していた人がありましたが、お互いに土台がなく、生きる意味が分からず、相手に求めるのみで与えることのない間柄でした。結婚についても、世間の人々の結婚を見、また両親の結婚を見て、どうしても偽善としか思えず、便宜上結婚しているくらいならしない方がいいと思っていました。でも心の奥底ではやはり結婚したい思いがありましたが、自分も相手も信頼していませんでしたし、たとえ結婚しても結局こわれるしかないのだから仕方がないと虚無的な思いでおりました。

私は救われた後、彼との間を主から探られ、彼の救いのためにはっきり別れるほうがよいと示

されました。私は彼に、「イエス様によって新しく生まれ変わったので、もう交際はできない」ことを伝えました。彼はその後まもなくキリスト集会に導かれ、バイブル・キャンプにも集い、イエス様に心を開くようになっていきました。でも、主は彼を天に召されました。このことは私にまったく分からないことでしたが、主はその御手で私をつつみこんでくださり、キリスト集会の方々のお祈りによって私はまったく平安に守られました。

その後、結婚について祈っておりました。自分の思いの強い私は、主のみこころよりも自分の思いや考えを第一とするようなことをして主を悲しませるような者でしたが、それでも主は赦してくださり、主人との結婚へと導いてくださいました。

主の愛の訓練の中で

私が主人と結婚する時に、主人には、すでに天に召された先妻との間に二人の子供がありました。この結婚のお話があってから、迷いやすい私を主は特別ていねいに導いてくださって、次から次へとみことばをくださり、聖霊による平安をいただきました。まわりの方々、特に未信者の家族や親族の喜びによって、この結婚がみこころだとの確信をいただき、迷わずに結婚することができました。もしあの時ためらっていたら、今ある祝福はいただけなかったことを思い、主に心から感謝しています。でも私自身は本当に愚かで、「私ならやれる」とその時思っていたのです。主は高ぶる者を退けられ、愛のむちで私を訓練されました。

神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。（ヤコブ　4・6）

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。

（ヘブル　12・5～7）

しかし現実はきびしいものでした。赤ちゃんのめぐみは私になつかず、いつも父親にしがみついて離れませんでした。長男の崇は、ときに情緒不安定になり、集団生活にもうまくついていけないところがありました。私は自分の力で何とかしなければと頑張りました。でも思うように行きませんでした。万事に疲れ切り、放心状態でした。自分がかわいそうで、子供や主人を責めていました。家の中はひえびえとして、誰も安らぐことができませんでした。その頃、わが家で祈り会を開いていましたが、私はそういう自分の惨めな姿をさらけ出すことができず、皆さまに祈ってもらうことすら思いつきませんでした。主の姿が隠されてしまったようで、キリスト集会に行ってもただむなしく、疲れきって帰ってきました。もうここまでと思い家を出ようとした時、主はみことばによって私を連れ戻されました。

「この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。」

（II歴代誌　20・17）

やがて、次女の初穂、次男賛と二人の子供が与えられました。しかし私は、信仰によってではなく肉によって歩み、ますます家族を苦しめ自分も苦しみました。

私が救われた翌年、私の母も主を受け入れ救われていましたが、結婚して二年目に私の父も救われました。その後間もなく父母と同居することになりました。このことで私たち家族の問題はもっと複雑になり、家中が窒息しそうな状態でした。私には平安もなく喜びもありませんでした。私は主から見離されているようで、あせりといらだち、恐れの中にありました。その間主はずっと忍耐してくださり、結婚七年目に次のようなみことばを贈ってくださいました。

「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。今、万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ。万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしそれを喜び、わたしの栄光を現わそう。主は仰せられる。あなたがたは多くを期待したが、見よ、わずかであった。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。それはなぜか。――万軍の主の御告げ。――それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたはみな、自分の家のために走り回っていたからだ。」

（ハガイ　1・4～9）

このようにきびしいみことばをいただいてはじめて、私も主人も主の前にひれ伏さざるをえませんでした。主は、自分のこと、家族の問題、そればかりに心をうばわれあくせくしていた私たちに、「主の宮が廃墟になっている」と警告なさったのです。

主の家族

その時から、わが家に大きな変化が起きました。まず十四歳になっていた崇が救いを求め、悔い改めて救われました。ただただ一方的なあわれみでした。また七歳だった次女の初穂が救われ、続いて長女のめぐみも十一歳で救われました。同じ日に、五歳の賛も「僕も天国に行きたい」と言っていっしょに祈り、救われました。私たちは主の前にどうしようもない家族でしたが、主がお約束をしてくださったそのゆえに、こんなにも素晴らしい恵みにあずかることができ、感謝と賛美しかありませんでした。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

そして十年目の結婚記念日に、子供たち全員に、主人が家族の成り立ちを初めて話すことができました。主は子供たちを守り、その後もまったく自然にその心を整えてくださっています。このように結婚して十年目に、家族が主の光の中に出されたことは、私にとっても大きな恵みでした。それまで私自身が縛られていた血のつながりという縄目から解放していただき、主がそのご

意思をもって私たち家族を造られたという事実こそが最も大切であり、私たちは「主の家族」なのだ、と心から思うことができるようになりました。以前は恐れていた周囲の声も、今は何もこわくはなく、むしろ主によって、どの子も不思議なくらいいとおしいのです。そして私にとって考えることのむずかしかった先妻の明美さんのことも、何のわだかまりもなく思えるようになり、明美さんが心から祈っていたであろうご家族の救いを、またまったく同じ心で祈ることができるようになりました。主人には、長い間裁いていたことを本当に申しわけなく思います。今は主が最良の伴侶として主人を与えてくださったことを心から感謝するようになり、結婚できて本当によかった、と思っています。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

（詩篇 119・71、72）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（Ⅰテサロニケ 5・16～18）

このみことばは結婚の時主からいただいたものですが、今改めて感謝しています。

主の聖め

その後は、キリスト集会の皆さまとのおつきあいの中に、夫婦そろって入れていただき、主が働かれご栄光を現わされている現実を見せていただくようになりました。そのような中で、私は主に祈らざるをえませんでした。「私の中には何かつまったものがあり、主の御手をさえぎっています。どうか光を当て、教えてください。そして聖めてください」。

「わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。」（詩篇 81・10）

主はまず母と私の間に剣を送られ、祈りに答えてくださいました。私は、救いを知る前は親を親とも思わない者でしたし、不従順で逆らう者でした。救われ、結婚してからは、母に頼り、依存していました。そして母も私に頼り、お互いにそれぞれの夫と一つになれず、長い間そのままきました。でも苦しくてこれ以上、そういう状態を続けられないようになりました。主は私と母を正面から突きあわせられ、心の内にある思いを吐き出させられました。私はやっと親から離れ、自立することができるようになりました。

「それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。」（マタイ 19・5）

それから母とは主にある姉妹として話しあえるようになり、救われていない親族のためにいっしょに祈れるようになりました。また、両親の兄、姉、妹たちに主が働いてくださり、この夏には、郷里である京都府福知山市のおじ夫婦の家で、イエス様を伝える豊かな語らいの場を与えていただきました。その後も九月の神戸キャンプでは、おばがイエス様のお話を聞くことができ、多くの方々といっしょに祈ることができました。

また主は、もう一つ祈りの答をくださいました。一年くらい前から、次女の初穂が学校に行かないという、私にとってはきびしい試練を送られたのです。私はどうしていいか分かりませんでした。数週間、数カ月とたつうちに、私は主によって心の奥を深く探られていきました。彼女の席だけぽつんと空いている学校で、私はみじめに泣いてしまっていました。「どうして私の子だけがこんなことに…」と。主を知っていながら、希望のない、どうしようもない自分の姿を見せられました。私には信仰などなかったのだと知らされました。そしてなんとか学校に行かせようと、いろいろな方々の話を聞き、人の判断に頼り、迷い、そのたびに右に左にゆれる自分の考えや判断に、私には土台もなにもなく、正しいことが何であるかも全然わからない者だと知らされました。そしてこのことが初穂のわがままからきていると気づくのに半年以上かかりました。そのわがままを許し、結果的に子供を滅びへ追いやろうとしている自分の罪をはっきり見せられました。初穂は一歳の時、川崎病という病にかかりました。その時も私は主に心の底を探られ、心から悔い改めたつもりでした。それなのに愚かな私はまた迷いだそうとしていたのです。にもかかわらず、主は十年前にくださったのと同じみことばをもって、初穂をもとに戻してくださいま

した。

「恐れないで、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。」（ルカ　8・50）

私は彼女のわがままととっくみあいをしました。それでも学校に行かないという初穂を外へ追い出しました。彼女はそこで初めて主を感じたようです。それから彼女は学校に行きはじめ、見違えるほど元気になりました。私は、彼女が本当に望んでいたことは、親である私がしっかりと主の側だけに立ち通すことだったのだとやっと気づくことができました。そして今まで「子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。」（エペソ6・1）というみことばを、ただ主から子供たちへ向けての命令としか受け取っていませんでしたが、このみことばは、親である私がこのみことばからはずれている子供をその幸せのために親に従うようにと心から祈り求めるための指針なのだと気づかせられました。多くの方々の祈りによって、主はこのかたくなな者に、主のみこころが何であるかを教えてくださいました。

主の光の中で

最後に、この十月にドイツで行なわれた「よろこびの集い」で、どんなに私たち家族が祝福をいただいたかをお伝えしたいと思います。十三年前、私が救われて一年目に、ベックさんはじめキリスト集会の方々とドイツ各地に行かせていただいて以来、私たち一人一人のことを祈り続けてくださっているドイツの集会の方々にぜひまたお会いしたいと、願っていました。でも今年初

めに、「ドイツよろこびの集い」の話があり、ぜひ参加したいと祈りはじめた時は、次女は登校拒否のまっただ中で、私自身も主のみこころからはずれている状態でした。長女は行かないと言っており、主人も一週間も仕事を休むのは無理だと言っておりました。どう見ても参加することは不可能のようでしたが、主は着々と整えてくださり、家族六人がそろって参加することができました。

ドイツではすべての時が祝福でした。聖霊の圧倒的なご支配の中で、ドイツ語は分かりませんが、ドイツの方々とともに主にあるまことの一致をこの目で見ることができました。ドイツのある方が、「ドイツの主にある兄弟姉妹、日本の主にある兄弟姉妹と言わないようにしましょう。この地上には、救われている人と救われていない人の二種類の人間しかいないのです」と言われました。「私たちは救われた者であり、天に国籍を持つ者で主にあって一つなのだ」ということが胸にせまりました。そして救われていない人のために真剣に祈らなければ、と思いました。また、アイドリンゲンのムッターハウスには、日本からいっしょに行ったある方が、「今日、ここに二百人のリンデが帰ってきました…」とあいさつされました。ドイツの主にある方々の祈りによってベックさんが日本へ送られ、数多くのたましいが導かれたこと、またリンデの願いを通して多くの実が結ばれ、それが私たち一人一人だと強く思わされました。ドイツの集会の方々の祈りは、今も続けられ、人々が続々と主のみもとに導かれている事実に、圧倒される思いを経験しました。メサイヤを歌い、心を一つに主を賛美できたことは大きな喜びでした。天国に行く前に、この地上で天国のような時を味わわせていただいたことは、この上ない感謝でした。

新しい歌を主に歌え。全地よ。主に歌え。主に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。まことに、国々の民の神々はみな、むなしい。しかし主は天をお造りになった。尊厳と威光は御前にあり、力と光栄は主の聖所にある。

国々の民の諸族よ。主にささげよ。栄光と力を主にささげよ。御名の栄光を主にささげよ。ささげ物を携えて、主の大庭にはいれ。聖なる飾り物を着けて、主にひれ伏せ。全地よ。主の御前に、おののけ。国々の中で言え。「主は王である。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはない。主は公正をもって国々の民をさばく。」

天は喜び、地は、こおどりし、海とそれに満ちているものは鳴りとどろけ。野とその中にあるものはみな、喜び勇め。そのとき、森の木々もみな、主の御前で、喜び歌おう。確かに、主は来られる。確かに、地をさばくために来られる。主は、義をもって世界をさばき、その真実をもって国々の民をさばかれる。

（詩篇 96・1～13）

飛行機の中から見た世界は、主の御手の完全さをあますところなく現わす光の世界でした。移ろいゆき、消えゆく世界のためにすら主がこれほど完全に、うるわしくお造りになっておられるなら、これから行く天国はいかばかりだろうかと思いました。一日も早く天国に行って、イエス様にお会いしたいと願わずにはいられませんでした。あふれるばかりの恵みをいただいて帰って

きた「ドイツよろこびの集い」でした。心から感謝しています。

イエス様からいただいた恵みを数えると、どうしてここまでしてくださるのか、ほんとうに不思議です。でもこんな私さえも愛し続けてくださるイエス様に心から感謝し、信頼し、これからもすがっていきたいと思います。そして御前に素直に、正直に、歩みたいと願っています。

▼由紀子さんの洗礼式で。 写真下、子供さんたちの洗礼式で。





▲病院で。

イエス様のところに行きます

故　歳川雅洋

一九五四年宮崎県に生まれる。飯野中、小林高、芝浦工業大学卒業。税理士事務所などの会社を経て株式会社ランテック勤務。妻美也子さん、長男創太郎さん、次男遼太郎さん、長女あゆみさん。
一九九四年八月十三日、大腸がんにて天に召される。

一九九四年八月十三日、私の夫、雅洋は主のみもとに召されていきました。以下の原稿は、夫が一冊の大学ノートに書き記した遺稿で、葬儀の日に、夫の信仰の証しとして読ませていただいたものです。

このノートは、私の最後のノートになるはずです。信仰がまだ浅くて短い私は、聖句をほとん

ど知りませんでした。したがって「光よあれ」などに出ている証しのように、自分のものになりきってはいませんが、なるほどと感じたものを書いていきます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してくださった。…この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、彼らはすべての苦しみから救われた。…彼らが叫ぶと、主は聞いてくださる。そして、彼らをそのすべての苦しみから救い出される。主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。

（詩篇　34・4、6、17、18）

私は一九五四年六月二十四日、宮崎県えびの市に長男として生まれ、両親に見守られて育ちました。飯野中学校卒業、小林高校卒業、芝浦工業大学卒業とここまでは順調でしたが、大学を卒業する時が不況の年に当たり、就職がうまくいきませんでした。その後、勉強、アルバイトなどをしながら職を探しましたが、なかなか思うようにはいきませんでした。三十五歳の頃から落ち着き、現在は株式会社ランテックというところで仕事をしています。ここ数年は、穏やかで落ち着いた生活でした。子供もすくすくと育ち、元気いっぱいです。ところが一九九三年の十月に、出血があるということで病院で検査をしてもらったところ、大腸に腫瘍ができているということ

です。すぐに手術をすることになり、十一月十五日に手術を受けました。手術は成功しましたが、悪性の腫瘍が見つかり、それが肝臓に転移しており、治療をすることになりました。治療が一段落し、暮も押しせまった十二月三十日に退院することができました。

それまでの自分は、あまり家庭を顧みず、会社の仕事一辺倒でした。今ふりかえってみると、仕事ではそれなりの実績をあげ、自信も大いにありました。ですからごう慢で、ひとりよがりな人間になってしまっていました。母が何回もすすめるイエス様の話に耳を傾けず、自分を自分の神としていました。イエス様を知った今、何とも恥ずかしいことで、愚かな私でした。重田さんや古田さんが来てくださいましたが、全くとりつくしまがないという態度でした。救われるには、後四、五年はかかると言われたほどでした。自宅で療養をし、二月からは仕事に出ることができ、まあまあ順調に勤めていましたが、三月末になると、もう一度入院して治療することが必要であると主治医の先生に言われ、入院して治療を受けました。二週間で退院したのですが、どうも調子が思わしくないので病院を訪れて再入院をお願いしました。でも、ベッドのあきがなく、その日は点滴だけを受けて帰りました。精神的に落ち着かず、頭の中でいろいろなことが堂々巡りをしていました。自殺するにはどうしたらいいかなどと考えていました。何時間も家の中をうろうろしていました。

四月六日のこと、どうしたらよいのかを妻に泣きながら聞くと、「イエス様にすがるしかない」ということで、二人で手をとりあい、イエス様にお祈りをしました。

その後、江藤さんが病院に来られた時に小さな証しをすることができ、イエス様を信じるのが

すべてだと確信を得ました。調子が悪かった頃は、四月三十日に西軽井沢国際福音センターで行なわれる実弟の歳川譲治の結婚式に出ることはとても無理だと思っていましたが、金原ご夫妻に助けていただいて、福岡県の久留米市からはるばる御代田まで行くことができました。四月二十八日にはベックさんとお話しすることができました。「何も心配することはないよ。雅洋」と言ってくださいました。私は洗礼を受ける決心をしました。五月一日に、長男の創太郎といっしょに洗礼を受けました。

主人はここまで書いて、書き続ける力がなくなり、ここで筆は止まっています。

夫の洗礼の時のみことばは次のようなものでした。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

一九九四年四月六日に神様を受け入れ、救われることを祈り願い、召されるまでの四カ月と七日間の信仰生活でした。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした（詩篇119・71）

歳川美也子

一九五四年佐賀県に生まれる。福富中、白石高、神奈川県藤沢市立高等看護学校卒業。藤沢市民病院、福岡市千鳥橋病院で看護婦として勤務。雅洋さんと結婚。一九九四年夫雅洋さん天に召される。長男創太郎さん、次男遼太郎さん、長女あゆみさん。

出会い

夫と私は二十一歳の時、鎌倉で知りあいました。初めてのデートでは鎌倉めぐりをしたことを覚えています。二十七歳の時、結婚しました。夫が召されるまで十二年間の結婚生活でしたが、知りあってから数えると十九年もの歳月が流れていました。結婚したものの、生活は決して豊かではありませんでした。私は看護婦として働き、夫は職場を変わり、子供が次々と生まれるなど、なかなかきびしい道のりでした。でも私はその中で、夫を頼り、甘え、やさしく寛容な夫の手のひらの上で生活させてもらっているというのが実感でした。会社を変わった夫は、新しい職場で生き生きとして働くようになり、小さいながらわが家を持ち、福岡市から久留米市へ移り住みました。さあこれから、という時、夫が発病したのです。引っ越して一年半後のことでした。

私の信仰

私は浄土真宗の家で生まれましたので、幼い頃から仏壇に手を合わせる生活をあたりまえのようにしてきました。それは結婚まで続きました。数年前に、実母が突然心不全で亡くなりました。葬儀は仏式で、ただ重苦しく悲しいものでした。母をみとれなかった私は、これからは一生母を供養していかなければいけないのだと思いました。いつも母はどこへ行ってしまったんだろうか、どんな思いをして死んだのだろうかと思い出しては、心を痛めていました。

その頃、歳川の母を通してお顔を存じあげていた金原さんから突然電話があり、「今度行くからね」とのことです。一九九三年四月、金原さんは田中さんという方といっしょにわが家を訪ねてくださいました。私は母のことなどをいろいろとお話しました。その頃の私は、まだ神様という言葉に拒絶反応を示していました。その時のお二人の口からは、神様とか、イエス様という言葉は出てきませんでした。それで私は安心し、かたくなな気持ちがほぐれていきました。お二人は最後に私のことを祈ってくださいました。生まれて初めて聞くお祈りの言葉でした。祈ってくださっているのを聞いて、これなら私も祈れるかもしれない、と思いました。それから何度か訪れてくださり、聖書も少しずつ読むようになり、家庭集会へも娘といっしょに時々行くようになりました。

その年の九月、大牟田で開かれたよろこびの集いへ、「姉さんも行かなければ」と義弟に誘われ、初めて参加してみました。皆さまのお顔がやけに明るく、次から次へと握手を求めてこられ、

とまどいながらも手を差し出したことを覚えています。初めての礼拝でイエス様を信じ、受け入れ、聖餐にあずからせていただき、聖歌を歌いながら何だか涙が止まりませんでした。どうして私がこのように変えられてしまったのか、今でも全く分かりません。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。

（ヨハネ　15・16）

このことは、主の一方的な憐れみからでたものでした。ただイエス様に祈ることができるのは、とても幸せでした。そしてその直後の十月に夫の病気が分かったのです。その時私は、このために主に救われたのだ、と思いました。私が耐えることができるように、先に私を救ってくださったのだと確信しました。

しかし、現実の夫の病気はあまりにも酷なものでした。主の救いを受けているとはいっても、信仰の薄い私は、自分の苦しみ、悲しみをどうすることもできませんでした。今まで夫だけを頼りにし、子供が成人しても私たち二人だけはずっといっしょだと思いこんで生きてきた私にとって、この世から夫がいなくなるなどということは信じることができず、耐えられないことでした。早く夫の病に気づくべきであったと自分を責め、夫を苦しめたくない、二人で死んでしまいたい、いっそ一家心中しようかとまで思いつめ、どうしたら死ねるのかと思い悩む日々でした。自分の気持ちをどうすることもできずに、三歳の娘にビデオを見せておき、別室に行って泣き声がもれないようにバスタオルで顔をおおい、思いきり泣き叫びました。気がつかないうちに「助けて、

助けて」と叫んでいました。

いつでも祈るべきであり、失望してはならない…。

（ルカ　18・1）

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。（IIコリント　12・9）

そのうちに、この二つのみことばが静かに心の中に響いてきました。こんなに苦しい状況に置かれているのに、主の恵みは私に十分だと言われている、今の恵みを感謝しなければいけない、という思いに少しずつ変えられ、夫は希望をもって闘病しようとしているのに、私はすでに絶望していた、夫を殺していたのと同じことだ、ということに気づかされ、この主からの試練を受け入れようという思いに変えられていきました。そしてイエス様を知った以上、自ら命を絶つなどということを、主は決してお喜びにならないということも知らされました。

あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。

（ピリピ　1・29）

翌年の二月二十日、大牟田のよろこびの集いで、夫に立ち会ってもらって、洗礼を受けました。その日は義弟譲治の結婚式でもありました。

闘病生活

一九九三年十月二十五日のこと、夫が病院へ行くと言いました。健康に自信のあった夫が自分から病院へ行くというのです。私は不安を覚えました。ひとりで診察室に入ったきり、なかなか出てきません。やっと出てきた夫は、「腸の中を診てもらったら、何かあったよ。僕も見たんだけど、はっきり患部がわかったよ」と言うのです。テレビカメラで一部始終を見てしまっていたのでした。これが夫が自分の病気が何であるかを知るきっかけになってしまいました。私も、夫の一言が何を意味しているのかを直感しました。

十一月四日、夫は八女市の公立八女総合病院に入院しました。夫へは主治医から「悪性のものと思ってください」と話がありました。しかし夫は、手術をすれば治ると信じているらしく、ことの重大さがぴんときていなかったようです。十一月八日、今度は私だけが主治医に呼ばれ、「大腸がんが肝臓に転移しています。大腸は切除しても、肝臓の方は手術は不可能です。広がりすぎています。本人には肝臓に影があると説明します。奥さんとして覚悟だけはしておいてください」と告げられました。「覚悟だけはしておいてください」とはどういうことなのか、夫が死ぬということなのか、と頭の混乱したまま夫のいる病室へ向かいました。顔をあわせるなり、夫は「どうだった」と聞いてきました。「やはり悪いものでした。肝臓に影があるそうです」と伝えました。夫は平然として「うん」と答えました。私はせっぱつまった思いで、「あなたにはどうしても信仰をもってもらいたいのです」と話したのを覚えています。

それからは面会に通う車の中で、一日も早く夫がイエス様を受け入れることができますようにと、娘とともに祈り続けました。

十一月十五日、大腸がんは摘出されましたが、大動脈のリンパにまで転移していることが分かりました。それでも、夫は、手術が終わったのだからあとは良くなるはずだと思ったのでしょう。その後の治療に耐えていました。

十二月三十日に退院のお許しが出て、一九九四年の正月は家族そろって迎えることができました。これが、最後のお正月でした。末期状態にありながらも、二月、三月と社会復帰をし、会社に出勤しました。

三月二十二日、肝臓の治療のために二度目の入院をしました。抗がん剤を直接肝臓へ注入するのです。この入院を前にして、私たちは心から話しあうことができました。私は夫に、「主治医が肝臓に影があると言われたのは、実はがんの転移です。リンパにも転移がありました」とはっきりと話すことができました。夫は「本当のことを話してくれてありがとう」と言いました。まだ信仰をもっていない夫が、どのような思いで私の言葉を聞いたのか、察するにあまりあります。主人はそれでもまだ、自分の力に頼り、医学に頼り、治療を受けようとしていました。抗がん剤注入の治療は十日で終わり、退院することができ、自宅に喜んで帰ってきました。しかし抗がん剤は強い薬で、自宅にいる夫に追い打ちをかけるように、吐き気、食欲不振、全身倦怠感などさまざまな症状が出てきました。そしてそれを通して、自分の体は自分ではどうにもできない、最新の医学技術をもってしてもどうにもならないということが分かり、きびしい所に立たされ、つ

いには自殺まで考えたようです。夫は今までの自分により頼んでいた全ての心を砕きに砕かれ、「神様を信じたい、神様しかいない」と主イエス様を受け入れる気持ちになりました。四月六日、三度目の入院の日でした。

あなたは、見ておられました。害毒と苦痛を。彼らを御手の中に収めるためにじっと見つめておられました。不幸な人は、あなたに身をゆだねます。（詩篇　10・14）

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇　34・18）

四月十日、福岡キリスト集会の皆さまと江藤さんが病院に来てくださいました。江藤さんは「聖書のみことばは、すべて事実です」とくり返され、帰りぎわに「全身全霊で祈ってください。必ず平安がやってきます」と何度も言われました。夫は「死ぬことが恐い」と話しました。そしてこの日に、夫は主イエス様を自分の救い主としてはっきりと受け入れ、従う決心をしたのです。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。（詩篇　32・1）

夫は心から祈るようになりました。そして私に「神様ごめんなさい。助けてくださいとしか祈れない。これでいいのか、ベックさんに聞いて」と涙して頼むのです。やがてベックさんのご指示で、久留米市の聖マリア病院に勤務しておられる福岡キリスト集会の松井さんが毎週水曜日に

来てくださるようになりました。夫の入院生活は、信仰の生活に変わっていきました。それまで毎日持っていった日経新聞を、もういらないと言い、聖書を読み、「光よあれ」を読み、あっという間に主だけを見上げる者へと変えられていきました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。

（詩篇　37・5）

弟の結婚式が、西軽井沢国際福音センターで行なわれることになりました。ベックさんが「雅洋は、御代田が時です。御代田へ来れたらベストだね」とおっしゃいました。夫は「すぐ、行く。飛行機の手配をして」と言いました。主治医に相談したところ、規則上長期外泊は無理なので、一時退院というかたちをとらせていただき、四月二十八日から五月二日まで、「よろこびの集い」と弟の結婚式に参加することができました。食事も満足にとれない状態ですから、点滴を先に送っておき、四日間毎日点滴をしました。

夫はベックさんと二人だけでお話しすることができ、初めての礼拝で聖餐にあずかり、長男といっしょに洗礼を受けることができました。弟の結婚式にも出席することができ、本当に祝福された五日間でした。

病気の夫、幼い三人の子供をつれての長旅はとても不安でしたが、すべてはイエス様が用意し、導いてくださいました。金原ご夫妻にもたいへんお世話になりました。ご夫妻は「主のご用ですから」と温かく私たちを御代田までつれていってくださいました。

私たち夫婦は、口にこそ出しませんでしたが、これが二人にとって、子供たちにとって、最後の家族旅行になるという思いをかみしめていました。

五月三日、夫は四度目の入院をしました。すでに肺への転移も発見され、転移で大きくなった胸のリンパ線が声を出す神経を圧迫し、かすれ声しか出せなくなっていて、話しかけても短く返答するだけでした。やがて主治医から、リンパ線の腫瘍を止めるために抗がん剤の治療をしましょうと、夫と私に申し出がありました。夫は、もう一度社会復帰をしたいという強い希望がありましたので治療を承知しました。この時、聖マリア病院へ転院して治療するのもよいのではとすすめられましたが、私たちにはどちらがよいのか全く判断ができず、イエス様に「聖マリア病院に転院したほうがいいかどうか、私たちには分かりません。どうかみこころを教えてください」と祈りました。抗がん剤の治療によってリンパ線の腫瘍は一時縮小しましたが、骨髄の機能が低下するという副作用が出て、治療を中止せざるをえなくなりました。それからは積極的な治療はなされず対症療法へと移っていきました。食事も思うようにとれず、胸の静脈にも点滴をする中心静脈栄養となりました。私たちは毎日、祈りました。この病を負ったこと、この苦しみの中にあることはどうしてなのか、私たちには分かりません。本当に分かりません。しかし、祈っているうちに、次のみことばに導かれました。

イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」

（ヨハネ　13・7）

「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。」（マタイ　18・19）

このようにイエス様が約束してくださいましたから感謝します、と二人で手を取りあい、祈りました。

やがて夫はベッドに寝ていることが多くなりました。それでもキリスト集会の方々がお見えになると喜びました。聖書を開き、祈っていただくと「アーメン」と声を出すことができました。静かな静かな入院生活でした。イエス様がいつも自分のそばにおられる、そのことを確信しておりました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。（イザヤ　41・10）

私たちの国籍は天にあります。（ピリピ　3・20）

夫は、天国への確信をもっていました。しかし、あとに残る私たちのこと、経済的なことなど、この世の生活への心配があったようです。私は「すべて主にお任せしています。先のことは何も心配していません。すべては主が守り、ととのえてくださいますから」と言いますと、「安心し

た」と言って涙を流しました。すべてに、イエス様の平安が与えられていることに感謝でいっぱいでした。

六月、七月と食事ができない時、夫はメロンを好みました。冷たくしたメロンを一口で食べられる大きさに切って持っていくのが私の日課でした。不思議なことに、この二カ月間、キリスト集会の方から、知人から、親戚からと、なくなると思うと次のメロンが届くのです。一度も買うことはありませんでした。主がいろいろな方々を通して与えてくださっているのだと、二人でよく感謝しました。必要な時、必要なだけ与えてくださっていたメロンが届かなくなる頃、夫は氷しか口に入らなくなっていきました。

夫はこの頃、二度帰宅することができました。主治医がすすめてくださり、点滴をしたままでした。一度目は、六月二十五日、夫の四十歳の誕生日の次の日でした。夫の両親や妹夫婦が見舞いに来てくれ、ケーキを買って一日遅れでしたがわが家でお祝いをすることができました。二度目は七月十日で、金原ご夫妻や弟の譲治夫妻とお会いすることができ、主のご計画と恵みに感謝しました。

それから夫はますます弱っていき、聖マリア病院への転院を考える日々が続きました。長男に相談しますと「お父さんが弱っているのが僕にも分かる。聖マリア病院がいいと思うよ」と言いました。夫にそのことを話し、主治医に申し出ましたところ、「その方がいいでしょう。これからは子供さんがいつでも会いに行ける自宅近くがいいでしょう」と許してくださいました。

七月二十二日、寝台のついた車で聖マリア病院へ転院しました。自宅から歩いて行ける所です。

看護婦さんがたが大勢、ベッドのまわりに来てくださって声をかけてくださいます。夫は久しぶりに心からの笑顔を見せました。やがて看護調書を作成するということで、担当の看護婦さんが、次々と質問をしては看護調書に書きこんでいかれました。その中に、「今、一番頼りになる人は誰ですか」という質問がありました。主人はしばらく考えて、「イエス・キリスト」と答えました。妻でもなく、医師でもなく、ほかの誰でもなく「イエス様」と答えたのです。私は心を打たれ、夫の信仰を見習いたいと思いました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

（ヨハネ　11・25、26）

このみことばを私が読みましたら、夫ははっきりと「はい」と返事しました。

彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない。

（ローマ　10・11）

イエス様は夫を愛され、夫もイエス様だけを信頼し、二人の間には誰も入ることはできません。七月三十日は日曜日で、その日の朝、古田ご夫妻や福岡キリスト集会の皆さまが病室に見え、最初で最後の礼拝をすることができました。夫が西軽井沢国際福音センターのよろこびの集いで初めて聞き、好きになった聖歌二一八番「神より生まれしものよ」を歌い、「イエス様の時がきましたら、天国へ凱旋しますから感謝します」と祈っていただきました。

主治医になってくださった松井さんは、毎日夫の病室を訪れてくださり、聖書を読み、心から祈ってくださいました。八月三日、私は初めて夫の病状説明を受けました。「この夏は越せないでしょう」とのことでした。最悪の病状を告げられたにもかかわらず、私は今までになく落ちついて平安に受けとめることができました。主の時がせまっていることをはっきり知ることができました。

私が病状の説明を受けたことを知っていた夫は、病室を訪れる私に、何か言いたそうにじっと見つめます。八月五日のこと、大学ノートに「自分の死のタイムは…」と書いて聞いてきました。「知りたいの?」と言うと、うなずきます。私は今が主の導きの時だと思いました。それでもはっきり言うことがためらわれ、「秋までもてればいいね…」と言いますと、首を横に振ります。「夏が越せたらいいね」と言いますと前より激しく首を振り、「違う」と言います。それで私も覚悟して、「夏が越せたらいいね、ということは、逆に言えば夏が越せないということです」と告げられた通りに伝えますと、大きく「うん」とうなずきました。「イエス様の所へ早く行きたいの?」と聞きますと、また大きくうなずきます。「パパ、先に行って待っていてね。私も子供たちも必ず行きますから。私のお席取っておいてね」と言いますと、じっと私を見つめていました。

私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言った。「ここに上れ…。」（黙示　4・1）

主がヨハネに呼びかけられた黙示録の中のこの部分を二回読み、「あなたも、ここに『上れ。』

と言われたら『はい』って返事しましょうね」と言いますと、「はい」と答えました。「早く天国に行きたいのね？」と言いますと、また「うん」とうなずきました。「死ぬことが恐い？」と尋ねますと、はっきり「恐くない」と言いました。死の恐怖から完全に解放されていました。

このように私たち二人は、主イエス様を真ん中にして、いろいろなことを話しました。全てを隠さず相談し、約束もしました。葬儀のことも話しあいました。夫はキリスト集会の葬儀を希望しました。みことばをそえてパネルにする写真も、私が選んでおいた中から夫が自分で選んで決めました。後で、「こんなことを話すなんて、私ってひどいわね」と言いましたら、静かに静かに首を振りました。夫も、私も、とっても平安でした。

召される四日前のこと、「家に帰りたい」と言います。もちろんとても帰れるような病状ではありません。入院したきり外の様子も季節の移り変わりも分からぬままの生活でしたので、「緑を見たい」という夫の言葉で、せめて散歩をしようということになりました。散歩といってもベッドごと揺られていくので、大変苦痛だったと思います。それでも緑の木々をじっと見つめていました。「散歩してよかったね」と言いましたら、夫は私と看護婦さんに両手を上げて頭の上で大きなマルを作りました。ほんの数十分の散歩でしたが、病室へ戻ったときも両手で大きなマルを作り、にっこりと笑いました。

何かしら付き添わずにはおられない気持ちで、私は夫が召される三日前からは夜も昼も夫のそばで過ごしました。

八月十二日、尿が全く出なくなりました。たんがからみ、ゼロゼロと音がしだしました。鎮痛

剤の二十四時間点滴で腰の痛みもやわらぎ、召されるまで激しい痛みとの戦いはほとんどありませんでした。夜の十一時頃から呼吸の様子がおかしくなり、すぐに宮崎の両親、妹夫婦、佐賀の私の父、長男に連絡しました。長男は少年野球の遠征に山口県に行っていました。夫は長男が野球をすることを喜んでいましたから、今回の遠征も、夫が「行っておいで、待っているから」と送り出していたのでした。私が連絡に追われている時、夫は松井さんと弟夫婦に「祈って…イエス様」と言い、皆さまに涙ながらに祈っていただいたそうです。

翌日の早朝の四時から五時にかけて、全員が集まりました。夫は長男の帰りを約束通り待ちました。皆で聖歌二一八番「神より生まれしものよ」を歌い、聖書を読み、松井さんが祈ってくださいました。主のご臨在をひしひしと感じることができました。

私が問いかけますと、夫は「祈って…」と言いました。「お父さん、今まで本当にありがとう…。イエス様、どうか夫をあなた様の時にみもとにお呼びください」と涙ながらに心から祈ることができました。

召される数十分前、松井さんが「ご夫婦で、二人だけで」とすすめてくださり、私たち夫婦は二人になりました。夫の耳元で「分かりますか」と話しかけますと、ゼロゼロ言いながらも「イエス様の所に行く。イエス様の所に行く」と、二度はっきり言いました。私は胸がつまって、「イエス様の所に行くのね。行ってもいいよ…はいだよね」と言いますと、「はい」と唇が動き、これが夫の最後の言葉となりました。この「はい」は、かつて二人で話しあった、あの黙示録四章一節、「ここに上れ…」の、主に対するお返事だったのです。

あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。…死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。（黙示　2・10）

召される瞬間、フッと笑ったような、少し顔を赤らめたような表情を見せ、呼吸が止まりました。主治医の松井さんは、夫がイエス様を信じて以来ずっと枕元にあった聖書を取り上げ、夫の手をとりながら、朗読なさいました。そのみことばの一つ一つにうなずくように、再び、数回、深い深い息をしてそのまま召されていきました。その顔は平安そのものでした。「ああ、夫は天国へ行きました。イエス様の御手に抱かれました。主よ感謝します」と、くり返しくり返し、涙の中で祈ることができました。悲しみの中にも、平安と慰めが病室にあふれ、夫を真ん中にして、松井さんと固い握手をしました。私は夫を、松井さんは一人の患者を天の御国へ送ることができた、万感のこもった握手でした。私は夫のこの世での最後の日々に、信仰者の主治医を与えてくださった主に心から感謝しました。イエス様が夫を天の御国へ迎え入れてくださいましたのは、八月十三日、午前七時四十八分でした。

私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。（IIテモテ　4・6～8）

ベックさんがお見舞いに来てくださる予定の八月十五日が、葬儀となりました。葬儀は、厳粛

で心静まる祝福に満ちたものでした。遺骨となった夫を見た時、どっと悲しみがおしよせました。涙がとめどもなく流れました。皆さまが歌ってくださった聖歌二六〇番の「主よいよいよ近づかん」は、静かに静かに私の心を静め、平安な思いへと変えられていきました。

イエス様に全てをお委ねした聖マリア病院での二十三日間は、私たち夫婦にとって、何ものにもかえがたい日々でした。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ　8・38、39）

子供たちのこと

私には三人の子供たちが与えられています。当時長男は小学校の六年生、次男は二年生、長女はまだ四歳でした。抗がん剤の副作用がひどく、夫が自分から死にたいと言った時、「子供に一生残る心の傷を負わせないで…あなたの生きざまを子供たちに見せてやってください…」と泣きながら頼みました。夫は、主に従う信仰というすばらしい生きざまを子供たちに見せてくれました。私は夫の発病以来、子供たちとずっと、「神様を信じることができますように…」と祈っていましたので、「パパが神様を信じる人になった」と話しますと、子供たちは驚き、また安心しました。大好きな父が信じるイエス様は、子供たちにとって大きな慰めであり恵みでした。長男

創太郎は、私が「お父さんの病気は良くならない。イエス様のみもとに行く日が近い」と告げた時、一晩泣きあかしましたが、次の朝、「お父さんが神様の所に行くのなら、僕はそれでいい」と言いきりました。次男遼太郎は私に、「お父さんが死んだ時、どう思った?」と聞いてきました。「天国へ行った、と思った」と答えますと、「僕も天国へ行ったと思った。お父さんイエス様を信じていたから…」と言いました。長女あゆみは、「パパは、もう苦しまなくていいよってイエス様に言われたから天国へ行ったんだよね」と言います。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

これは夫の大好きだったみことばです。このみことばの通り、私たち五人は主の大きな愛によって救われました。今、長男は、「いつか、天国の父に会いに行く日まで、僕たちを生かしてください」と、次男は、「イエス様といっしょに、父が見守っていてくれますから感謝します」と祈っています。父は、子供たちにイエス様を信じる信仰と生きる希望を与えてくれたのでした。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。

（伝道者　12・1）

これからこの世で、父親のいない子供として生きていく時、さまざまな経験をするであろう子供たちにとって、この信仰の証しこそ、父親が全生涯をかけて残していった最高の贈りものとなることでしょう。

平安な日々

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。（ヨブ　1・21）

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ　1・21）

葬儀が終って後、来てくださった三百人以上の方々に礼状をお出しし、これらのみことばをお伝えしました。

夫は、病気を通してイエス様に導かれ、救いをいただき、信仰を持つことができました。闘病生活の十カ月間の内、わずか四カ月と七日間の信仰生活でした。聖書も全部は読めませんでしたが、必要なみことばだけが与えられました。夫は、信仰は歳月ではない、ただただ主イエス様を見上げていくことだと、身をもって教えてくれました。みことばの一つ一つをもって私たちを励まし、勇気づけ、平安にしてくださる主イエス様。私たちはそのイエス様にこれからも従って生きていきます。そして主の恵みに、深く深く感謝します。

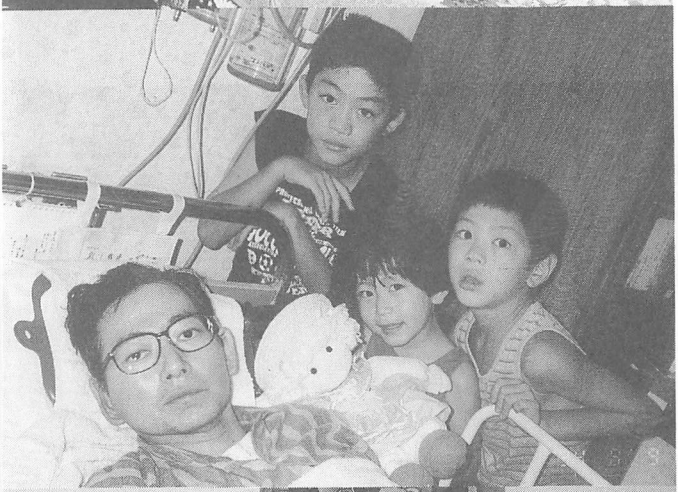
苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。（詩篇 119・71、72）



◀葬儀の日に。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。

（伝道者　3・11）





▲写真中、召される五日前。
子供さんたちと。
◀写真下、洗礼式の日に。

主の愛だけを

酒井千尋

一九三三年神戸市に生まれる。神戸一中、神戸高校卒。東京芸術大学楽理科中退。早稲田大学卒。ライター、エディターとしてピアス、帝人ほかを経て飯守アートへ。東京デザイナー学院講師。家族は妻秀子さん、長男千樹さん。

▼ロサンゼルスよろこびの集いで。







自己実現の道

私は一九三三年四月九日、神戸の東灘で生まれました。祖父は第一次世界大戦中に、ドイツ染料の輸入で富を築きました。父はその次男で、雲雀ケ丘に家を建て、温室で蘭を栽培したり、花畑を作ったり、優雅な生活をしていましたが、結核になり、四十四歳で死にました。私が十歳の時でした。父は読書家でしたが人嫌いでした。父が死んだ後、第二次世界大戦が終り、母と姉と私は、インフレの中で売り食い生活を強いられ、財産はどんどん目減りしていきました。母は船場のこいさん（末娘）でしたから、戦後の混乱した経済を乗り切れるはずもなく、私が大学に入った直後、ついに資産は底をついてしまったのです。

私は父から二つの性質を受け継いでいました。ものを書くことと音楽。特に音楽には熱中して、学校に毎朝一時間早くいって、ピアノの練習をしました。終戦後は、学校にしかピアノはなかったのです。高校ではオーケストラを作り、ストラヴィンスキーのバイオリン協奏曲を編曲して演奏したりしました。大学は、迷いました。一つの道は、医者。あまり健康でなかった私は、職業として、まず身近な医者を考えたのです。もう一つは、音楽家。しかし、演奏家になるには演奏技術が不足なので、音楽の研究者になりたいと思い、芸大受験を決心しました。楽理科西洋音楽史専攻。合格して喜んだのもつかのま、私は深刻な生活難にさらされるようになりました。その日暮らしでピアノがないという状態では、勉学を継続するわけにいきません。一年後に私は、周囲のすすめもあって、自活しながら通えそうな大学、それもそのころただ一つ、広告論の講座の

ある大学を受け直しました。私はものが書けて、音楽を生かせ、しかも食べていけそうな職業として、広告の世界を考えたのです。

そのころは食べるために何でもしました。新宿駅の臨時駅員、ガソリンスタンドのボーイ、徹夜の合金製造実験、まだ毛髪があったので理髪コンクールのモデルなど。部屋代が払えないので、友人の持っている空き地に、古い材木を買ってきて、自力で一坪のバンガローを建てて卒業まで住みました。電気なし水道なしトイレなし。石油ランプで山小屋のような暮らしです。「意思あれば道あり」。一週間働き、一週間大学へ。この貧乏暮らしで、私はすっかり非社交的な性格になってしまいました。

卒業の年は就職難で、放送局や広告会社を受けましたが、すべて落ちました。最終選考に残っても、面接に行く電車賃がないのです。行けたとしても、服はよれよれ、靴はぼろぼろで、これでは採用する方も二の足を踏むでしょう。それでも、大阪のピアスという化粧品会社にやっと勤めることができ、一年間営業をやりました。そのうち文章を書く仕事が増え、ラジオのコマーシャルで賞をいただいたりして、それを足場に、給料のいい帝人という会社に変わりました。

当時帝人はテトロンなど合成繊維で活発な広告活動を展開していました。ホンコンシャツ、フラワーモード、個性創造…華やかな広告合戦のさなか、仕事は山ほどあり、私は広告を作り、キャンペーンの企画書を作りました。当時の私は、広告作りに、自己実現の夢のすべてを賭けていたのです。

職場では、隣にいたほくろのある女の子と結婚しました。いったんは断られましたが、「あな

たは一人っ子だから、僕とでないとうまくいかない。わがままさせてあげる…」と約束手形を乱発して、ついに結婚にこぎつけました。といっても貧乏でしたから、新婚旅行は高知、足摺岬に行くのがせいぜいでした。すぐ転勤で東京に移りました。東京では広告の仕事が忙しく、私はますます自己実現の道をつっぱしっていきました。

主のささやき

子供のころ、家に聖書があり、私は文語文で書かれた分かりにくい聖書をところどころ読んでいました。ですから、私は苦しい環境に置かれると、教会に行けば心の平安があるかもしれないな、と考えていました。芸大の夏休みには、友人に誘われて、六甲教会のフランス人の神父の家に遊びに行き、カトリックの典礼音楽を片っぱしから歌いました。しかしその間一度も、聖書のことも、イエス様のことも、神父の口から聞くことはありませんでした。日曜日には六甲教会に行きました。そこには壮麗な儀式はあっても、私の悩みに関心をもってくれる人、イエス様のことを話してくれる人は一人もいませんでした。私はやがて離れてしまいました。主はこのようにして、私を「主イエス様ご自身」に出会い、しっかりと結び付くまで留め置かれたのでした。

新婚旅行の初めての晩、私はなぜかホテル備え付けの聖書を開いて妻といっしょに読みました。

「…野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたによくしてくださらないわけがありましょうか。…何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。…神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうす

れば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ　6・30～34）

今思うと、私たちの結婚を主が憐れんで、ひっそりと整えてくださったのだと思います。やがて主と本当に出会うその日のために。しかし、会社に戻ると、私はまた、自己実現の道をひた走るのでした。

虚栄の向こうに見た虚しさ

「意思あれば道あり」。私の自己実現の道は一見好調でした。沢山の広告賞を受賞し、社長の文章の代作もしました。しかし、私はいつしか、その華やかさの向こうに、恐ろしい虚しさを感じるようになりました。広告作りは、泡のような仕事です。いくら評判になっても、一月先には忘れ去られます。私はそんな日々の中で、「この虚しさはなんだろうか。こんなことを続けていていいのだろうか」と感じていました。

実に、日の下で骨折ったいっさいの労苦と思い煩いは、人に何になろう。その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。これもまた、むなしい。（伝道者　2・22、23）

やがて帝人は構造不況に突入しました。もはや会社にとって広告は不要でした。課員の削減が仕事となりました。山ほどある賞状やトロフィーは、新任部長の「目障りだから片付けろ」の一

言で、ごみとして処分されてしまいました。専門職とは、しょせん仕事があっての華です。私の自己実現の夢は、あえなく潰れてしまったのです。

そのころ、高給で雇われ社長の口があり、私は家族に豊かな生活をさせたい、老後の資金も確保したいと思い、銀座のデザイン会社の社長を引き受けました。自己実現の最後の悪あがきでした。一年の間、しゃにむに働きました。私は広告制作の現場で面白い広告を作りたい、文章を書きたい、というのが夢でしたが、社長職ではそんなことはできません。現場を離れ、ひたすら経営のために奔走し、やがて徒労感と虚しさだけでぼろぼろになりました。もはや、「意思あれば道あり」という自己実現の生き方ではどうにもならない所に追い込まれていました。

主の救い

主は、このようにして、私の自己実現の人生の誤りと虚しさに気付かせてくださったのです。しっかりした立脚点に立たない限り、私の人生は結局徒労にすぎなかったのだと分かりました。

そのころ主は、飯守さんを通して私に語られました。ベックさんのメッセージのテープもいただいて聞きました。いままでの生き方はすべて間違いだし、主の前に多くの罪をおかしていることもはっきりしました。ベックさんにお目にかかり、心から悔い改め、そしてイエス様に従って生きていくことを決心しました。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すで

にキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

（ローマ　5・8、9）

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。

（ピリピ　3・7）

仕事は、飯守さんの会社で、企業のマークやロゴ、色彩をきめてイメージを改善する仕事をやることになりました。私は文章と企画の担当です。主に守られて、仕事は少しずつ増えていきました。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。…これらのものはすべて与えられます。」（マタイ6・33）のみことばは真実でした。

しかし、実のところ、私はまだまだ不十分な信仰の者でした。イエス様を信じてはいるものの、イエス様の十字架の血の贖罪を自分のこととして受け取っていたとはとても言えません。集会に出ても、終わると逃げるように帰り、自宅につくとほっとしました。持ち前の非社交的な性格は直らず、バイブル・キャンプにも参加しませんでした。

主の削ぎ落としと愛

主はこのような私をもっとお側に引き寄せるために、ご本作りの仕事をくださいました。キリスト集会のご本は、一冊一冊が祈られて手渡されていきます。そして全国からの注文に応じての

発送や、集会での購入と保管、証しの作成、デザインなど、多くのかたがたの祈りと献身で発行されています。それは、イエス様の体であるキリスト集会の、たくさんたくさんある器官の働きの一つです。私はその中の文章整理を同労の方と担当しているにすぎませんが、主はそれを通して、私にたくさんのことを教え、導き、造りかえてくださいました。初めのうちは、何の悩むこともなく、ただ原稿を懸命に整理していました。ですから私は、編集が終わったとき、

「…自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことををしただけです。』と言いなさい。」（ルカ　17・10）

と、口では言い、心の表面で思っていても、実はひそかに自分に拠り頼んでいるところがありました。日程を計画し、予定通りに進行する。無理は頑張りで克服する。問題点は私が解決する。いや、解決しなくてはならない。それが主の「ために」働くことだ。おお、これはなんという思い上がりでしょうか。主はこのような思い上がりを、決して決して見過ごされません。

あるとき、サタンが巧妙に偽装した原稿がまぎれこみました。掲載せずにすみましたが、私はその前後のことで、主に刺されました。「おまえは一体、どこにいるのか。何をしているのか」。この時の主の詰問は実に鋭く、ざっくりと骨にまで届く深い傷でした。母が召されるころで、他にも問題が重なって、私は弱り果て、もはや一歩も進めなくなってしまいました。今までどこかで自分により頼み、いいと信じてきたやり方が、そして私の信仰の思い上がりが、主によって完全に否定されたのです。このとき主は、私をざっくりと削ぎ落とされたのでした。実際に体重も

十キロ痩せてしまいました。私は、叩き潰されました。どうしていいか分からない。それでも原稿の整理を続けなければならない。ぎりぎりの状況の中で、私はひたすら悔い改め、主の憐れみと助けを祈り求めました。

サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。

（使徒　9・8）

…「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。」……ひとりの御使いが彼にさわって、「起きて、食べなさい。」と言った。彼は見た。すると彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水のはいったつぼがあった。彼はそれを食べ、そして飲んで、また横になった。それから、主の使いがもう一度戻って来て、彼にさわり、「起きて、食べなさい。旅はまだ遠いのだから。」と言った。

（Ⅰ列王　19・4～7）

「…わたしは悩みの炉であなたを試みた。わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行なう。どうしてわたしの名が汚されてよかろうか。わたしはわたしの栄光を他の者には与えない。」

（イザヤ　48・10、11）

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

（ヨブ　42・5、6）

そして私をこのように砕くことこそ、主のご計画であり愛だったのです。砕かれて、ばらばらになったとき、私にはもはや主イエス様以外に、イエス様の十字架以外に、何も残っていないことを、骨身にしみて分からせられたのです。

しかし、主は、愛の主です。私が悔い改め、主だけに頼ることを祈ったとき、主はまたたくまにすべてを完全に整えてくださいました。主はこの時、「祈りは必ず答えられる、それも具体的に、はっきりとした形で」という確信を与えてくださいました。主へのおそれと、信頼と、従順。このことを境として、わたしは主に、一歩、引き寄せられました。このときの主の試練は、どのように書き連ねても、お伝えすることはできません。それは個人的であり、特殊であり、本人だけにしか分からないものだからです。

…霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。

（ヘブル 12・10）

あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。

（ピリピ 1・29）

その間、ノイローゼ同然の私を、じっと無言で耐え、支えてくれた妻に、また回りで祈って支えてくださった皆さまに心から感謝します。

それからの私は、ご本そのものをただ主だけにお任せするようになりました。計画なし。予定

表なし。出来上がりのイメージなし。がんばりなし。自分なし。ただ、主に祈って、主が必要とされるものをその都度いただくだけ。主のみ手が存分に働かれるように、整えておくだけ。主の愛だけが輝くように。それを邪魔しないように。そして主は、ご本作りを通して、私の信仰をも、もう一度整えてくださったのです。

私が心のどこかで「主のために働くんだ」と思っていたことは、とんでもない思いあがりであり、間違いでした。そうではなくて、ただ、主が私のような者を「用いられる」だけ、たったそれだけなのです。主の前に、人は自分の働きの場を自分で決める権限などないのでした。私は今、次のように思うようになり、祈っています。「主よ。あなたが私を愛していてくださることは、骨身にしみてよく知っております。私があなたを愛していることもあなたはご存じです。ですからあなたが必要とされるなら、何でもどうぞ。でも、私のあなたへの愛だけは、どうか、取り上げないでください。なぜなら、それを取り上げられると、私にはもう何もないからです」。

結婚してあっというまに三十数年がたちました。妻はいつもにこにこと、対人的に無能力な私を支え、私を立て、主にある家族を陰で整えてくれ、対外的には潤滑油となってくれました。このような妻を与えてくださった主に、心から感謝しています。

大きな恵みのなかにあって

「聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ」。「主だけに繋がる」。私たちは大きな恵みの中にありながらもつい周囲のことに気を取られて、主の愛のご計画の、恵みの壮大さに目がいかず、気がつか

ないでいるのではないでしょうか。

私自身、未だに信仰の弱い者ですし、多くの罪、多くの過ちを日々重ねます。私の中にはよいものはひとつもありません。自分なんか大嫌いだし、自分を見ると絶望し、いてもたってもいられなくなります。でも、そのような私でさえ、悔い改めるとき、主は赦してくださるし、忍耐して愛し続けていてくださいます。なんとも言えないやすらぎと、細やかな心遣いを示してくださいます。時には厳しく、時には優しく。それを知ってしまった今は、ただ主だけに繋がっていられるように、主の憐れみを祈るばかりです。

また主は、どのような苦しみや悲しみの中にあっても、その霧や雲の上に、明るい青空を用意してくださっています。主はすべてを愛のうちに計画し、ひとりひとりの上に、愛の計画を達成しようとしておられます。それは、個人的で、具体的で、はっきりした主の愛のご計画です。それをこの目で見た以上、私は、ただ主を見上げ、恐れ、愛し、祈り、信頼し、聞き、見、期待して待っているだけです。

どうか一人でも多くの方が、このすばらしいイエス様に出会われ、救われますように。どうか主にのみ、ただ主にのみ、誉れとご栄光がありますように。



そうだったのですね

酒井秀子

一九三九年香川県に生まれる。堺市立熊野小、殿馬場中、鳳高校、大阪女子学園短大卒。帝人勤務後酒井千尋さんと結婚。朝日カルチュアセンター、東武カルチュアセンターのステンドグラス講師。日本建築美術工芸協会会員。夫千尋さん、長男千樹さん。

一九九四年十月三日、成田空港を出発し、ドイツの「よろこびの集い」に出発することができました。ドイツに到着したときにいただいたみことばは次のものでした。

神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。（ローマ　4・21）

十月五日、バスに揺られながら見る景色は、初めての地なのになぜかなつかしく、涙がでてくるのです。どうしてだろう……。眺めているうちに、御代田の国際福音センター周辺を思わせる風景がところどころ出てくるのです。

御代田のイイモリ・ハウスができた時、節子さんと何度も何度も車でいろいろなものを東京から運びこみ、疲れると夕焼けの景色を見に、千メーター道路を車を走らせて眺めた景色が思いだ

されました。

ベックさんはこんなにすてきな所から、いやだと思っていた日本へ、それもいやだと思っていた東京へとやってこられたんだ、どんなにか故郷ドイツに帰りたかっただろう、と思いました。

私が小学校三年で叔母の家に養女に行った時、夜になるとホームシックにかかり、淋しくて淋しくて故郷の香川に帰りたかったことが思いださされるのでした。

ああ、イエスさまもどんなにか天の御国にお帰りになりたかっただろうに、「ごめんなさい、私のために故郷を離れて来てくださり、また十字架にかかって死んでくださったのですね、ごめんなさい」と思いました。

ああ、そうだったのですね、私がドイツのよろこびの集いに参加できたのは、

ああ、そうだったのですね、イエスさまの愛を、もう一度知るためだったのですね。

ああ、そうだったのですね、とても行けそうにないと思っていたのに、

ああ、そうだったのですね、あんなにたてこんでいた仕事がスムーズに片付いていったのは。

ああ、そうだったのですね、本当にごめんなさい。いつもいつも私のことをかわいがってくださってありがとうございます。

ああ、そうだったのですね、叔母の家に養女に出たのも、ベックさんと飯守さんのお家で初めてお会いした時も、いずれはイエスさまを受け入れると言ってしまったことも。すべてイエスさまがなさったことだったのですね。

養女である私にとって、叔父と叔母に「イエスさまを受け入れました」と言うのは、とても言

いにくいことでした。叔父と叔母は私を可愛がってくれて、私がしたいということはすべてさせてくれ、大学は東京に出たいと言ったときなど、「娘一人を出すのは心配だから私たちもいっしょについて行こう」とまで言いだす人たちでした。これには私もまいってしまい、結局大阪の短大にしてしまいました。

こんな優しい二人ですから、私の結婚のことでは、ひともんちゃくありました。「養女に入っておきながら、結婚して姓が変わることは、私たち夫婦を捨てて出ていくことだ」と言われ、来る日も来る日も気まずい思いをしました。「結婚しても捨てるのではない。会社勤めの男性が姓を変わることは大変だ。いずれは二人を見るつもりだ」ということをよく理解してもらうまで、時間がかかりました。そのこともあって、「私はイエスさまを受け入れます。天国でまた一緒に暮らしましょう」と言うまでに六年の歳月が流れました。

主人が先に救われた後、それを叔父と叔母に言いだしかね、特に叔父は私を猫可愛がりに可愛がってくれていましたので、「イエスさまを信じます」などと言おうものなら、「捨てられる、自分たちの死後はどうしてくれる」と、またまたひともんちゃくありそうなので、少しずつ説得して、ゆっくりと理解してもらうことにしました。

まず、それとなく「主人がキリスト集会に行くようになった。主人は自分の力により頼む性格なので、イエスさまにすがって生きていくほうがよいと思う」ことを、いろいろな例をあげて、叔父と叔母、主人の母に手紙を出し続けました。そして叔父と叔母に、聖書を毎夕一章ずつ録音し、「神さまはすばらしいよ」などと一言二言入れて送りつづけました。マタイ、マルコ、ヨハ

ネと送っていましたが、文句も言ってこないので、「私もキリスト集会に通うことにした」と言ってみました。その頃には「そうやなあ、そんな生き方のほうがええかも知れん」と言ってくれるようになっていました。

「キリスト集会に通うと心が洗われるようだ」ということ、「何だか分からないが、一週間、感謝な気持で過ごせる」ことを知らせ、そしてキリスト集会に通いだしました。

やがて、八カ月後に高知でよろこびの集いがあり、物部川で洗礼式があることを知りました。私は主人が洗礼を受けたときから、ずーっと川で洗礼を受けたいと思っていたので、叔父に「高知で洗礼を受けたい」と告げました。「叔父叔母にも来て見てほしい」と、怒られるのを覚悟で言ってみました。すると、「親子三人で行くのか」と聞いてきて、「飛行機の費用はおじいちゃんが出してやる」とまで言ってくれ、叔父叔母は来てくれませんでしたが、私と長男は一九八五年八月十八日、物部川で受洗することができました。

その頃には、叔父から「お祈りはどうするんや」とか「成就とは」と質問が出てくるようになっていました。叔父は活字人間で、寝る時、本がないと眠ることができず、戦後本好きが高じて古書籍屋を始めたような人でしたので、いつのまにか聖書を読むことを始めていたようでした。そして、私が吹きこんだ聖書の朗読テープを聞きながら毎晩眠っているとのことでした。

私の洗礼から十日後、叔父は七十四歳で突然世を去りました。そして叔母も、一九九一年十二月、病院でベックさんに見舞っていただいてから少しずつ変えられていきました。入院した頃は、「面倒を見るのは当たり前、見舞いに来るのが遅い」と不機嫌になったりしていましたが、近頃

は私が「天国で待っていてね」と言うと、「うん」とうなずくようにまで、イエスさまは叔母を変えてくださいました。その叔母は、一九九五年十二月二十四日、病院でクリスマスの歌を聞きながら天に召されていきました。感謝です。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者　3・11）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

あなたはあなたの神に会う備えをせよ。（アモス　4・12）

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。（詩篇　103・1～5）

あるとき、過労から、耳鳴りとめまいを経験することになりました。私は若いときから、倒れてしまうまで自分の体調が分からないたちで、叔母の看病、仕事、主婦業、それに更年期が重なっ

て無理をしていたようです。主人の母は救われて天国にいますが、中年のころからメニエル氏病で、よく耳鳴り、めまいを訴えていました。私はそのつらさをよく理解することができませんでした。私が耳鳴りとめまいがしていた頃のメモです。

鈍い私ですもの、こんなことがなければ
主人の母のつらさ、分かってあげられませんもの。

そうだったのですか。
これからずっと、私の耳の中に住まわれるのですね。よろしくお願いします。
人に優しくなれるよう、信号送ってください。私は自分かってに動きまわるんです。
でも、息子や主人じゃなく、私の耳の中にいらしてくださって、ありがとうございます。
これからも、どうぞよろしくお願いします。

そうなんですか。過労はだめですか。ハイハイ働きすぎないようにしましょう。
そうですか、イライラはいけませんか。ハイハイ、いらいらするのはなるべくよしましょう。
そうですか。ゆっくり、のんびりですね。これは大変です。
私がいちばん苦手なことです。でもやってみますよ。
そうだったのですか。
私はずっと、冷蔵庫の解凍の音だと思っていました。

そうだったのですか。この音は。
神様からの信号だったのですね。ずいぶん長い間知らんふりしてごめんなさい。
変圧器の音だと思っていましたから。
そうだったのですか。私に知らせるのは大変ですね。

ずいぶんうかつですね。私の耳の中にずっと住まわれるのですね。
よろしくお願いします。
神さまからの信号、何をおっしゃっているのか分かりませんが、
よく心を静めて聞きとるようにします。

そうだったのですか。主人の母からつらい病だと聞いていましたが、おおげさな人だと思っていました。やっとその痛みが分かるようになるのですね。

そうなんですね。神さまだってたいへんですね。鈍い私に信号を送りつづけるのは。
それにしてもありがとうございます。
私の耳の中にいらしてくださって。

私は歩みの遅い者ですから、いつも後から「ああ、そうだったのですね」ということになるの

ですが、「ああ、そうですね」と言えるようになりたいと思います。主はすばらしいお方です。感謝です。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。
（Iテサロニケ　5・16～18）

これらのことはすべて、神から出ているのです。
（IIコリント　5・18）

…イエスは彼に言われた。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」
（マタイ　22・37）



▲左上勇さん、左下邦子さん。ドイツよろこびの集いで。
◀ご自宅の前で。



目をさましなさい

久保元勇

一九四一年京都に生まれる。高原小、蒲生野中学、府立須知高校、神戸大学工学部卒業。株式会社クボタに入社、エンジンおよび関連機器の研究開発、コンピュータソフト開発、解析関連業務に従事。日本科学技術連盟講師。家族は妻邦子さん、長男浩樹さん、次男直樹さん。

・家庭集会　随時　・住所　大阪府堺市城山台三丁目一八-一五　〒五九〇-〇一　・電　〇七二二-九九-九四五八



▲家庭集会で。

1　新しい地へ

一九九二年十二月二十二日の明け方。私はふしぎな夢を見ました。短時間のうちに四日コースの夢を見たのです。

一日目。多くの国の人々がごちそうを前にして食事をしており、やがて私もそこに加わることになっています。二日目。諮問。面接。四人の人が順番を待っており、私の番が迫っていて、どのような証しをしようかとやや緊張した場面。三日目。左の方に円形の段々になった場所があり、主にある方々がともに集まって、喜び、賛美し、皆が本当に輝いています。そこにはいろいろな国の人々がいて、私もそこへ入れることになっています。四日目。……？　目覚まし時計で目が覚めました。横に妻の寝顔があるのを見てきびしい現実に戻っていました。その頃私は、以前に所属していた教会で出していた福音伝道のためのパンフレットについて、その内容や構成をいろいろと考えている時期でした。

その夢を見た日から、なぜかは分からないのですが、うれしくてうれしくて仕方がありませんでした。何日間か人には言わずにこの夢のことを考えましたが、その意味が分かりません。その頃所属していた教会の祈禱会では「ふしぎな夢を見た」とだけ話しました。「どんな夢？」と聞かれましたが、「まだその意味が分からないので…」と言うしかありませんでした。

その後半年して、私はキリスト集会で毎週のように開かれる家庭集会や年に何回も開かれる西軽井沢国際福音センターでの「よろこびの集い」に参加し、そこに生きて働かれている主の御姿

に初めて接することができました。雄大な浅間山を窓越しに見ながらの福音集会、元旦礼拝。全国から集まった方々の喜びの顔々。さらに一九九四年秋の「ドイツよろこびの集い」。日本からドイツの各地から、何百人もの方々が集いました。ともに主を喜ぶことのすばらしさ。ことばは通じなくても、主にある霊の一致を体験しました。それは天国を垣間みた思いでした。

一般に、夢のことを取り上げるには、私たちは慎重である必要があります。しかし、あれから数年たった今、冒頭に述べた夢も、主があわれみによって私をキリスト集会へと導かれた一つの過程だと思えるので、あえて書きました。

一九九二年十二月三十一日。私は当時所属していた教会のある方に年賀状を出そうとしました。そのとき、次のような聖書のみことばを書き添えました。

目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。

（黙示　3・2）

この聖句を書きながら、私は涙を押さえることができませんでした。この聖句は、主が私に与えられたみことばであると思いました。妻に見せると、「正月早々から死の話はやめて！」と言いました。しかしいくら祈っても、これ以外の聖句が与えられません。私は真夜中にそっと車を運転して、その年賀状をその方のポストに入れてきました。

一九九三年。年が変わり、示された聖句や夢のことが気になりました。会社をやめて神学校にでも行くべきなのか？　とも考えました。しかし、確信が与えられません。妻に話しておかなく

てはと、何度か話を持ちかけましたが、そのつど妻は反撃しました。「今会社を辞めたらどうなるの？」、「家のローンは一体どうするの？」と。

今日多くの教会は「目をさましなさい。死にかけているほかの人たちを力づけなさい。」と聖句にある通りの状態ではないでしょうか。サンデークリスチャンの群れ。毎週日曜日朝の礼拝をきっちり守り、終わればだれとも話さずサッと家へ帰る…。自分だけの信仰。形式主義。無気力。そして私自身の霊的状態もまた、長くこのようなものでした。

その一方で、私たちのまわりには、イエス様を知らないで滅びに向かう多くの飢え渇いた魂があります。私は救われて長くなるのに、主のためにはたして何をしてきたのか？　主のためと言いながら、すべてを自分のためにしてきたのではないのか？　主にこんなにまで愛され守られていながら、主のためには何の働きもできていない自分に気がつかされたのです。そうです。私はハンマーで頭を殴られなければ目を覚ますことができないほど眠りこけている愚か者でした。

神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るのか、決してわからない。…耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」

（黙示　3・1～3、6）

私は毎年春先には花粉症にかかり、不眠の夜が続きます。私はこのような時、いらいらすることをやめ、起き上がって静まり、所属していた教会がもっと生き生きしたものに変えられるように祈るようになっていました。

その頃私は夢中になって、多くのパンフレットを作っていました。これらを使って教会がもっと生き生きしたものに変えられるように、教会の方々とともに語りあい、祈りあっていこうと考えていたのです。

一般に、人間が中心となる組織の中には、よくトラブルが生じます。私たちの信仰生活の中においても、人につまずき、組織に翻弄されてしまうことはありえるのですが、問題が生じたとき、私たちはすぐ主のみもとに行き、主にその重荷をになっていただくことが大切ではないでしょうか。すべての問題は主からきているのですが、そのことを心の底から分かるようになるには、私たちは悲しいことに多少の時間がかかるようです。

主にすべてをゆだねて導いていただくのではなく、人がすべての物事を決定し、人が人を指示し、組織が人を裁き、支配してしまうような仕組みが、もし少しでもあるとすれば、ここに主の働きを妨げる大きな壁があるのではないでしょうか。

その頃ある方から、妻が読むようにと、何箇所かに傍線を引いた「絶えず祈れ」の本をいただきました。後ろのページにはキリスト集会の案内があり、私はそれをひろい読みして、これは全

く教会制度を無視した「無教会主義」の書物だと思いましたから、読まずに放置しておきました。

四月二十四日。もう二週間にもなるし、そろそろその方に借りた本を返さなければならない。それで「どうもご親切にありがとうございました。しかし、ここの箇所がおかしいので、このような本はもう貸さないようにしてください」と手紙を書こうと考えました。そのために、私はやむなく「絶えず祈れ」を読みました。そのとき私は吸い込まれてしまいました。「祈りの大切さ」は日頃から多少は分かっているつもりでしたが、もっと深く真剣にこの本を読むべきだとの思いが生じ、早速キリスト集会へ手紙を書いて他の本もあわせて注文しました。

主は彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります。」と答えた。神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」…主は仰せられた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。」

（出エジプト　3・4、5、7）

四月末日。「絶えず祈れ」、「神の愛」、「実を結ぶ命」、「光よあれ」が届きました。私はとりつかれたようにして朝も晩も読みあさりました。この頃時を同じくして、二十年あまり前に同じ教会に行っていた名古屋の方が音楽テープを届けてくださいました。「テープに入っていた証しは抜いておいたからね」とおっしゃって、その方の配慮が分かりました。それは「苦しみと感謝か

ら生まれた賛美」第二集でした。私はテープを聞いて圧倒されてしまいました。心からの賛美。これまでの賛美とどこかが違う。その違いはどこから来るのか？　もっと他のテープも聞きたくなりました。テープの端に小さく「キリスト集会」とあり、私はまた驚きました。

五月二日。キリスト集会を探す。同じ教会の別の方が行ったことがあると聞き、富田林の加藤さんの電話番号を教えてもらい早速電話し訪問。短い語らいでしたがテープ第三集、第四集を入手。そのとき以来何度も何度もテープを聞きながら、賛美の間に入っているみことばを聞き、私は導かれていきました。

五月二十五日。会社を休み、様子を見るために富田林の昼の家庭集会に出席。私が妻に対し、「人を見ないで、十字架を見上げるように。主が回復してくださるから…」と言ってきたことを話すと、ある方から「奥様の悩みを分かちあうことが大切ですよ」と忠告されました。その時から、「私だけが教会へ行って恵まれている。妻は他の教会をさまよっている。これではたしていいのだろうか？」と考えるようになりました。

五月三十日。神戸のキリスト集会の様子を見に行きました。その日の集会で私は、「来年春までは月一回ほど集会に来ます。場合によったらその後、キリスト集会にかわるかもしれません」と話しました。その頃私は、十二月に所属教会の牧師に事情を説明した上で手続きを終え、キリスト集会に移りたいと考えていました。

六月六日。教会へ。司会の方が私に短い証しをするよう求めました。私は聖句を引用して次のように語りました。

荒野に呼ばわる者の声がする。「主の道を整えよ。荒れ地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。このようにして、主の栄光が現わされると、すべての者が共にこれを見る。主の口が語られたからだ。」（イザヤ　40・3～5）

たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。

（Ⅰコリント　13・1～8）

「主は私たちに、『主の道を備えよ』と命じておられます。私は家族や知人の救いに対してキリストへの道となっていない、むしろ妨げにさえなっている自分を知っています。私自身の山、

つまり自分中心の思い、誇り高ぶってしまう心は砕かれなければなりません。私自身の谷、つまり弱り果てた暗い心の状態は、埋め立てられ修復されなければなりません。

「私自身の生活の場を通して、すべての人が、救い主であるイエス様を見られますように」、「私自身が心砕かれへりくだるときに、主が豊かに働かれることを知ることができますように」、「いつも主の栄光だけが現わされ、すべての人々がそれを見るようにしてくださいますように」、「私自身が祈り、いのち、聖、愛そのものであるイエス様にだけ目をとめて歩めますように」、「お互いに裁きあうのではなく、主にある愛の交わりを保つことができますように」、「私たちがともに励ましあいながらイエス様の愛を人々に伝える者に変えられますように」。以上が私の祈りです。

先に救われた私たちが、救われてすぐに天に引き上げられないで地上に残されている理由は何でしょうか？　それは、私たちが私たちの生活を通して、まだ救われていない方々にイエス様を伝えていく「主の道となる」役目があるからにほかなりません。「私は救われた。ああよかった」で終わってはならないのです。今、この機会を通しても、私自身がイエス様からもっと役立つ者となるために試されていることを深く感じます。そしてますます私たちが砕かれて、主が通られるよい管とならせてくださいますように…」という心からの祈りを語りました。

これが最後の教会出席になろうとは、その時には考えもしませんでした。

イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたがたにはわからないが、あとでわかるようになります。」（ヨハネ　13・7）

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（IIコリント　4・17、18）

「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。」

（黙示　3・19）

やがて、今まで車に乗っても家にいても、いつも流していた音楽テープは、人間中心の傾向が感じられてか、もう聞きたくなくなりました。かわりに「苦しみと感謝から生まれた賛美」第三集のみことばが、私にとっての主の導きになりました。

六月十二日。西宮の家庭集会に長男も出席。以後礼拝にも家庭集会にも欠かさず出席するようになりました。そこにいると、生きて働いておられる主の働きが、ひしひしと分かるのです。

六月十九～二十五日。長男はロサンゼルスの「よろこびの集い」に参加し、そこで洗礼を受けて帰りました。人間の思いを超えて不思議な導きをなさる主に感謝します。

六月二十日。神戸キリスト集会へ礼拝に。

この間の多くの一つ一つのできごとを通して、私ははっきりと、キリスト集会を通して主に仕えるべきだ、という確信が与えられました。

「主だけを真に礼拝し、主にある喜びに満ち溢れて生活できれば、主がそれをよしとされれば、私たちはそれで十分ではないか？」、「今までお世話になった教会は、私がいなくなっても十分成り立つはずで、役員会、教会学校やそのほかのことも主はみこころのままにすべてを整えてくださるだろう」というふうに、思いが整理されていきました。この間も、主が絶えず私たちを導いていてくださっているという確信があり、私はいつも平安でした。

六月二十四日。牧師、役員会あてに退会の文書を提出。

イエスは、みなの者に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」（ルカ　9・23、24）

六月二十六日、二十七日。神戸キリスト集会へ。

七月三十一日。キリスト集会に移ってわが家での第一回の家庭集会。自分の思いではなく、主の導きによって、その後もほとんど毎月一回家庭集会が開かれました。

八月六日から八日まで。西軽井沢国際福音センターでの「よろこびへのコンサート」へ。次男直樹受洗。感謝。このようにして息子たちもあっという間に救われました。私たちはこうしてキリスト集会に導かれました。主に従いたいと思い、願うだけの者に、主はこのように数々のよいことをしてくださいました。

「彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちにわたしは聞く。」
（イザヤ　65・24）

「わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。――神である主の御告げ。――わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。」
（エゼキエル　34・14～16）

私は主の豊かな導きを思い、ただ主を恐れます。

2　主との出会い

ここで私がどのようにして主と出会ったかを記します。私が五歳になったばかりの六月十日。私は父親と二人で山道を歩いていて感電事故にあい、目の前で父親を失いました。また、六歳のとき友達と魚取りをしていて池に落ち、死にそうな目にあいました。不思議にも七歳年上の姉がたまたまそこを通りかかり、助け上げられました。私はこの世で二度死んでいてもおかしくない経験をしました。

私は幼い頃に父を亡くしましたが、神様が私に目を留めてくださり、いつも導き、守ってくだ

さっていたことを感謝しています。私は死んでいてもおかしくない者です。今、私がこうして生かされているのは、何か大切な意味があるからだろうと思えてなりません。私は父を亡くしたことにより、人生について、死について、深い関心を持つようになりました。私の郷里は、日本のどこでもそうでしょうが、因習に深くかかわったところでした。私の家には仏壇、天神、きつねが両側にいる神棚、出雲のえびすの顔、神社の札などがありました。幼いときから、私はこんな木の切れはしの像が神様でないことが直観で分かっていました。あるとき、天神の神棚の扉を開けて中を調べました。外から覗いたとき光が見えるように安物のメッキをした鏡が貼りつけてありました。祖母は大変悲しみましたが…。人間が作り出したこれらのものは全く信用がおけないことも、この時確認しました。

その後は、父の法事や神社の行事があっても、こんなものは神様と何の関係もないことが分かっていましたから、拝むことはありませんでした。父のいない私を、まことの神様はいつも守り続けていてくださいました。

私が小学生の頃、兄が友人の上田さんと教会に通っていたことがありました。兄は歌を歌うのが好きで、よく流行歌を歌っていましたが、一時期にはよく讃美歌を歌っていました。子供の私に、讃美歌を通してイエス様のことが伝わってきました。兄がよく歌っていたのは、次の讃美歌でした。

「いつくしみ深き友なるイエスは、罪とが憂いをとり去りたまう。こころの嘆きを包まず述べて、などかはおろさぬ、負える重荷を。いつくしみ深き友なるイエスは、われらの弱きを知りて

憐れむ。悩み悲しみに沈めるときも、祈りにこたえて慰めたまわん。いつくしみ深き友なるイエスは、かわらぬ愛もて導きたまう。世の友われらを捨て去るときも、祈りにこたえていたわりたまわん」（讃美歌二一二番）

兄が持っていた「私の人生探求」（田中菊雄著）が、この頃の私を導いてくれたいわゆる座右の書でした。この本に記されている書物を次々と読みあさりました。倉田百三の「出家とその弟子」、「親鸞」「克己」に涙しました。すばらしい生き方だと思いました。ヒルティの「眠られぬ夜のために」、「幸福論」は何度も何度も読み返しました。この時期の私を支えてくれたものはまさしくこの「私の人生探求」であり、これ以上のものは他にはないと思っていました。勤勉、努力、精進。これらの結果としての成功を説いていました。私もこの生き方にならって生きようと努めました。

しかし一方、これらの本だけでは満たされず、もっと偉大なもの、永遠なるものがあるのではないかという思いがいつもありました。今思うとイエス様がこの私を終始導いていてくださっていたことが分かるのです。私のうちに、何か真実なものを求める気持ちは絶えません。その頃は毎朝六時ごろのラジオ関西の番組を欠かさず聞きました。「世の光」という五分ほどのショートメッセージに聞き入りました。毎朝聞く聖書のみことばによって、岩のように堅い私の心は少しずつ耕され、柔らかな土壌に変えられていきました。数年間を要しました。ついに「世の光」あてに手紙を書きました。すると、近くの聖書教会が紹介されました。その教会へ通うにつれて、

少しずつ神様のことや聖書のみことばが分かるようになってきました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

自分の力に頼って、神様の思いから遠く離れて、罪深い生活をしているこの私を救い出すために、神様がそのひとり子をこの世につかわされたこと、主イエス・キリストが十字架にかかって死んでくださったのは、ご自分のためにではなく、私を救い出すためであったこと、この私のそむきの罪を赦すためであったことを知り、ただ感謝するだけです。

「わたし（イエス様）はぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」　（ヨハネ　15・5）

「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」

（ヨハネ　16・24）

「わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさ

い。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」（ルカ　11・9）

私は長い間「人生探求」式の生き方をしてきました。自分の努力で真理をつかみ、救いを得ようと探し求め続けてきました。しかし、イエス様はずっと忍耐し、私を見守り、支え続けてくださっていたことがその時やっと分かりました。私は全面降伏しました。自分で自分を築き上げようとすることこそ、主に背く行為であることを知り、「神様、赦してください。こんな罪人の私をあわれんで助け出してください」と祈りました。一九七〇年三月十四日、洗礼を受けました。いつしか「私の人生探求」は色あせ、かげの薄いものになってしまいました。その年の秋、愛する妻を通してふたごの息子が与えられました。

3　教会遍歴

喜びの教会生活が続きました。特別伝道集会や福音クルセードなどにもすすんで参加し働きました。ところが数年たったある日、なぜそうなったのか分かりませんが、教会員総会の選挙で牧師を否認するということがありました。私はそのことの意味がよく分かりませんでした。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・23）

イエス様はただ一度だけの十字架で完全な救いを成就してくださいました。私たちはこの十字

架によって一つにされています。けれども私たち地上の教会には時としてこのようなことが起こります。悲しむべきことです。

その後何度か家を引っ越して、近くの教会へかわりました。この最後の教会では宣教師が熱心にメッセージをとりついでくださいました。やがてその宣教師が母国へ帰られた後、新しい宣教師が派遣され、古い信徒との間に軋轢が生じました。私はそのようなことにかかわるのはごめんこうむりたく、籍を置いたまま急いで他の教会へかわりました。このように私は、信仰生活においても周囲の状況に左右されて全く羊のようにさまよい歩いていました。やがて私は悔い改めてこのような空しい生活をやめ、元の教会へ復帰してもう一度やり直すことにしました。そのとき私は、「もう決して人は見ない。いつも主だけを見上げて進みたい。クリスチャンは教会以外に行くところがない。だから、どんなことが起こってもこの教会を通して主に仕えよう」と決心し、教会ではできるだけ奉仕を引き受け、熱心に働かせていただこうとしました。

私は主に救い出されました。私のまわりにいる人々にどのようにしたら主の救いを紹介できるのでしょうか？　しかし何もできない自分に落胆しました。

「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。

（使徒　16・30、31）

私は多くの負い目を持っています。因習にとらわれた故郷では、イエス様を知らずに飢え渇い

ている、滅びに向かう多くの魂があります。私の身のまわりには、うめき叫んでいる多くの人々がいます。私が救い出されたことは何にも代えられない大きな喜びです。けれども自分の救いだけを喜んでばかりいることはできません。しかし、私は本当にみじめな存在です。イエス様の大きな愛を受けながら、何一つその愛を人々に伝えていけないのです。私の言葉や行ないを見ても、その内に何一つよいものがないため、イエス様の愛を人々に伝えることができません。それどころか、私自身がイエス様を伝える妨げになっていることを知っているゆえに主を恐れます。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。…私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。…私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ　7・15、19、24）

しかし、何と感謝なことでしょう。主はこのような者にも、みことばを通して約束してくださっています。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。…私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

（ローマ　7・25、8・24、25）

約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。

（ヘブル　10・23、24）

4　キリスト集会へ

私たちはいろいろな試練を通してキリスト集会へと導き出されました。この集会には、主が中心におられる「キリストの体である集会」の姿があります。これはまさしく私が長く求めていたものでした。

子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。

（Ⅰヨハネ　5・21）

主だけが中心とならないで、人間のつくった組織や役員制度がいつのまにか教会を支配してしまう。一人一人は自分に頼って勤勉に努力し、伝道活動や会堂建設に励む。その努力の割にはまわりの人々が救われません。私もかつて、「ああ、主よ。これは一体何なのでしょうか？　あなたのみこころを示してください！」と何度も叫びました。

…今、ようやく鈍い私にも「目をさましなさい」との声が聞こえます。

主ご自身ではなく、私自身が、私たち自身が前に出て、あらゆることを計画し組織的に物事をなしていこうとします。そして、組織や人間が中心となり、いつしかそれらが偶像になっていきます。結果として、聖霊の働きを妨げ、主ご自身の御手を縛りあげてしまっていたことが分かり

ました。

神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

（IIコリント　6・16～18）

父なる神と私たちの主なるキリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とがありますように。…ある人たちが違った教えを説いたり、果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。

（Iテモテ　1・2～4）

いま私たちのまわりにも、このような問題で迷っておられる方々がおられます。「どうぞ、人を見ないで主だけを仰ぎ見ていただきたい」と願っています。私たちは主の前にへりくだり、主がどのように私たちを導こうとなさっているのかを静かに尋ね求めることが大切ではないでしょうか。自分自身は大切ではありません。人から受ける評価は大切ではありません。「主は何を望

んでおられるのか?」そのことだけが大切なのではないでしょうか。主は私たちをそのような「人間の組織」の束縛から解き放ち、主だけに従うようにと召しておられます。そして、主の召しに気づいたときには、私たちははっきりとその召しに従いたいものです。

「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。」（黙示　3・15）

「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」（黙示　3・1～3）

この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。あなたは、人がその子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを、知らなければならない。…あなたの神、主が、あなたを良い地に導き入れようとしておられるからである。そこは、水の流れと泉があり、谷間と山を流れ出た深い淵のある地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろの地、オリーブ油と蜜の地。そこは、あなたが十分に食物を食

べ、何一つ足りないもののない地、その地の石は鉄であり、その山々からは青銅を掘り出すことのできる地である。あなたが食べて満ち足りたとき、主が賜わった良い地について、あなたの神、主をほめたたえなければならない。気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、主を忘れることがないように。

（申命記　8・4～11）

しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。あなたは知っているのだ。あなたの神、主だけが神であり、誠実な神である。主を愛し、主の命令を守る者には恵みの契約を千代まで守られる。…

（申命記　7・8、9）

主は私たちを、真の礼拝の場へと導いてくださいました！　この間には、多くの方々の熱い祈りがあり、その背後に主の絶えることのない守りと導きがあったことを覚え、ただ感謝の気持ちでいっぱいです。

一九九四年四月から、堺、泉北の地で、毎週礼拝が持たれるようになりました。主は私のような不信仰な者、信仰の弱い者に対しても、次々と新しい人々の救いを目の前で見せてくださり、励ましてくださいます。主が今後、私たちをどのように導かれるかは私には分かりません。しか

し、主は必ず主を愛する者を通して、すばらしい祝福をこの地にも与えてくださるに違いありません。

「わたしは、あなたがたが得るのに労しなかった地と、あなたがたが建てなかった町々を、あなたがたに与えたので、あなたがたはそこに住み、自分で植えなかったぶどう畑とオリーブ畑で食べている。今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、主に仕えなさい。」

（ヨシュア　24・13、14）

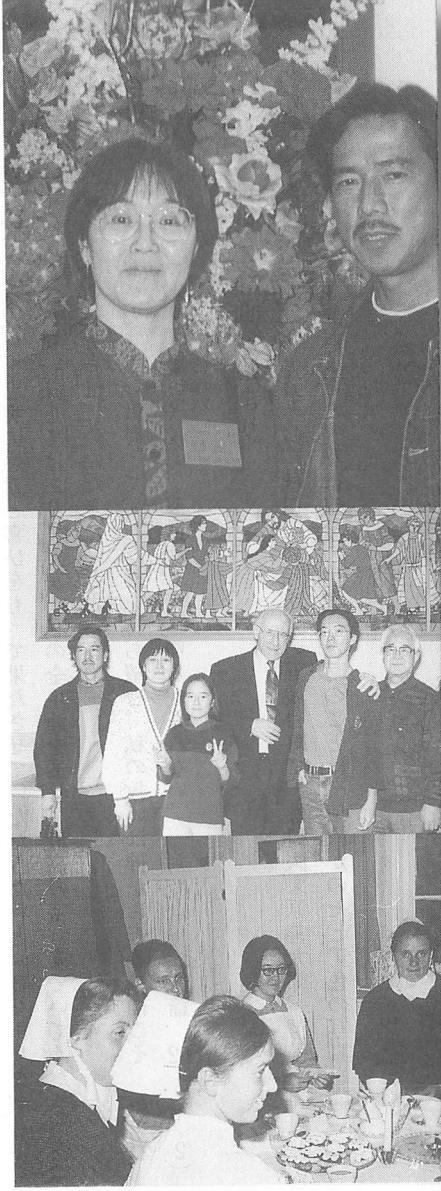
どうか、いつも主のご栄光のみがあがめられますように。引き続いて弱い者のためにもお祈りください。

生きることはキリスト、死ぬこともまた益です

（ピリピ1・21）

南場 牧子

一九四九年秋田県五城目町に生まれる。北浦小、土崎小、聖霊女子短期大学附属中、平第一中、福島県立磐城女子高校卒業後、西ベルリンに留学。病気のため帰国。自宅で語学教室を開設。一九七四年結婚。家族は夫敏雄さん、長男優さん、長女舞さん。



▲写真上、右敏雄さん、左牧子さん。
写真中、子供さんたちの洗礼式で。
写真下、ベルリンで訓練生として。

はじめに

この証しを書く直前に、私自身がみことばの光の中に改めて引き出され、自分の姿をはっきりと主に見せていただき、心からの悔い改めへと導かれ、主の前にへりくだる機会が与えられたことは、私にとって本当に幸いでした。私の四十五年の人生に主がどのようにして関わり、忍耐をもって導き、罪の中から救い出し、今日まで生かし、キリスト者として歩ませてくださったか、また二十八年間の信仰生活の後に、このアメリカの地で主がどのようにキリスト集会へと導いてくださったかを証しさせていただける恵みに、ただただ感謝するのみです。がんの再発後数年を経た今もなお生かされていることの意味を深く考え、いつ天に召されてもよいように、主からいただいている役目を忠実に感謝と喜びをもって果たさせていただきたいと、日々祈りながら歩んでいます。つたない証しではありますが、私の全生涯を通し、最高の宝、友でいてくださった主イエス様をご紹介させていただきたいと思います。

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。（詩篇 62・1、2）

神のご計画の始まり

私は一九四九年一月七日、秋田県の片田舎の五城目町で、外科医栗原善太郎、房子を両親とし、次女として生まれました。私は自分の生まれた町のことは、何枚かのセピア色の写真を通して知

る以外、全く記憶に残っていません。物心がつく頃には男鹿半島の北浦という小さな漁村に住んでいました。医者の家庭で育ちましたが、贅沢というものを知らずに過ごしたことは幸いでした。医者である父とは、会話する時間が全くありませんでした。母は弟を出産した後、いつも貧血状態に悩んでいましたが、その母の姿に、子供心にも死というものを感じていました。また、家族五人の生活の中にいつも家族以外の者が加わり、何か落ち着かず、平安のない幼児期、少女期を送っていました。これらのことは、今振り返ってみると、全てが主イエス様との出会い、救われるために必要な過程であり、備えであったことが分かります。

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。（詩篇　8・4）

小学校入学前の三年間は、私にとって最高に楽しい思い出の期間でした。小学、中学、高校と成長していくにつれて通らせられる困難の日々に先がけて、主が幼く、弱い私のために用意し備えてくださったプレゼントだったように思います。

北浦の自然は、今でも夢に見るほど、はっきりと私の記憶に残っており、四季折々に、それぞれの季節にふさわしい大自然の美しさ、すばらしさを味わい楽しむことができました。

この大自然が、そして人間そのものが、天地万物を創造された神によって造られたという事実を、幼い私は知らなかったわけですが、母が自分の前からすっと消えてしまうような不安をいつも抱いていた私を、主は大自然を通して慰めてくださっていたのだと思います。「神よ。あなた

は、いつくしみによって悩む者のために備えをされました。」（詩篇68・10）とみことばにあるように、このような小さな者に目を留め、守り導いてくださった主に心から感謝します。

生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。

（詩篇　22・10）

この地上にあっては寄留者

年齢も七歳になり、北浦小学校に入学して何日もたたない内に、秋田市土崎へ突然引っ越しました。これが私たち家族にとって相次ぐ引っ越しの始まりとなりました。体の弱い母には本当に耐え難かったと思います。七年間に四回もの引っ越しをしました。聖書を読み始めた頃、「私はあなたとともにいる旅人で、私のすべての先祖たちのように、寄留の者なのです。」（詩篇39・12）、また、イエス様ご自身も、「…人の子には枕する所もありません。」（マタイ8・20）と言われている箇所を見つけた時、なぜか大きな慰めをいただいたことを覚えています。

二十歳を過ぎてから、母の口から引っ越しの苦労を聞かされ、母の苦しみを改めて知る思いがしました。と同時に家族全員が神のご計画の下で、山あり谷ありの道を歩まされた全ての過程が、救いに至るためには不可欠のものであり、全てが有益であったことが分かりました。ですから、たび重なる引っ越しも、神の御手の中で意味あることとしてなされたことを知った時、全てが神の恵みであったと気づかされました。

劣等感の始まりと苦しみ

小学生の頃から健康で、ころころ太っていた私でしたが、なぜかスポーツが得意で、一度も自分の体のことで悩んだことはありませんでした。しかし、中学、高校と進む内に、性格も容姿も自分と正反対の頭のよい姉に対して、劣等感というおさえ切れないどろどろした出口のない感情に襲われ、主イエス様を知るまで五年間も苦しめられました。

母の母校であった聖霊女子短大附属中学校に、まず姉が入学し、二年後に私は授業料全額免除の特待生として入学しました。ところが、この特待生という肩書きが次第に重荷となり始め、先生からは何かにつけて姉と比較され、勉強もクラブ活動もいつも姉の存在と先生の目を意識しながらするようになっていきました。表面的には明るく振る舞い、学校生活を楽しんでいるかのように見せかけていましたが、心の内は声にならない叫びで一杯になり、私の悩みを全部吐き出したいという思いと毎日葛藤していました。

「わたし（主）の目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」
（イザヤ　43・4）

このみことばを後日見つけた時、私はうれしくて大声で泣いてしまいました。私をこのままで受け入れ愛してくださるお方がおられるという事実を知り、感謝と喜びで一杯になりました。子供の賛美の歌の中に「このままの姿で」というのがあります。「バラはバラのように、すみれは

すみれのように、私もこのままの姿で老いて行きます」とあるように、一人一人が神に似せて造られた神の作品であり、神に愛されている者であることを知りました。

追いつめられて

姉が高二、私が中三、弟が小六の時、私たち家族は故郷の秋田を離れ、福島県平市、現在のいわき市の近くの好間村という所に移ることになり、引っ越しは一体いつまで続くのかという不安に押し潰されそうになりながら、辛い日々を送りました。私は、私立女子中から公立男女共学中へ、中三の一学期途中の転校で、転校第一日目から受験戦争に巻き込まれることになりました。もとの学校では、中学、高校、短期大学と特待生として在籍できれば、卒業後はドイツ留学ができるので、その希望だけが私を励まし支えていましたから、この引っ越しは私にとって、夢も希望も奪うものでした。

テストにつぐテストで、私の頭はいつもパンク状態でしたが、毎日補習時間の後まで残してもらい、熱心な先生方に個人指導をしていただいた成果があがって、無事県立磐城女子高校に入学できました。この間九カ月は、テストの点と成績順位のみにとらわれ、無我夢中の日々でした。合格してほっとしたのもつかの間、今度は優秀な多くの生徒たちに囲まれた状態となり、私は自分の能力の限界を感じ、目標の定まらない自分自身への苛立ちから、本当なら入学できてうれしくてたまらないはずなのに、沈みこんでいくようになりました。

通学路に植えられた桜の木々の美しい花を見上げても、心は虚ろで涙だけが溢れてなりません

でした。生きていくことの意味が分からないままに、一カ月二カ月と高校生活を送っていました。特に成績上位の生徒が多くいたクラスでしたから、基礎のできていなかった私は勉強すればするほど、彼女たちについていけない自分に惨めさを感じ、追いつめられていきました。しかし、苦しくなればなるほど、追いつめられればられるほど、人間には解決できないことが多くあり、その解決を与えてくれるのは、人ではなくて「神ただお一人」なのだということが漠然と分かってきたことは感謝でした。

しかし、重荷を下ろす所はどこにあるのか、神は目に見えないお方だから、どのようにして悩みを訴えたらよいのか、その答えが全く分からない私でした。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

「わたし（イエス様）がいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」（ヨハネ　6・35）

「…そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」（ヨハネ・6・37）

主イエス様に引き寄せられて

「招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」　（マタイ　22・14）

ある土曜日のこと、数人の同級生とバプテスト教会の英語のバイブルクラスに出席するチャンスがあり、「教会、バイブル」という言葉にとても心を引かれながら、生まれて初めて教会を訪れました。しかし、いっしょにバイブルクラスに出席した同級生たちは次第に来なくなり、何カ月もたたない内に、とうとう私一人だけが残されてしまいました。聖書を読み、賛美し、祈ることを教えられた私は、英語を学ぶことはどうでもよいと思うようになり、高二になる頃には、聖日礼拝にも欠かさず出席するようになりました。

「いつくしみ深き友なるイエスは、罪とが憂いをとり去りたまう。心の嘆きを包まず述べて、などかはおろさぬ負える重荷を。」という讃美歌（三一二番）がありますが、私はこの詩を読み、歌った時、私の重荷をおろす所はイエス様の所しかないと分かり、涙が止まりませんでした。私は中学生の時からずっと、一生離れることのない、しかもこの私の全てを理解し受け入れてくれる友が欲しいと願い続けていましたから、この讃美歌の中に出てくるイエス様というお方が、私の求めている唯一まことの神であるのなら、背負ってきた罪の重荷を全てイエス様の前におろし、イエス様を信じて救われたいと心から思いました。

その数年前、秋田市で「キング・オブ・キングズ」という映画が上映され、私は二回も見に行きました。映画の中で、イエス様が十字架にかけられた場面で、涙が溢れてきて止まらないほど心を動かされたことを思い出し、あの十字架は私自身のためのものであったこと、イエス様こそ

が私の最高の宝、救い主、かけがえのないお方であることがはっきりと分かりました。

「…わたしが、あなたを造り上げた。あなたは、わたし自身のしもべだ。…あなたはわたしに忘れられることがない。わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。」

（イザヤ　44・21、22）

洗礼へと導かれる

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

「あなたがたがわたし（イエス様）を選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」

（ヨハネ　15・16）

それからしばらくして、礼拝の後で牧師が洗礼希望者を募った時、私はバプテスマを受けさせてほしいと申し出ました。

一九六五年十月十日、私は他の二人といっしょに、水石山キャンプ場に設置されたプールでバプテスマを受けました。十六歳の時でした。受洗の夜、母は赤飯を炊いて祝ってくれました。感

謝で一杯になったこの夜のことは忘れられません。

しかし、教会生活を送るにつれて、聖書のみことばと現実の姿とのギャップに悩み、教会生活を通して信仰の成長が得られないことにも悩むようになりました。しかし、信仰を持って間のない私に、主は三人の信仰の先輩を備え、個人的な語らいの時も数多く与えてくださったので、人につまずくことから守られたのは本当に幸いでした。目には見えないけれども、確かに生きて働かれておられるイエス様を、三人の歩みの中に見せていただいたことから、私も彼らのようにイエス様を日々の生活の中で体験し、イエス様に従って歩いていきたいと心から願い、祈るようになっていきました。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」（マタイ　7・7）

留学への道

信仰を持って一年がたとうとしていました。高校では一応国立コースに籍を置いていましたが、大学へ行く目標が定まらないため、勉強意欲も次第に薄れていき、成績も下降線をたどるありさまでした。毎週土曜日午後に参加する高校生会の活動だけが唯一の楽しみであり、解放される時でもありました。その頃、毎月一回、整肢療護園や精神薄弱児施設を訪れるチャンスがありました。そこで尊敬するクリスチャンの先輩の働く姿、イエス様がなさったようにへりくだって子供たちに仕えておられる姿を目の当たりに見ました。私が歩むべき道をお示しくださいと、真剣に

主に祈り求め始めました。

一九六六年、母教会において秋期特別伝道集会が開かれ、主は留学への道を開いてくださいました。ディアコニセ（主に仕える女性）になるため、旧西ベルリンにあるディアコニセ・ハウス、「ベテル」で訓練を受けることになりました。ドイツ出発の日まで私を支え励ましてくれたのは次のみことばでした。

「だれでもわたし（イエス様）について来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（マタイ　16・24）

「わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。」（マルコ　10・29、30）

…何もかも捨てて、イエスに従った。（ルカ　5・11）

ドイツ留学を決心した私ではありましたが、未信者の両親に打ちあけるまではかなりの日数がかかりました。祈りながら思いきって留学のことを話した時、二人は「なぜドイツでなければならないのか、どのようにして決心にまで至ったのか」を尋ねたのち、留学を喜んで許してくれました。本当に感謝でした。

そしてこのドイツ留学が後に母が主を求めるきっかけとなり、父も弟もともに救われるという

家族の救いにつながっていくことになろうとは、私自身全く予想だにしていませんでした。

家族との別れは本当に辛いものでしたが、みことばの約束、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒16・31）が私を励まし、勇気づけてくれました。主は必ず約束を守ってくださいます。

ドイツ留学

一九六七年高校を卒業。半年の準備期間を終え、愛する家族、教会の友人に別れを告げて日本を去る時、私は将来への希望で一杯でしたから、言葉の不安など全くありませんでした。一度は転校でドイツ留学への道が閉ざされ、主を信じてから再びその道が開かれたのは大きな驚きであり喜びでした。何もかもが私にとっては新鮮であり、心が踊りました。ドイツ語学校で厳しい授業を受けながら、訓練生としてさまざまな奉仕と訓練に加えて、ドイツ語の聖書講義、賛美練習、ドイツ語の復習と、余計なことはいっさい考えるひまもない位、充実した日々を送ることができ、本当に感謝でした。ベルリン滞在中、母と私の間で交わされた手紙の数は百通にも達し、両親、弟がともに救いに導かれたことは、大きな慰めとなりました。二度訪れた休暇先の「黒い森」での三週間は、日頃の厳しい訓練も肉体の疲れも全て忘れてしまう位、自由でゆったりとして、次の訓練へのエネルギーを蓄える最高の休息となりました。

やがて、訓練も無事終了し、正式にディアコニセの資格が与えられ、制服も正式な物となりました。

そして、私はさらに本格的に医学の勉強をするため、シュツットガルトに出発するという矢先、突然、左膝が曲がらなくなり、歩くこともできず、勉強も奉仕も全て中断せざるをえなくなってしまったのです。「主は私を見捨ててしまわれるのだろうか。主を信じる者は決して失望させられることはないとあるけれど、主よ。私はどうしたらよいのでしょうか」と、主に問いつづけながら過ごしました。

私が、神に呼ばわると、主は私を救ってくださる。夕、朝、真昼、私は嘆き、うめく。すると、主は私の声を聞いてくださる。（詩篇　55・16、17）

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。（詩篇　55・22）

「ベテル」では、私が病気になったことで、「医者でありクリスチャンである父に病気のことを委ね、主に私の将来をお委ねしたい」という意向が伝えられ、私は帰国を決意しました。ベルリンを去るその日まで、「ベテル」の方々が回復に協力し、励まし、支えてくださいました。ベルリンでの訓練や生活は本当に厳しかったけれども、私にとって一番輝いて歩かせていただいた思い出の時となり、有益なものをたくさんいただき、感謝でした。

父の勤務する病院で検査を受けた結果、腰椎を痛めたのが原因で左足の膝に症状が出ていたことが分かり、父が作ってくれたコルセットを着け、治療に専念する日々を送ることになりました。

新しい歩み、結婚

やがて主は、体の回復とともに社会復帰への道を開いてくださり、私は語学教室を開くことによって経済的にも自立することになりました。主は、実に個性的な子供たちを集めてくださり、私自身も通信教育で学びながら、次第に心の傷も薄くなっていきました。家庭に多くの問題を抱えた生徒、落ちこぼれと呼ばれている生徒と出会わせてくださり、彼らを通して人の心の痛みを思いやり、ともに重荷を負うことを学ばせていただきました。

一九七一年春、福島県三春から高知県宿毛市へと導かれ、教会に属さず家族だけで小さな集会を開くことになり、約三年間勉強を教えていた生徒たちも加わって、温かく楽しい集いの時を持つことができました。

行動範囲を広げ、積極的に動きまわりたいと思い、私は自動二輪免許を取ることにしました。弟の励ましと特訓の成果が上がり、何とか免許が取れ、やがて高知市の社会人オートバイ・クラブにも所属するようになりました。主はそこに将来夫となる人を備えてくださり、クラブ員として二年間行動を共にしました。私自身、主を信じる者であることも、ドイツ留学中病気をしたことも隠してはいませんでしたし、未信者の彼からプロポーズされた時、どうして私を選んだのか不思議でもあり、信じられませんでした。彼はその頃大工として五年間の修業を終え、就職先も決まったということで申し込みに来たのでした。私は「他の女性でなく、どうして私なのですか」と尋ねました。彼の答えは、「一生を通して共に歩めるのは栗原さんだけです。信仰のことは何

も分からないけれど、全宇宙全世界を創造されたのは神だと信じています。いずれ同じ信仰を持つことになると思います。こんな僕でもよかったら、結婚してください」という真剣なものでした。個人的には大工修業中という以外、何も知りませんでしたが、クラブ活動の中で二年間、さまざまな観点から彼を見て、責任感のある信頼できる人だと好感を抱いてはいました。

とにかく、年齢が五歳年下であることから、一瞬、本当に私のような者でよいのだろうかと躊躇しましたが、彼の「天地創造の神を信じている」という答えを聞いた時、心に平安があり、喜びが湧き上がってくるのを覚え、将来必ず主は彼を救ってくださるとの確信が与えられ、彼の申し出を受けました。この確信は十年後現実のものとなったのです。

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。

（伝道者　4・9）

私の両親、彼の母親の承諾を得て、プロポーズから二カ月後の一九七四年五月十九日、家族、近親者、クラブ員、生徒たちの祝福の中、結婚式を挙げました。ハネムーンは私たち二人にとって初めてのデートともなり、京都、奈良へ二台のオートバイで行き、一生忘れられない思い出となりました。

子育てを通しての訓練と祝福

一九七五年三月八日、長男優が誕生しました。非常に個性の強い子供であることに気がついた

私たちは、優が小学校に入る前に、神戸にあるマリストブラザーズ・インターナショナルスクールこそ彼の学校だと導かれ、夫の故郷の高知を去り、知人の一人もいない神戸に引っ越すことにしました。夫も私も優の入学と同時に仕事を探し始めることになり、私たち三人にとってゼロからの出発になりました。一九八三年三月二十八日、長女舞が誕生しました。優は七年間、舞は一年間、この学校に通い、親子ともにすばらしい先生、友だちに出会い、本当に楽しい有意義な日々を送らせていただきました。

一方で、主から預かった二人の子供に対する信仰者の親として責任を果たすことの重大さに気づかされた時、主に対しても、みことばに対しても、畏れが生じてきました。その頃の私は、みことばの光で自分を照らしていただくこともよく分かっていませんでしたから、優に対してもみことばで訓戒するよりもむしろ自分の思いで叱りつけ、時にはたたき、後で主の前に泣いて悔い改めた回数の方が多かったと思います。また、子供のためと思いながら、実は自己満足のためだったことも多々ありました。今は、優や舞だけではなく、子供の集会に集う一人一人に対して、主の愛をもって接し、みことばを通してのみ語れるよう私自身が先ず訓練していただいています。箴言の学びをさせていただきながら、親子ともども主の恵みをいただき、導き助けられていることを本当に幸いだと思います。みことばを食べ、味わうことを主から教えていただきました。

結婚十年目に、姉の病気がきっかけとなり、再び家族全員が、ある教会に導かれ、まず姉が、次いで夫が救いへと導かれ、バプテスマの恵みにあずかりました。主は私たちの結婚をも祝福と変えてくださいました。しかし、私にとって十四年ぶりに訪れたその教会は、異言を語る教会で

した。集うにつれて、礼拝の中に聖さが感じられず、異言の祈りや賛美を聞いても平安がなく、心が騒いで落ち着かないようになってきた頃、主はこの教会を離れる日を定めてくださり、私たち全員を守ってくださいました。舞が誕生してから神戸に引っ越して来ていた両親、姉も行動を共にしました。

アメリカの地へ

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。

（詩篇　37・5）

優が六年生の時、家族四人が喜んで信仰生活を送れる教会を、また、優と舞が安心して学べるクリスチャン・スクールをと祈り始め、アメリカへの道を示され、決断しました。一年間の祈りで準備がなされ、優の卒業と同時に家財を処分し、未知の国アメリカへと出発することになりました。主が私たちの先を行かれ、私たちを守り導いてくださいと祈る毎日でした。

一九八七年七月二十一日、私たち家族は姉と共にロサンゼルス空港に降り立ちました。大きな旅行カバンを両手にして歩く私たちは、まるで民族大移動の民のように見えたことでしょう。言葉も習慣も異なるアメリカで、主は、私たち一人一人を砕き、訓練してくださいました。英語の勉強から始めることになった夫は、五年の間に高卒資格を取り、短期大学で建築学を学ぶまで成長させていただきました。家族全員が永住権を得るまでの間、言葉では言い表わせない苦しい所

を通らされ、全てにおいて主に守り導いていただいたことから、私たちは主にのみ頼り、主を畏れて生活することがいかに大切かを身をもって知ることができました。

私たちはアメリカの教会、クリスタル・カテドラルに導かれ、優と舞は附属のアカデミーに入学し、すばらしい信仰の教師と友人に恵まれ、幸いな学校生活を送りました。全てを捨てて、このアメリカの国へ来たことへの、主からのお答をいただき、親として本当に感謝で一杯になりました。優はその後、彼に最も合った高校で四年間を過ごし、現在UCLAの三年生として学んでいますが、学校、家庭、そして信仰生活の全てにおいて、日々主を認め、主を誰よりも愛し、全ての全てとして信頼し、歩いていけるよう、毎日祈りを熱くして二人の子供を見守っています。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。

（伝道者　12・1）

乳がんの試練を通して

一九八九年八月頃、右胸に小さなしこりを発見。以前にも何度か乳腺炎を経験していましたから、別に気にも留めずに過ごしていました。しこりは無くならず、私は乳がんの恐れを感じ、主に毎日治してくださいと祈りましたが、逆にしこりは少しずつ確実に大きくなり、神戸にいた時読んだ信仰の本に書かれている通りに祈ったり、断食も試みましたが、事態は悪化するばかりでした。経済的にも、病院へ行くどころではないほど困窮していました。そんな中で、私は一つの決断を迫られ、導かれた後、「主よ。胸のしこりを取り除いてください、治してくださいという祈りは、もうしません。主のみこころのままにしてください。ただ一つお願いがあります。時が

くるまで、教会の奉仕も日常生活も、今まで通り誰にも負担をかけないように続けさせてください」と祈ることができました。

翌年一月頃には、しこりもさらに大きく盛り上がり、次第に充血し、鎮痛剤を飲んでも夜中に痛みが激しくなって眠れないまま朝を迎えることの方が多くなりました。そのような時、私はイエス様の十字架上での苦しみをほんの少しでも味わうことができて感謝でした。主の苦しみの百分の一、十分の一にも値しないものではあっても、肉体の弱さには勝てず、涙しながら「主よ。痛みの中にあっても主が共にいてくださり、支えてくださっていることを教え、感謝に導いてください。私を憐れんでください」と祈りました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

一九九〇年四月、主の復活を祝うため、日本から両親がアメリカを訪れました。一週間の楽しい滞在の後、日本に帰る最後の夜を迎えた時、夫の促しもあり、両親に胸のしこりのことを話しました。父は乳がんであることを認め、すぐ神戸に帰って手術を受けるようにと勧めました。私は自分の信仰をかけてこの八カ月を過ごしてきましたから、動揺することは何もなかったのですが、両親や姉に大きなショックを与えてしまったことは、今でも大きな心の痛みとして残ってい

ます。優と舞には父から説明がなされ、翌日両親が帰国しましたが、その後を追うように私はひとり、夫と姉に全てを託して、主の守りを祈りながら平安の中で日本に帰りました。

五月八日に神戸に着き、翌日神戸医大にて診察を受け、入院、検査の後、五月二十二日午前十一時に手術することになりました。この間約二週間、私は毎日のように両親と語りあい、祈る時を与えられ、霊を主に整えられて、平安の内に手術台に上りました。母は祈って待ち、父は手術の一部始終を見守ってくれたようです。手術は無事終了し、二カ月半にわたる入院生活を送ることになりました。

右胸全体、胸筋、右腋、神経も取り去られ、骨もかなり削られたとのことでしたが、ていねいで実に素晴らしい手術だったと外科医の父が報告してくれた時、私は全てを整えてくださった主に心からの感謝を捧げました。担当医、助手、看護婦さん一人一人が快活で、毎日助けていただきました。

手術後ただちに始められた右肩と右腕のリハビリには本当に泣かされましたが、一日も早くアメリカの家族の所に帰りたい一心で耐えました。右腕は誰のものなのか分からないほどだるく、自由に動かず、時には、家事ができるようになるかしら、車の運転は、などと心配することもありましたが、看護婦さんや訓練者、母の励ましの中で、皆が驚くほどの進歩を見せるまでになりました。一日中賛美のテープをかけ、アメリカの家族やクリスチャンの友人から送られてくるカードで病室の壁は一杯になり、いつも平安と希望で溢れ、入ってくる人々をも主は祝福してくださり、苦しくてつらいリハビリ訓練の中にあって、とても楽しい入院生活を送らせていただきまし

た。「外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。」（コロサイ4・5、6）のみことばに勇気づけられ、私の病室に入ってくる人に、いつでも証しするチャンスが与えられたことが一番うれしかったです。

私は血管が異常に細く、退院の朝まで血液検査、リンゲル注射のたびに悩まされ、左手の甲から腕に至るまで真っ青でした。しかし、小さなことにも祈る姿勢を教えられ、感謝の心を忘れないで過ごすことの大切さを学ぶことができました。

六月七日第一回抗がん剤投与。想像を絶する苦しみを味わうことになりました。異常なまでに嗅覚が鋭くなり、いつも吐き気を感じ、美しい白いユリの花の香りにも鼻を押さえるほどでした。水も食事も口に入らなくなりました。空腹であっても食べられない辛さを味わいました。自分であって自分でないような、自分を制することもできない状態に陥り、特に母には大きな苦痛を与えてしまった自分が情けなくて、一日中泣きながら主に訴えていました。

白血球は千百まで減少し、次の抗がん剤は二分の一の量しか投与されませんでした。髪が抜けるショックが少なくなるようにと、前もって長い髪を切って心の準備をしていた私でしたが、一時退院して、白血球の増えるのを待っている間に抜け始め、平静を装ってはみたものの、耐えられなくなり、夢遊病者のような日を何日も過ごしました。母は再入院に備えてウイッグを用意してくれました。自分の弱さ、惨めさをしみじみと味わう経験をしました。

入院中、両親は全てをあげて私を励まし、支えてくれました。どんなにか体も疲れたことでしょ

う。毎日毎日、母は私の好物を作っては運んできてくれて、昼、夜の食事は両親を交えての楽しい晩餐となり、消灯時ぎりぎりまで楽しく語りあう時が与えられ、本当に感謝でした。夜九時過ぎに帰って行く両親の姿を、涙で霞んで見えなくなるまで見送ったのを覚えています。

毎週土曜日ごとに美しい花を一杯届けて慰めてくれた弟。両親、在米の家族、クリスチャンの友人たち、神戸医大のスタッフの方の祈り、励まし、助けをいただいて、困難を乗りきらせていただきました。主のご配慮に、ただただ頭が下がり、感謝で一杯になりました。

忍耐、試練の後の祝福

七月末、私を迎えにきてくれた姉と妹に伴われて、アメリカの家族の元に戻ったのは八月十五日でした。夫と息子の顔を見たとたん、「主よ。また愛する家族に会わせてくださって感謝します。これからの生活も全て主が守り導いてくださいますように」と、まず祈ることができ、後は喜びで一杯になりました。

がんセンターでさらに二回だめ押しの抗がん剤投与の後、右肩、腕のリハビリをして、私は少しずつもとの生活ができるまでに回復し、教会での奉仕も再開されました。しかし、経済的には苦しい状態が続き、労働許可はいつまでも下りず、私たちはたいへん厳しい立場に置かれることになりました。「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。」（マタイ6・26）というみことばに慰められました。

神戸の両親は、マンションを処分し、その中から私たち家族がアメリカに留まれるようにと大切なお金を預けてくれました。手術後二年半は、その尊いお金を使わせてもらい、私たち家族は養われ、私も治療を続けることができました。

一九九一年の新年に、「主よ。あなたの決めておられるように、私を生かしてください。」（詩篇119・149）のみことばが与えられましたが、これは同時に母にも当てはまるものとなったのです。母が貧血で倒れ、検査の結果、再生不良貧血症という難病と分かり、姉は帰国し、母の看病をすることになりました。そのような時、今度は姉が網膜剝離の手術を受けるという最悪の状態を迎えることになりました。私たちはどうすればよいのか分からず、ただ主にお委ねするしかありませんでした。入院中いつも私のそばにいてくれた母、退院後私の代わりに家族の世話をしてくれた姉でしたから、私はひたすら祈りました。大きな試練の始まりでした。

しかし主はこのような時に、大きな慰め、希望を与え、勝利の生活へと導いてくださいました。九月一日、優がわが家の初穂としてバプテスマにあずかりました。そして十一月に突然法律が変わり、私たち二人に労働許可が下り、夫は大学で学びながら大工として仕事を始めることになりました。翌年三月には待望の永住権が与えられ、優も永住権保持者として大学に進学することもできるようになりました。ぎりぎりの時点で、主は一挙に全てを解決してくださいました。

私自身もまた、体が回復したので、一九九二年九月から日本語学校の教師として働くことになり、この時から日本の方々との交流が主によって備えられ始めていたことを、後で知ることになりました。

真の集いの中へ

一九九二年十一月頃、仕事先のクリスチャンの女性から夫が「光よあれ」をいただいてきたことが、私たち家族にとってキリスト集会に導かれるきっかけになりました。年末年始に、母と姉を見舞いに神戸に帰ることができましたが、行き帰りの飛行機の中ではあまり読む時間がなく、ロスに戻ってから一気に読ませていただきました。「キリスト教」という宗教ではなく、「主イエス・キリストだけを中心とした、まことのキリストの体である集会」があり、そこでの集いや主にある交わりが本当にこの世にあると知らされ、喜びで一杯になり、ぜひそのような集会に集いたいと願いました。当銘さんに誘われ、パサデナで開かれていた集会に集い始めるようになりましたが、午前はアメリカの教会で礼拝に出、午後は集会に集う、というような状態に私自身苦しくなり、主に解答を求めて祈っていました。そして四月半ば、日本からメッセンジャーが来てくださった時、そのメッセージの中で、二心の私自身の姿と信仰姿勢を主から問われ、集会にのみ集えるよう主に願いました。

その少し前、母のたっての希望で、このアメリカの地で家族全員で復活の主に礼拝を捧げる恵みを主から与えられました。輸血と輸血の間の旅でしたが、母は本当に私たち、特に優、舞に会えたことを喜んでいました。母にとっては最後の旅となりましたが、主は一人一人に奇蹟を見せてくださったのです。

五月にはベックさんが来てくださいました。母のことをベックさんにお願いしましたら、帰国

後、すぐ入院先の母の病室を訪れ、「病気では死なないよ。主の時がその時だよ」と母を励まし慰めてくださったと姉より聞き、母のことも本当に平安の中で祈ることができました。その時ベックさんといっしょに写した母の笑顔は、最高に美しく、輝いていました。

一九九三年六月十九日から二十三日まで、バイオラ大学で第一回ロス・バイブル・キャンプが開催され、大きな期待をもって家族全員で参加し、キャンプ中に家族一致の決断をもって教会を去り、キリスト集会に集うよう導かれました。二十三年間探し求めていた真のキリストの体である集会についにたどりつくことができました。さらに、わが家でも日曜礼拝、家庭集会をすることになりました。

「…神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ　6・33）

がんの再発と母が召される

そのころ、短期留学中であった神戸キリスト集会の奥田さんも私たちのキリスト集会に集われ、日本からも二週間ごとにメッセンジャーの方々を迎えて、皆が喜びと希望を抱いてキリスト集会に集っていました。そして一九九三年九月。三カ月検診のため、ドクターを訪れた時、CTスキャンを含む総合的な検査をしようということになりました。長時間のX線撮影やさまざまな検査の最中の会話で、再発では？　との思いも一瞬浮かびましたが、最終結果を祈りながら待ちました。多くの方々に祈りで支え励ましていただきました。

江藤さん夫妻を迎えての家庭集会の朝、ドクターから「骨に異常が見つかった」との知らせを受けました。翌火曜日にドクターに会う約束をし、家庭集会が終わってから皆さまに報告し、祈っていただきました。一人になった時、私は主に「主よ。なぜ今なのですか」と聞きました。みことばが答えでした。「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。」(伝道者3・1)そして「…高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。」(IIコリント12・7)。波立つ心は静められ、主から安らぎを与えられました。

メッセージのテープを聞くたびに、自我を十字架につけることの大切さを教えられていた私でしたが、未だに残っている古い私、自我を徹底的に砕くために、さらに肉体のとげを与えられたのでしょう。それほど私は、主の目にはうなじのこわい者だったのだと思います。

このような時、神戸の母が危篤という知らせが入りました。母に最後の別れをし、感謝の一言が言いたいという願いに、主が憐れんで私の祈りを聞いてくださり、私は神戸の母のもとに二週間いることができました。その間、母の看病、神戸キリスト集会の皆さまとのおつきあい、父、姉との語らい、さらに、三十年近く会っていなかった伯母や従兄弟たちとも再会でき、私は最高の喜びを主から与えていただきました。また神戸医大での再検査の結果、がん再発が事実と分かり、先生方は入院して抗がん剤治療をしたほうがよいと勧められましたが、私は愛する家族、キリスト集会の皆さまといっしょにいることが私にとって一番大切だと導かれた後、先生方に主を信じ従う者としての証しをさせていただいて、病院を後にしました。全て主に委ねていきたいと家族に話し、母にも「お母さん、がんの再発が分かって、治療しても治る見込みがもうないんだっ

て。私もすぐに行くから、イエス様の所で待っててね。痛みも苦しみもない所に行こうね」と事実を告げることができ、感謝でした。帰国する日の朝、小康状態にある母と笑って別れることができたことは驚きでした。主は私が耐えられない重荷を取り去ってくださり、母の臨終の時も、前夜式や葬儀の時も、アメリカに留めてくださいました。人一倍泣き虫の私への主のご配慮であったと思います。

帰米後三カ月して、母は主のみもとに信仰の戦いを終えて凱旋していきました。母の葬儀は始めから終わりまで、主が中心にいてくださる福音のための集いとなり、すばらしいものだったと父から聞き心から主に感謝しました。

母の信仰を見て

三十代の頃から病弱であった母を見て育った私ですが、一九九三年十二月十四日に天に召されるまで、母は全生涯を通して輝いていた女性であり、どのような状態に置かれても適応し、主を知ってからはさらに輝き、いつもイエス様により頼んで歩いたキリスト者でした。約二年間難病に冒され、入退院の厳しい闘病生活を送りながらも、母は出会う人々に愛をもって接し、希望を分かちあい、主にある平安の内にキリスト者としての歩みを全うさせていただいた主の証し人でした。その母と最後の二年間、二人三脚で闘病生活、信仰生活を共に歩んだ姉も、夫であり主にあっては兄弟でありまた医者として母と厳しい道を通ってきた父も、平安と感謝の日々を主から贈られたのは幸いだったと思います。「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのように

しなさい。」（ルカ6・31）このみことばをとても大事にしていた母は、今は愛するイエス様のみもとで私たちとの再会を心待ちにしていることでしょう。おちゃめな母が主のおそばで憩っている姿が目に浮かぶようです。

家族全員の救いが成就して

一九九四年一月一日、西軽井沢国際福音センターで母の記念式と納骨式を行なうことになり、私たち家族四人は、夢にまで見たセンターを訪れることができました。一月二日の朝、優と舞が主に従う証しとして洗礼を受けたことは、私たち夫婦、父や姉にとって最高の喜びとなりました。孫全員の救いを祈り続けていた母でしたから、天においても歓声が上がったことでしょう。私が救われて以来二十八年の間に、両親、弟、姉、夫、二人の子供を主はみことばの約束通り救ってくださいました。ただ主を賛美します。そしてさらに主の救いのご計画は進められていくのです。

栄光の冠を目指して

私は愛するキリスト集会の多くの方々、家族の祈りと励ましによって支えられ、主に守られて、今日まで歩ませていただきました。私の肉体の痛みは日毎に激しくなり、私を夜昼となく責め立て悩ませますが、主の十字架を思いながら、次の二つのみことばに勇気づけられて生かされています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キ

リストが私のうちに生きておられるのです。（ガラテヤ　2・20）

兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。（ピリピ　3・13、14）

母の病は、長い間会えなかった兄、姉、妹たちと再会し、主の前で和解し、主を証しするために主から与えられたものでした。私の病もまた、主のご計画によって与えられ、主に用いていただくためのものであったと、今は分かります。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

主のみこころのままに

「わたし（主）の恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」…ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。…なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。（IIコリント　12・9、10）

がん再発から数年。私の祈りを、主は聞いてくださいました。私は何者でもありません。罪赦された罪人の頭です。主の一方的な愛と憐れみによって生かされている者です。この地上にあっては、なお試練の中に置かれていますが、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。」（Ⅰテサロニケ5・16～18）、「信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。」（Ⅰテモテ6・12）のみことばを日々味わいながら、愛する家族と共に、すべてを主イエス様に委ねて、目には見えないけれども、生きておられる主イエス様だけを見上げながら、最後の一瞬まで雄々しく、輝いたキリスト者として歩みたいと願っています。

今年で結婚二十年になりますが、全く異なった二人が共に生活していく中で、互いに助けあい、励ましあい、慰めあい、また仕えあい、忍耐をもって祈ることを教えられ、今は信仰の土台を主イエス・キリストに置いて歩める夫婦、主にある兄弟姉妹に変えられた恵み。すばらしい賜物を主から与えられている優と舞を主から預からせていただいている恵み。父と姉を私たち家族の一員として迎えられた恵み。この地上で数多くの主にある方々と出会えた恵み。母を主のみもとに送り、「私たちの国籍は天に在ります。」との確信をいただいた恵み。第二回ロス・バイブルキャンプにふたたび集えた恵み。アメリカに来て初めての家族旅行を通し忘れられない思い出を与えられた恵み。…主にいただいたたくさんの恵みを一つ一つ数えながら、感謝と喜びと希望をもって歩んでいきたいと願っています。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ

忘れるな。

（詩篇103・1、2）

救い主イエス様。最高の宝、友でいてくださる主イエス様。心から愛し感謝します。全ての栄光と誉れが主にありますように。御名を心から賛美します。

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一　みことばの大切さ

ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Iヨハネ5・13　Iペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰

Iヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ53・4～6　Iペテロ2・24　IIコリント5・21

四　血潮の価値

イザヤ1・18　ローマ3・24、25　Iヨハネ1・7　エペソ1・7　Iペテロ1・18、19
黙示12・11

五　確信の根拠

イザヤ43・1、25　イザヤ44・22　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17
詩篇103・12　ヘブル13・5、6

六　思いわずらうな

マタイ13・22　マタイ6・25〜32　ピリピ4・6、7　Iペテロ5・7〜9　詩篇55・22

七　試練の時

ヤコブ1・12　ヤコブ4・7、8　Iコリント10・13　Iペテロ5・8〜10
Iペテロ1・5〜7　IIコリント12・9、10　ローマ5・3〜5　ローマ8・28
イザヤ40・29〜31

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」　（エレミヤ　31・3）

リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。さらに病床にあって本の読めない方々のために、ＰＢＡのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（8本1組）があります。



ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

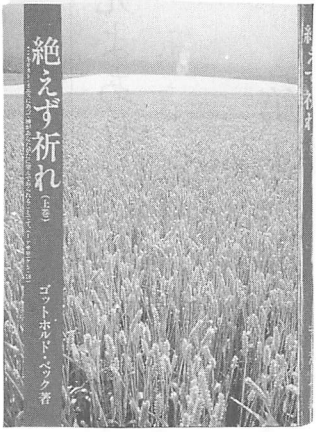
価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。

絶えず祈れのおすすめ

ゴットホルド・ベック著

主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちにそそごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらをあけるのです。祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていないかたがたはイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われているかたがたは、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るためのはげましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージがおさめられています。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

上巻価四〇〇円・下巻価二五〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズ　のおすすめ

光よあれ

「私たちは主のもの」

第1集

25人の証し

価三三〇円

第2集

25人の証し

価三五〇円

第3集

42人の証し

価三三〇円

お申し込みはハガキに本の名前（第何集）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上、〒一八〇武蔵野市吉祥寺本町四―九―一一吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込を。

山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、染野待子さんの「主が語られたことは必ず実現する」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、またベックさんのメッセージ「神は愛です」を収録。

松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」、古田稔・康子夫妻の「すべてを主の御手に」、アルコール依存症から脱出した染野茂夫さんの「駆けのぼりし主の道」、重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」が掲載されています。

江藤善清・恵子夫妻の「天国を望み見て」「主に導かれて」、蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、武井達郎・生子夫妻の「主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな」など。ベックさんの「みこころが地でも行なわれますように」を巻末に収録。

第4集
66人の証し
価三五〇円

ニュースキャスター山川千秋さんの夫人穆子さんの「ここに、主がおられる」、故笹川郁夫・公子夫妻の「もはや私ではなく、キリストが私の中で」「走るべき行程を走り終えた夫」、竹本誠一さんの「主に導かれて七十年」、大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」などが掲載されています。

第5集
67人の証し
価三八〇円

吉屋和子さんの「その栄光は地に満ちわたれ」、村上誠弁護士と夫人の「主とともに歩む」「キリストにはかえられません」、田中順治・節子夫妻の「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」「数えてみよ、主の恵み」、大城紀美子さんの「今日まで灯し続けた信仰の灯」など。

第6集
70人の証し
価三八〇円

玉城新正さんの「恐怖から解き放たれて」、新井稔さんの「妻の安らぎとともに救われて」、岡本広海・基子夫妻の「キリストにある愛、喜び、平安」「今あるは神の恵みです」、森島左武郎・久仁子夫妻の「あなたは豊かなところへ…」「栄光と支配がキリストにありますように」ほか。

第7集
69人の証し
価四〇〇円

神竹孝至・礼子夫妻の「真理への道」「神様のご計画」、飽戸弘教授・安子夫妻の「奇蹟コミュニケーションで回心」「目を開かれて」、友野雅志・和子夫妻の「私のすべてであられる主」「主だけを見上げて」、岡本雅文、恵子夫妻の「弁解の余地はない」「生きよと言われた主」など。

日本とドイツの出会い「ドイツよろこびの集いの記録」のおすすめ

このグラフは一九九四年秋に開かれた「ドイツよろこびの集い」のカラー写真集です。世界中から集まった約四百人のかたがたの写真と証し、またドイツ各地で行なわれたキリスト集会やメサイアの賛美の模様など、主にあるみなさまのよろこびにあふれた記録を通して、主のご臨在とご栄光がひしひしと伝わってきます。四十年間日本のために祈り続けられたドイツの主にあるかたがたとの出会いを感動的に証しするアルバムです。B4変形判で百ページ、全て色刷りです。



40年間日本のために祈り続けた
ドイツの主にある兄弟姉妹との
出会い

価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）　ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



なにものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）
ゴットホルド・ベック編著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

キリスト集会のご案内

・**牧師制度がありません**……キリスト集会には牧師制度はありません。いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

・**組織も、会則もありません**……キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

・**会員制度がありません**……会員として登録されるようないわゆる会員名簿にあたるものはありません。出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

・**献金制度がありません**……月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行なわれ、無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

・**日曜礼拝**……祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

・**家庭集会**……家庭でひらかれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百箇所以上あり、多くの所で日曜礼拝が行なわれます。

・**よろこびの集い**……西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国のひとびとが集まる大きな集会です。快適で経済的な宿泊設備を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

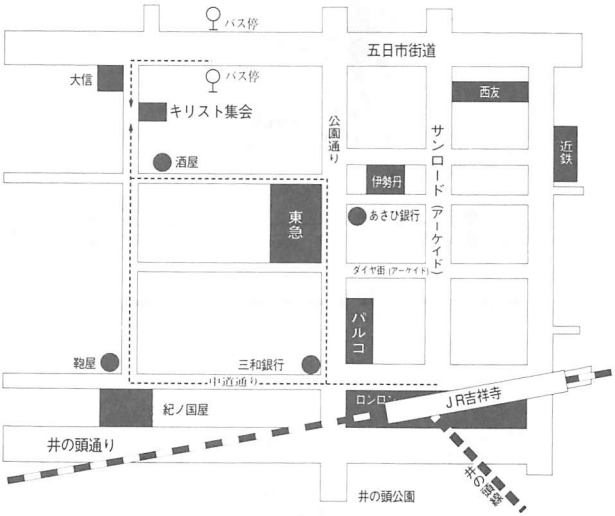
吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。

吉祥寺キリスト集会

G．ベック　０４２２－２２－２０１６　東京都武蔵野市吉祥寺本町４－９－11〒180

日曜礼拝	10:30	14:00	19:00	火曜学び会	11:00
日曜メッセージ	12:00	15:00	20:00	木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00				
中高生日曜クラス	9:00				



● ＡＡミーティングへのご案内

ＡＡ武蔵野グループは、吉祥寺キリスト集会において、毎週火曜日午後７時よりＡＡグループ、ミーティングを開催しています。アルコール、薬物などの依存症で悩み苦しんでおられる方、またそのご家族の方、知人の方、参加は自由です。ＡＡミーティングは、希望と信仰による回復のステップです。すでに悲惨な依存症から解放され、家族と共に希望と平和に満ちた生活を送っている大勢の人々が心から歓迎いたします。

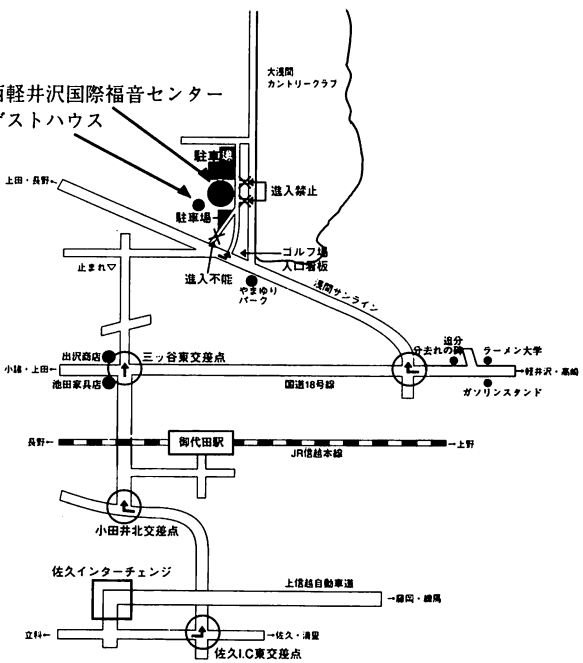
西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター

０２６７-３２-６４００㈹　長野県北佐久郡御代田町塩野450-15〒389-02

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

０２６７-３２-６４４４　長野県北佐久郡御代田町塩野450-33〒389-02



・上信越自動車道で佐久インターチェンジから出て上図を参考にしてください。

・ＪＲ信越線で御代田駅下車。タクシーで約５分＝1000円程度。徒歩約45分＝３km。

御代田へは東京上野駅から信越線特急「あさま」で軽井沢乗りかえ、各停で３つ目の御代田駅下車。

・国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、２つ目の追分宿の信号を越え、左にESSOのガソリンスタンドを越えて浅間サンラインに右折して入ります。そこから約３kmです。

・道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。















「光が、やみの中から輝き出よ。」
と言われた神は、私たちの心を照らし、
キリストの御顔にある
神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。
(IIコリント4・6)

定価 400円(本体388円)